山形県埋蔵文化財調査報告書151集

川口遺跡
発掘調査報告書

1990

山　形　県
山形県教育委員会

川口遺跡

発掘調査報告書

平成2年3月

山形県
山形県教育委員会

調査区全景（西南↑）

ST 2 住居跡（南西↑）

SM25石組墓壙（南↑）

SM28土壙墓他（南↑）

SM29　RQ48石棒（南西↑）

序

本報告書は、山形県教育委員会が平成元年度に実施した県営ほ場整備事業「富並地区」にかかる川口遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

この調査は昨年度の早房D遺跡に引き続いて行われた富並地区関係の第二年次分として実施されたものでありますが、これまでとかく不鮮明であった当該地域における縄文時代後期の集落や遺物の内容理解にとって貴重な資料を提供するものと期待されるところです。

近年の急速で広範になされる諸開発事業の進展は、埋蔵文化財の保存や保護とのかかわりにおいても困難な問題を多く生み出す所となっておりますが、「県民福祉の向上」、「こころ広くたくましい県民の育成」とする基本的な立場から調整を行い、今後とも埋蔵文化財の保護とその活用を計ってまいる所存です。

最後になりましたが、本調査にご協力いただいた村山平野土地改良事務所・大高根土地改良区・村山市教育委員会および調査に従事された地元の方々に対して心より感謝の意を表しますとともに、本書が地域の歴史を解明する上で基礎的な資料として活用していただければ幸いと存じます。

平成2年3月

山形県教育委員会

教育長　木　場　清　耕

例　言

1　本報告書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて平成元年度に実施した「県営ほ場整備事業富並地区」に係る川口遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地・調査期間・調査体制等は以下の通りである。

川口遺跡　（CMYKG）　遺跡番号616（山形県遺跡地図）

所在地　山形県村山市大字富並字川口

現地調査　平成元年4月17日～平成元年8月11日（延べ81日）

調査主体　山形県教育委員会

調査担当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　（主任調査員）　佐々木洋治　（同左）　野尻　侃

（現場主任）　阿部明彦　（調査員）　月山隆弘、須賀井新人

事務局　（事務局長）　土門紹穂　（事務局長補佐）　斎藤久子

（事務局員）　新関紘子、長谷川浩、高橋春雄、永井健郎

調査協力　村山市富並地区、大高根土地改良区、村山市教育委員会、村山平野土地改良事務所、北村山教育事務所

3　本書の作成は阿部明彦、月山隆弘の2名が担当し、阿部正子、遠藤淑子、吉野映子、鈴木サヨ子、田村操江、伊藤和子、戸来れい子、高橋啓子、柴田ふぢ子、斎藤明子が補佐した。

4　本文の執筆はIII章を月山が、その他を阿部が各分担した。また、編集は安部　実・阿部明彦・月山隆弘がその任に当たり、全体を佐々木洋治が総括している。

5　現地調査と本書の作成に当たっては下記の機関および個人からご指導とご助言をいただいた。末尾ながら明記して感謝の意を表したい（順不同・敬称略）。

柏倉亮吉、加藤　稔、川崎利夫、阿子島功、安孫子昭二（東京都教育委員会）荒井　格・渡辺　紀（仙台市教育委員会）、高橋与右衛門（岩手県埋蔵文化財センター）、桐生正一（滝沢村教育委員会）、小林　克・船木義勝（秋田県埋蔵文化財センター）

6　調査記録および出土遺物は山形県教育委員会が一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構と遺物の分類記号は下記の通りである。

ＳＴ：住居跡、ＳＫ：土壙跡、ＥＰ：住居関連柱穴、ＥＬ：住居内炉跡
ＲＰ：土器・土製品、ＲＱ：石器・石製品、

2　報告書の執筆基準は下記の通りである。

（1）遺構平面図ほかの方位は磁北を示している。グリッドの南北軸線はＮ-27°-Ｅを測る。

（2）遺構の実測図はそれぞれの大きさを考慮して1/40、1/60、1/80（住居跡・土壙）、1/300、1/400（遺構配置図）で採録し、各々にスケールを付した。
なお、遺構挿図中のレベルは海抜高である。

（3）土層注記におけるローマ数字は表土・包含層等の基本層序を表し、算用数字は遺構内堆積土の区分として用いている。

（4）遺物の実測図・拓影図は1/4（一部の大形品1/6）、1/3、1/2を各基本として採録し、各々にスケールを付した。

（5）遺構挿図中のスクリーンは焼土、住居跡の範囲を示す一連の壁柱穴群、一部の礫その他を表している。

3　本書で取り上げた遺物は主に住居跡・土壙等の遺構に関連したものを中心とした。
なお、包含層中から出土した遺物については、破片類を除く、完形土器、石器、および土・石製品その他について採録している。従って、実測図中に検出地点ないし出土グリッド名、あるいは登録番号（ＲＰ・ＲＱ）を付記して、位置を明示している。

目　次

I　調査の経緯

1　調査に至る経過……1

2　調査の概要……2

II　遺跡の概観

1　遺跡の立地と環境……3

2　遺跡の層序……4

3　遺構と遺物の分布……4

III　検出遺構

1　住居跡……10

2　土　壙……27

3　墓　壙……49

4　集石遺構……52

5　立石遺構……52

IV　出土遺物

1　土　器……61

2　土偶・土製品……87

3　石　器……93

4　石製品……103

V　まとめ

1　遺跡・遺構……104

2　遺　物……104

表目次

表－1　竪穴住居跡一覧表……26

表－2　土壙一覧表（1）……47

表－3　土壙一覧表（2）……48

表－4　墓壙一覧表……60

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図
第２図　土層柱状図
第３図　調査概要図
第４図　遺構配置図
第５図　Ａ・Ｂ区遺構配置図
第６図　Ｃ区遺構配置図
第７図　Ｄ区遺構配置図
第８図　住居跡概要図
第９図　ＳＴ１住居跡
第10図　ＳＴ２住居跡
第11図　ＳＴ３住居跡
第12図　ＳＴ４住居跡
第13図　ＳＴ５住居跡
第14図　ＳＴ６住居跡
第15図　ＳＴ７・12・13住居跡
第16図　ＳＴ８住居跡
第17図　ＳＴ９住居跡
第18図　ＳＴ10住居跡
第19図　ＳＴ11住居跡
第20図　土壙概要図・土壙規模
第21図　Ａ区土壙（１）
第22図　Ａ区土壙（２）
第23図　Ａ区土壙（３）
第24図　Ａ区土壙（４）
第25図　Ａ区土壙（５）
第26図　Ａ区土壙・柱穴（６）
第27図　Ａ区土壙・柱穴（７）
第28図　Ｂ区土壙（８）
第29図　Ｃ区土壙（９）
第30図　Ｃ区土壙（10）
第31図　Ｃ区土壙（11）
第32図　Ｃ区土壙（12）
第33図　Ｃ区土壙（13）
第34図　Ｄ区土壙（14）
第35図　Ｄ区土壙（15）
第36図　Ｄ区土壙（16）
第37図　Ｄ区土壙（17）
第38図　Ｄ区土壙（18）
第39図　墓壙規模
第40図　墓壙配置図・石棺墓位置図
第41図　Ｄ区墓壙（１）
第42図　Ｄ区墓壙（２）
第43図　Ｄ区墓壙（３）
第44図　Ｄ区墓壙（４）
第45図　Ｄ区墓壙（５）
第46図　Ｄ区墓壙（６）
第47図　Ｄ区墓壙（７）
第48図　土器拓影図（１）
第49図　土器拓影図（２）
第50図　土器拓影図（３）
第51図　土器拓影図（４）
第52図　土器拓影図（５）
第53図　土器拓影図（６）
第54図　土器拓影図（７）
第55図　土器拓影図（８）
第56図　土器実測図（１）
第57図　土器実測図（２）
第58図　土器実測図（３）
第59図　土器実測図（４）
第60図　土器実測図（５）
第61図　土器実測図（６）
第62図　土器実測図（７）
第63図　土器実測図（８）
第64図　土器実測図（９）・拓影図他
第65図　土器展開拓影図（１）
第66図　土器展開拓影図（２）
第67図　土偶等実測図（１）
第68図　土偶等実測図（２）
第69図　土製品実測図（１）
第70図　土製品実測図（２）
第71図　石器実測図（１）
第72図　石器実測図（２）
第73図　石器実測図（３）
第74図　石器実測図（４）
第75図　石器実測図（５）
第76図　石器実測図（６）
第77図　石器実測図（７）
第78図　土器集成図

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景
図版２　遺跡遠景他
図版３　遺跡全景
図版４　遺跡全景他
図版５　ＳＴ１・２住居跡検出状況
図版６　ＳＴ１住居跡
図版７　ＳＴ２・１住居跡他
図版８　ＳＴ２住居跡
図版９　ＳＴ３住居跡他
図版10　ＳＴ４住居跡検出状況
図版11　ＳＴ４住居跡他
図版12　ＳＴ５住居跡他
図版13　ＳＴ６・７住居跡他
図版14　ＳＴ８住居跡
図版15　ＳＴ８住居跡
図版16　ＳＴ８住居跡
図版17　ＳＴ９住居跡
図版18　ＳＫ337土壙土層断面他
図版19　ＳＫ619土壙
図版20　ＳＫ688土壙土層断面他
図版21　ＳＫ1052土壙断面他
図版22　ＳＫ32土壙遺物出土状況
図版23　ＳＫ34土壙土層断面他
図版24　ＳＫ36土壙土層断面他
図版25　ＳＫ59土壙土層断面他
図版26　ＳＫ土壙土層断面他
図版27　ＳＫ174土壙土層断面他
図版28　ＳＫ174土壙土層断面他
図版29　ＳＫ276土壙土層断面他
図版30　ＥＵ320埋設土器
図版31　ＳＫ1534土壙他
図版32　ＲＰ１検出状況他
図版33　ＲＰ27検出状況他
図版34　ＳＰ49検出状況他
図版35　ＲＱ48検出状況他
図版36　ＳＭ24・26石棺墓
図版37　ＳＭ25石棺墓
図版38　ＳＭ27石棺墓
図版39　ＳＭ28石棺墓
図版40　集石遺構
図版41　墓壙検出状況
図版42　墓壙群
図版43　Ａ区全景
図版44　Ａ・Ｄ区全景
図版45　Ｂ区全景
図版46　Ｃ区全景
図版47　Ｄ区全景
図版48　調査風景他
図版49　遺構内出土土器（１）
図版50　遺構内出土土器（２）
図版51　遺構内出土土器（３）
図版52　遺構内出土土器（４）
図版53　遺構内出土土器（５）
図版54　遺構内出土土器（６）
図版55　遺構内出土土器（７）
図版56　遺構内出土土器（８）
図版57　出土土器（１）
図版58　出土土器（２）
図版59　出土土器（３）
図版60　出土土器（４）
図版61　出土土器（５）
図版62　出土土器（６）
図版63　出土土器（７）
図版64　出土土器（８）
図版65　出土土器（９）
図版66　出土土器（10）・石器
図版67　出土土器（11）
図版68　出土土器（12）
図版69　出土土器（13）
図版70　土偶（１）
図版71　土偶（２）
図版72　土偶（３）・小形土器・注口土器
図版73　土版・スタンプ状土製品・耳栓他
図版74　土製円盤
図版75　石鏃・石錐・掻器・石匙
図版76　石匙・磨製石斧（１）
図版77　磨製石斧（２）
図版78　磨製石斧（３）
図版79　磨石・凹石
図版80　石皿（１）
図版81　石皿（２）
図版82　石棒（１）
図版83　石刀
図版84　軽石製品他

調査の経緯

1　調査に至る経過

村山市の北西部に位置する富並地区は大高根山や葉山などの山懐に抱かれて地形的な起伏に富む。地区の水源は葉山から東流する富並川であり、両縁の処々に発達した段丘が形成される。この水系と段丘は早くから生活の拠点的な舞台として利用されたらしく、縄文時代集落の立地もこれらとは無縁でない。例えば、山ノ内のガンジャ遺跡や岩倉遺跡は縄文時代早期中葉と中期後葉、国道の改修に伴って調査された古道・中山遺跡は中期中葉～後葉、宮の前遺跡は後期後葉から晩期前葉、里部落北側の西海渕遺跡は中期中葉～後葉期の遺跡であり、川口遺跡は後期中葉を主体とする遺跡であった。

すなわち、水系を中心として営まれた縄文時代集落の占地とその移動・拡散等が想起され、興味深い内容を秘めていると考えられるからである。いずれにしろ、太古から自然に恵まれた豊かな大地であったと言えるであろう。

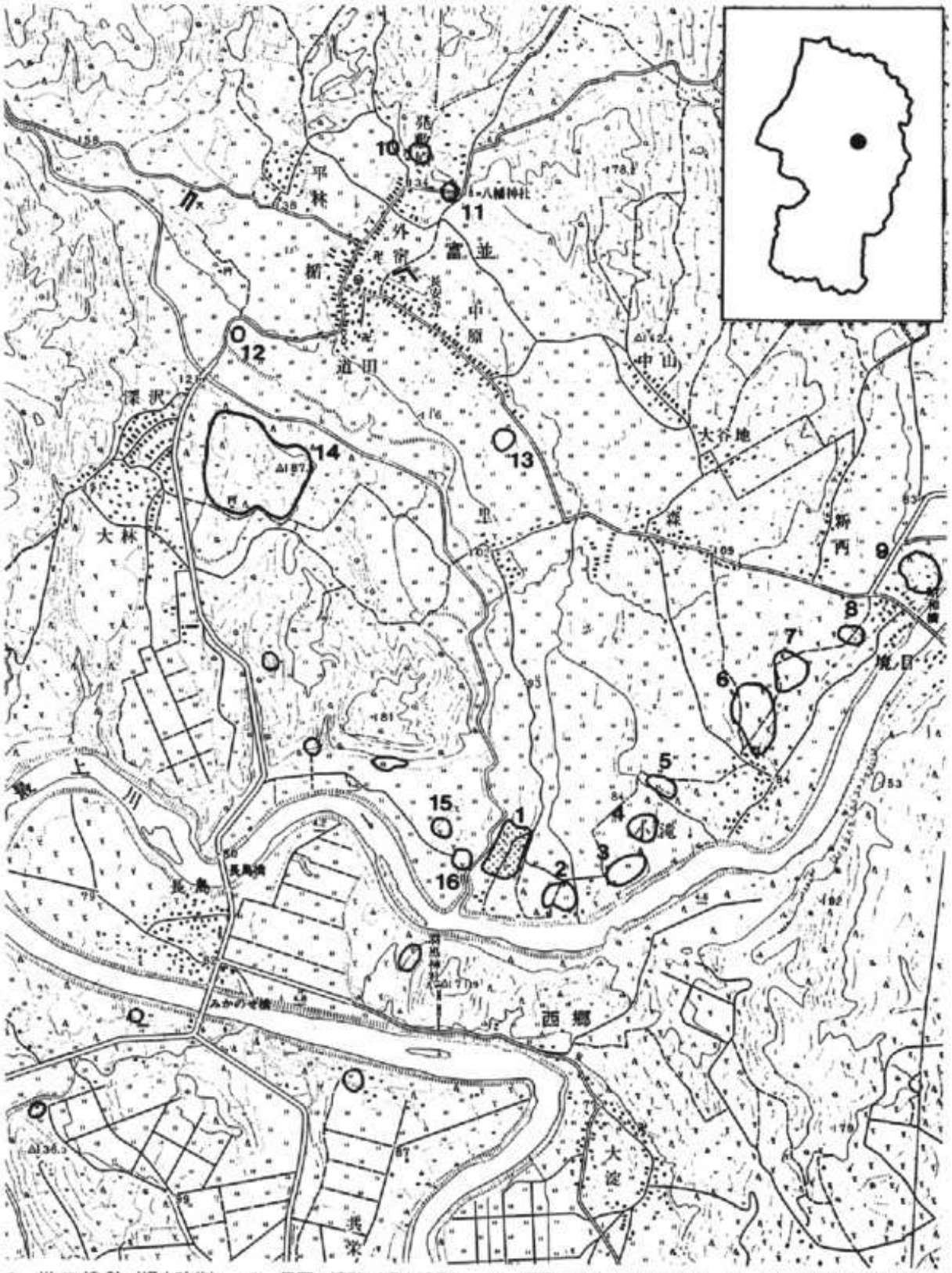
一方、こうした地域一帯に昭和63年度から近代的農業経営の基盤作りを目的とした県営ほ場整備事業が実施されることになり、幾つかの遺跡がこの事業区域内に含まれると予想された。このため県教育委員会は事前に県農林部との協議を進め、工事に先行して年次毎に遺跡の試掘を含む詳細分布調査を実施して来ている。

その結果、本遺跡はやむをえず壊されると判断されたことから事前に緊急発掘調査を行って記録保存に資すると決したものである。

2　調査の概要

調査は遺跡全域を覆うグリットの設定から開始し、その基準を調査区南端に予定される農道センターの杭に置いた。グリットの単位は1区画が10m×10mである。次に、遺跡域の微地形や遺構・遺物の分布状況を探る目的から10m×2mのトレンチを南北方向に3列、補助的な東西トレンチを段丘崖寄りの西側に数箇所設定した。その結果、地形的に遺跡範囲の内でもA・C・D区とした部分が微高地であり、かつ主体的な遺構と遺物の分布が認められた。従って、この部分を対象として重機で拡張し、各拡張区は農道その他の関係からA～D区に分割してB→C→A→D区の順に遺構の検出と精査、および記録作業を進めている。なお、各調査区の面積はA区1,800㎡、B区1,025㎡、C区1,970㎡、D区2,735㎡、計7,530㎡である。

調査の進行に伴って地点的な内容や性格が明らかとなり、次第にまとまりある一つの集落的様相が窺えた。すなわち、D区南西部の墓域を中心とした遺構群の配置に特徴が認められ、A区に居住域の展開、C・D区に土壙群や捨場が形成される等の在り方である。



第1図　遺跡位置図　（S＝1：25,000）

II　遺跡の概観

1　遺跡の立地と環境

村山市の北西部に位置する富並地区は、葉山から東南方に向かって流れ出す富並川によって形成された扇状地形と河岸段丘の発達する地域である。そこでの土地利用は、平坦面の卓越する「森」・「中原」などの集落を中心として広がる水田地帯と、最上川の縁辺や低丘陵の斜面、あるいは丘陵裾部などを中心とするスイカ・果樹ほかの畑作地帯とに大別される。一方、現在の集落立地は扇状地の中央部に南東に向かって細長く延びる微高地(「中原」・「森」・「里」) や最上川西岸の段丘崖縁辺部 (「川口」・「小滝」・「境ノ目」)、あるいは、扇頂部に近い高台 (「楯」・「外宿」・「道田」・「平林」)、丘陵や山裾 (「中山」・「深沢」・「発敷原」・「西山」) 等と識別でき、各々に自然地形や歴史的背景を負った状況が窺い知れた。

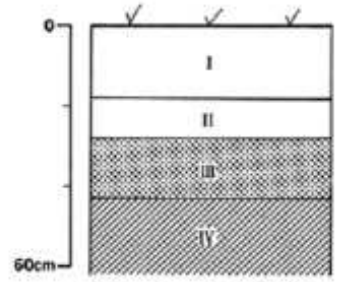
例えば、鬼甲城との関連が推測される「深沢」集落、あるいは中世に於ける城館の存在を地名として今に伝える「楯」、最上川舟運との関わりが深い「境ノ目」・「小滝」・「川口」などの川筋の村、旧街道に沿う「外宿」・「道田」、近年の開拓に伴う「中山」・「大谷地」・「平林」などの村々である。

この地域に確認される川口遺跡ほかの縄文時代遺跡は、これまでの調査から第1図に示した15箇所ほどが知られている。これらの分布は主として長島橋から昭和橋間の最上川左岸の段丘(第1図1～9、15・16)、富並川左岸の河岸段丘(12・13)、大高根南麓の山裾部(10・11)などと読みとることができ、最上川に沿って点々と分布する特徴的なありかたや、富並川を拠り所として規模の大きな集落を地点を遷しながら連綿と形成する様子などが注目される。視点を変えてこれらの意義を探れば、一つに集落立地と生業との関わり、もう一つに集団の領域と社会組織と言った内容までにもせまり得る希有な事例と評価できる。

すなわち、「縄文のムラ」とも言える一つの地域社会や組織の具体像が浮かび上がるのではないかと期待されよう。

見通し的に述べれば、縄文早・前期は山ノ内遺跡をはじめとする富並川上流部の山間丘陵地や最上川左岸の段丘に、中期は西海渕や古道・中山遺跡を中心とする富並川中・下流域や山麓に、後期は富並川河口近くに位置する川口遺跡、晩期は扇状地形の扇頂部付近で富並川左岸に位置する宮の前遺跡へと立地的に変遷したようであり、いずれもその集落規模の点では、地域の拠点的集落と考えてよい。今後、これら遺跡群の調査が進めば、より具体的に内容が明確になると期待されるが、以上に挙げた遺跡群の変遷が連面と途切れることがないのかどうか、あるいは一時的な離散状態を経て集合する形態をとったのかどうか、その他生業に関わる季節的な棲分けと集落の関係追及など興味ある課題は多い。

2　遺跡の層序



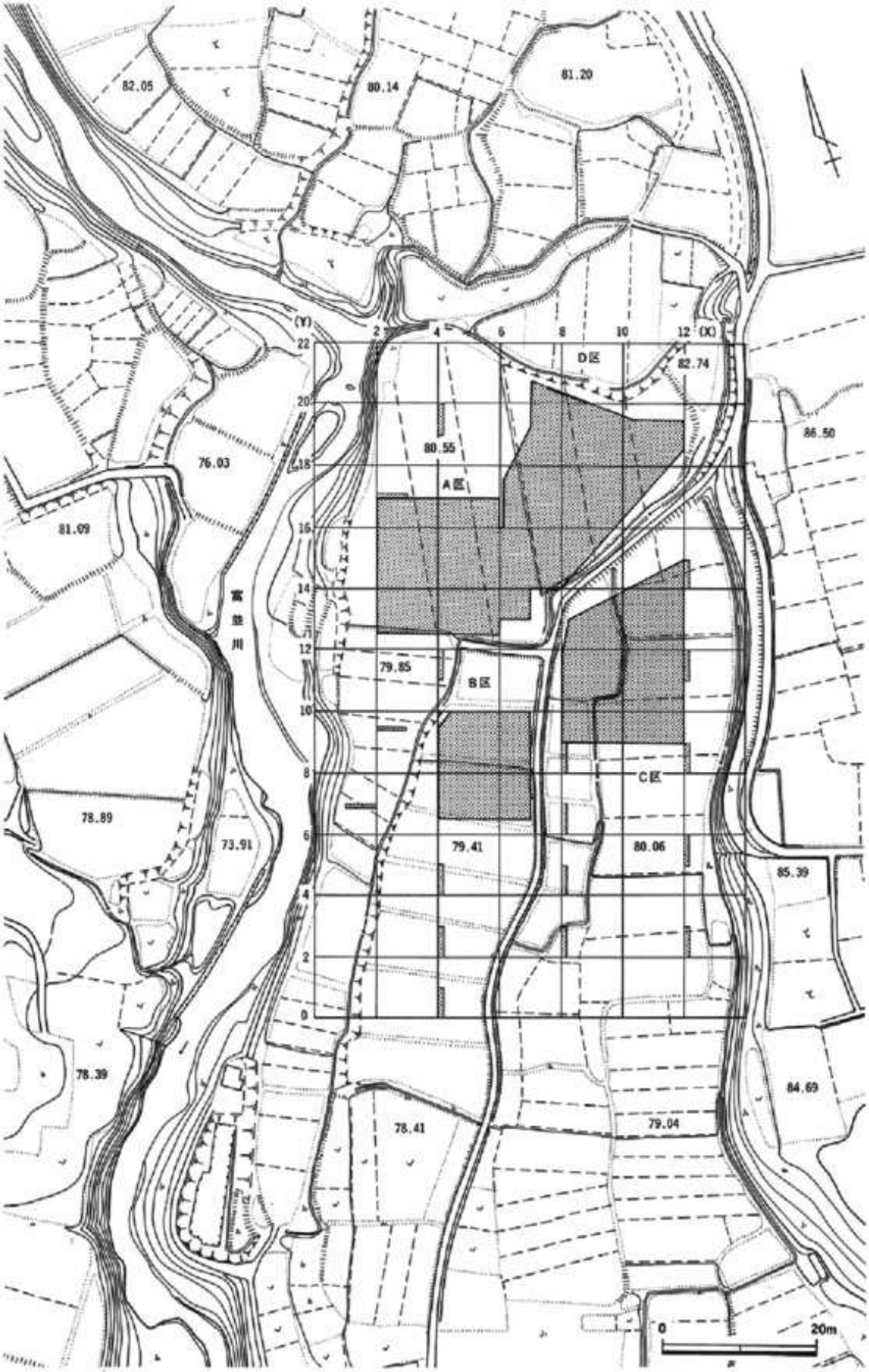
第２図　土層柱状図

調査区は低位段丘面の縁辺部に位置し、その北東間近には比高差約５ｍの段丘崖が自然の壁となって南北方向に延び出している。現況は大半が水田となるが、かつては北東側から南西に傾斜する面に小さな段々畑が多くあり、桑畑や野菜等が作られていたらしい。調査では調査区を北東側からD・A・C・B区と各命名して作業を進めたことから、ここでもそれを踏襲して説明しよう。各調査区の比高差はD・A区でD区が約80cm、D・C区でD区が約30cm、C・A区でC区が約50cm、C・B区でC区が約50cm、A・B区でA区が約50cm各々高い。すなわち標高の高い順に表せばD→C→A→B区となるが、大きくはD・C区の面とA・B区の面の二つに区分でき、成因は河川（富並川）の解析によると判断できる。ここでの層序は基本的に４層からなり、A・D区の観察所見ではⅠ層：黒褐色土壌（耕作土）、Ⅱ層：暗褐色土壌（鉄分を多量に含む）、Ⅲ層：クロボク土（遺物包含層）、Ⅳ層：にぶい黄褐色砂壌土（遺構検出層）となる。ただし、A区の東や南西部分、B・C区の大半とD区の中央から南側部分を除けばⅠ・Ⅱ・Ⅳ層の構成を見せ、戦後に行われた開田によってⅢ層の大方が削り取られたものと考えられる。

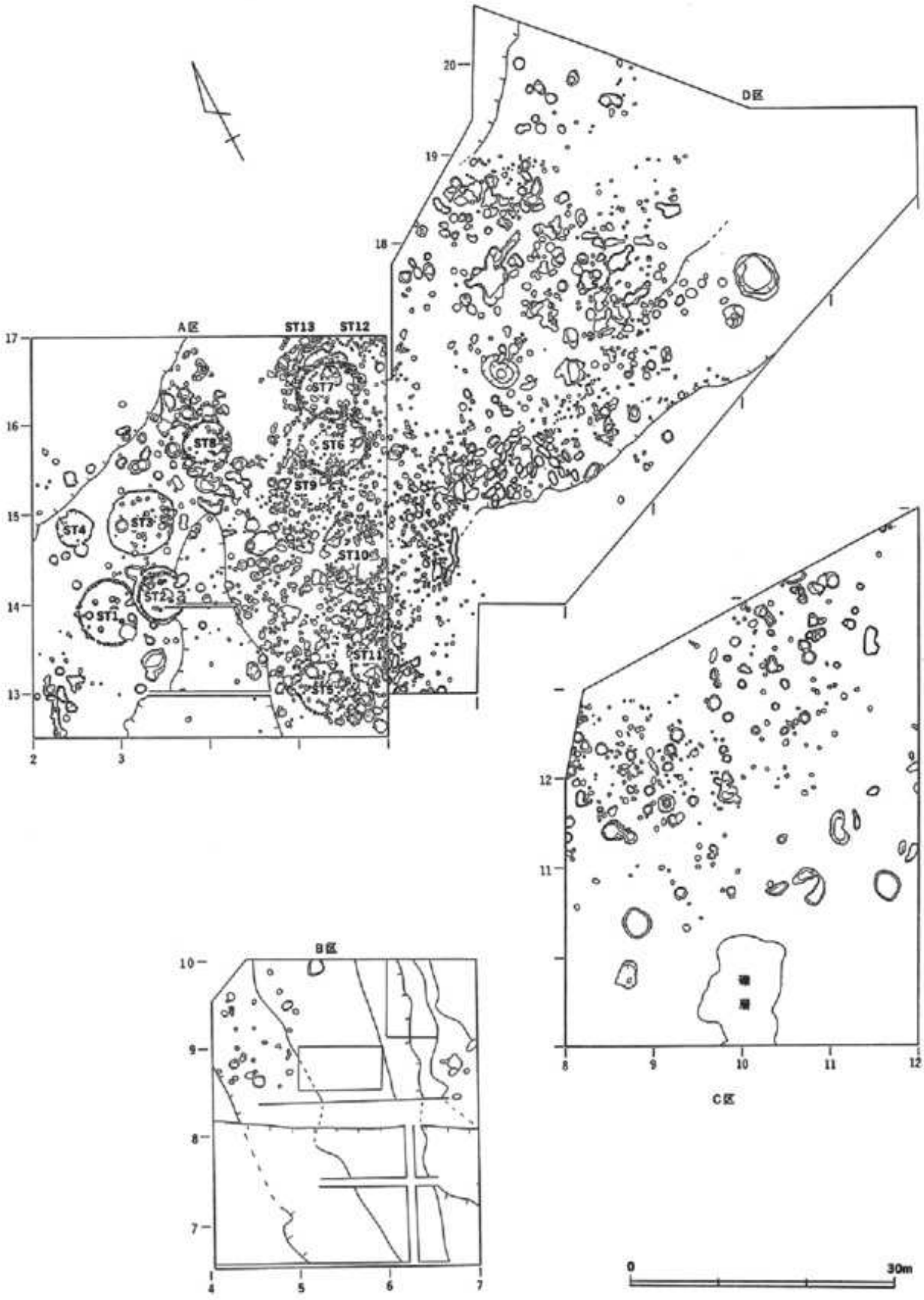
3　遺構と遺物の分布

検出された遺構には竪穴住居跡13棟、住居内炉跡３基（石組炉１基を含む）、墓壙45基（石棺６基を含む）、土壙・柱穴1500基以上、および集石遺構等がある。竪穴住居跡はA区西側の微高地にＳＴ１～４、同東側にＳＴ７・９～13、同北側にＳＴ８等がそれぞれ位置し、D・B区では認めなかった。なお、C区では埋甕炉とも考えられるＥＵ320が検出されたことから、時期的に遡る段階での住居の存在が推測される。しかし、いずれにしても住居の分布的中心はA区にあると窺え、配置や重複の状況は興味深い。

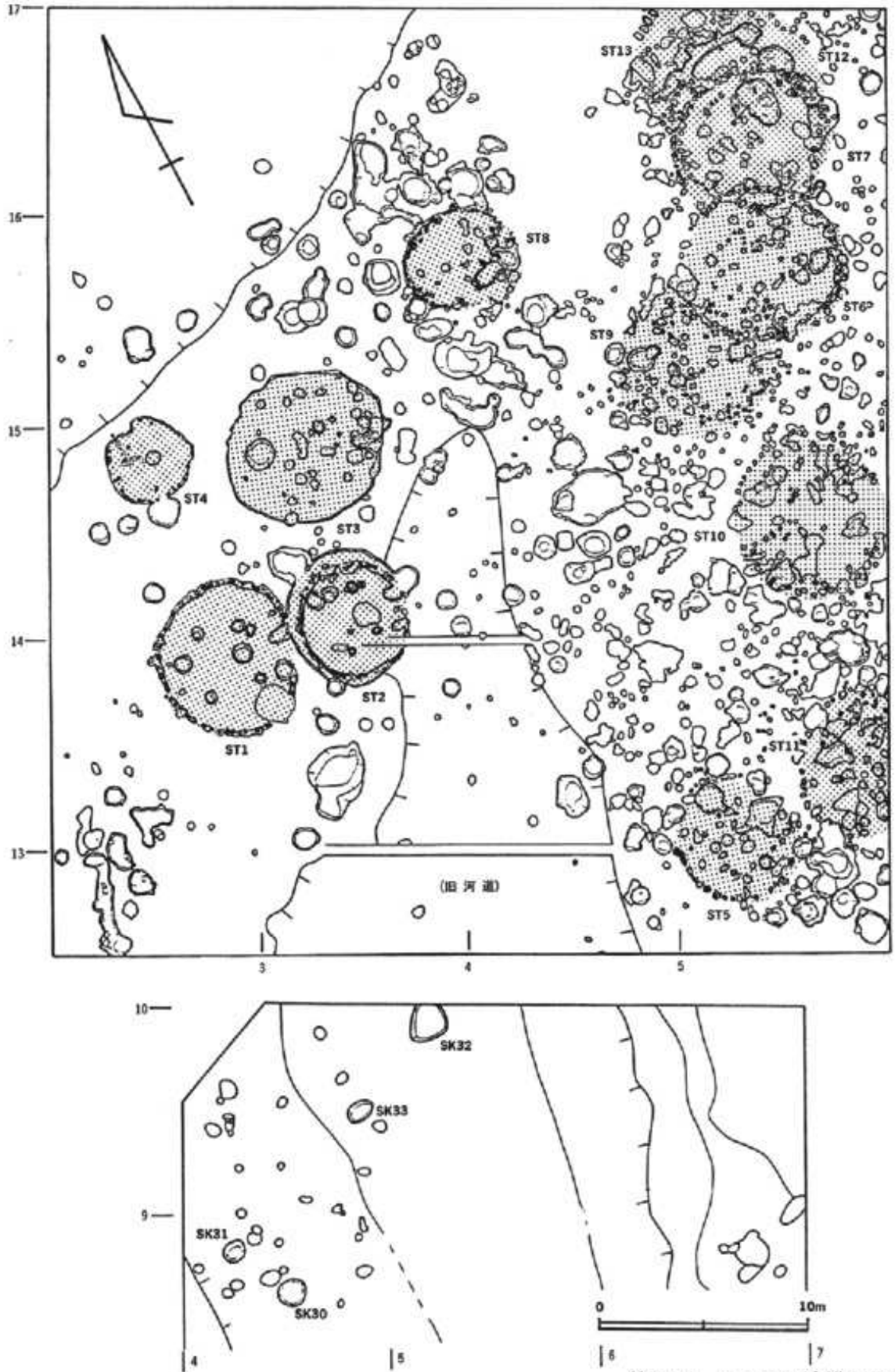
土壙は各調査区で検出されたが、B・C区の南側には認められず、かつ遺構の存在そのものが希薄となった。特徴的なフラスコ状・袋状形態の土壙が集中的に検出されるのはA区南半及びC区の北半部分である。墓壙はD区南西部分、グリッドにすると６～８－16・17Gの範囲に限定的に分布し、その構築はⅢ層上部からと判断される。分布の外観は小判形の墓壙が半円状に密集してまとまりを作るように見え、土地の改変がなければ南側にも円環を成して存在した可能性が考えられる。また、集石群の分布もほぼこの墓壙の分布と重なっていた。一方、遺物の分布はA・D区の中央部分窪地（旧河川跡）やA区北端部分で主体的に認められたⅢ層中を中心とし、地盤の高い部分に位置した住居域からの検出はごく僅かであった。また一括土器等の優品は土壙内部から出土したものが大半である。


82.05
80.14
81.20
(Y)
(X)
D区
82.74
80.55
A区
86.50
76.03
81.09
富士川
79.85
B区
C区
78.89
73.91
79.41
80.06
85.39
78.39
78.41
79.04
84.69
0
20m

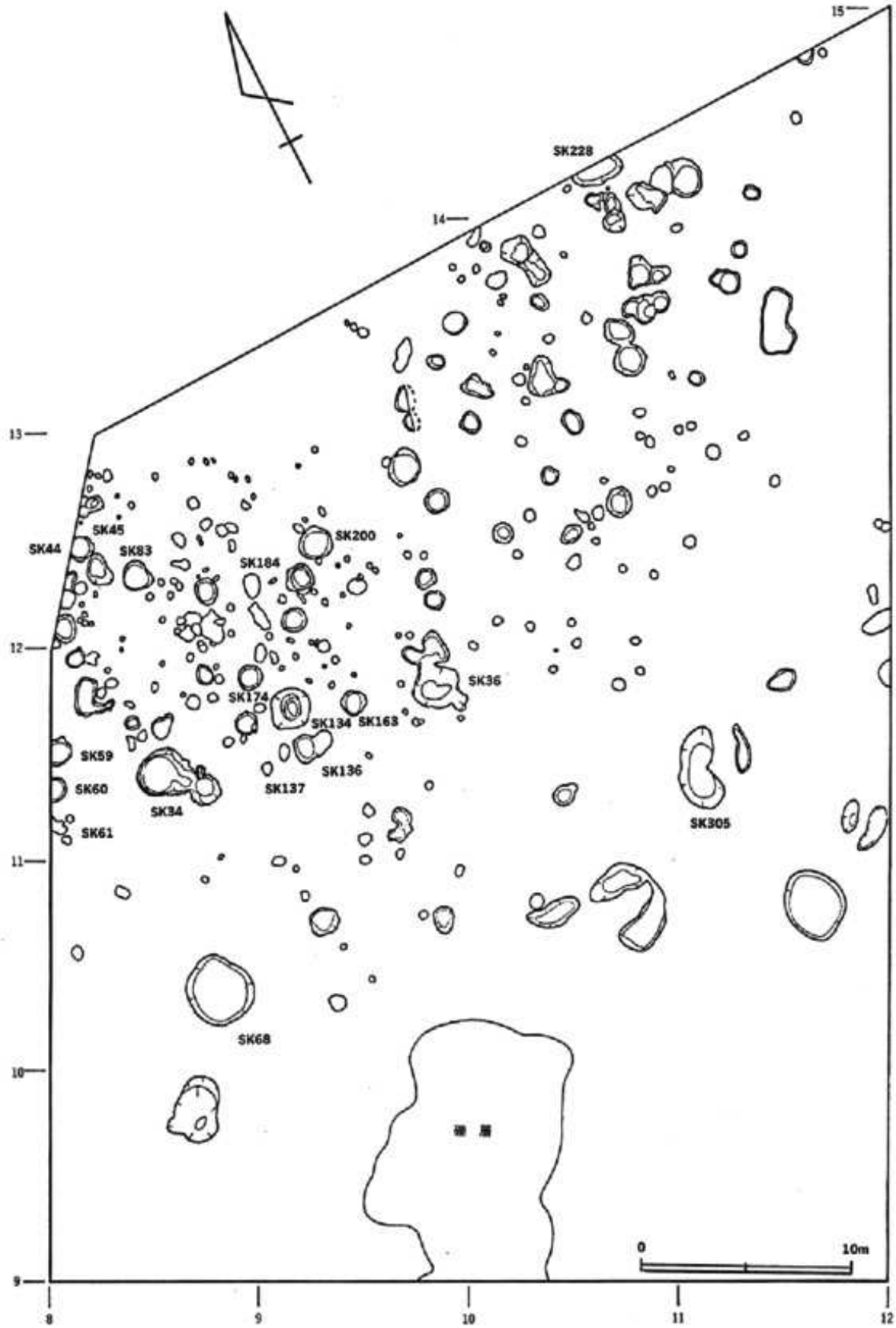
第3図　調査概要図


A区
B区
C区
D区
ST1
ST2
ST3
ST4
ST5
ST6
ST7
ST8
ST9
ST10
ST11
ST12
ST13
0
30m

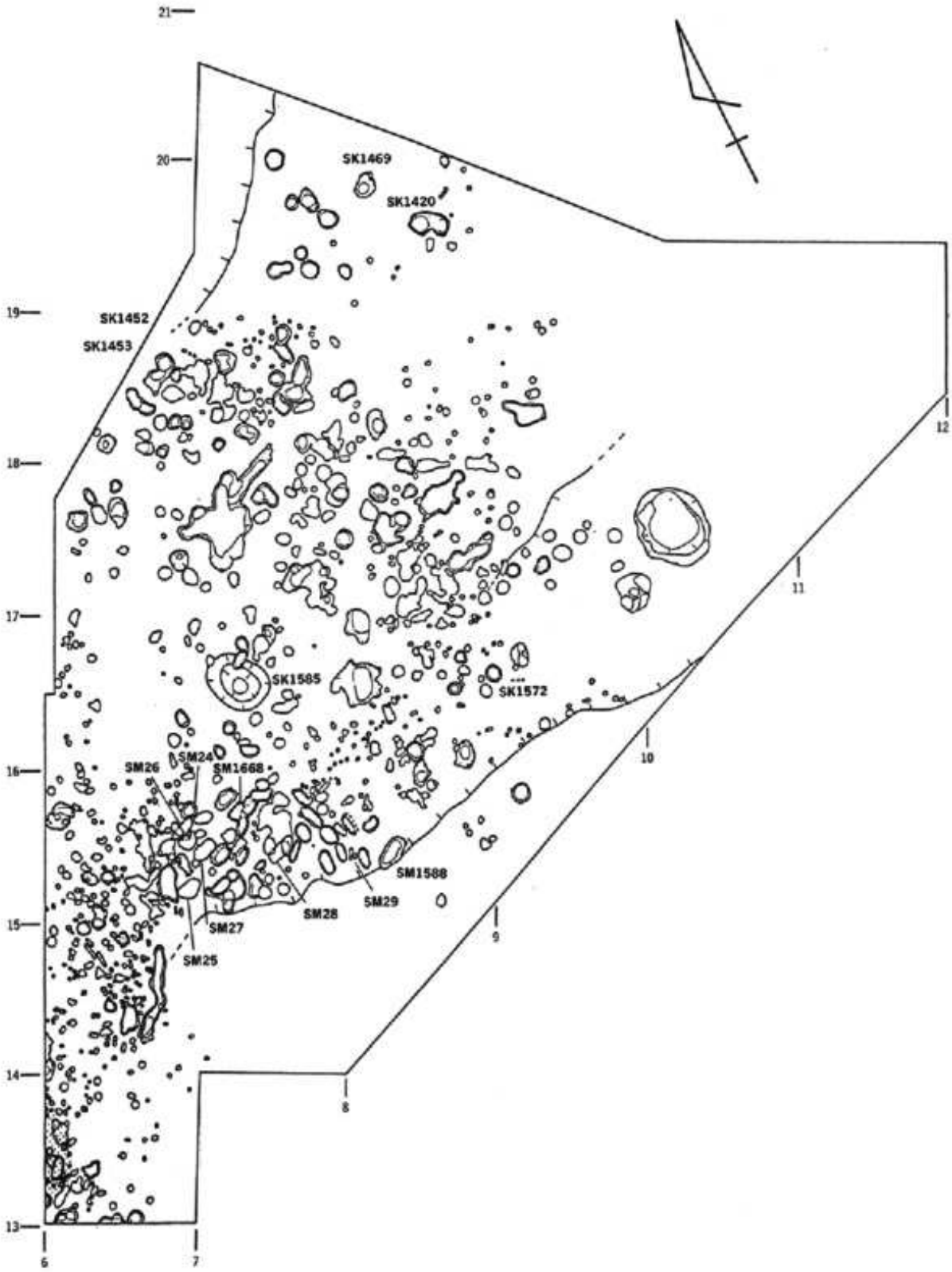
第4図　遺構配置図



第5図　A・B区遺構配置図


15
14
13
12
11
10
9
8
9
10
11
12
SK228
SK45
SK44
SK83
SK184
SK200
SK36
SK174
SK134
SK163
SK59
SK60
SK61
SK34
SK136
SK137
SK305
SK68
0
10m

第6図　C区遺構配置図


SK1469
SK1420
SK1452
SK1453
SK1585
SK1572
SM26
SM24
SM1668
SM1588
SM29
SM28
SM27
SM25
0
20m

第７図　Ｄ区遺構配置図

III　検出遺構

1　住居跡（第8～19図、表－1）

住居跡はA区を中心として重複を含めて13棟が検出された。これらを大まかに形態分類すれば、I類：周溝と壁柱穴の特徴的なST1・2住居跡の類型、II類：周溝の無いST4・8住居跡の類型、III類：壁柱穴が連続的に認められるST7・9他の住居類型、主柱のみで壁柱の無いST3住居例等に分類できる。しかし、III類は検出段階で壁・周溝の確認できなかった例のため、本来ならI・II類に帰属する可能性が考えられる。以下各住居跡毎に説明する（ただし検出が部分的で、全体の不明なST12・13住居跡は割愛した）。

ST1住居跡（第9図、図版5～7）

［位置・重複］A区の2・3－14・15Gに位置し、III層上面で検出された。東側のST2に切られるほかは土壙等との重複は認められない。［平面形・規模］南北にやや長い楕円形を呈し、周溝・壁柱穴から長軸7.6m、短軸6.8m規模を各測る。壁は検出できなかった。［床面・炉・柱穴］床面はほぼ平坦と考えられるが大分削平を受けた様子が窺えた。主柱はEP364・368・372・1044の四本と推定でき、規模は径43～64cm、深さ57～70cm、相互の距離2.5～3mを各測る。壁柱穴は小穴を連続的に掘り込む（むしろ刺し込むが適切か）もので、径8～30cm、深さ10～45cmの規模を持つ。総数にして51基を数えるが、住居構築以前から存在した南東側大礫部分や住居西側および西南の一部では検出されず、不連続に途切れる状態が認められた。［出入口施設］EP370・1050のやや規模の大きい二柱穴は、環状に巡る壁柱列の内側に接続し、距離90cmを測る。両柱穴間に壁柱穴が確認されないこと、主柱372－368・1044－365等と平行すること等からみて住居の出入口施設に関連する柱穴と推定できる。なお以下に述べるST2住居跡でも同様の施設が確認された。炉跡は床面が削られていたため明確でないが、主柱372-368間中央に位置する略円形土壙SK369が該当しよう。長径100cm、短径86cm規模の掘込を持つ地床炉と判断できるが、焼土等は認めていない。［開口方向］住居出入口や主柱等から見た方向はN-80°-E前後で、墓壙群の位置に向かって開口する住居跡と捉えられる。

ST2住居跡（第10図、図版5～8）

［位置・重複］A区、2・3－14・15Gに位置し、III・IV層上面で検出された。西側のST1住居跡、北東のSK1059土壙を各切る他、SK354・同365土壙と重複している。［平面形・周溝］平面プランは南北に長い楕円形で長径6.5m、短径5.7mの規模を測る。周溝は上幅30～100cm（平均80cm）、深さ4～20cmを各測り、その幅広の在り方が特徴となる。内側に床面との境を画す壁柱穴が連続的に巡り、その外側に幅広の平坦面が取り巻いている。

面・柱穴］床面は西側でIV層を、東側では旧河道に堆積したIII層（黒ボク土）を掘り込んで構築している。旧状を留める床面西側は平坦で締まりを有すが、出入口周辺は基盤層がIII層のためか安定しない。部分的ながら貼り床の形跡が認められる（第10図ｃ－ｃ′1層）。主柱はＥＰ403・1087・1101・1085の四基と推定でき、径25～30cm、深さ43～70cm、距離1.7～2.4mを各測る。壁柱穴はＳＴ１住居跡と同様で、径10～20cm、深さ42～78cm規模のものが連続的に57基ほど配置されて周巡している。［出入口施設］ＳＴ１住居跡同様、周溝に接続する柱穴ＥＰ1057・1069の２基が主柱に平行して住居東端に配置され、その開口方向がＳＴ１住居例にほぼ同一と窺えた。［炉跡］主柱ＥＰ1087－1101間のやや西側に、ＳＫ362土壙を炉の掘り込みとする地床炉ＥＬ22が付設される。焼土は上面が削られるため原形を止めないが、中央部分に厚さ４cmほどで残存していた。

ＳＴ３住居跡（第11図、図版９）

［位置・重複］Ａ区、２・３－14・15Ｇに位置し、IV層上面で検出された。他との重複はない。［平面形・規模］平面形は東西方向でやや長い楕円形で、長径8.2m、短径6.9mを各測る。壁は住居がＳＴ１同様に地盤の高い部分に位置するため、その大方が削られたと判断でき、検出面から僅か２～３cmの深さで確認できる程度であった。［床面・柱穴］床面は平坦でやや締まりが認められる。柱穴は床全体で38基ほどが認められるが、配置から見てＥＰ380・387・390・1701の四本が基本になると推測できる。あるいは東壁際のＥＰ1073・1707等が加わって出入口の施設を構成した可能性も考えられるが、ＳＴ１・２住居跡のようには明瞭でない。また、周溝・炉跡も確認できず全体に不明瞭な部分が多い。

ＳＴ４住居跡（第12図、図版10・11）

［位置・重複］Ａ区、２－15・16Ｇに位置し、IV層上面で検出された。南側に接する様に位置するＳＫ347と重複関係にあるが、土層の観察からでは先後関係は捉えられなかった。もしかするとＳＫ347土壙が付随していた可能性も考えられる。［平面形・規模］北側が部分的に傾斜面にかかることから検出できなかったが、平面形は略円形と認められる。規模は長径4.2m、短径3.9mで、調査で検出された住居の中では最小例となる。壁は上部が大分削られていると推測されるが、検出面から10～15cmの深さを持つ。［床・柱穴］壁の内側に沿って巡る32基の壁柱穴が認められた。規模は径５～13cm、深さ６～25cm程度で、その仕様から直接刺し込まれたと判断できる。なお、主柱・周溝は検出されなかった。［炉跡］床面の中央やや東側に地床炉が検出された。床面を直接使用するもので、石組や掘り込み等施設を認めず、焼土化した範囲の径60～70cm、深さ５cm程となって確認されるのみである。

ＳＴ５住居跡（第13図、図版12）

［位置・重複］A区、4・5－13・14Gで検出された。Ⅳ層上面で検出されたが、壁の大方は失われ、壁柱穴のみの検出に留まっている。ＳＫ619・654・687・614等と重複関係にあり、壁柱穴を切るＳＫ614・687が時期的に新しいと判断できるが、他は不明である。［平面形・規模］南北にやや長い楕円形プランを有し、壁柱穴から長径6.28m、短径5.65m規模と推測される。［床面・柱穴］床面は既に削られており確認されない。柱穴はＥＰ620・634・1118・1709の四本が主柱穴と考えられる。柱穴径50～70cm、深さ20～60cm、距離3.9～4.4mを各測る。また、壁柱穴と考えられるＥＰ632・625～628・644～646等の31基が住居輪郭をなぞるように周巡していた。これらの規模は径・深さ共に20cm内外のものが大半である。なお、東側のＳＫ677－687間に壁柱穴が見られないことからすれば、ＳＴ１・２住居跡同様東側に開口する出入口の存在が推定されよう。

ＳＴ６住居跡（第14図、図版13）

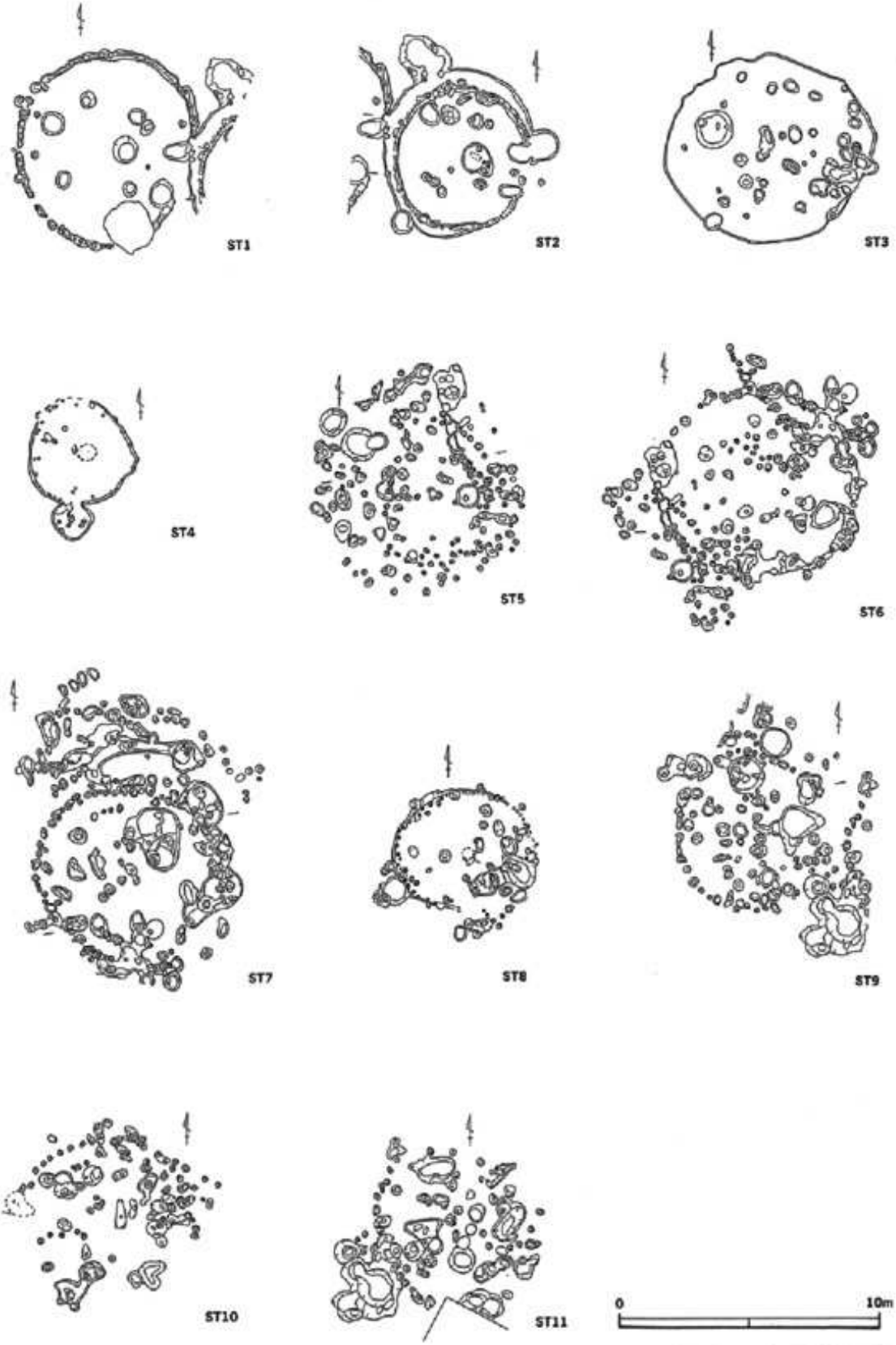
［位置・重複］A区、4・5－16・17Gに位置し、Ⅳ層上面で検出された。北東部でＳＴ７住居跡と、南西でＳＴ９住居跡と各重複している。先後関係は明確でないが、壁柱穴の在り方からＳＴ９→６→７の構築順が想定される。［平面形・規模］平面形は略円形で、規模は壁柱穴列を住居範囲と見れば長径8.05m、短径7.25m程と推測できる。なお、壁・床は検出できなかった。その理由の一つは黒ボク土（Ⅲ層）中にそれらが止まった故と考えられる。［柱穴］確認面は西側が東側に較べて約30cm程低くなったが、それは、Ⅳ層の傾斜と対応している。主柱穴は配置・規模等からＥＰ907・930・1040・1042の四基と推測でき、径43～78cm、深さ59～66cm規模を各測る。距離はＥＰ907－1042間で3.7m、ＥＰ930－1040間で2.8mを各測り、南北方向で2.85mと同一である。このことはＳＴ１・２住居跡で認めたようにプラン長短との関係が窺え、相関が成り立つとすれば住居出入口は南側と推測できる。壁柱穴は総数で50数基を数え、出入口部分の南側で不明瞭となっている。

ＳＴ７住居跡（第15図、図版13）

［位置・重複］A区、4・5－13・14Gに位置し、Ⅳ層上面で検出された。南西でＳＴ６住居跡に切られ、北側のＳＴ12・13住居跡、東側のＳＫ1030・1037を切る重複関係が認められる。［平面形・規模］壁は未検出ながら壁柱穴から南北方向にやや長い楕円形と考えられ、長径7.3m、短径6.7m規模が推測できる。［床面・柱穴］床面は未検出である。主柱はＥＰ997・1016・988・1026の四基と推定されるが明確でない。またＥＰ1028は対向する柱穴と組合さって出入口施設を構成すると判断される。すなわち、南東に向かって開口した住居と考えられる。なお，炉跡は確認されなかった。

ＳＴ８住居跡（第16図　図版14～16）

［位置・重複］A区、3・4－16・17Gに位置し、その東西部分で各々ＳＫ438・1095土壙



第8図　住居跡概要図

との重複が窺えた。その関係はＳＫ1095を切り、ＳＫ438に切られると判断される。

［平面形・規模］南東側の一部が不明ながら東西方向に長い楕円形と考えられ、規模は東西5.46m、南北4.5mと推定できる。壁は南東側部分を確認できなかったが、遺存良好な西北部分では深さ10～20cm程で検出された。［床・柱穴］壁の明確な住居西半では貼床が認められ、堅く叩き締められた様子が看取される。床面上での主柱は明確でなく、壁柱穴列から外側に幾分出るＥＰ1710・1712・1713・1715・1716等が主柱的な役割を担ったと考えられる。また、外壁を構成したかのような小壁柱穴が壁の内側に接して50数基検出された。これらの規模は径10cm、深さ30cm内外のものが大半である。［炉跡］住居のほぼ中央部に半周のみを河原石で囲う石組炉が検出された。南側に高さ40cmの大きな礫、その左右に半分ほどの偏平な石を半ば埋め込んで構築するもので、明らかに正面や左右の区別が存在したと考えられる。焼土は縁石内側に40×45cm、厚さ５cm規模で拡がり、上部に木灰を明瞭に止めていた。なお、出入口施設は明らかでないが炉や壁柱穴の在り方から判断すれば、南東方向に開口したものと推測される。

ＳＴ９住居跡（第17図、図版17）

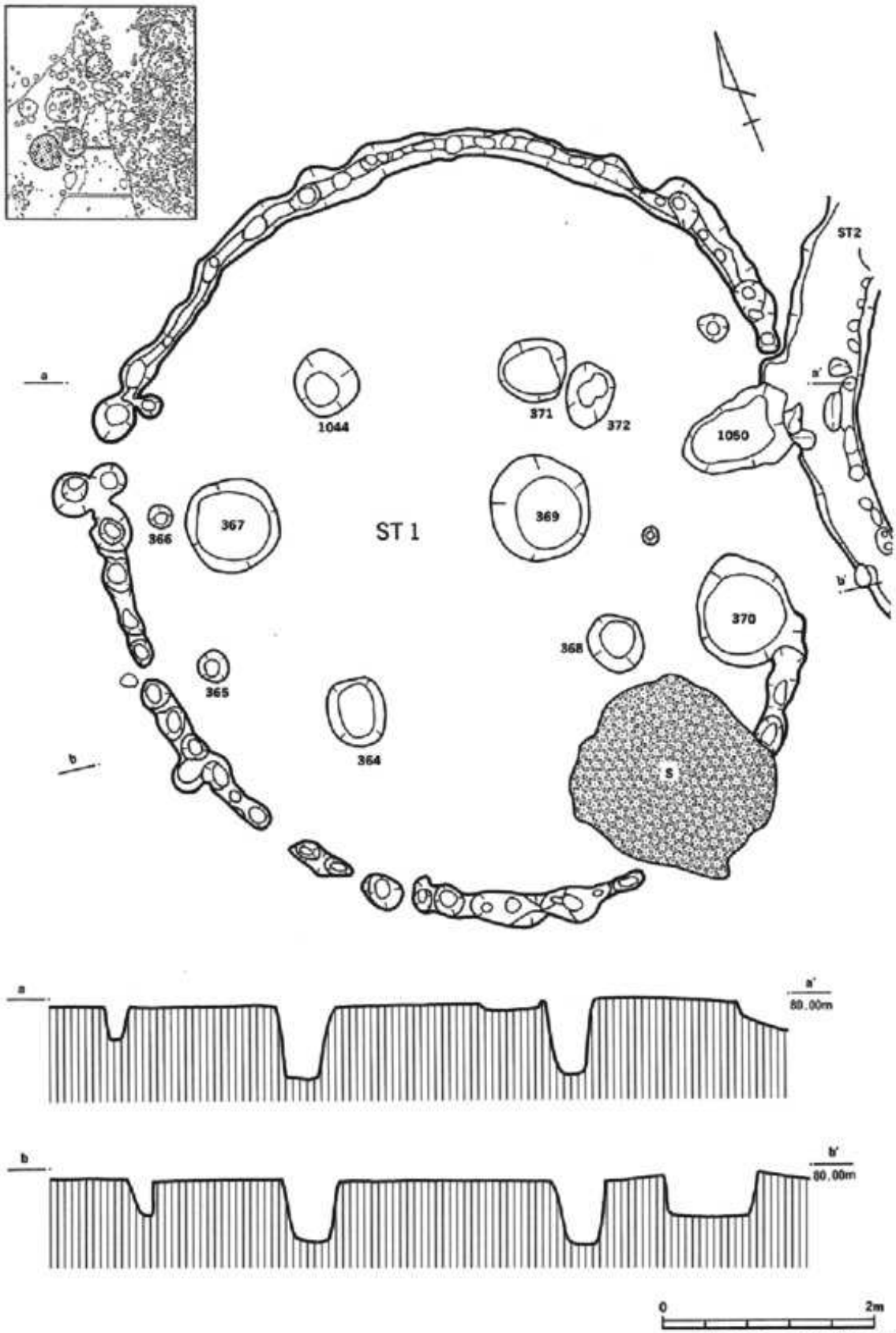
［位置・重複］Ａ区、４・５－15・16Ｇに位置し、Ⅳ層上面で検出された。重複ではＳＫ６に切られ、ＳＫ502を切る関係が認められる。その他ＳＫ891やピット多数との重複が窺え、本住居跡より規模の小さな住居との重複も推測される。［平面形・規模］住居プランは楕円形で、壁柱穴から長径7.0m、短径6.32m程の規模が推定できる。［床面・柱穴］床面は削られて遺存しない。主柱は幾つかの候補が上げられなくもないが、配置・規模等で一定しないため特定が困難である。一方、壁柱穴は径・深さ共に20cm内外を測るものが主体となり、これらが環状に巡っていると捉えられる。なお炉跡は検出されなかった。

ＳＴ10住居跡（第19図）

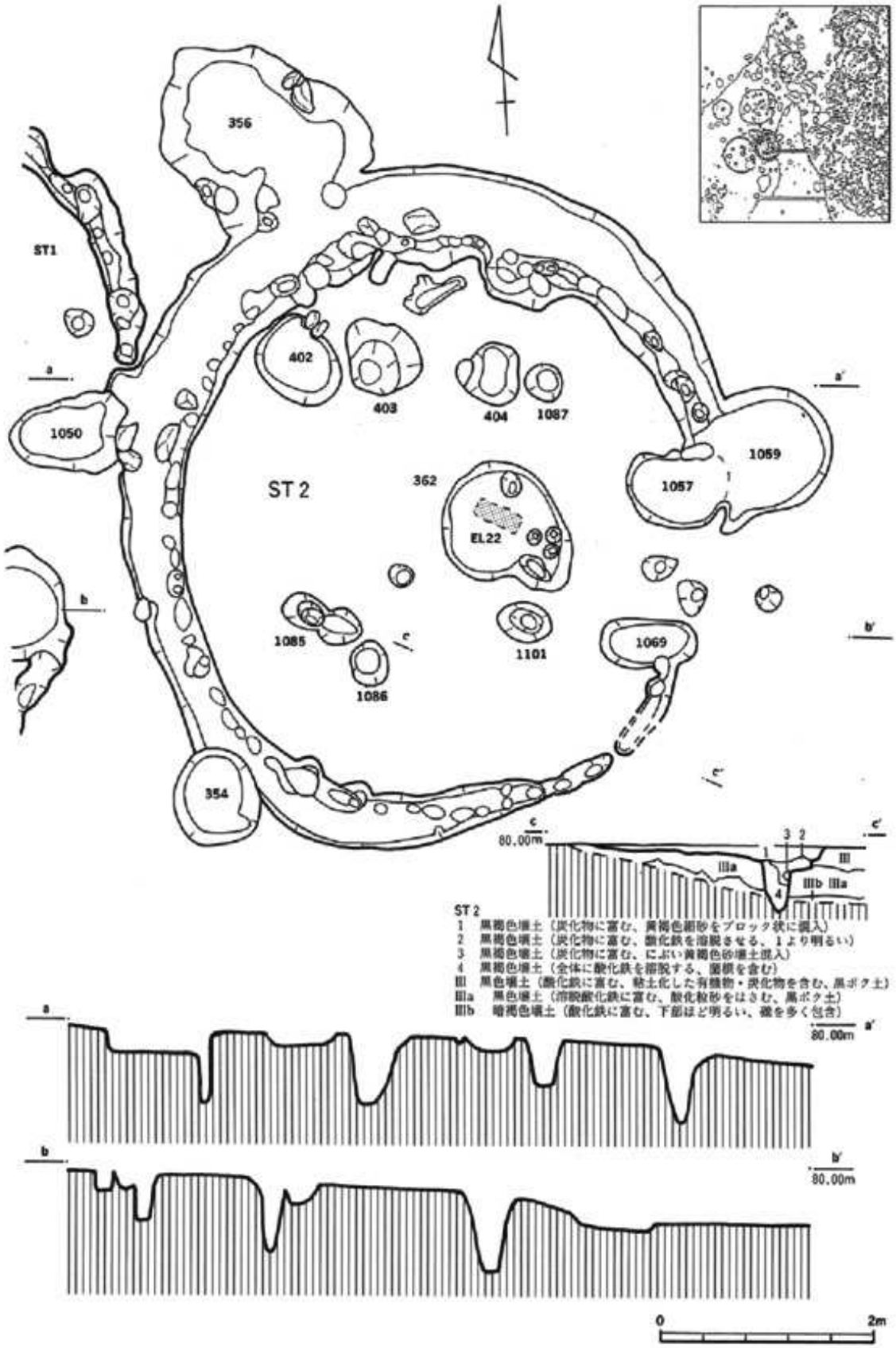
［位置・重複］Ａ区、５・６－14Ｇに位置し、ＳＫ823他多数のピットと重複するが、先後関係は明らかでない。［平面形・規模］平面形は壁柱穴の配列から、東西方向にやや長い楕円形と捉えられ、長径で約７ｍと推定される。［床面・柱穴］床面は遺存しない。柱穴は主柱が不明で、壁柱20基程で半周を構成すると見受けられた。壁柱径20cm内外、深さ30～40cmを各測る。なお、炉跡その他は不明であった。

ＳＴ11住居跡（第19図）

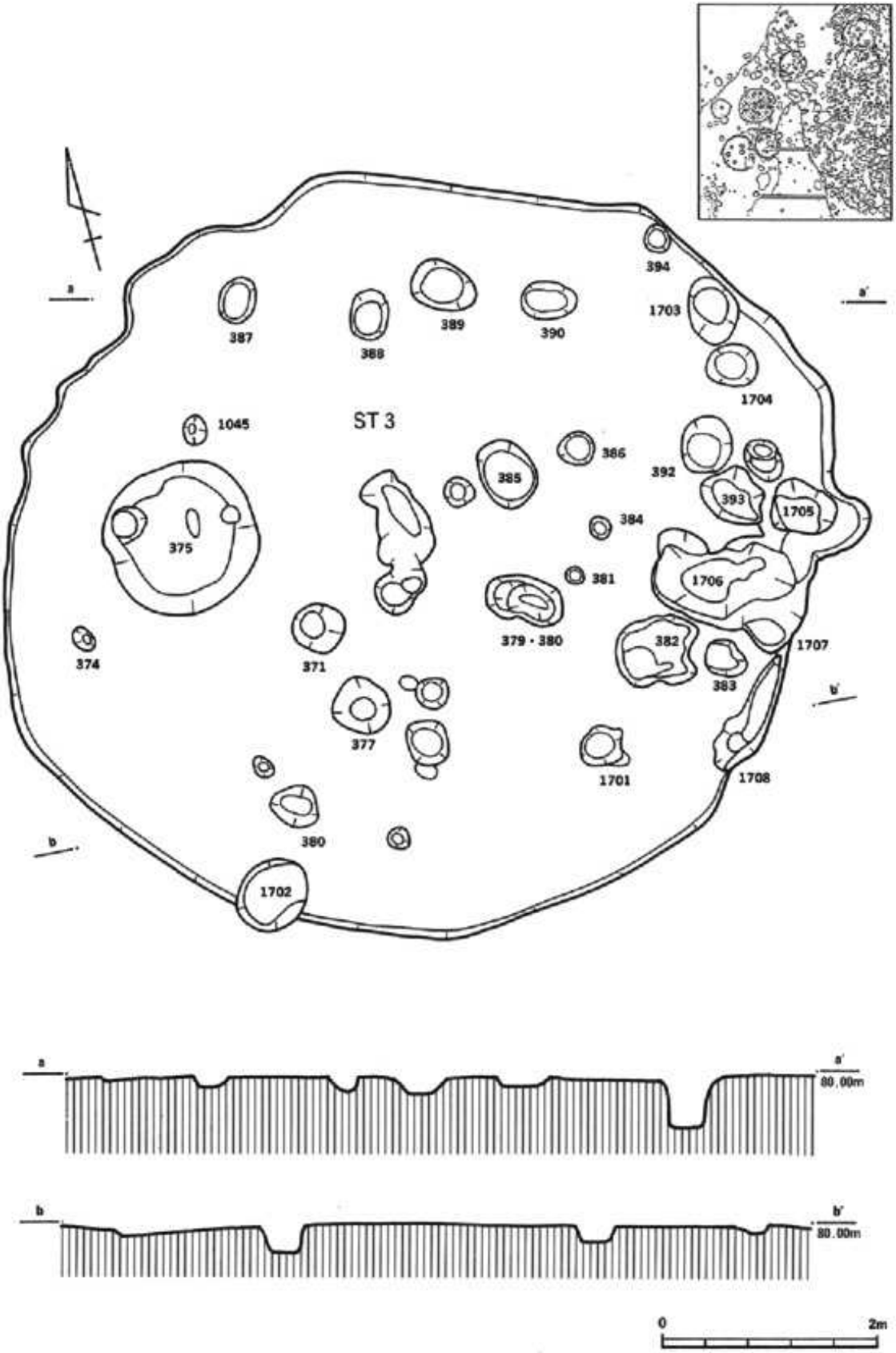
［位置・重複］Ａ・Ｄ区、５・６－14Ｇに位置し、ＳＫ688・699・791・1112等と重複関係にあるが、先後関係は明確でない。［平面形・規模］プランは略円形で、長径約6.8m規模と推測される。［床面・柱穴］床面は遺存せず、柱穴のみでの確認となった。主柱はＥＰ681・798・1113・1717の４基と推測でき、壁柱穴はプラン外周に30基程が確認された。


ST2
a
a'
1044
371
372
1050
ST 1
366
367
369
370
368
365
364
S
b
b'
a
a'
80.00m
b
b'
80.00m
0
2m

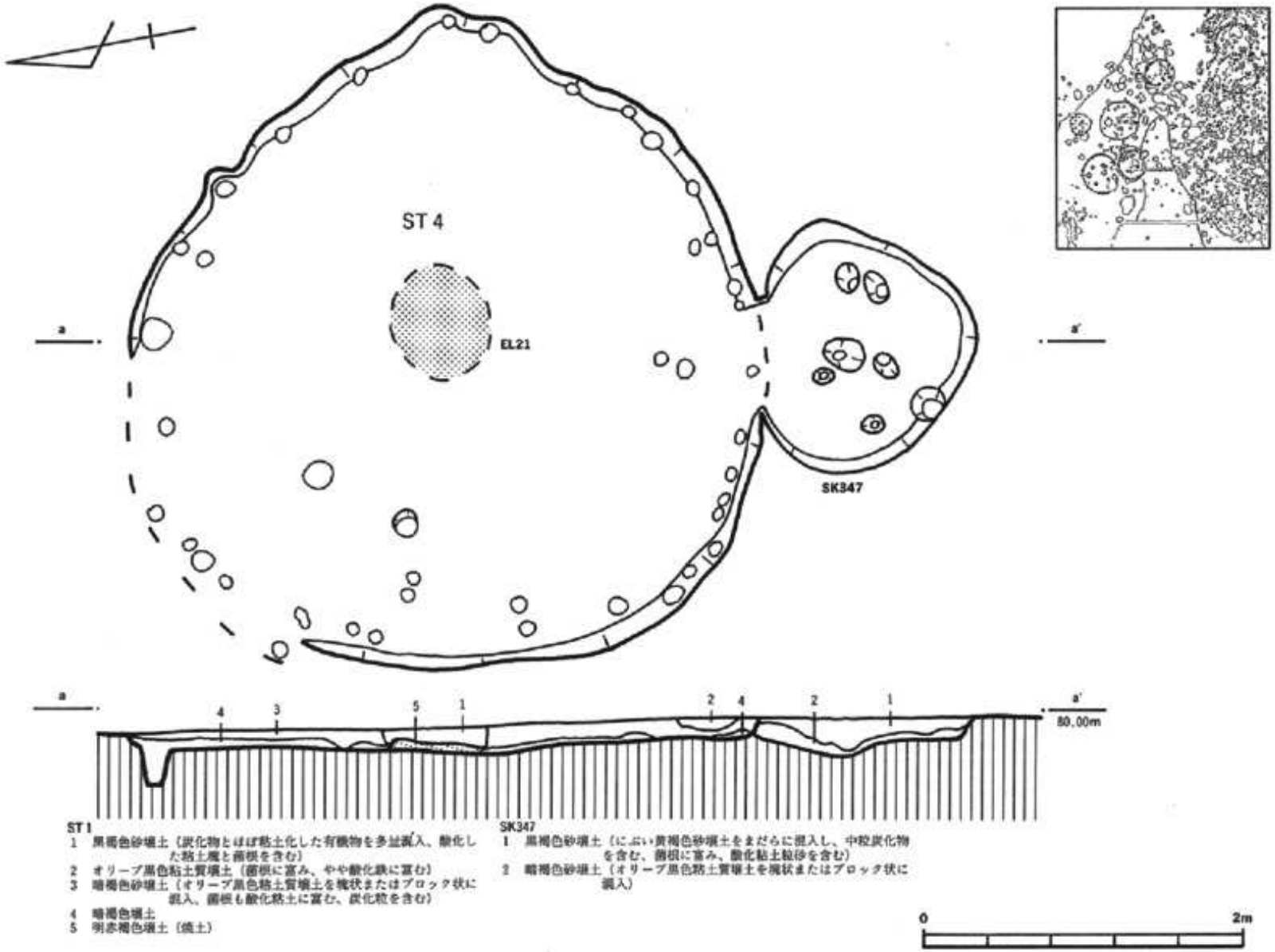
第9図　ST1住居跡


356
ST1
402
403
404
1087
1050
ST 2
362
EL22
1059
1057
1085
1086
1101
1069
354
a
a'
b
b'
c
c'
80.00m
ST 2
1 黒褐色壌土（炭化物に富む、黄褐色細砂をブロック状に混入）
2 黒褐色壌土（炭化物に富む、酸化鉄を溶脱させる、1より明るい）
3 黒褐色壌土（炭化物に富む、にぶい黄褐色砂壌土混入）
4 黒褐色壌土（全体に酸化鉄を溶脱する、置根を含む）
III 黒色壌土（酸化鉄に富む、粘土化した有機物・炭化物を含む、黒ボク土）
IIIa 黒色壌土（溶脱酸化鉄に富む、酸化粒砂をはさむ、黒ボク土）
IIIb 暗褐色壌土（酸化鉄に富む、下部ほど明るい、礫を多く包含）
0
2m

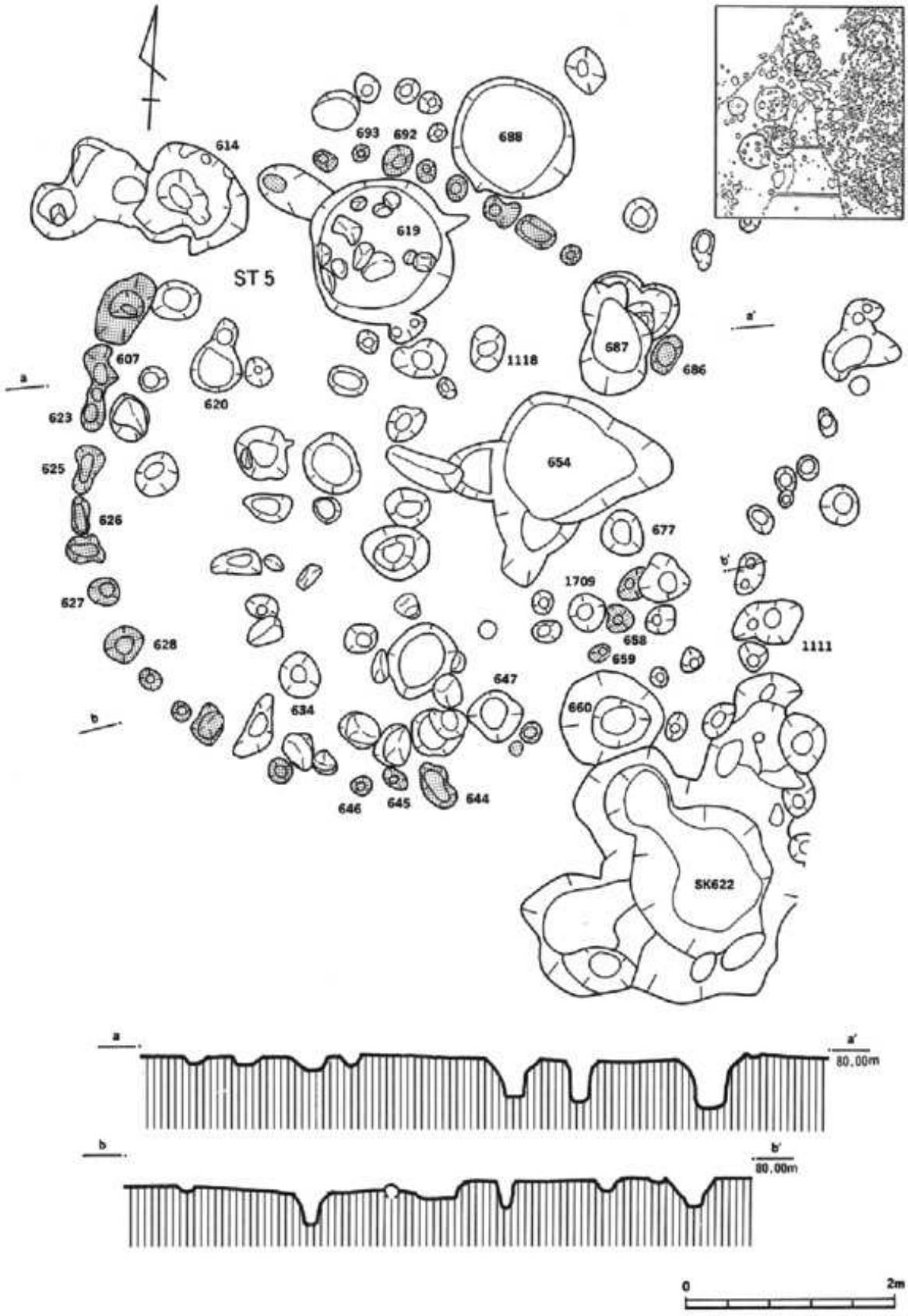
第10図　ST 2 住居跡


ST 3
a
a'
b
b'
387
388
389
390
394
1703
1704
1045
386
385
392
393
1705
375
384
381
1706
379・380
382
1707
374
371
383
377
1701
1708
380
1702
80.00m
0
2m

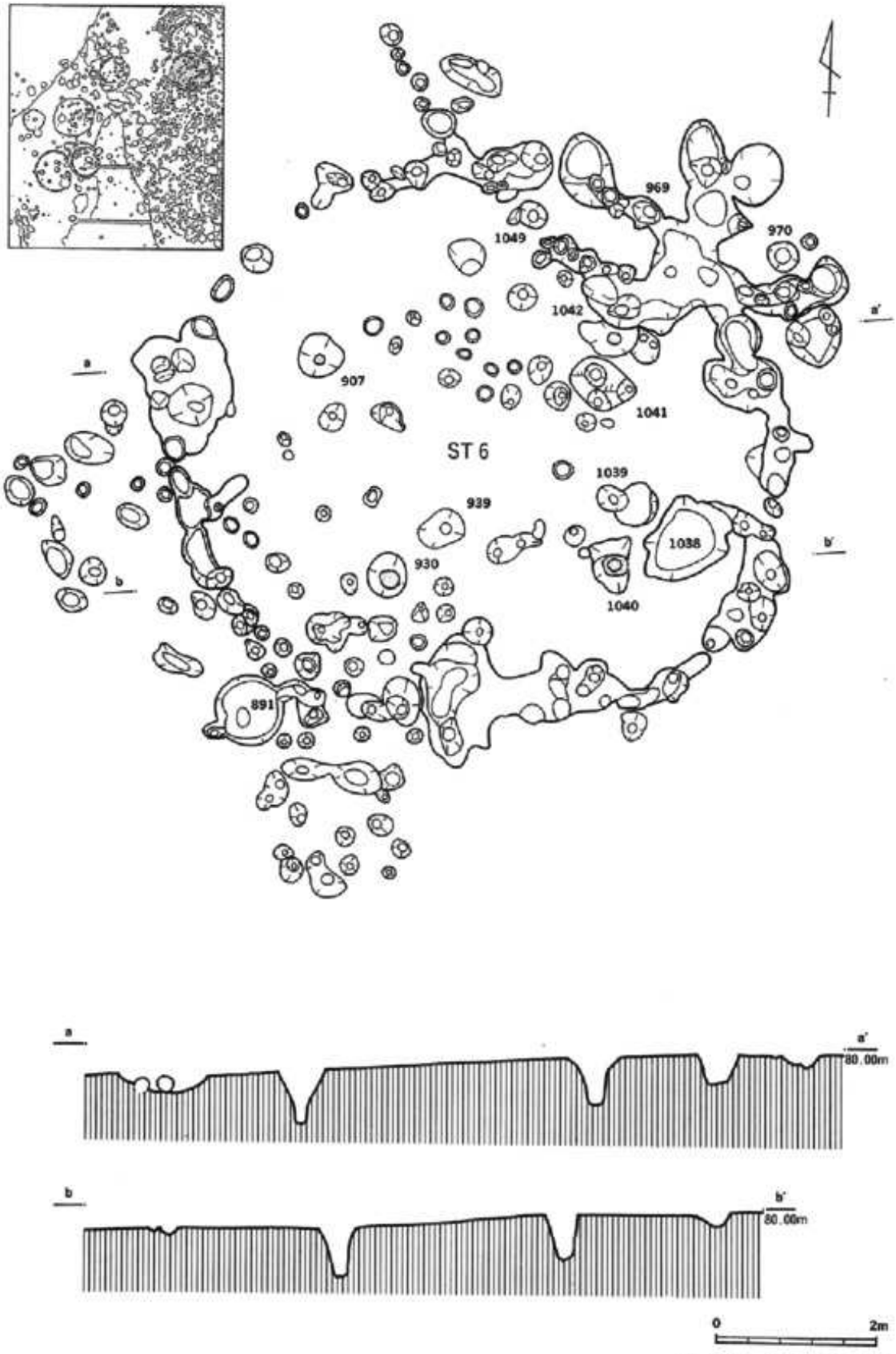
第11図　ST 3 住居跡


ST 4
EL21
SK347
a
a'
80.00m
4
3
5
1
2
4
2
1
0
2m
ST 1
1 黒褐色砂壌土（炭化物とほぼ粘土化した有機物を多量混入、酸化した粘土塊と細根を含む）
2 オリーブ黒色粘土質壌土（細根に富み、やや酸化鉄に富む）
3 暗褐色砂壌土（オリーブ黒色粘土質壌土を塊状またはブロック状に混入、細根も酸化粘土に富む、炭化粒を含む）
4 暗褐色壌土
5 明赤褐色壌土（焼土）
SK347
1 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をまだらに混入し、中粒炭化物を含む、細根に富み、酸化粘土粒砂を含む）
2 暗褐色砂壌土（オリーブ黒色粘土質壌土を塊状またはブロック状に混入）

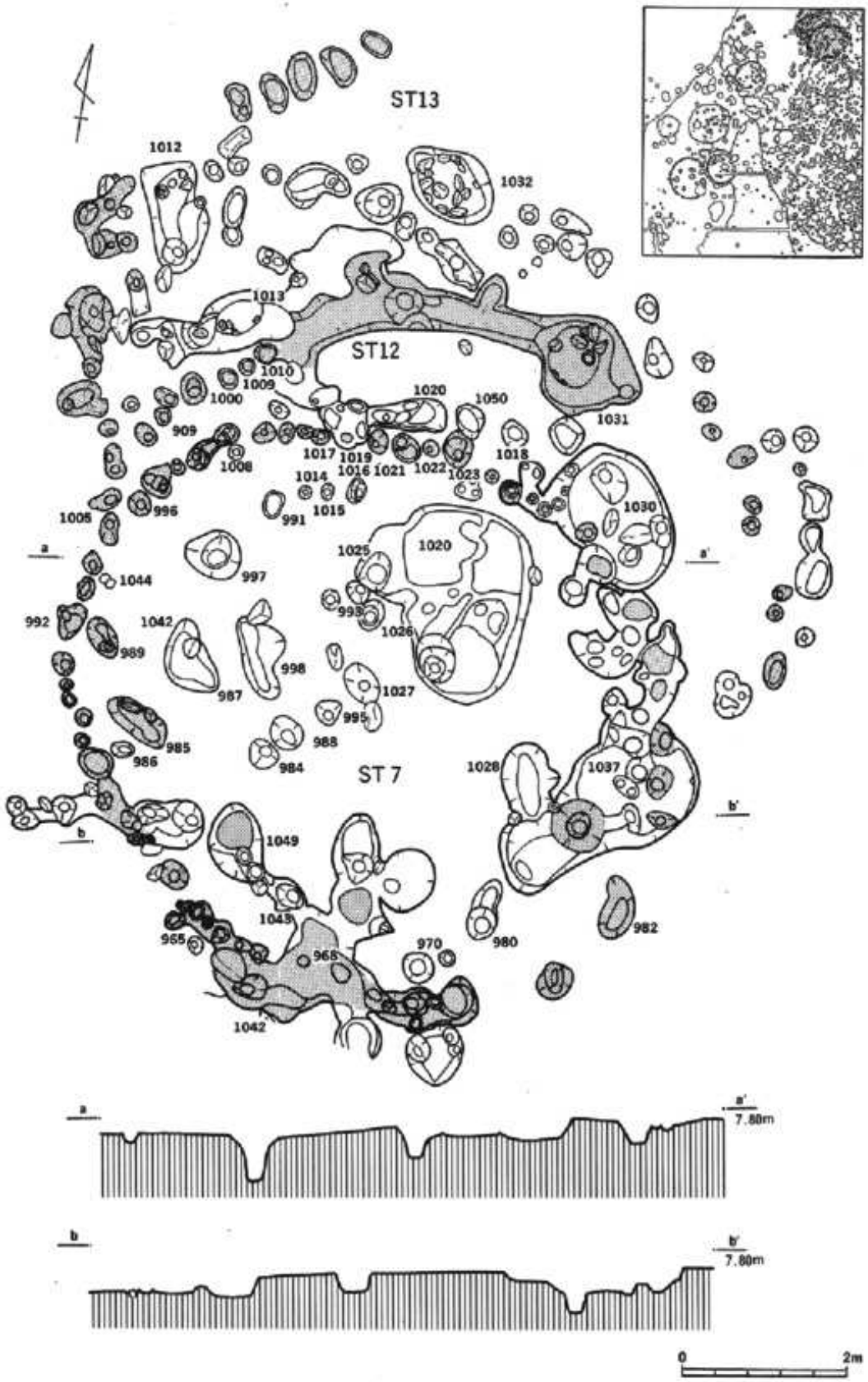
第12図　ST 4 住居跡


ST 5
614
693
692
688
619
607
620
623
625
626
627
628
634
646
645
644
647
1118
687
686
654
677
1709
658
659
660
1111
SK622
a
a'
b
b'
80.00m
0
2m

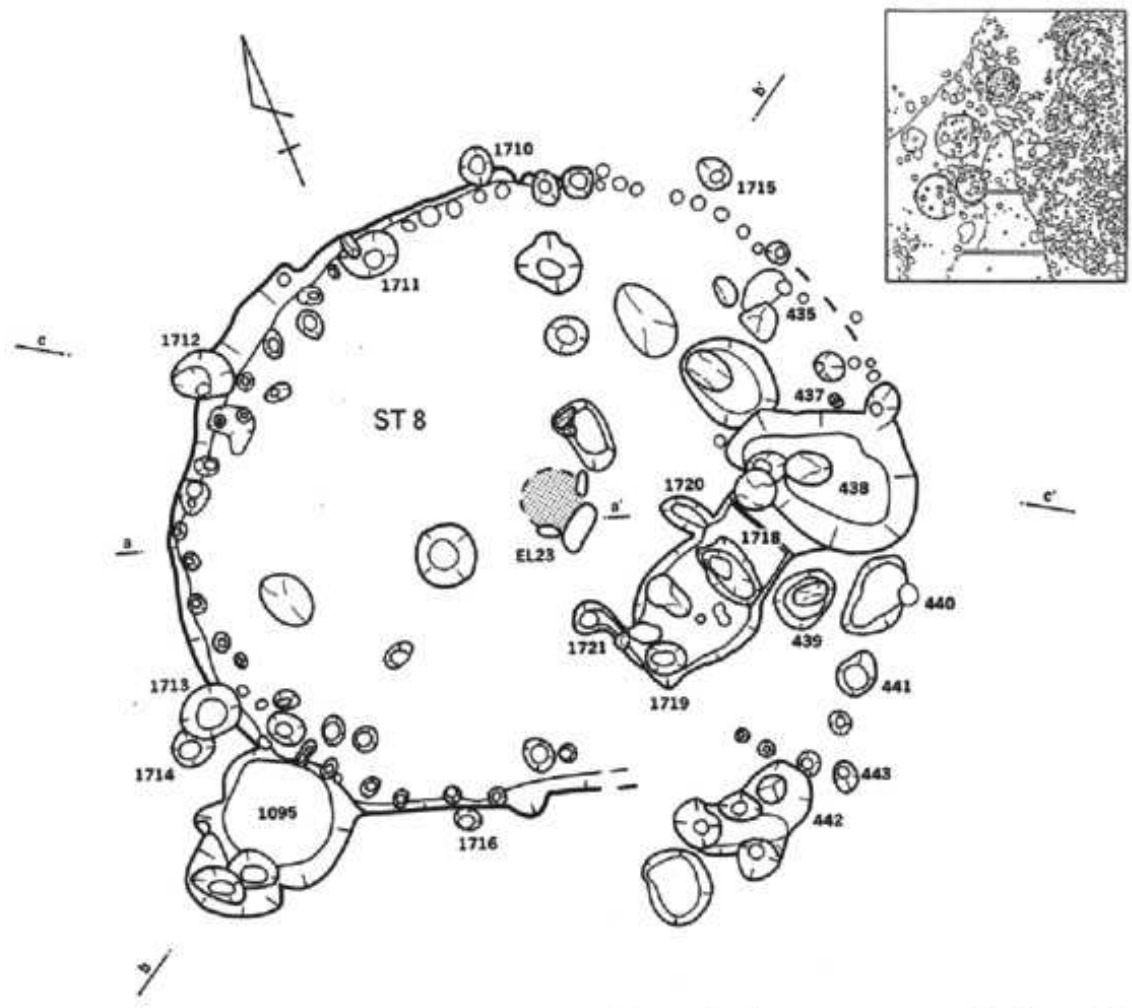
第13図　ST 5 住居跡


969
970
1049
1042
1041
907
ST 6
1039
939
1038
930
1040
891
a
a'
b
b'
80.00m
80.00m
0
2m

第14図　ST 6 住居跡

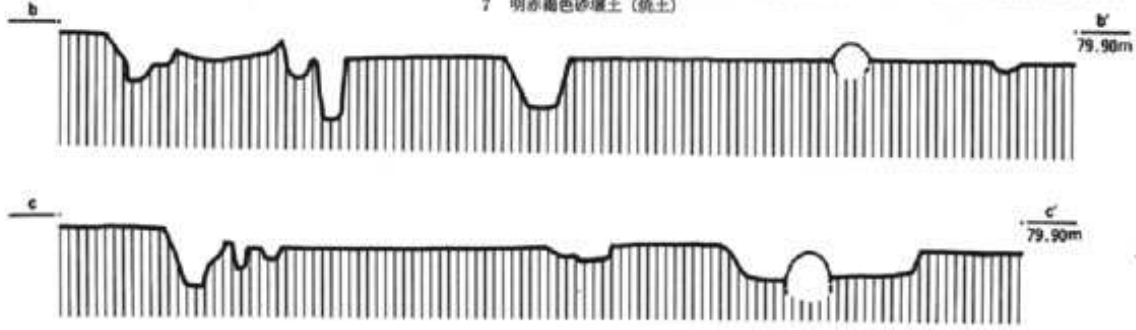


第15図　ST 7 ・12・13住居跡

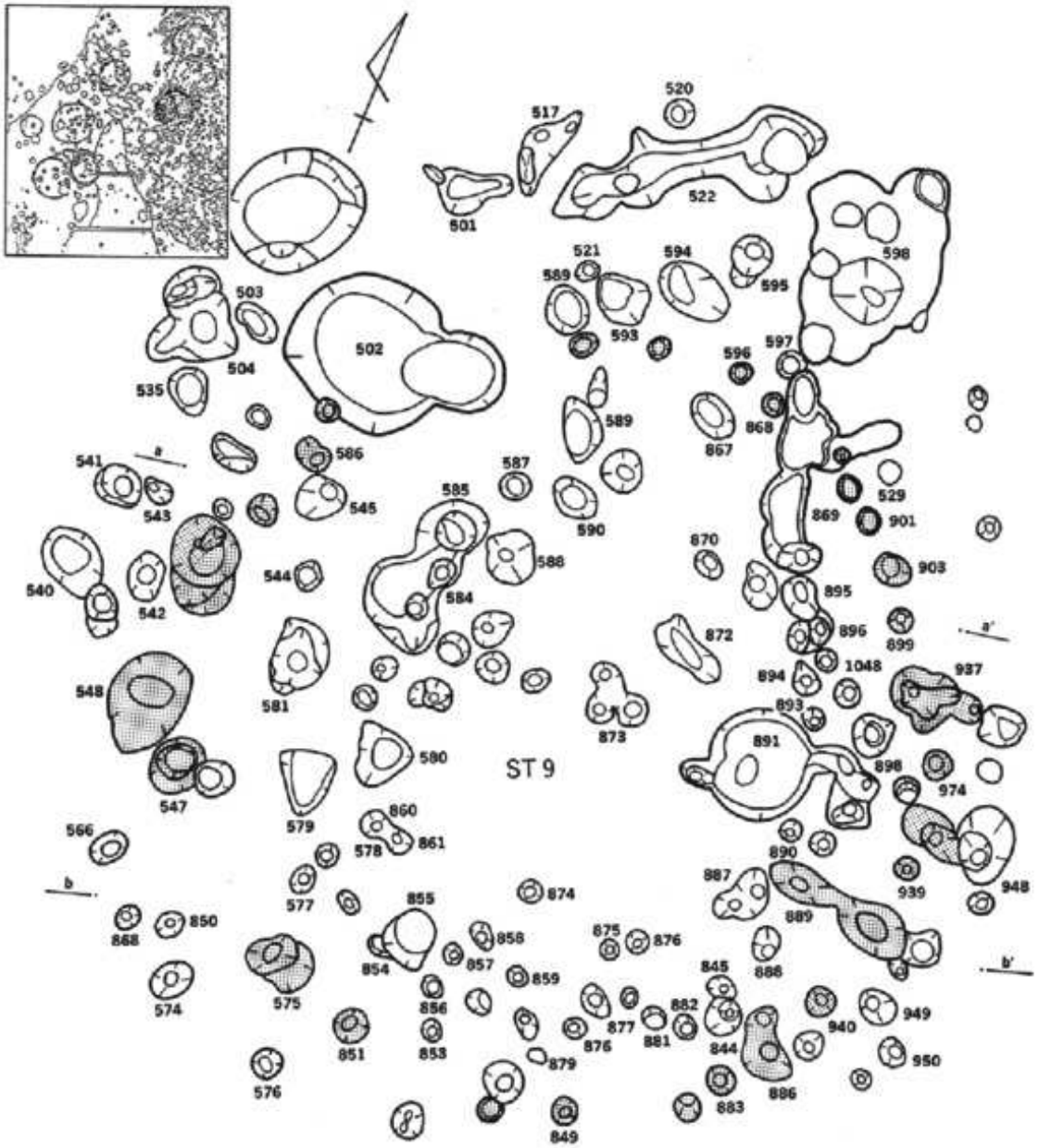


ST 8

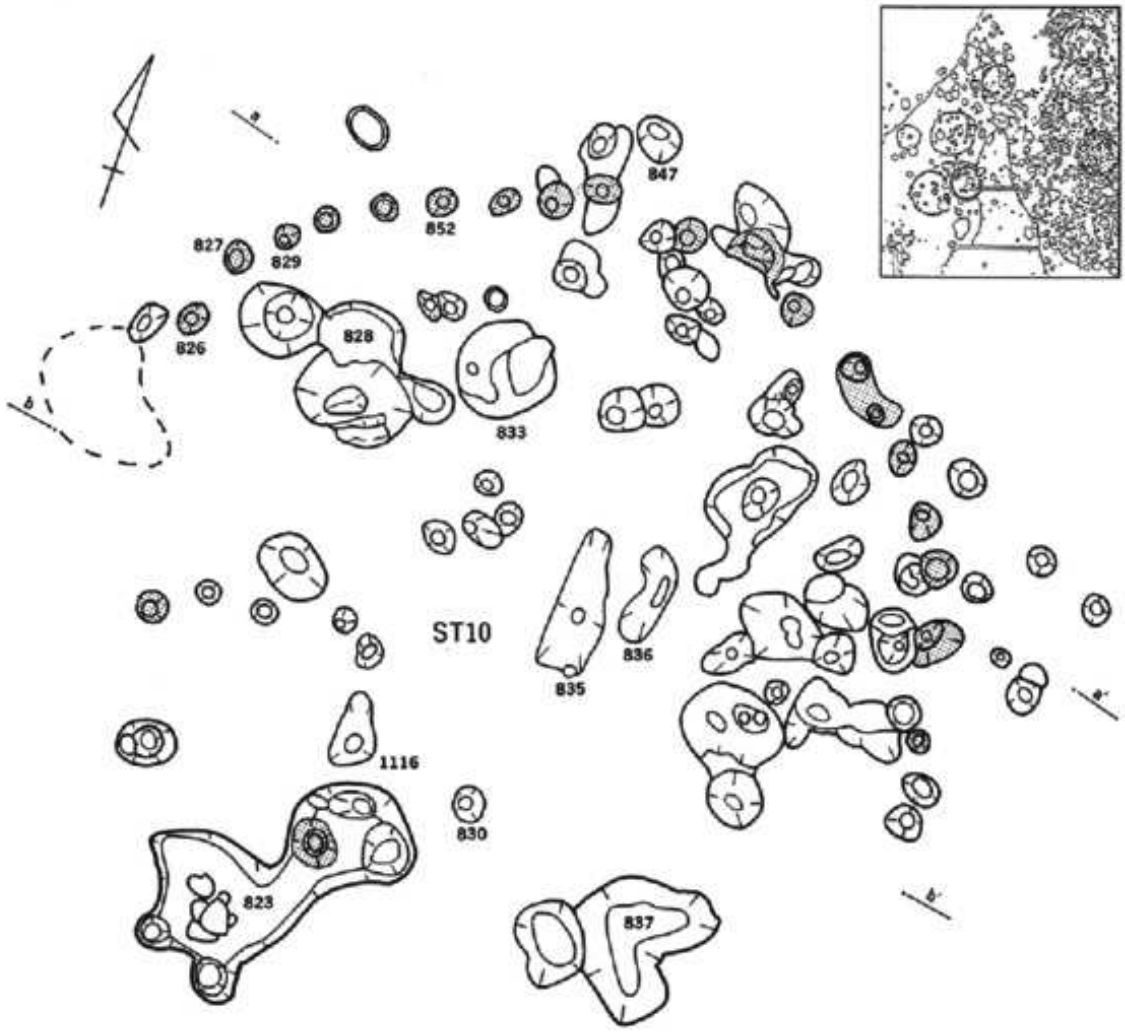
1 黒褐色砂壌土（粘土化した有機物をはさみ、酸化鉄分を若干含む）
2 黒褐色壌土（炭化物と粘土化した有機物、酸化粒砂を全体に含む）
3 黒褐色壌土（黄褐色細砂を帯状に混入）
4 暗褐色砂壌土（黄褐色細砂をブロック状でまだらに混入）
5 黒褐色砂壌土（粘土化した有機物を含み、黄褐色細砂をブロックで混入）
6 黒褐色壌土（粘土化した有機物と褐色砂壌土をブロックで若干混入、炭化粒子を含む）
7 明赤褐色砂壌土（焼土）



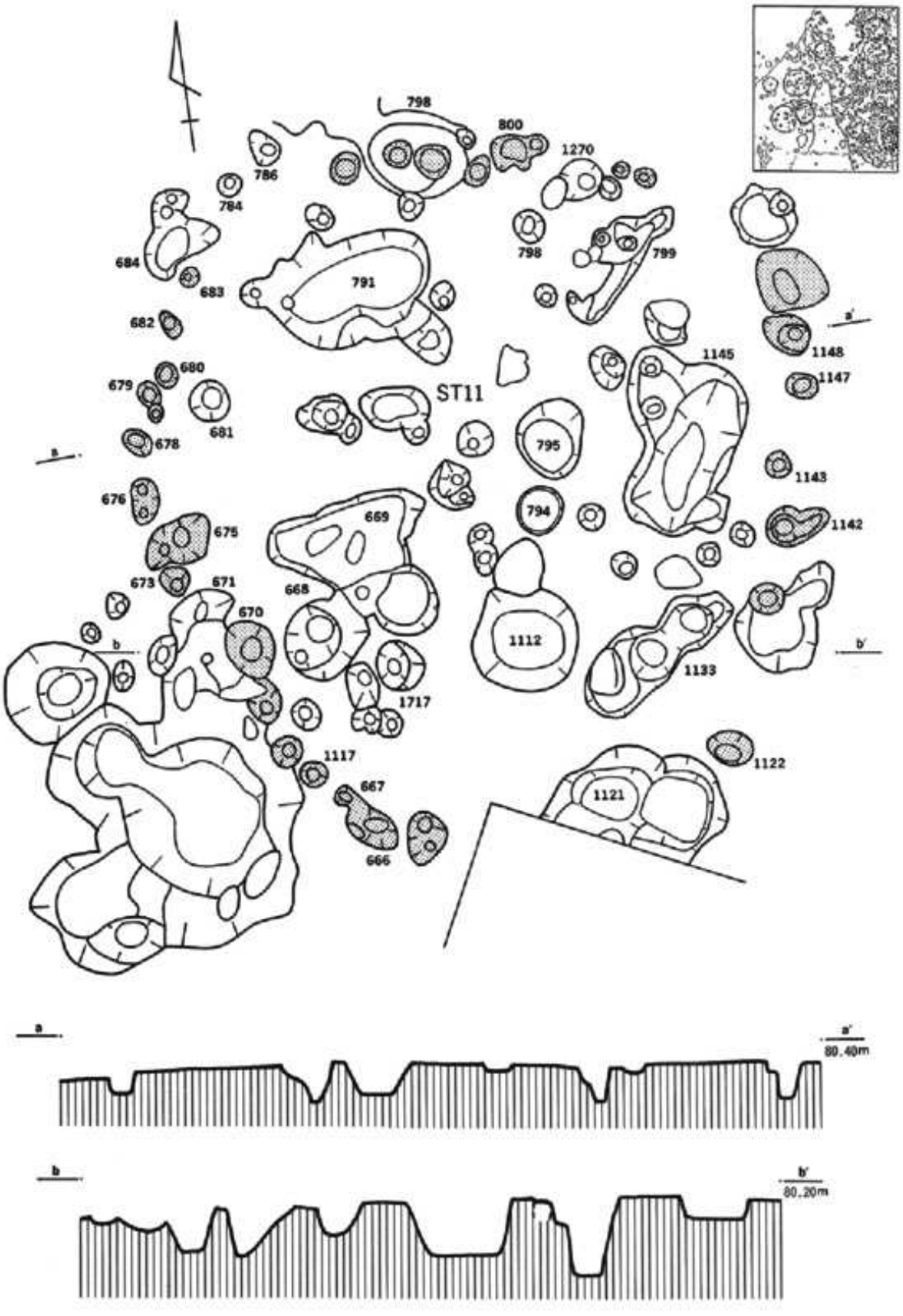
第16図　ST 8 住居跡



第17図　ST 9 住居跡



第18図　ST10住居跡



第19図　ST11住居跡

表－1　竪穴住居跡一覧表

師団番号	遺構番号	検出地区(G)	平面形	規模 長径×短径(m)	深さ(cm)	主柱	柱穴	周溝	炉跡	壁面の状態	床面の状態(確認面)	主軸方位	備考
9	ST 1	2・3-14・15	楕円形	7.6×6.8		4	51	未検出	未検出	未検出	ほぼ平坦、南側若干低い	N-11°-W	ST 2 に切られる SK370・1050と重複 南側に大陥を確認
10	ST 2	2・3-14・15	楕円形	6.5×5.7		4	57	上幅 30～100cm 下幅 25～100cm	地床が EL22	未検出	東側が西側より30cm前後低い	N-21°-W	SK356に切られる ST 1・SK1059を切る SK362と重複
11	ST 3	2・3-15・16	略円形	8.2×6.9	3～5	4	34	未検出	未検出	120°前後で立ち上がる	平坦	N-89°-W	
12	ST 4	2-15・16	略円形	4.2×3.9	10～15		43	未検出	地床が EL21	145°前後で立ち上がる。北西側一部天確認。	平坦	N-87°-E	SK347を切る
13	ST 5	4・5-13・14	楕円形	6.28×5.65		4	34	未検出	未検出	未検出	南側若干低い、南側に多数の礫有	N-53°-W	SK619・654と重複、SK687に切られる
14	ST 6	4・5-16・17	円　形	8.05×7.25		4	61	有	未確認	未検出	東側が西側より30cm前後低い	N-34°-W	ST 7 を切る ST 9 に切られる
15	ST 7	4・5-17	楕円形	7.3×6.7		3	60	未検出	未検出	未検出	床面が10cm前後高い	N-84°-W	ST 6 に切られる ST 12・13・SK1030・1037を切る
16	ST 8	3・4-16・17	楕円形	5.6×4.5	10～20		64	未検出	石組が EL23	西側44分確認 120°前後	床面が10cm前後低い、貼り床有	N-73°-W	SK437・1095と重複 (第64図4)
17	ST 9	4・5-15・16	略円形	7.0×6.32			33	未検出	未検出	未検出	西側が20cm前後低い	N-75°-W	ST 6 に切られる SK502を切る SK891他と重複
18	ST10	5-15	楕円形	7.0×6.32		4	30	未検出	未検出	未検出	南・東側が10cm前後高い	N-77°-W	SK837他と重複
19	ST11	5・6-14	楕円形	6.78×6.4		4	34	未検出	未検出	未検出	西側が15cm前後低い	N-41°-W	SK668・669・791・1112と重複
15	ST12	4・5-17	(楕円形)	(6m以上)			13	未検出	有	未検出	凹凸	不　明	ST 7 に切られる ST13と重複
	ST13	4・5-17	(楕円形)	(6m以上)			14	未検出	検　出	未検出	凹凸	不　明	ST 7 に切られる ST12と重複

2　土　壙（第20～38図、表2・3、図版18～28）

検出土壙は、現地で登録したもの約1000基を数える。平面形は基本的に円形ないし楕円形を呈すが、一部重複等から不整となのるものも多く認めた。規模的には口径60～170cm、深さ20～70cmに集中し、平均的事例で径130cm、深さ約50cm前後と捉えられる。以下に概要を述べる。なお、挿図中に掲載した土壙は表2に一覧として掲げた。

（1）形　態（フラスコ・袋状土壙）

土壙は規模・平面形・壁面の状態等から幾つかに類別できるが、検出された断面フラスコ状ないし袋状、および類似の土壙に限定すれば以下の8型式（タイプ）と判別できる。

A類：開口部から底面に至る途中で一旦狭まり、そこから下部に向かって大きく拡がるいわゆるフラスコ形となるもの（SK329）。

B類：開口部から底面まで直線的に拡がる形態のもので、Aタイプの上半部が欠損した形状と見られるもの（SK688）。

C類：開口部から底面の途中で一旦狭まり、そこから内弯して袋状を呈するもので、Aタイプに類似し（SK36・47・416・737・748・1415・1572等）、事例的に多い。

D類：開口部からすぐに内弯して袋状となるもの。Cタイプの上半部が欠損した状態とも見て取れる（SK115・1127）。

E類：開口部から底面までの半ば上部で一旦狭まり、そこから弧状に内弯して袋状を呈するもの（SK345）。Cタイプに類似し、その変形とも捉えられる。

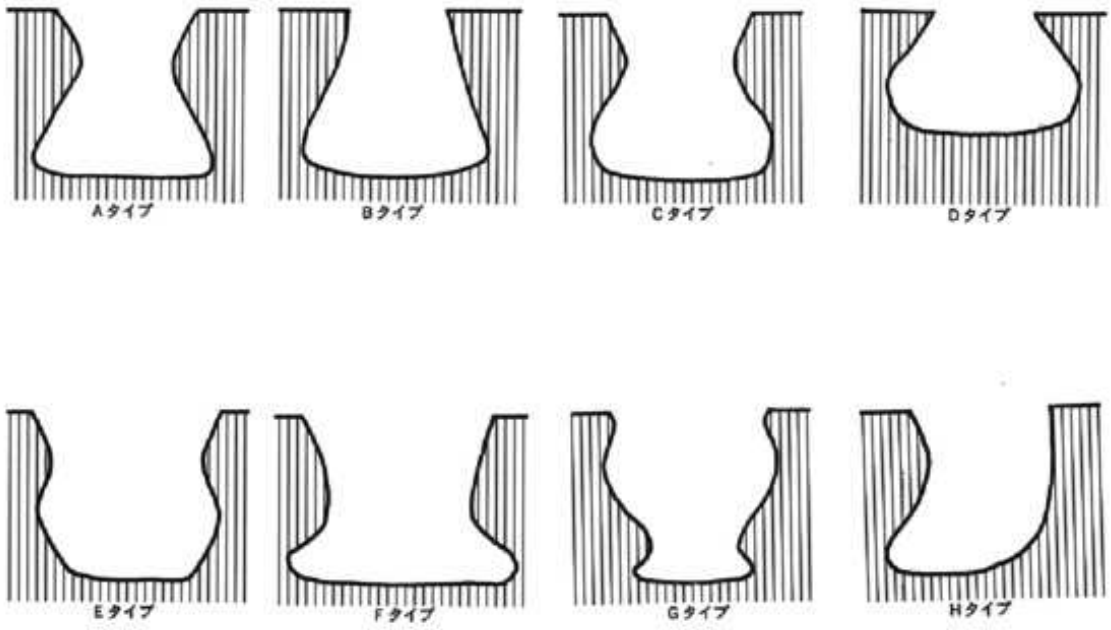
F類：開口部から下部まで急傾で入り込み、最下部で強く拡がって袋状の下半部構造を有するもの（SK400・1091）。

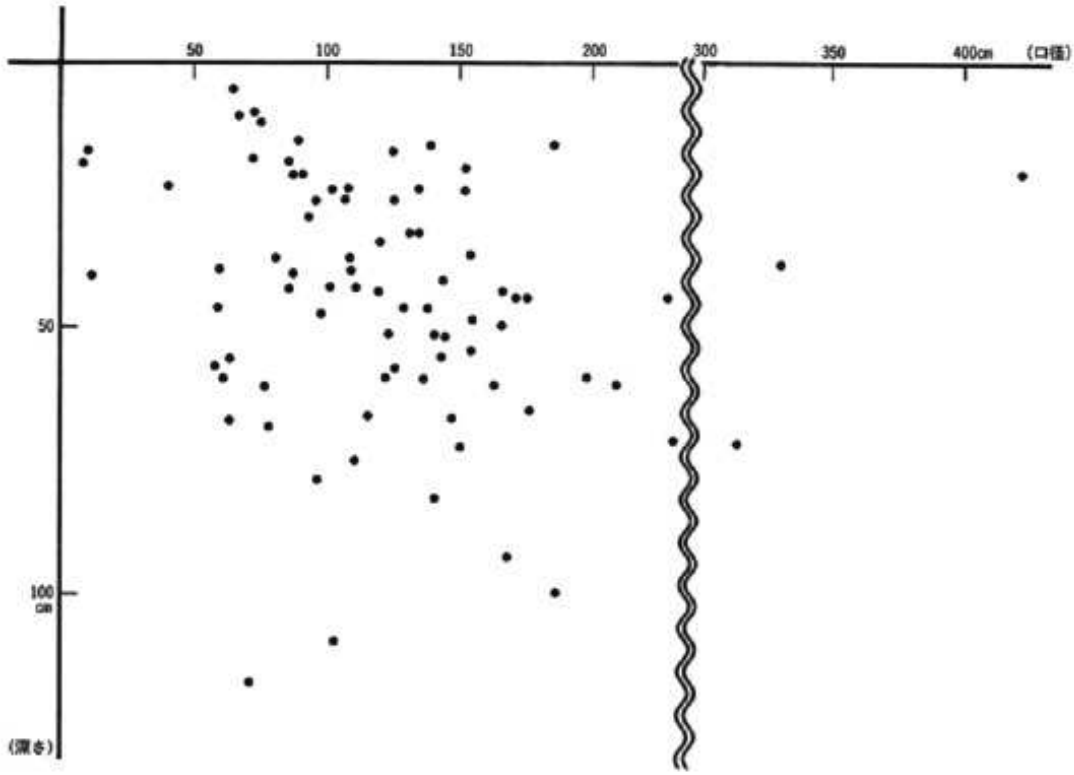
G類：開口部からすぐに内弯する上部と、その下に小さくハの字に開く下半の構造を見せるもの（SK163・571）。

H類：下部で一部ないし半分程度が内弯する形態のもの（SK337・418・1096・1121・1126・1414・1515・1419・1420・1439・1468）。事例的に多い。

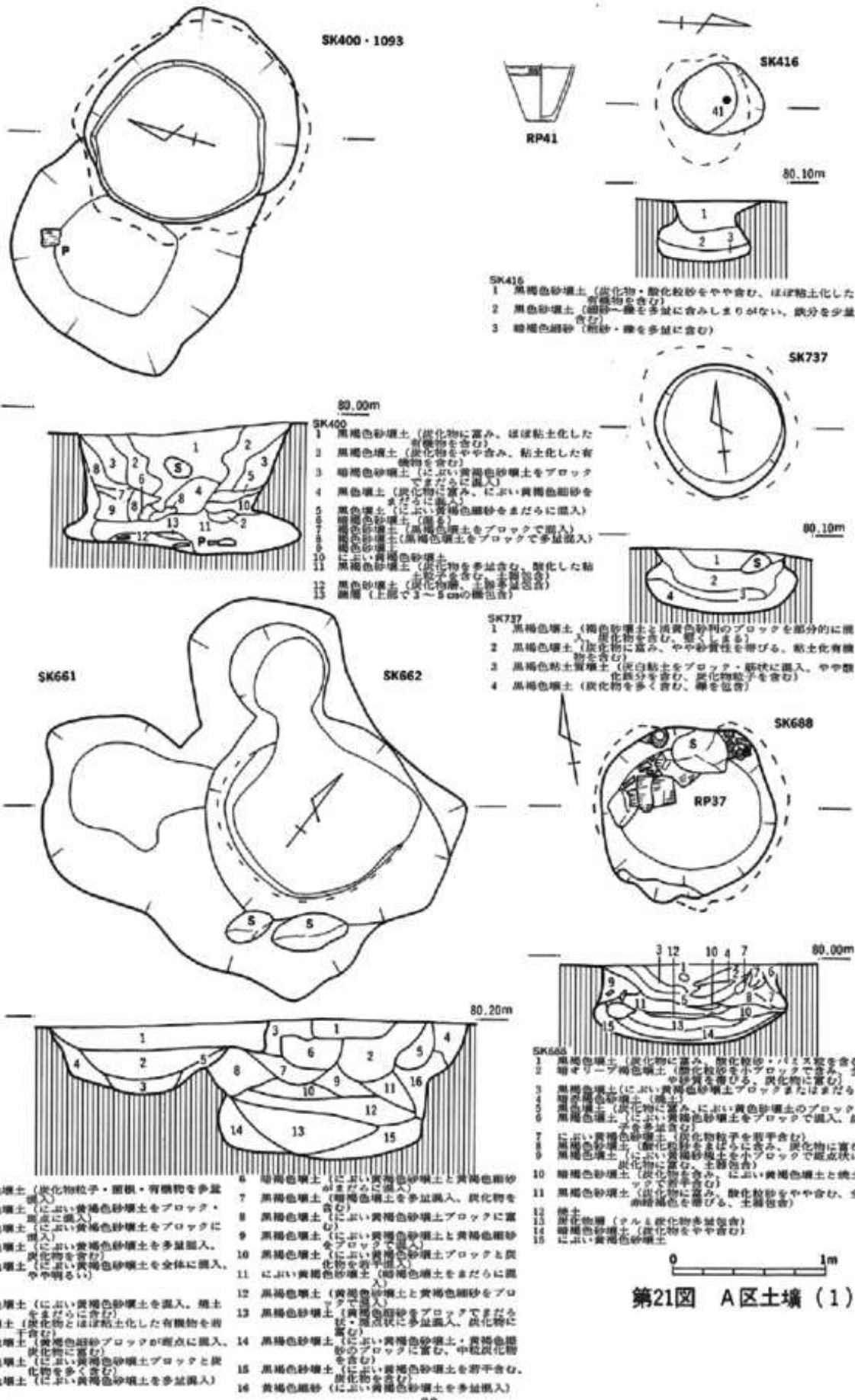
（2）構　造（覆土・遺物）

確認面は、層上面であり、IV層中を掘り込んで止まるものが多い。しかし、中にはその下層の暗褐色砂質土（多量の礫を含む）まで達するものも認められる。これら土壙の堆積土は2層以上の埋土よりなり、III層を基本とする中に壁を構成する、IV・V層、礫・炭化クルミ(粒)、土器破片等遺物、パミス粒等をブロック状、あるいはレンズ状に含むものが大半である。これらの状態から若干例を除いて多くが自然堆積によるものと判断できる。ただし、石棒と石皿が底面に安置されるSK1112、壺等の完形土器が意識的に埋設されたSK115・174・691・1572他は区別され、人為的な所産と推測される。



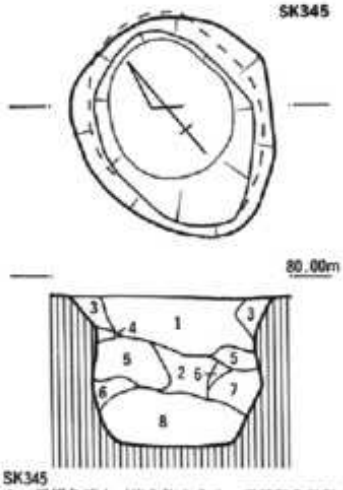


第20図　土壙概要図・土壙規模


SK400・1093
P
SK416
RP41
41
80.10m
1
2
3
SK416
1 黒褐色砂壌土（炭化物・酸化粒砂をやや含む、ほぼ粘土化した有機物を含む）
2 黒色砂壌土（細砂～礫を多量に含みしまりがない。鉄分を少量含む）
3 暗褐色細砂（粗砂・礫を多量に含む）
SK737
80.00m
SK400
1 黒褐色砂壌土（炭化物に富み、ほぼ粘土化した有機物を含む）
3 黒褐色壌土（炭化物をやや含み、粘土化した有機物を含む）
3 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックでまだらに混入）
4 黒色壌土（炭化物に富み、にぶい黄褐色細砂をまだらに混入）
5 黒色壌土（にぶい黄褐色細砂をまだらに混入）
6 暗褐色砂壌土（礫層）
7 暗褐色砂壌土（黒褐色壌土をブロックで混入）
8 暗褐色砂壌土（黒褐色壌土をブロックで多量混入）
9 暗褐色砂壌土
10 にぶい黄褐色砂壌土
11 黒褐色砂壌土（炭化物を多量含む、酸化した粘土粒子を含む、土器包含）
12 黒色砂壌土（炭化物微、土器多量包含）
13 礫層（上層で3～5cmの礫包含）
80.10m
SK737
1 黒褐色壌土（褐色砂壌土と浅黄色砂利のブロックを部分的に混入、炭化物を含む、軽くしまる）
2 黒褐色壌土（炭化物に富み、やや砂質性を帯びる、粘土化有機物を含む）
3 黒褐色粘土質壌土（灰白粘土をブロック・筋状に混入、やや酸化鉄分を含む、炭化物粒子を含む）
4 黒褐色壌土（炭化物を多く含む、礫を包含）
SK661
SK662
SK688
RP37
80.20m
80.00m
SK661
1 黒褐色壌土（炭化物粒子・固根・有機物を多量混入）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック・斑点に混入）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックに混入）
4 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入。炭化物を含む）
5 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を全体に混入、やや明るい）
6 暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土と黄褐色細砂がまだらに混入）
7 黒褐色壌土（暗褐色壌土を多量混入。炭化物を含む）
8 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土ブロックに富む）
9 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土と黄褐色細砂をブロックで混入）
10 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土ブロックと炭化物を若干混入）
11 にぶい黄褐色砂壌土（暗褐色壌土をまだらに混入）
12 黒褐色壌土（黄褐色砂壌土と黄褐色細砂をブロックで混入）
13 黒褐色砂壌土（黄褐色細砂をブロックでまだら状・筋状に多量混入。炭化物に富む）
14 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土・黄褐色細砂のブロックに富む、中粒炭化物を含む）
15 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土を若干含む。炭化物をやや含む）
16 黄褐色細砂（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入）
SK662
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を混入。焼土をまだらに含む）
2 黒色壌土（炭化物とほぼ粘土化した有機物を若干含む）
3 黒褐色壌土（黄褐色細砂ブロックが斑点に混入。炭化物に富む）
4 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土ブロックと炭化物を多く含む）
5 暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入）
SK688
1 黒褐色壌土（炭化物に富み、酸化粒砂・パミス粒を含む）
2 暗オリーブ褐色壌土（酸化粒砂を小ブロックで含み、全体にやや明るく帯びる、炭化物に富む）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土ブロックまたはまだらで混入）
4 暗褐色砂壌土（礫土）
5 黒色壌土（炭化物に富み、にぶい黄色砂壌土のブロック含む）
6 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで混入。炭化物粒子を多量含む）
7 にぶい黄褐色砂壌土（炭化物粒子を若干含む）
8 黒褐色砂壌土（酸化粒砂をまばらに含み、炭化物に富む）
9 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで斑点状に含む、炭化物に富む、土器包含）
10 暗褐色砂壌土（炭化物を含み、にぶい黄褐色壌土と焼土をブロックで若干含む）
11 黒褐色砂壌土（炭化物に富み、酸化粒砂をやや含む、全体に暗赤褐色を帯びる、土器包含）
12 焼土
13 炭化物層（ブル＆炭化物多量包含）
14 暗褐色砂壌土（炭化物をやや含む）
15 にぶい黄褐色砂壌土
0
1m

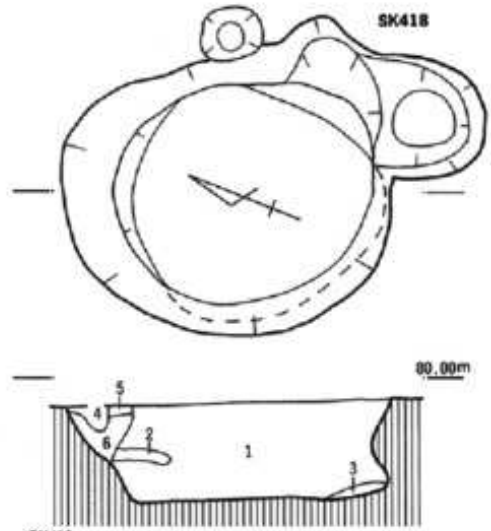
第21図　A区土壙（1）

SK345



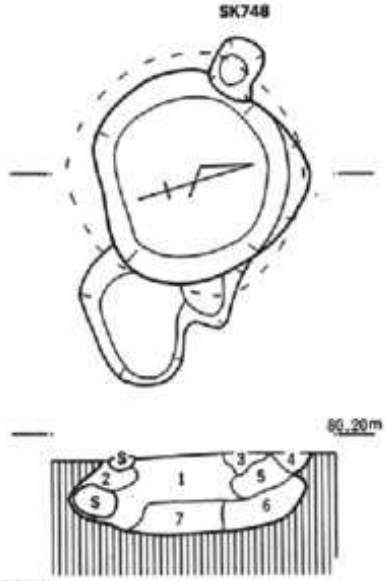
1 黒褐色壌土（炭化物を含み、黄橙酸化粒砂を少量混入。1～5cmの礫包含）
2 暗褐色壌土（炭化物粒子と酸化粒砂を若干含む）
3 褐色砂壌土
4 暗褐色砂壌土
5 黒褐色壌土ににぶい黄褐色砂壌土がブロック状に混入
6 褐色壌土
7 にぶい黄褐色砂壌土
8 黒褐色壌土（1より明るく柔らかい。7を小ブロックで斑点状に混入）

SK418



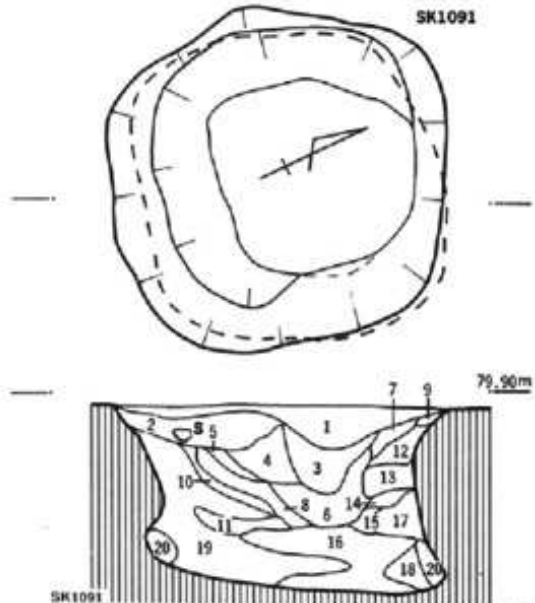
1 黒色壌土（ほぼ粘土化した有機物・酸化粒砂を全体に含む）
2 黒褐色壌土（全体に灰色を帯びやや混る）
3 黒褐色砂壌土（黄色を帯びる）
4 黒色壌土
5 黒色壌土とにぶい黄褐色砂壌土の撹乱
6 にぶい黄褐色砂壌土

SK748



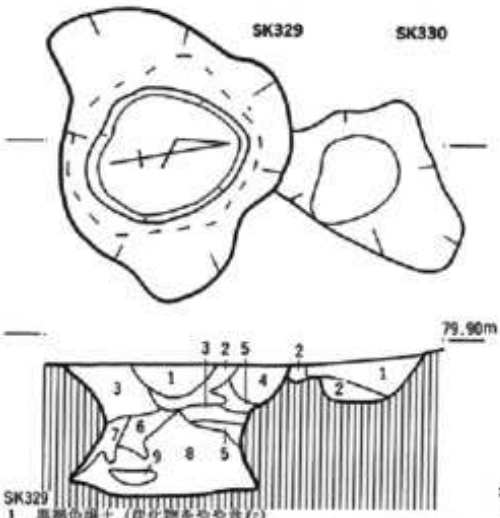
1 黒褐色壌土（酸化粒砂を斑点状に混入、炭化物に富む）
2 黒褐色壌土（暗褐色砂壌土を全体に混入、炭化物に富む）
3 黒褐色壌土（酸化粒砂と炭化物を若干含む）
4 黒色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックでまだらに混入）
5 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで混入、酸化粒砂・炭化物を粒子状で混入。パミス粒を含む）
6 黒褐色壌土（炭化物とパミス粒を含む、堅くしまる）
7 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック・斑点状に多量混入。酸化粒・炭化物を粒子状で含む、明るい）

SK1091



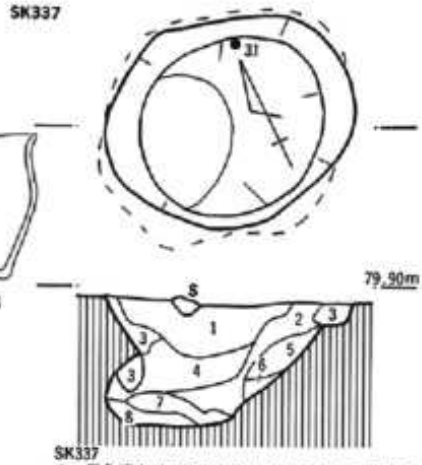
1 黒色壌土（炭化物に富む、ほぼ粘土化した有機物・酸化粒砂を若干含む）
2 黒褐色壌土（褐砂壌土と黄橙細砂をブロック・まだらに混入、炭化物とほぼ粘土化した有機物を含む）
3 黒色壌土（炭化物と酸化粒砂を若干含む）
4 黒褐色砂壌土（炭化物粒子と酸化粒子を若干含み、黄褐細砂が全体に混入）
5 黒色壌土（酸化粒砂と黄橙細砂を混入し、やや砂質を帯びる）
6 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐砂壌土ブロックをまだらに混入、炭化物を含む）
7 暗褐色砂壌土（黒褐壌土を斑状に含む、黄褐細砂を混入、粘土化した有機物含む）
8 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐砂壌土をブロックで斑点状に混入、黄橙細砂を含む）
9 暗褐色砂壌土（黄橙細砂と酸化粒砂を混入、粘土化した有機物を含む）
10 にぶい黄褐色砂壌土（炭化物を若干含み、黄褐細砂を多量混入）
11 にぶい黄褐色砂壌土（黄褐細砂を多量混入）
12 褐色砂壌土（黒褐砂壌土をまだらに混入、赤褐細砂を含む）
13 褐色砂壌土
14 褐色砂壌土（黒褐壌土をまだら状に多量混入）
15 暗褐色砂壌土（炭化物粒子をわずかに含み、黄褐細砂を混入）
16 黒褐色壌土（炭化物粒子を均一に含みかなり混る）
17 にぶい黄褐色壌土（細密粒子でよくしまり、混りを帯びる）
18 褐色細砂
19 黄褐色細砂
20 赤褐色粗砂・砂利（酸化鉄層）

第22図　A区土壙（2）

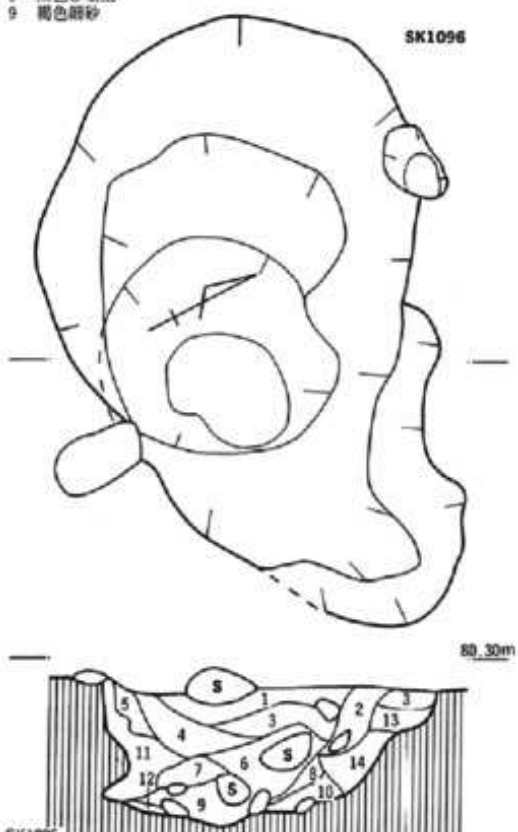


SK329
1 黒褐色壌土（炭化物をやや含む）
2 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで少量混入）
3 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入、炭化物を若干混入）
4 暗褐色砂壌土
5 にぶい黄褐色砂壌土
6 黒褐色砂壌土（極めて柔かくしまりがない）
7 暗褐色砂壌土（炭化物を含む）
8 黒色砂壌土
9 褐色細砂

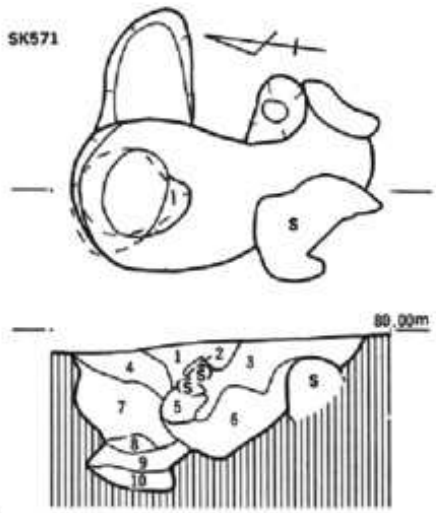
SK330
1 暗褐色砂壌土
2 にぶい黄褐色砂壌土



SK337
1 黒色壌土（小粒炭化物を全体に含み、鉄根を若干はさむ）
2 暗褐色砂壌土（上部に黒色壌土をブロック状に混入）
3 にぶい黄褐色砂壌土と黒色壌土の攪乱
4 黒褐色壌土（黒色に極めて近い）
5 褐色砂壌土（にぶい黄褐砂壌土をブロックで混入、炭化物を含む）
6 褐色砂壌土
7 にぶい黄褐色砂壌土
8 黒褐色砂壌土



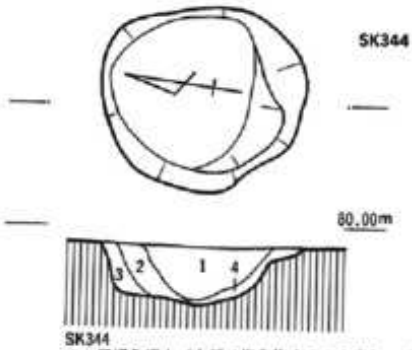
SK1096
1 黒色壌土（炭化物を部分的にライン状で含む、酸化粒砂を混入）
2 黒色壌土（炭化物を含む、褐色を帯びる）
3 黒色壌土（暗褐砂壌土をブロック状に混入、炭化物を含む）
4 黒褐色壌土（暗褐色砂壌土をブロックでまだらに混入）
5 黒褐色砂壌土（黄褐細砂を全体に混入）
6 黒色壌土（炭化物を含む、やや柔って柔かい、粘性やや強い）
7 黒色壌土（6よりやや褐色を帯びる）
8 黒褐色壌土（黒褐色壌土と黄褐細砂をブロック状に混入）
9 黒褐色壌土（酸化鉄分に富む、炭化物をやや含む）
10 黒褐色壌土（黄褐色細砂をブロック状に混入、酸化鉄に極めて富む）
11 暗褐色砂壌土（黒色壌土と黄褐色細砂をまだらで多量に混入）
12 暗褐色砂壌土（炭化物を若干含む、溶脱酸化鉄に富む）
13 暗褐色細砂（黄褐色細砂を多量に混入）
14 褐色細砂（黒褐色壌土をまだらに混入、やや酸化粒砂に富む）
15 明緑灰色細砂（溶脱酸化鉄を含む、グライ化する）



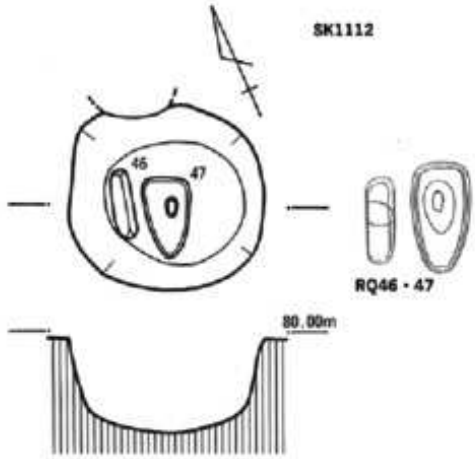
SK571
1 灰黄褐色粘土質壌土（にぶい黄褐色壌土を小ブロックで混入、炭化粒子を多量含む、溶脱酸化鉄に富む）
2 暗灰黄色粘土質壌土（にぶい黄褐色壌土を小ブロックで混入、溶脱酸化鉄に富む）
3 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色壌土をブロックで多量混入、炭化物・酸化鉄分に富む）
4 黒褐色壌土（炭化物・パミス粒に富む、酸化鉄分・酸化粘土粒を若干含む）
5 暗灰黄色粘土質壌土（酸化鉄分に富む）
6 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐壌土をブロック状で多量混入）
7 黒褐色壌土（炭化物を少し含む、酸化鉄分・粒砂を含む）
8 にぶい黄褐色のブロック
9 黒褐色砂壌土（酸化鉄砂をブロック状で混入、やや粘性強い）
10 暗褐色粘土質（にぶい黄褐色壌土・黒褐色砂壌土を若干混入）

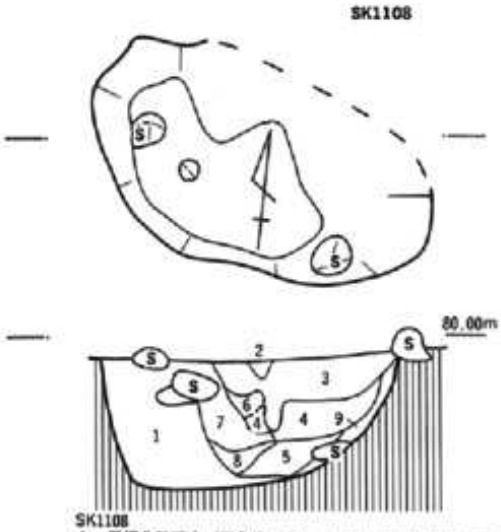
0 1m

第23図　A区土壙（3）

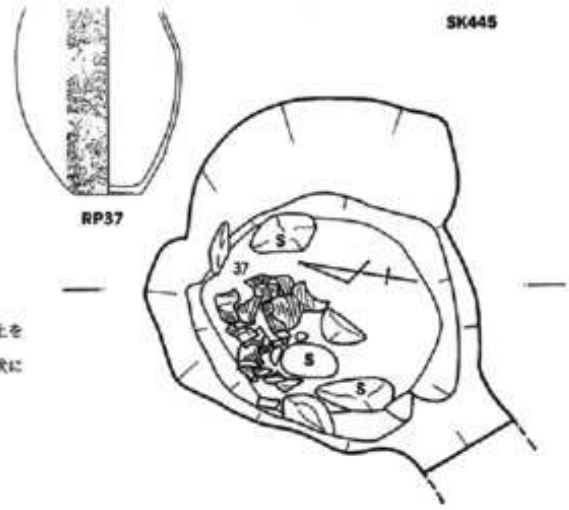


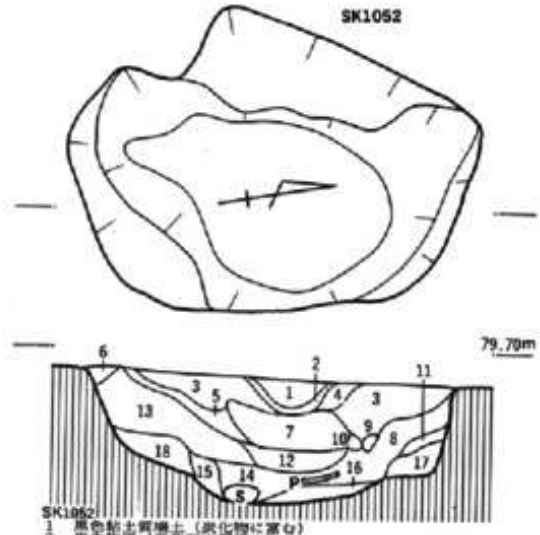
SK344
1 黒褐色壌土（上部で炭化物すこぶる富む、にぶい黄褐砂壌土を中央部でまだらに混入、酸化粘土粒を含む）
2 黒褐色壌土（炭化物に富み、にぶい黄褐砂壌土をブロック状に多量混入）
3 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土をブロック状に混入）
4 にぶい黄褐色砂壌土





SK1108
1 黒褐色砂壌土（炭化物を含み、にぶい黄褐砂壌土をブロックで若干含む、酸を多量に包含）
2 黒色壌土（炭化物、ほぼ粘土化した有機物・面酸を含む）
3 黒褐色砂壌土（黄褐細砂を多量混入、炭化物を多量含む）
4 暗褐色砂壌土（黄褐細砂を多量混入、炭化物を多量含む）
5 黒褐色砂壌土（3よりやや暗い、炭化物を多量含み黄褐色細砂を混入）
6 黄褐色細砂（炭化物を若干含み、黒褐砂壌土がまだらに混入）
7 にぶい黄褐色砂壌土（黄褐細砂を多量混入）
8 黄褐色細砂（炭化物を若干含み、黒褐砂壌土がまだらに混入、6より粒子が粗い）
9 褐色細砂（酸化鉄を含み、全体に赤褐色を帯びる）

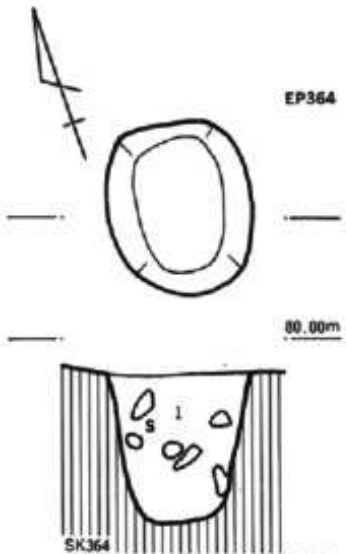




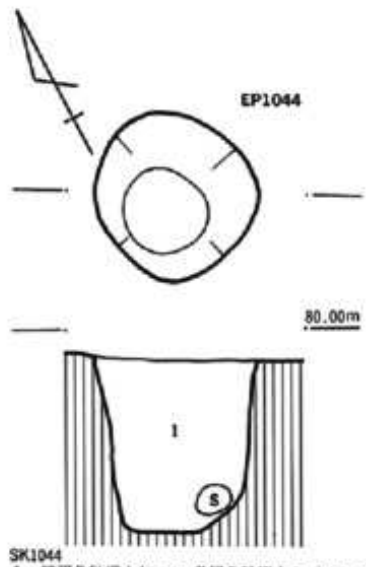
SK1052
1 黒色粘土質壌土（炭化物に富む）
2 炭化物層（黒色粘土質壌土）
3 黒色壌土（炭化物・酸化マンガン粒を含む）
4 黒褐色砂壌土（炭化物を若干・黄褐細砂を多量混入）
5 黒褐色壌土（黄褐細砂と酸化粒砂を若干混入、粘性がやや強い）
6 暗褐色壌土（ほぼ粘土化した有機物を含み、粘性が強い、にぶい黄褐砂壌土をブロック状に混入）
7 黒褐色壌土（炭化物に富み、酸化鉄物を多量含む）
8 黒色壌土（炭化物を含み酸化粒砂を混入、やや砂質を帯びる）
9 褐色細砂ブロック
10 黒褐色壌土ブロック（酸化粒砂を含む）
11 黒色壌土（8に同じ、より暗い）
12 黒褐色壌土（混って炭化物と酸化鉄分に富む）
13 黒色壌土（炭化物に富み、黄褐細砂をブロック状に混入）
14 暗褐色壌土（上部で炭化物と黄褐細砂を帯状に堆積）
15 黒褐色壌土（炭化物を含み黄褐細砂をやや混入）
16 暗褐色壌土（酸化鉄分に富み、全体が赤褐色を帯びる）
17 暗褐色砂・粘土の炭化層
18 褐色細砂・粗砂

0 1m

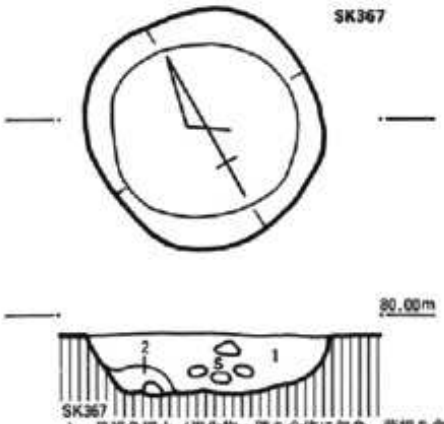
第24図　A区土壙（4）



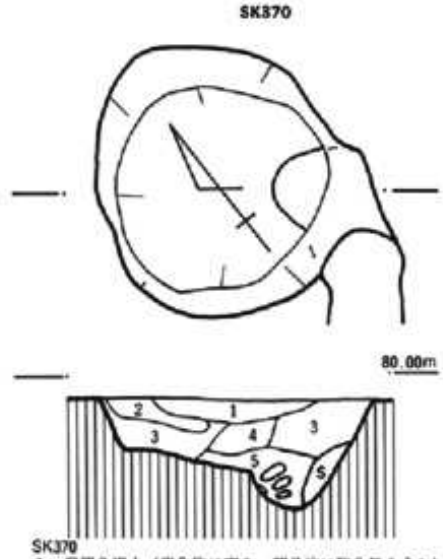
SK364
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐砂壌土ブロックで混入、炭化物をやや含み、酸化鉄とマンガンをブロックで少量含む）



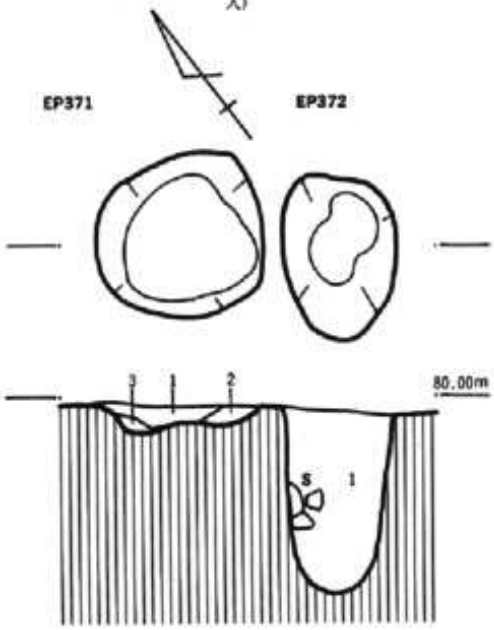
SK1044
1　暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで混入、炭化物をやや含む、中位にオリーブ黒色砂壌土を帯状に堆積し、堅くしまる）



SK367
1　黒褐色壌土（炭化物・礫を全体に包含、樹根を含む）
2　にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土と暗褐色砂壌土をまだらに混入）



SK370
1　黒褐色壌土（炭化物に富み、部分的に酸化鉄を含む）
2　にぶい黄褐色砂壌土
3　暗褐色壌土
4　褐色砂壌土（炭化と酸化粒砂を若干含む）
5　黄褐色壌土（やや粘性が強い、堅くしまる）

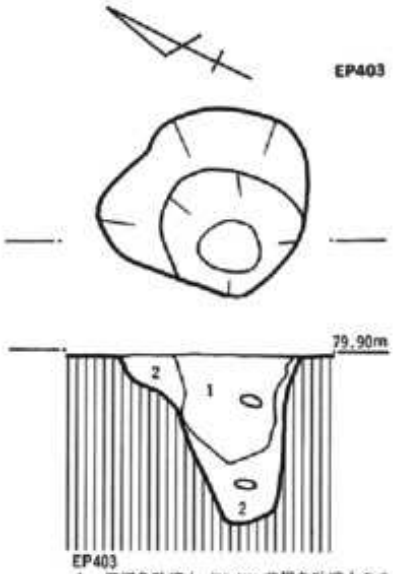


EP371
1　暗褐色砂壌土（炭化物を若干含む）
2　暗褐色砂壌土（黄褐色砂壌土を混入、炭化物を含む）
3　黄褐色砂壌土（暗褐色砂壌土を混入）

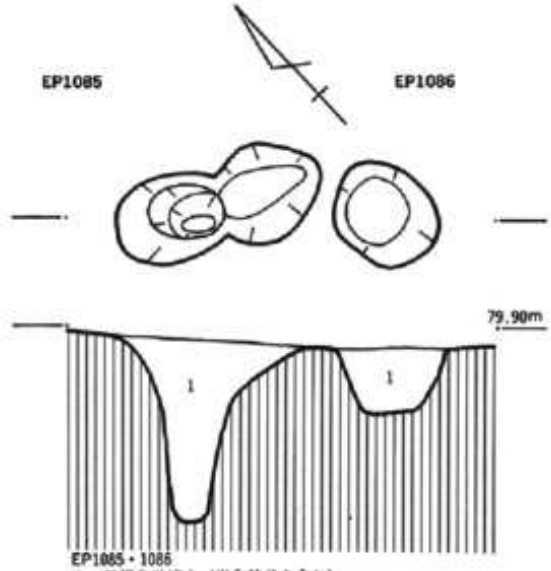
EP372
1　暗褐色砂壌土（炭化物を含む、礫を多量包含、ほぼ酸化した有機物を若干含む）

0　1m

第25図　A区土壙・柱穴（5）

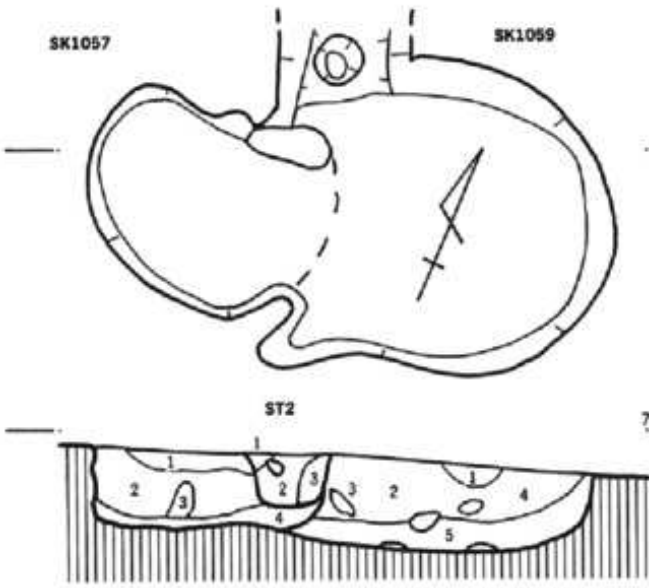


EP403
1 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をまだらに混入、炭化物を若干含む、礫含む）
2 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色砂壌土をブロック状で混入）



EP1085・1086
1 黒褐色砂壌土（炭化粒子を含む）

SK1050
1 黒褐色壌土（炭化物を粒子状で含む、礫を含む、ST 1 周溝が切る）
2 暗褐色砂壌土（黄褐色細砂をまばらに混入、酸化鉄分を含む）
3 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色壌土をブロックで混入、礫を含む）
4 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色壌土を若干含む）
5 にぶい黄褐色壌土（褐色壌土を含み、ブロックで混入）
6 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色壌土を若干含む）
7 褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をまばらに混入）



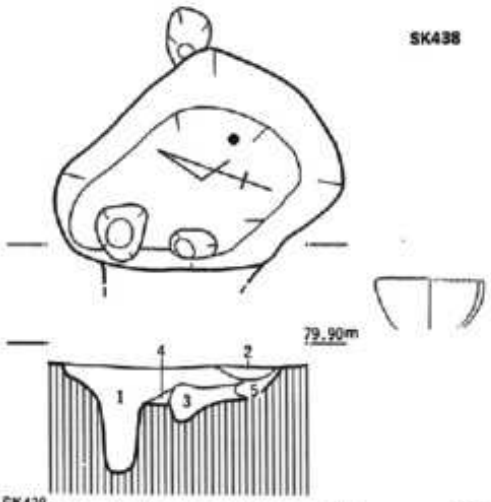
SK1057
1 黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄に富み、全体的に赤味を帯びる）
2 黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄に富む、パミス粒を含む）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで混入）
4 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を混入、溶脱酸化鉄に富む）

SK1059
1 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土を小ブロックに混入）
2 黒色褐土（炭化物にすこぶる富む、溶脱酸化鉄に富む）
3 暗褐色砂壌土（酸化鉄を含む、菌根を若干含む）
4 にぶい黄褐色砂壌土ブロック
5 黒褐色壌土（溶脱酸化鉄に富み、パミス粒・炭化物を含む）

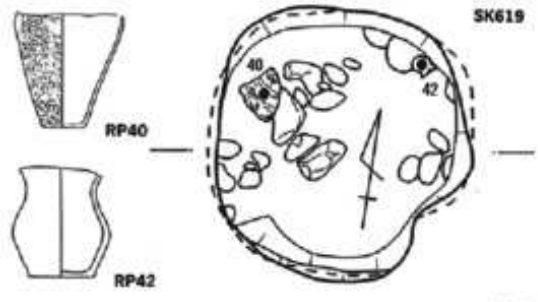
ST 2 (ED)
1 黒褐色壌土（炭化物を粒子状で含む、酸化鉄分をやや含む）
2 暗褐色砂壌土と黄褐色細砂の撹乱
3 暗褐色砂壌土（酸化鉄を含む、菌根を若干含む）

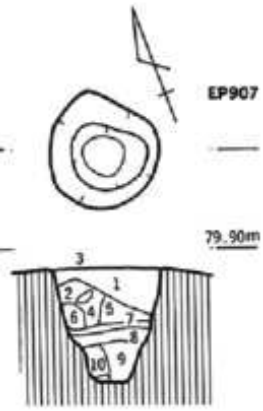
0 2m

第26図　A区土壙・柱穴（6）

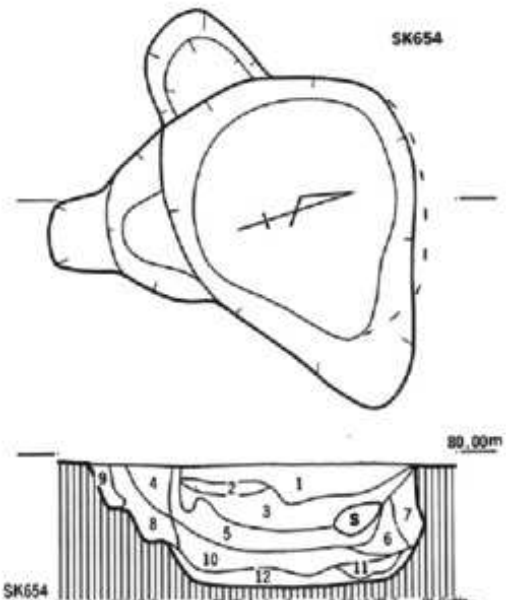


SK438
1 黒色壌土（炭化物粒子と酸化鉄に富む、層状を含み、灰オリーブ砂壌土をブロック状に混入）
2 黒色壌土（堅くしまり粘性が強い、酸化鉄を含む、1より暗い）
3 黒褐色砂壌土（灰オリーブ砂壌土をまだらに混入、溶脱酸化鉄に富む）
4 灰オリーブ色砂壌土
5 オリーブ褐色細砂（黒色壌土をブロック状に混入）

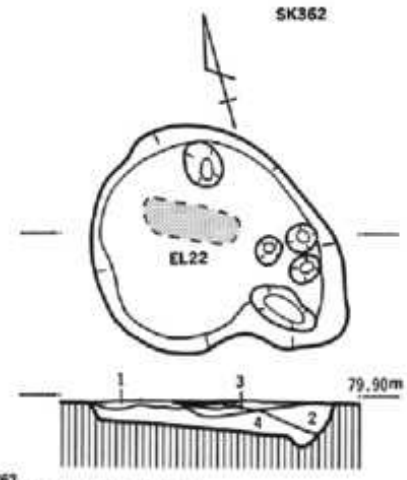




EP907
1 黒色壌土（炭化物を含み、酸化鉄分を部分的に富む）
2 黒色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックで斑点状に混入、酸化鉄を含む）
3 黒色壌土（酸化鉄に富む）
4 明褐色壌土（鉄分に富んだ酸化鉄層）
5 黒褐色壌土（炭化物を含む、酸化鉄分にすこぶる富み、粘土化後酸化した有機物を含む）
6 黄褐色細砂（酸化鉄に富み、ほぼ粘土化した有機物と炭化物をやや含む）
7 酸化鉄層
8 オリーブ黒色壌土（酸化鉄と炭化物を含む、疑似グライ化）
9 オリーブ黒色壌土（疑似グライ化、溶脱）
10 明緑灰色粘土質壌土（酸化鉄分を含む、グライ化）



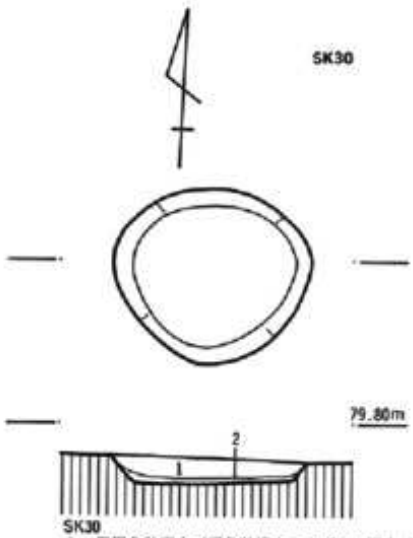
SK654
1 黒色壌土（明褐色シルト質壌土をブロック状に混入、炭化物・酸化鉄分を含む、パミス粒多量混入）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を若干混入、炭化物を含み、緻密で堅くしまる）
3 黒色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック状で混入、炭化物に富む）
4 黒褐色壌土（黄褐色細砂をまばらに混入、炭化粒多量混入）
5 黒褐色壌土（黄褐色細砂ブロックをまだら状に多量混入）
6 黒褐色壌土（炭化物を均一に含む、酸化鉄分を若干含む）
7 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点・まだら状に混入）
8 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をまだら状で、黄褐色細砂を斑点に多量混入）
9 黒色壌土（黄褐色細砂をブロックで混入）
10 褐色砂壌土（黄褐色細砂多量混入、5をまだらに含む）
11 暗褐色壌土（炭化物と酸化鉄分をやや含む）
12 黒色壌土（炭化物に富み、礫を包含する）



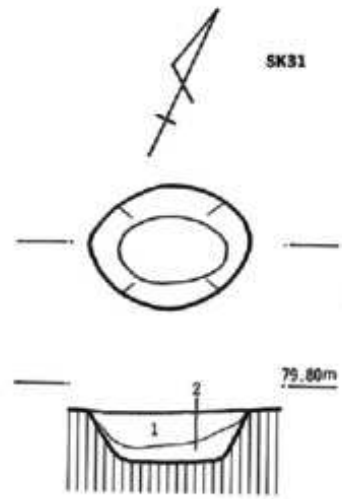
EP362
1 黒褐色砂壌土（焼土を含む）
2 黒褐色壌土（炭化物粒子と褐根を含む）
3 暗褐色砂壌土
4 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に混入）

0 2m

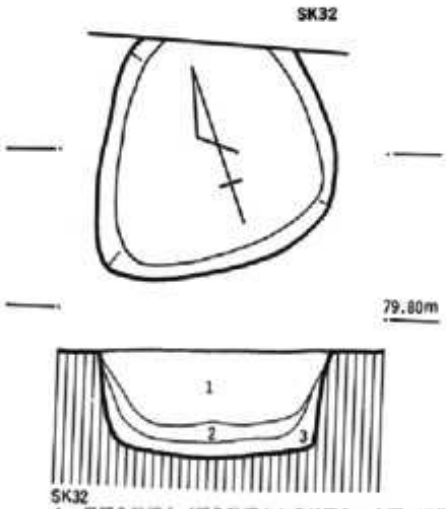
第27図　A区土壌・柱穴（7）



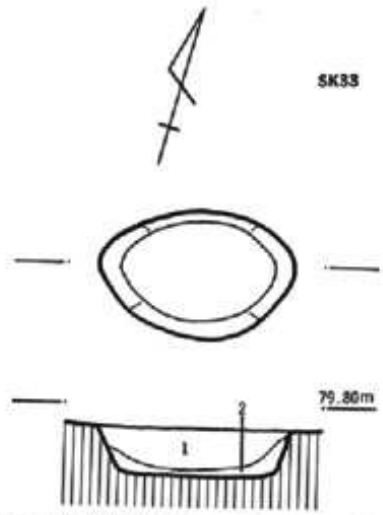
SK30
1　黒褐色砂壌土（褐色砂壌土をまばらに混入、炭化物若干含む）
2　暗褐色砂壌土（黄褐砂壌土を混入、礫が全域に密集する）



SK31
1　暗褐色砂壌土（黄褐砂壌土をまばらに混入、大礫含む）
2　暗褐色砂壌土（褐色砂壌土を混入、炭化物を含む、礫多量含む）



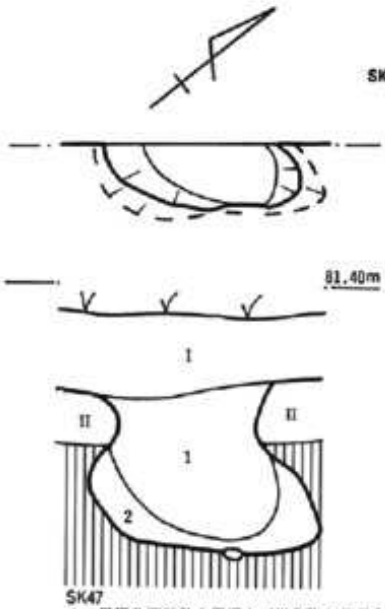
SK32
1　黒褐色砂壌土（褐色砂壌土を多量混入、上面に遺物多量包含、炭化物・礫を含む）
2　暗褐色砂壌土（黄褐色砂壌土をブロック状に混入、炭化物を含み土器をはさむ）
3　暗褐色砂壌土（黄褐色砂壌土を若干混入、炭化物を含む）



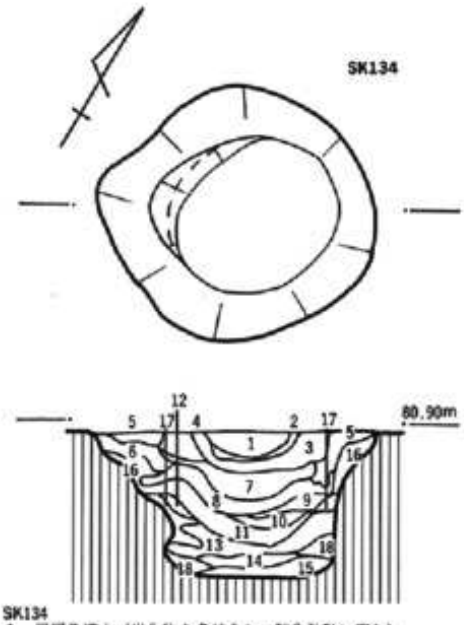
SK33
1　暗褐色砂壌土（黄褐色砂壌土ブロック状・まばらに混入、炭化物を含み、土器をはさむ）
2　褐色砂壌土（黄褐色砂壌土を若干混入、礫多量含む、土器をはさむ）

0　1m

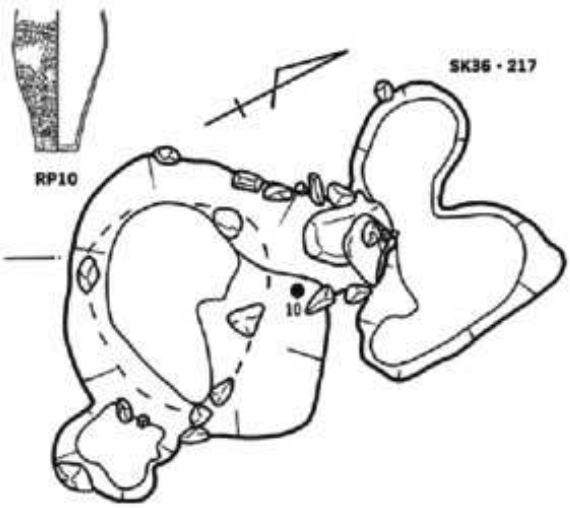
第28図　B区土壙（8）



SK47
1 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含む、非常に柔らかい）
2 暗褐色粘土質壌土（炭化物を若干含む、柔らかい）



SK134
1 黒褐色壌土（炭化物を多量含む、酸化粒砂に富む）
2 黒褐色壌土とにぶい黄褐色細砂との撹乱（炭化物を含む）
3 黒褐色壌土（酸化粒砂に富む、炭化物を多量含む）
4 暗褐色壌土（酸化粒砂に富む、有機物を含む）
5 暗褐色壌土（黄褐色砂壌土をブロックに混入）
6 撹乱
7 黒褐色壌土（炭化物を少量含む、比較的柔らかい）
8 黒色壌土（暗褐色壌土・炭化物をやや含む、粘性がある）
9 暗褐色壌土（かなり柔らかいがしまりがある）
10 黒色壌土（かなり柔らかいがしまりがある）
11 暗褐色壌土（にぶい黄褐色細砂をブロック状に混入）
12 にぶい黄褐色細砂～粗砂
13 にぶい黄褐色細砂と黒色・暗褐色壌土の撹乱
14 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色細砂～粗砂をブロック状に混入）
15 にぶい黄褐色粗砂と暗褐色壌土との互層
16 黄褐色細砂
17 にぶい黄褐色粗砂
18 暗褐色粗砂（にぶい黄褐色粗砂を混入）

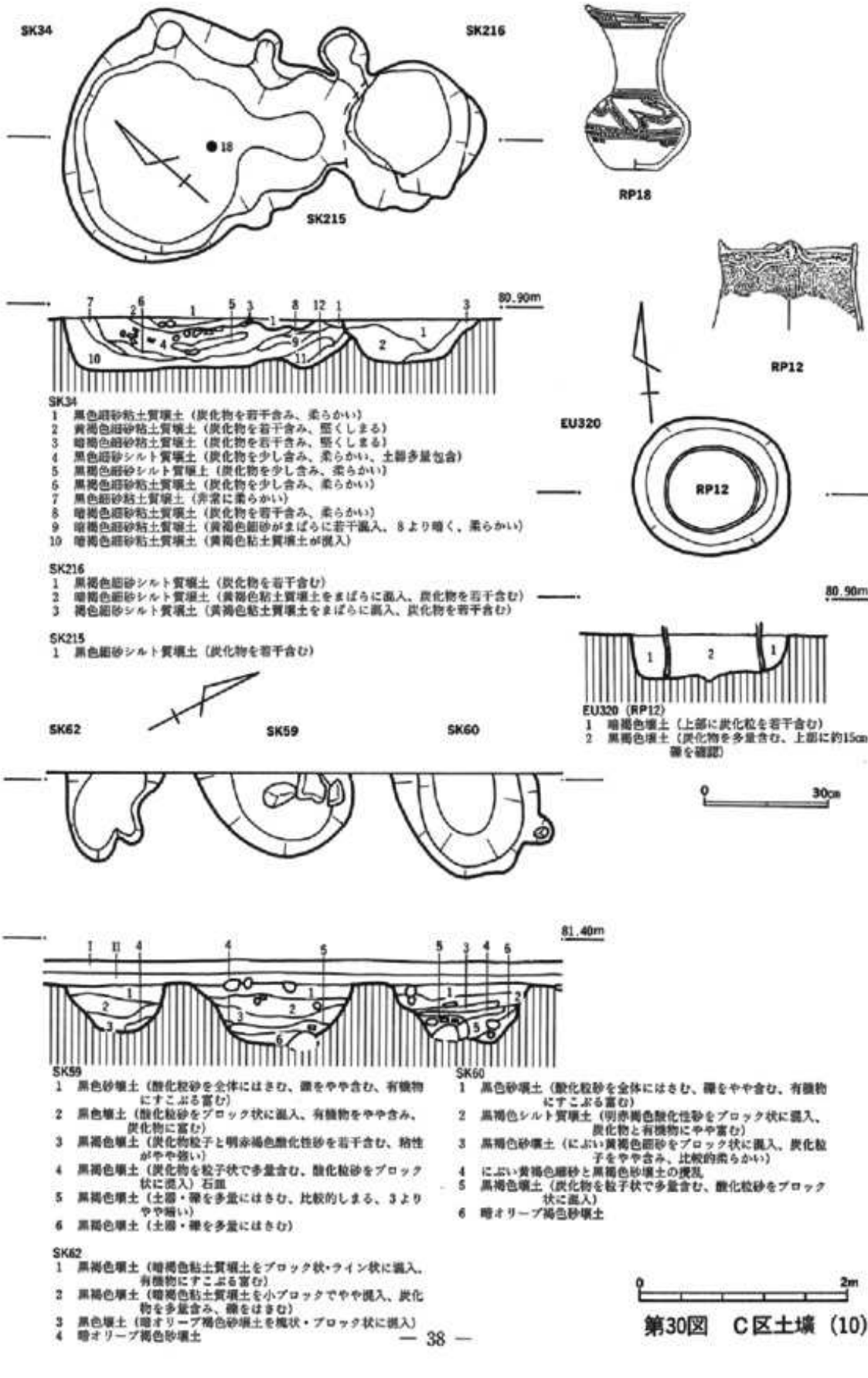


SK36
1 黒色細砂（炭化物を若干含む）
2 黒色細砂（褐色細砂をブロック状に混入、炭化物を若干含む）
3 暗褐色細砂（褐色細砂をまばらに混入、炭化物を若干含む）
4 褐色細砂
5 黒褐色細砂（炭化物を若干含む）
6 暗褐色細砂（黄褐色粘土質壌土をブロック状に混入）
7 黒色細砂（非常に柔らかい）
8 黒色細砂（黄褐色粘土質壌土をまばらに混入）

SK217
1 黒色細砂（炭化物を若干含む、柔らかい）
2 暗褐色細砂（黄褐色粘土質壌土をまばらに混入）
3 暗褐色細砂

0 2m

第29図　C区土壙（9）



SK34
1 黒色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含み、柔らかい）
2 黄褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含み、堅くしまる）
3 暗褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含み、堅くしまる）
4 黒色細砂シルト質壌土（炭化物を少し含み、柔らかい、土器多量包含）
5 黒褐色細砂シルト質壌土（炭化物を少し含み、柔らかい）
6 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を少し含み、柔らかい）
7 黒色細砂粘土質壌土（非常に柔らかい）
8 暗褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含み、柔らかい）
9 暗褐色細砂粘土質壌土（黄褐色細砂がまばらに若干混入、8より暗く、柔らかい）
10 暗褐色細砂粘土質壌土（黄褐色粘土質壌土が混入）

SK216
1 黒褐色細砂シルト質壌土（炭化物を若干含む）
2 暗褐色細砂シルト質壌土（黄褐色粘土質壌土をまばらに混入、炭化物を若干含む）
3 褐色細砂シルト質壌土（黄褐色粘土質壌土をまばらに混入、炭化物を若干含む）

SK215
1 黒色細砂シルト質壌土（炭化物を若干含む）

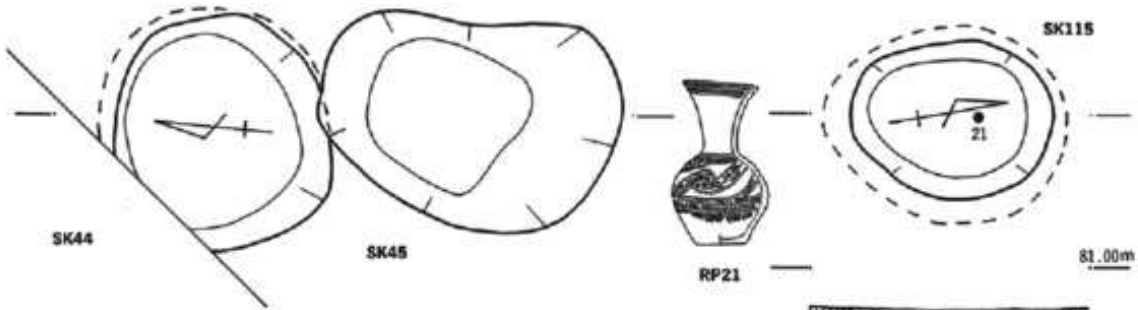
EU320（RP12）
1 暗褐色壌土（上部に炭化粒を若干含む）
2 黒褐色壌土（炭化物を多量含む、上部に約15cmの礫を確認）

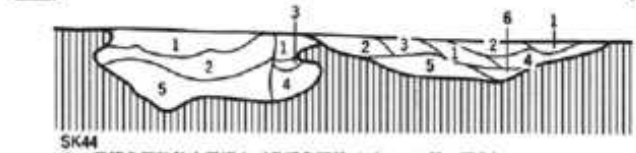
SK59
1 黒色砂壌土（酸化粒砂を全体にはさむ、礫をやや含む、有機物にすこぶる富む）
2 黒色壌土（酸化粒砂をブロック状に混入、有機物をやや含み、炭化物に富む）
3 黒褐色壌土（炭化物粒子と明赤褐色酸化性砂を若干含む、粘性がやや強い）
4 黒褐色壌土（炭化物を粒子状で多量含む、酸化粒砂をブロック状に混入）石皿
5 黒褐色壌土（土器・礫を多量にはさむ、比較的しまる、3よりやや緩い）
6 黒褐色壌土（土器・礫を多量にはさむ）

SK60
1 黒色砂壌土（酸化粒砂を全体にはさむ、礫をやや含む、有機物にすこぶる富む）
2 黒褐色シルト質壌土（明赤褐色酸化性砂をブロック状に混入、炭化物と有機物にやや富む）
3 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色細砂をブロック状に混入、炭化粒子をやや含み、比較的柔らかい）
4 にぶい黄褐色細砂と黒褐色砂壌土の撹乱
5 黒褐色壌土（炭化物を粒子状で多量含む、酸化粒砂をブロック状に混入）
6 暗オリーブ褐色砂壌土

SK62
1 黒褐色壌土（暗褐色粘土質壌土をブロック状・ライン状に混入、有機物にすこぶる富む）
2 黒褐色壌土（暗褐色粘土質壌土を小ブロックでやや混入、炭化物を多量含み、礫をはさむ）
3 黒色壌土（暗オリーブ褐色砂壌土を斑状・ブロック状に混入）
4 暗オリーブ褐色砂壌土

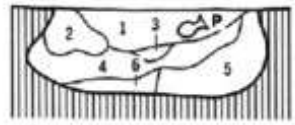
第30図　C区土壙（10）



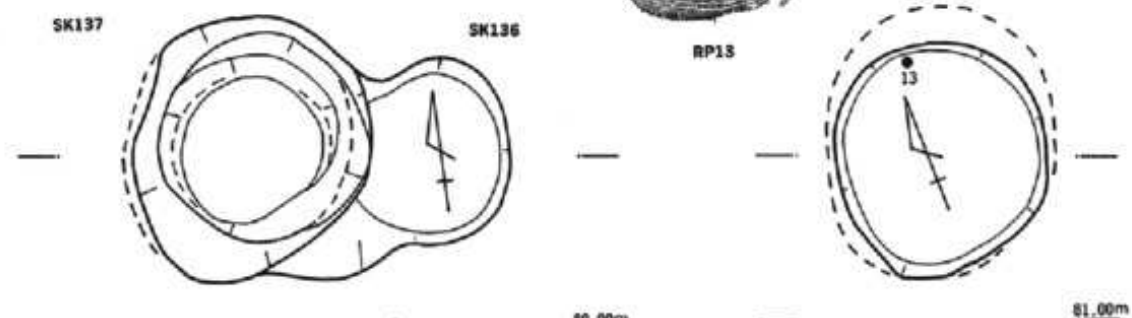


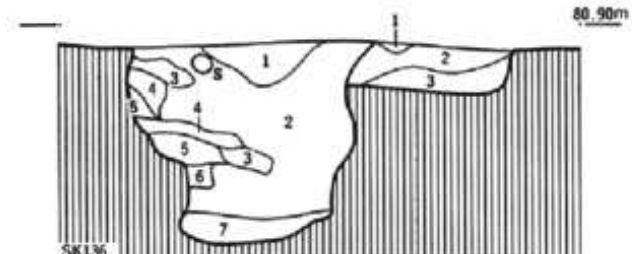
SK44
1 黒褐色細砂粘土質壌土（黄褐色細砂がブロック状に混入）
2 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干混入、柔らかい）
3 暗褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干混入、柔らかい）
4 褐色細砂粘土質壌土（黄褐色細砂質がまばらに混入、柔らかい）
5 黒色細砂粘土質壌土（黄褐色細砂質がまばらに混入、柔らかい）

SK45
1 黒色細砂粘土質壌土（炭化粒を多量含み、柔らかい）
2 黒褐色細砂粘土質壌土（黄褐色粘土質壌土を多量混入、炭化粒を多量含み、柔らかい）
3 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を多量含み、柔らかい）
4 暗褐色細砂粘土質壌土（炭化物を多量含み、柔らかい）
5 にぶい黄褐色壌土（黒褐色細砂粘土質壌土を混入）
6 にぶい黄褐色壌土（黄褐色砂壌土を混入）



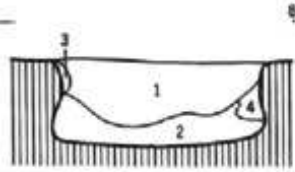
SK115
1 黒褐色壌土（有機物・炭化物をやや含む、土器をはさむ）RP21
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック・斑状に混入、炭化物をやや含む）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をまだらに多量含む、酸化粒砂若干含む）
4 暗褐色壌土（炭化物含む、やや粘性が強い）
5 黒褐色壌土（黄褐粗砂を斑状で周壁際に混入、黄褐色細砂ブロックを混入）
6 黒色壌土（やや粘性が強い）





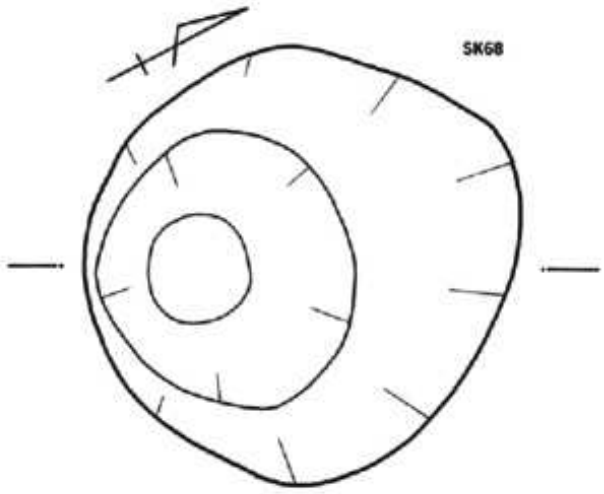
SK136
1 黒色壌土（黒ボク土、礫を含み、未分解有機物をはさむ）
2 にぶい黄褐色砂壌土と黒褐色壌土の攪乱
3 明黄褐色細砂～粗砂

SK137
1 黒褐色砂壌土（炭化物と酸化鉄分を含む、ほぼ粘土化した有機物を含む、小石をはさむ、堅くしまる）
2 黒褐色粘土質壌土（灰白色・明黄褐色の酸化粒を含む、炭化物多量混入、比較的柔らかい）
3 にぶい黄褐色砂壌土と黒褐色壌土の攪乱
4 にぶい黄褐色砂壌土
5 明黄褐色細砂～粗砂
6 にぶい黄褐色粗砂
7 黒褐色粘土質壌土とにぶい黄褐色粗砂の互層

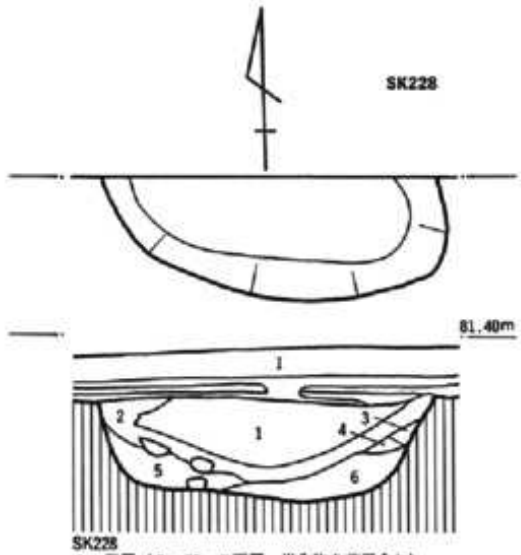


SK163
1 黒褐色壌土（炭化粒子を多量含む、ほぼ粘土化した有機物を含み、酸化粒砂を斑点状で混入）RP13
2 黒色壌土（やや粘性が強く、混りを帯びる）
3 暗褐色壌土（有機物を含む、やや砂質性を帯びる）
4 黒色壌土と暗褐色壌土の攪乱

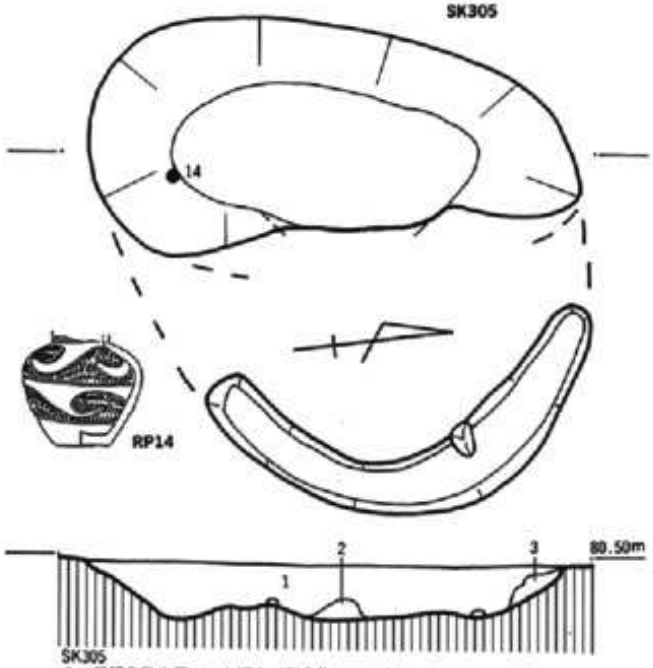
第31図　C区土壙（11）



SK68
1 黒褐色壌土（酸化粒砂を混入、炭化物とにぶい黄褐色細砂ブロックをやや含む）
2 黒色壌土（酸化粒砂を若干含み、炭化物と黄褐色細砂ブロックをやや含む）
3 暗褐色壌土（酸化粒砂を若干含み、炭化物と黄褐色細砂ブロックをやや含む）
4 黒褐色砂壌土（炭化物を多量含む）
5 暗褐色砂壌土
6 にぶい黄褐色細砂と黒色・暗褐色壌土の撹乱

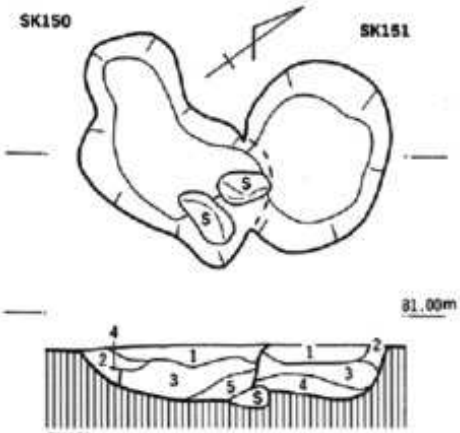


SK228
1 撹層（5～25cmの礫層、炭化物を若干含む）
2 黒色細砂（炭化物を若干含み、柔らかい、礫をはさむ）
3 暗褐色細砂（炭化物を若干含む）
4 黒褐色細砂（炭化物を若干含み、柔らかい）
5 暗褐色細砂
6 撹層（5～25cmの礫層、炭化物を若干含む）



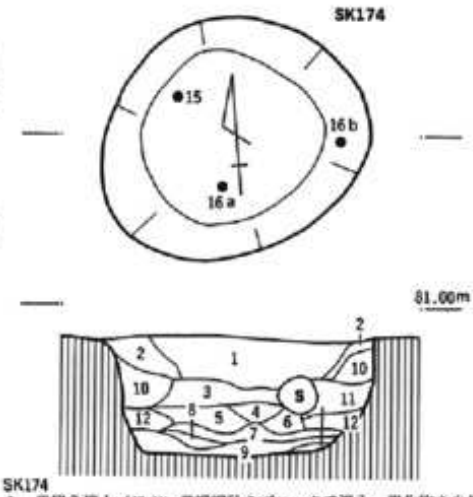
SK305
1 黒褐色粘土質シルト壌土（炭化物をやや含み、柔らかい、酸化性に富む）
2 にぶい黄褐色粘土質壌土（グライ化し、柔らかい）
3 暗褐色粘土質シルト壌土（グライ化し、柔らかい）

第32図　C区土壙（12）

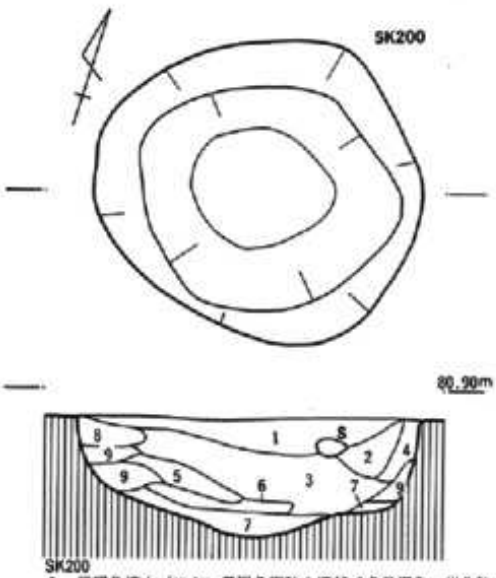


SK151
1 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含み、柔らかい）
2 黒褐色細砂粘土質壌土（暗褐色細砂壌土を多量混入）
3 暗褐色細砂粘土質壌土（炭化物を含む）
4 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を含む）

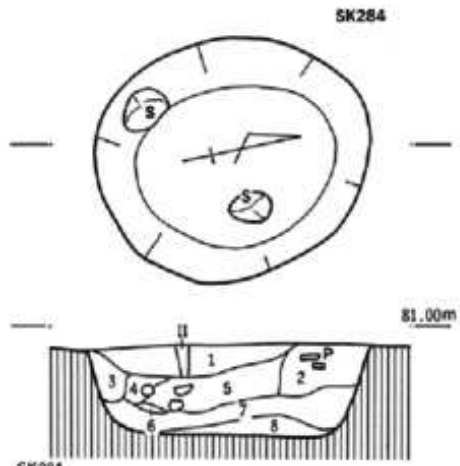
SK150
1 黒褐色細砂粘土質壌土（炭化物を若干含み、柔らかい）
2 暗褐色細砂粘土質壌土（黒褐色細砂粘土質壌土をまばらに混入）
3 黒褐色細砂粘土質壌土（黒褐色細砂粘土質壌土をブロック状に混入、炭化物を若干含み、柔らかい）
4 黄褐色粘土質壌土（柔らかい）
5 黄褐色粘土質壌土（黒褐色細砂粘土質壌土をブロック状に混入、堅くしまりがある）



SK174
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐細砂をブロックで混入、炭化物を少量含み、やや柔らかい）
2 黒褐色壌土（有機物を若干含み、1より明るい）
3 暗オリーブ褐色壌土（礫と炭化物を若干含む、土器をはさみ、非常に柔らかい）
4 暗褐色粘土質壌土（礫と炭化物を若干含み、ややしまる）
5 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色細砂を小ブロック状に混入）
6 暗オリーブ褐色砂壌土（ややしまる）
7 黒褐色壌土（非常に柔らかい）
8 暗褐色粘土質壌土（わずかに石炭分を含む）
9 黒褐色細砂（にぶい黄褐色細砂を多量混入）
10 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土をブロック状に混入）
11 にぶい黄褐色砂壌土と黒褐色壌土の攪乱
12 にぶい黄褐色細砂



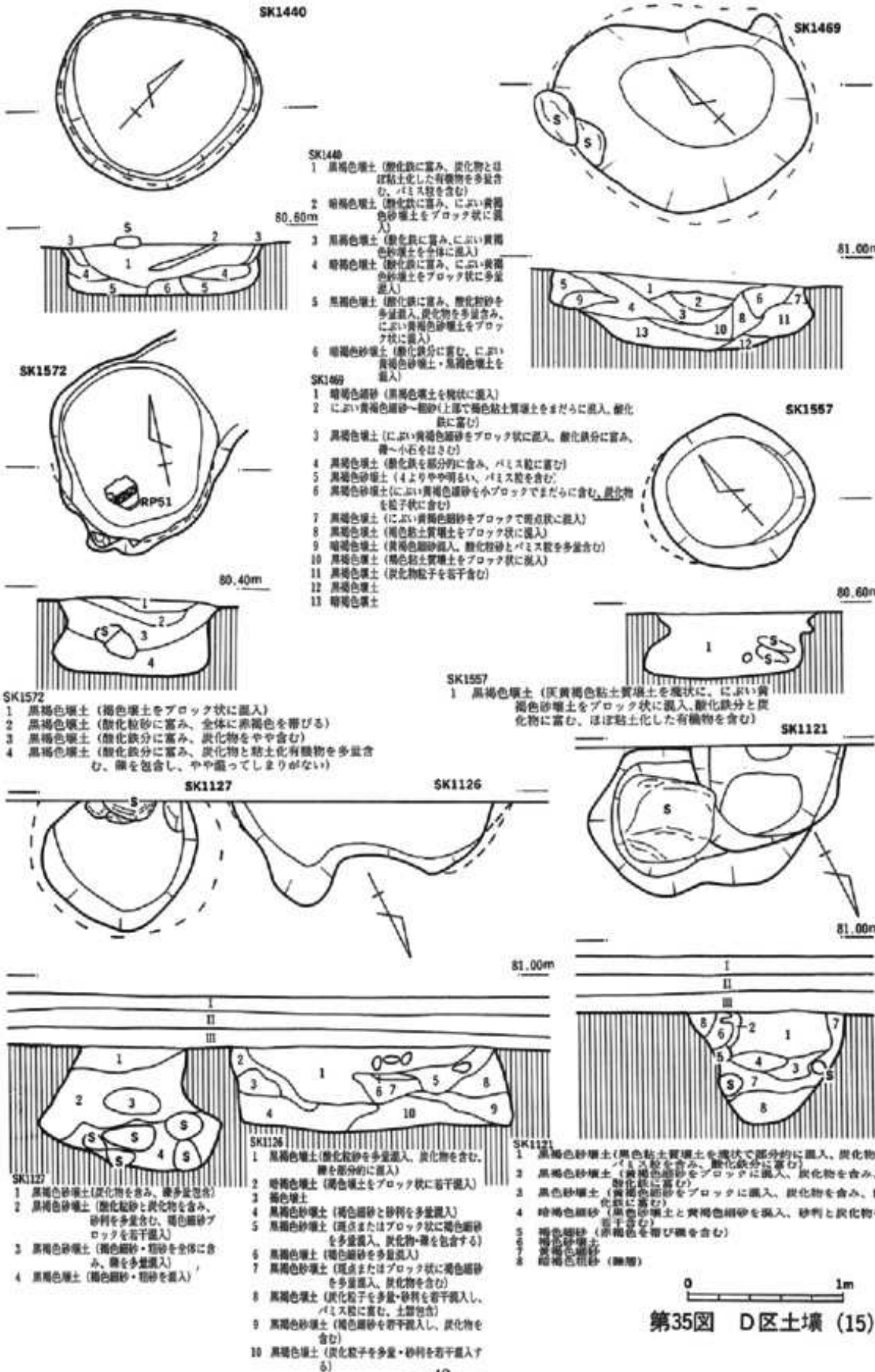
SK200
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色細砂を斑状で多量混入、炭化物を含み、酸化粒砂を斑点状に含む）
2 黒色壌土（やや粘性が強い、未分解有機物を含む）
3 黒色壌土（暗褐色壌土と黄褐色細砂を中位にブロックで混入）
4 黒色壌土（にぶい黄褐色細砂を混入）
5 暗褐色粘土質壌土（酸化粒砂を若干含む）
6 暗褐色粘土質壌土とにぶい黄褐色砂壌土の攪乱
7 にぶい赤褐色砂壌土
8 暗褐色壌土（礫を多量にはさむ）
9 黄褐色細砂



SK284
1 黒褐色細砂（炭化物を若干含み、柔らかい）
2 黒褐色細砂（炭化物を若干含み、柔らかい、土器をはさむ）
3 にぶい黄褐色細砂粘土
4 黒色細砂
5 にぶい黄褐色砂壌土（堅くしまり、礫をはさむ）
6 黒褐色細砂
7 暗褐色細砂
8 暗褐色細砂（7よりやや暗い）

0 1m

第33図　C区土壙（13）



SK1440
1 黒褐色壌土（酸化鉄に富み、炭化物とほぼ粘土化した有機物を多量含む、パミス粒を含む）
2 暗褐色壌土（酸化鉄に富み、にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に混入）
3 黒褐色壌土（酸化鉄に富み、にぶい黄褐色砂壌土を全体に混入）
4 暗褐色壌土（酸化鉄に富み、にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に多量混入）
5 黒褐色壌土（酸化鉄に富み、酸化物砂を多量混入、炭化物を多量含み、にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に混入）
6 暗褐色砂壌土（酸化鉄分に富む、にぶい黄褐色砂壌土・黒褐色壌土を混入）

SK1469
1 暗褐色細砂（黒褐色壌土を斑状に混入）
2 にぶい黄褐色細砂～細砂（上部で褐色粘土質壌土をまだらに混入、酸化鉄に富む）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色細砂をブロック状に混入、酸化鉄分に富み、礫～小石をはさむ）
4 黒褐色壌土（酸化鉄を部分的に含み、パミス粒に富む）
5 黒褐色砂壌土（4よりやや明るい、パミス粒を含む）
6 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色細砂を小ブロックでまだらに含む、炭化物を粒子状に含む）
7 黒褐色壌土（にぶい黄褐色細砂をブロックで斑点状に混入）
8 黒褐色壌土（褐色粘土質壌土をブロック状に混入）
9 暗褐色壌土（黄褐色細砂混入、酸化粒砂とパミス粒を多量含む）
10 黒褐色壌土（褐色粘土質壌土をブロック状に混入）
11 黒褐色壌土（炭化物粒子を若干含む）
12 黒褐色壌土
13 暗褐色壌土

SK1572
1 黒褐色壌土（褐色壌土をブロック状に混入）
2 黒褐色壌土（酸化粒砂に富み、全体に赤褐色を帯びる）
3 黒褐色壌土（酸化鉄分に富み、炭化物をやや含む）
4 黒褐色壌土（酸化鉄分に富み、炭化物と粘土化有機物を多量含む、礫を包含し、やや粗ってしまりがない）

SK1557
1 黒褐色壌土（灰黄褐色粘土質壌土を斑状に、にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に混入、酸化鉄分と炭化物に富む、ほぼ粘土化した有機物を含む）

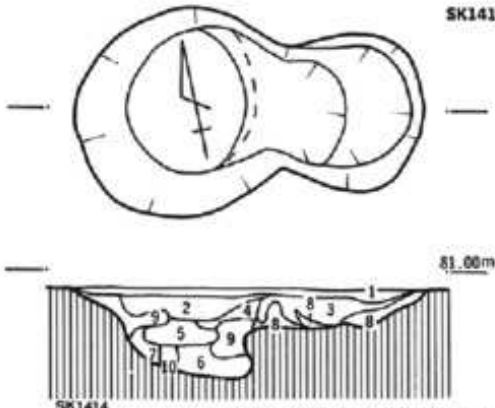
SK1127
1 黒褐色砂壌土（炭化物を含み、礫多量包含）
2 黒褐色砂壌土（酸化粒砂と炭化物を含み、砂利を多量含む、褐色細砂ブロックを若干混入）
3 黒褐色砂壌土（褐色細砂・粗砂を全体に含み、礫を多量混入）
4 黒褐色壌土（褐色細砂・粗砂を混入）

SK1126
1 黒褐色壌土（酸化粒砂を多量混入、炭化物を含む、礫を部分的に混入）
2 暗褐色壌土（褐色壌土をブロック状に若干混入）
3 褐色壌土
4 黒褐色砂壌土（褐色細砂と砂利を多量混入）
5 黒褐色砂壌土（斑点またはブロック状に褐色細砂を多量混入、炭化物・礫を包含する）
6 黒褐色壌土（褐色細砂を多量混入）
7 黒褐色砂壌土（斑点またはブロック状に褐色細砂を多量混入、炭化物を含む）
8 黒褐色壌土（炭化粒子を多量・砂利を若干混入し、パミス粒に富む、土器包含）
9 黒褐色砂壌土（褐色細砂を若干混入し、炭化物を含む）
10 黒褐色壌土（炭化粒子を多量・砂利を若干混入する）

SK1121
1 黒褐色砂壌土（黒色粘土質壌土を斑状で部分的に混入、炭化物・パミス粒を含み、酸化鉄分に富む）
2 黒褐色砂壌土（黄褐色細砂をブロック状に混入、炭化物を含み、酸化鉄に富む）
3 黒色砂壌土（黄褐色細砂をブロックに混入、炭化物を含み、酸化鉄に富む）
4 暗褐色細砂（黒色砂壌土と黄褐色細砂を混入、砂利と炭化物を若干含む）
5 褐色細砂（赤褐色を帯び礫を含む）
6 褐色砂壌土
7 黄褐色細砂
8 暗褐色粗砂（地層）

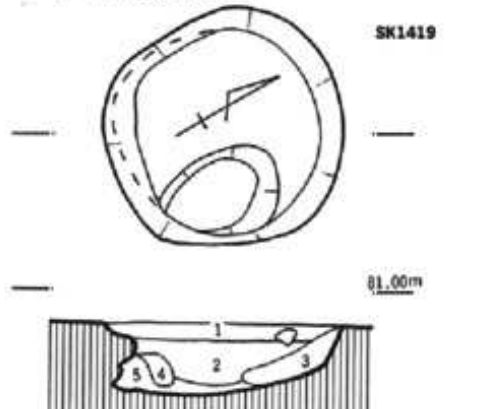
第35図　D区土壙（15）

SK1414



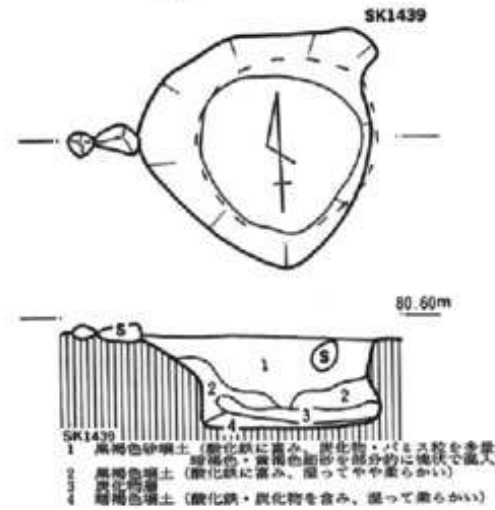
SK1414
1 黒褐色壌土（酸化鉄と粒砂に富み、パミス粒と炭化を多量含む）
2 黒褐色壌土（砂質性を帯びるが緻密で固くしまる）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックでまだらに混入、酸化鉄分を若干含む）
4 暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入、黄褐色砂壌土ブロックをやや含む）
5 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土と黄褐細砂ブロックを多量混入、やや酸化鉄分を混ぴる）
6 黒色壌土（黄褐色細砂～砂粒を部分的にブロック包含する）
7 黒褐色壌土（にぶい黄褐砂壌土がまだらに混入）
8 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色と暗褐色壌土がまだらに混入）
9 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色と暗褐色壌土がまだらに混入、ほぼ粘土化した有機物を含む）
10 にぶい黄褐色砂壌土

SK1419



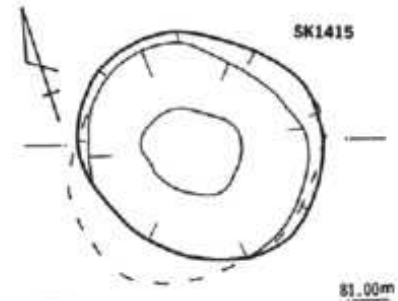
SK1419
1 黒褐色壌土（上部で灰黄褐色粘土質壌土をレンズ状に混入、酸化粒砂・炭化粒子に富み、パミス粒にすこぶる富む）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックでまだらに含む、パミス粒に富み、緻密で固くしまる）
3 暗褐色砂壌土（黒褐色壌土を筋状に混入、にぶい黄褐色砂壌土を多量混入、ブロックで筋状にはぎむ）
4 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土を筋でまだらに混入）
5 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土と黄褐色細砂をブロックで混入）

SK1439



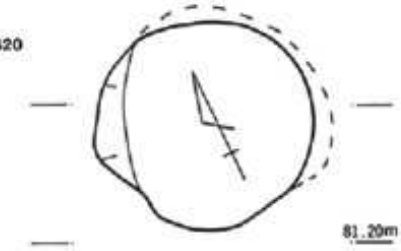
SK1439
1 黒褐色砂壌土（酸化鉄に富み、炭化物・パミス粒を多量含む、砂褐色・黄褐色細砂を部分的に塊状で混入）
2 黒褐色壌土（酸化鉄に富み、固ってやや重らかい）
3 炭化物層
4 暗褐色壌土（酸化鉄・炭化物を含み、固って重らかい）

SK1415



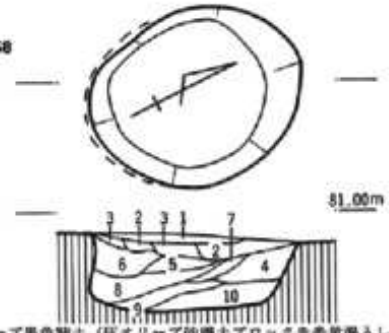
SK1415
1 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状にやや含む、中央部で炭化物に富む、緻密で堅くしまる）
2 黒褐色壌土（均一に堅くしまる）
3 暗褐色砂壌土（黒褐色砂壌土とにぶい黄褐色砂壌土がブロック状に混入）
4 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土をまだらに混入）
5 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を全体に混入し、2よりやや明るい、酸化粒砂をまばらに含む）
6 にぶい黄褐色砂壌土
7 暗褐色砂壌土
8 褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入）

SK1420



SK1420
1 黒褐色砂壌土（パミス粒と酸化粒砂に富む、炭化物を少量含む）
2 黒褐色砂壌土（黄褐色細砂を混入、パミス粒と酸化粒砂に富む）
3 黒褐色細砂～粗砂（黒褐色壌土をまだら状に混入）
4 黄褐色細砂質土（黒褐色壌土をまだら状に混入）
5 黒褐色砂壌土（パミス粒を若干含む、極めて固い、堅くしまる）
6 暗褐色砂壌土（黄褐色・黒褐色壌土を含む、有機物を若干含む）
7 黄褐色細砂
8 黒色砂壌土（黄褐色細砂をブロック・斑点状に混入）

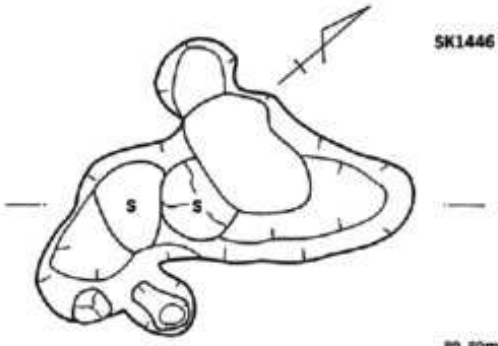
SK1468



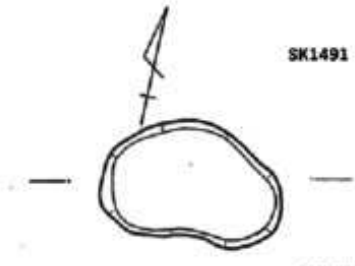
SK1468
1 オリーブ黒色粘土（灰オリーブ砂壌土ブロックを多量混入し、酸化鉄分に富む、パミス粒を多量含む）
2 暗オリーブ褐色砂壌土（酸化鉄を粒子状に含む、酸化鉄・パミス粒に富む）
3 オリーブ褐色（酸化鉄・パミス粒に富む）
4 黒褐色壌土（上部で酸化鉄を溶脱させる、炭化物を含み堅くしまる、パミス粒を含む）
5 暗褐色細砂（酸化粒砂を若干混入、ほぼ粘土化した有機物・固結を含む）
6 褐色砂壌土（上部で酸化鉄を溶脱させる、炭化物を含み堅くしまる、パミス粒を含む）
7 褐色細砂（酸化物を含み、粘性弱い）
8 暗褐色壌土（酸化粒砂と炭化粒子をやや含む）
9 褐色砂壌土
10 暗褐色砂壌土（ほぼ粘土化した有機物を含む）

0 1m

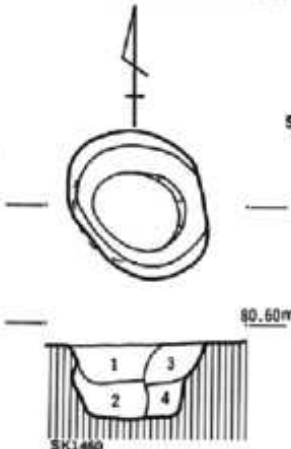
第34図　D区土壙（14）



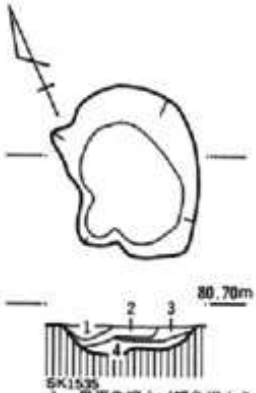
SK1446
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色壌土ブロック・炭化物・パミス粒を含む、酸化粒砂で酸化マンガンを帯びる）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色ブロック・炭化物・酸化鉄・粘土化有機物を含む）
3 黒褐色壌土（炭化物を均一に含む）
4 黒褐色壌土（にぶい黄褐砂壌土をブロック・斑点状で多量混入）
5 暗褐色砂壌土（黄褐色細砂～粗砂を多量混入、鉄をほさむ）
6 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状・まだらに多量混入、炭化物・粘土化有機物をややむむ）
7 褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土と黒褐色壌土を混入、粘土化有機物を含む）
8 にぶい黄褐色砂壌土（粘土化有機物を含む）



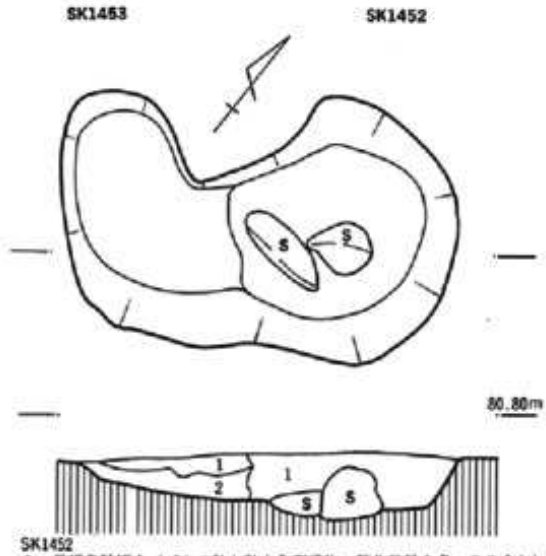
SK1491
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐砂壌土を斑点状に若干混入、炭化粒と粘土化有機物をはさむ、酸化鉄に富み、鉄塊で固くしまり粘性が強い）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐砂壌土をまだらに混入、酸化鉄に富む）
3 暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を全体に混入、酸化鉄に富む）
4 にぶい黄褐色砂壌土（酸化鉄を斑状する）



SK1460
1 黒褐色砂壌土（炭化物を多量含み、パミス粒・酸化鉄分を若干含み、砂利～礫を包含）
2 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土を多量混入し、だいぶ明るい、酸化鉄をやや含む）
3 黒褐色砂壌土（黄褐色細砂壌土と酸化粒砂をブロック状に混入、砂利～礫を包含）
4 暗褐色細砂～粗砂（黄褐色細砂壌土と酸化粒砂を斑状に混入、砂利～礫を包含）



SK1535
1 黒褐色壌土（暗色壌土をまだらに混入、パミス粒をやや含む、酸化鉄をやや含む）
2 暗褐色壌土（黒褐色壌土をまだらに混入、酸化鉄を含む）
3 黒褐色壌土（酸化鉄を含む、やや砂質性を帯びる）
4 黒褐色壌土（にぶい黄褐色粘土質壌土をブロック状に混入）

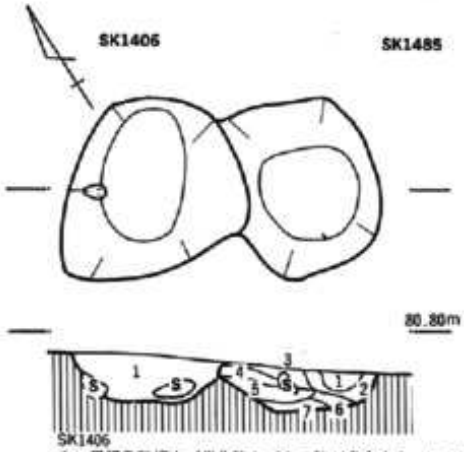


SK1452
1 黒褐色砂壌土（パミス粒と粘土化有機物、酸化粒砂を各々やや含む）
2 褐色砂壌土（粘土化有機物と環状酸化鉄分を含む）

SK1543
1 黒褐色壌土（炭化物を全体にはさみ、中央部で礫を包含。粒砂に富む）

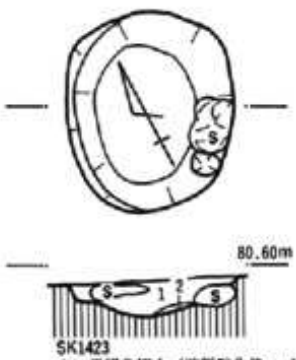
0 1m

第37図　D区土壙（17）

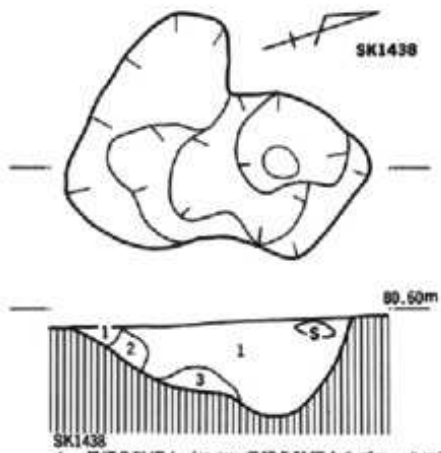


SK1406
1 黒褐色砂壌土（炭化物とパミス粒が多含する、にぶい黄褐色砂壌土をブロックでやや混入し、砂利を包含する）

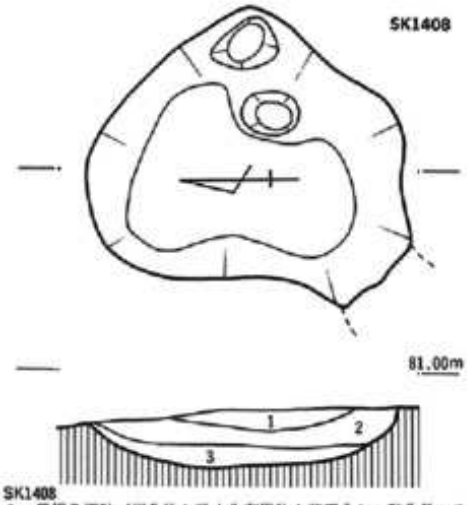
SK1485
1 黒褐色砂壌土（炭化物と粘土化した有機物をやや含む）
2 暗褐色細砂（黄褐色細砂混入、ほぼ粘土化した有機物を含む）
3 黒褐色砂壌土（酸化粒砂に富み、小粒炭化物をやや含む）
4 暗褐色細砂（黄褐色細砂を多量混入）
5 暗褐色細砂
6 暗褐色細砂（粘土化有機物と酸化鉄分に富む）
7 褐色細砂（黄褐細砂を多量混入）



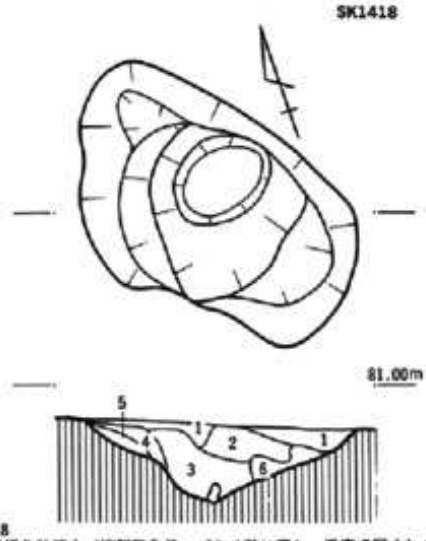
SK1423
1 黒褐色壌土（溶脱酸化鉄・パミス粒を含み砂質を帯びる、炭化物に富む、砂利・礫を包含）
2 にぶい黄褐色砂壌土



SK1438
1 黒褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックに若干混入、層上部で炭化物を多量含み、酸化鉄分に富む）
2 灰黄褐色壌土（黒褐色砂壌土をまだらにやや混入）
3 暗灰褐色細砂



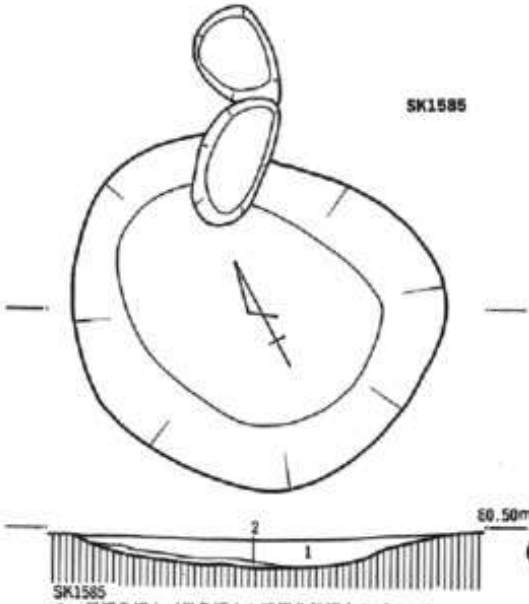
SK1408
1 黒褐色細砂（炭化物と粘土化有機物を若干含む、酸化鉄にやや富み、粒砂を全体に混入）
2 黒褐色砂壌土（粘土化有機物を含み、1より暗くやや粘りがある）
3 オリーブ褐色砂壌土（酸化鉄分に富み、黒褐色砂壌土をまだらに混入、下部で黄褐色細砂を混入）



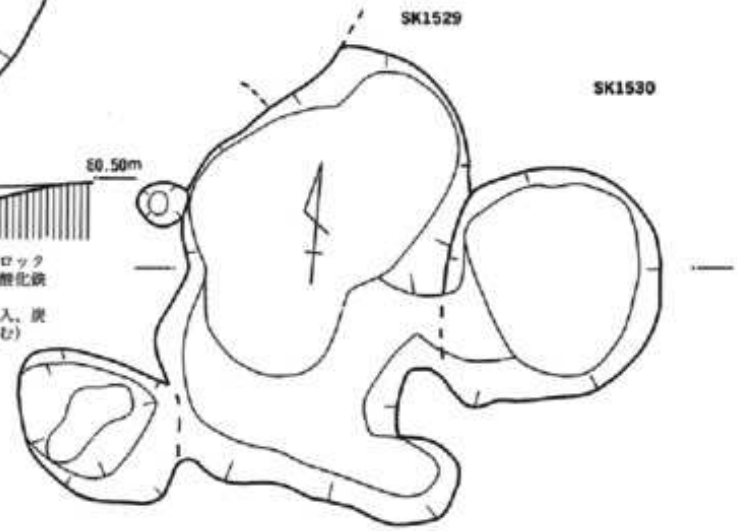
SK1418
1 黒褐色砂壌土（溶脱酸化鉄・パミス粒に富む、緻密で堅くしまる）
2 黒褐色砂壌土（酸化粒砂を含み、にぶい黄褐色砂壌土を斑点状・まだらに混入）
3 黒色砂壌土（溶脱酸化鉄・パミス粒に富む）
4 黒褐色砂壌土（黄褐色砂壌土をブロック状に多量混入）
5 黒褐色砂壌土（酸化鉄・パミス粒に富む）
6 暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に混入）

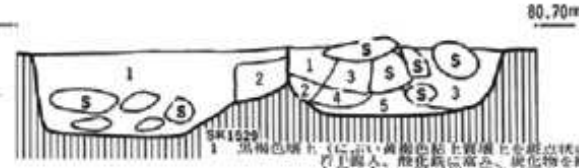
0 1m

第36図　D区土壙（16）



SK1585
1　黒褐色壌土（黒色壌土と暗褐色砂壌土をブロック状に混入、炭化物を若干含み、酸化鉄に富む）
2　暗褐色砂壌土（黄褐細砂をブロック状に混入、炭化物を若干含み、酸化鉄に富む）

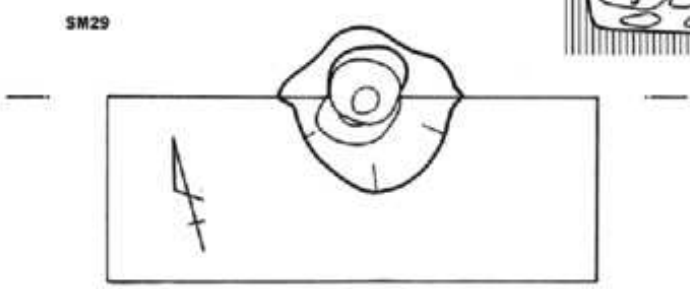


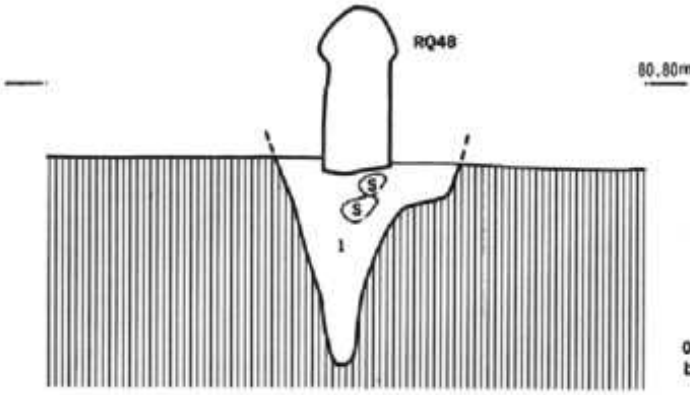


SK1529
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色粘土質壌土を斑点状に若干混入、酸化鉄に富み、炭化物を層上部で含む、層下部に微多量混入、やや砂質性を帯びる）
2　暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土・黒褐色壌土を混入、酸化鉄に富む）

SK1530
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色粘土質壌土を斑点状に若干混入、酸化鉄に富み、炭化物を含む）
2　黒褐色壌土（暗褐色壌土をまだらに混入、酸化鉄に富む）
3　黒褐色壌土（にぶい黄褐色粘土質壌土をブロック・斑点状に多量混入、礫をは3み炭化物を含む、酸化鉄に富む）
4　黒色粘土質壌土（炭化物・酸化鉄を含む、やや褐色を帯びる）
5　オリーブ黒色壌土（にぶい黄褐色粘土質壌土をブロック状に混入、酸化鉄分に富む、やや湿る）

0　1m





RQ48
SM29（RQ48）
1　暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色粘土質壌土をブロック状に多量混入、炭化物を層上部に多量含む、湿って柔らかい）

0　50cm

第38図　D区土壙（18）

表－2　土壙一覧表（1）

挿図番号	遺構番号	検出地区(G)	平面形	規模(cm) (上径)×(下径) ド：底平	深さ(cm)	壁の掘込状態	底面の状態	備考
28	SK30	4－10	略円形	74× 65	10	急傾斜	平坦	礫多量混入
	SK31	4－10	楕円形	59× 46	18	急傾斜	平坦	
	SK32	4－10	不整楕円形	27× 86	10	急傾斜	平坦	遺物多量出土
	SK33	4－10	楕円形	73× 47	18	急傾斜	平坦	SK216に切られ、SK215と重複
30	SK34	8－12	不整楕円形	(289)×213	48	東側緩やか、他は急傾斜	平坦一部凹凸	RP18(第58図3)
29	SK36	9－12	不整形	116×101 154×134	56	フラスコ状、北側開口部緩やか	平坦	RP19(第62図5)
31	SK44	8－13	略円形	(119)×(110) (113)×(108)	40	袋状	平坦一部窪む	SK44を切る、西側一部未調査
	SK45	8－13	不整楕円形	152× 98	20	緩やか	平坦	SK44に切られる
29	SK47	8－13	(不整楕円形)	71× 24 174× 56	126	フラスコ状	平坦	北・西側未調査
30	SK59	8－12	(楕円形)	(155)×(90)	39	急傾斜	平坦	遺物・礫多量混入、西側未調査
	SK60	8－12	(楕円形)	(135)×(98)	39	急傾斜、東・南・北側中端に段をもつ	平坦	礫多量混入、西側未調査
	SK62	8－12	不整楕円形	(95)×(85)	45	北・東側急傾斜 南西側緩やか	平坦	西側未調査
32	SK68	8－11	円形	334×316	38	南側急傾斜、他は極めて緩やか	鍋底状	
31	SK115	8－13	楕円形	101× 81 108×100	42	北側袋状、他はフラスコ状	平坦	RP21(第58図4)
29	SK134	9－12	円形	103× 95 116×114	108	西側袋状	平坦	
31	SK136	9－12	(不整楕円形)	(145)×(84)	22	南西側緩やか、他は急傾斜	平坦	SK137に切られる
	SK137	9－12	不整楕円形	186×105 98× 73	99	東側中端・下部で内彎 西側開口部・下部で内彎	鍋底状	SK136を切る
33	SK150	9－12	不整楕円形	126× 62	26	北側急傾斜、他は緩やか	鍋底状	SK151に切られる
	SK151	9－12	楕円形	97× 71	26	東側急傾斜、南・北側緩やか	平坦	RP23 SK150を切る
31	SK163	9－12	略円形	120×105 137×113	43	フラスコ状	平坦	RP13(第59図3)
33	SK174	8－12	円形	137×117	50	急傾斜	平坦	RP15(第59図1)RP16a(第57図5) RP16b(第63図15)
	SK200	9－13	略円形	164×151	60	東・南側垂直 西・北側急傾斜	鍋底状	
30	SK215	8－12	円形	66× 47	5	緩やか	凹凸	
	SK216	8－12	円形	145×132	41	南西側緩やか、東・北側急傾斜	平坦	SK34を切る
29	SK217	9－12・13	不整楕円形	160×(93)	22	緩やか	鍋底状	SK34・218と重複
32	SK228	9－15	(楕円形)	260× 92	70	急傾斜	平坦	
33	SK284	10－13	略円形	138×119	46	急傾斜	平坦	北側未調査
32	SK305	9・10－12	楕円形	425×368	21	緩やか	凹凸	RP14(第58図8) [illegible]
30	EU320	8－13	円形	75× 66	11	急傾斜	平坦	RP12(第62図6)
23	SK329	2－13・14	不整楕円形	148×120	66	フラスコ状	平坦	SK330を切る
	SK330	2－14	不整楕円形	(96)× 73	21	北東側緩やか、南側段をもつ	平坦	SK329に切られる
	SK337	3－14	楕円形	126×103	57	東側緩やか、他は袋状	平坦	RP31(第62図7a)
24	SK344	2－15	不整円形	102× 92	29	南側段をもつ、他は急傾斜	ほぼ平坦	
22	SK345	2－15	楕円形	111× 10	74	開口部下端より内彎 (南西側を除く)	平坦	
27	SK362	3－15	略円形	139×112	16	急傾斜	平坦	壁上部にEL22が重複 数基のピットに切られる
25	EP364	2－14	楕円形	64× 54	55	ほぼ垂直	平坦	礫多量含む、ST1主柱
	SK367	2－14	円形	89× 85	21	急傾斜	平坦	礫多量含む、ST1内
	SK370	3－14	楕円形	107× 87	26	急傾斜	平坦	ST1の壁柱穴を切る
	EP371	2－15	略円形	64× 61	10	緩やか、南側急傾斜	凹凸	
	EP372	2－15	楕円形	64× 42	67	ほぼ垂直	鍋底状	ST1主柱
21	SK400	3－16	略円形	141×137 155×129	81	袋状、底部直上で大きく内彎	平坦	SK1093を切る
26	EP403	3－15	不整楕円形	77× 69	61	開口部より中端まで急傾斜、中端よりほぼ垂直	鍋底状	ST2主柱、北・西壁は崩落
21	SK416	3－17	略円形	60× 47 69× 59	39	袋状	鍋底状	RP41(第60図11)
22	SK418	3－17	不整楕円形	166×138 128×105	49	南・西側袋状、東・北側段をもつ	平坦	東・南側土坑ピットに切られる
27	SK438	4－16	楕円形	144×108	52	緩やか	凹凸	(第63図4)ST8内 2基の柱穴と重複
24	SK445	4－16	不整楕円形	171×154	44	南西側急傾斜、北側中端まで緩やか、中端より急傾斜	平坦	RP32(第61図6)
23	SK571	5－15	不整形	150× 65	72	南側		
27	SK619	5－14	不整楕円形	141×123	51	袋状	鍋底状	RP40(第62図4)RP42(第63図13)

表－3　土壙一覧表（2）

挿図番号	遺構番号	検出地区(G)	平面形	規模(cm)(長軸)×(短軸)	深さ(cm)	壁の掘込状態	底面の状態	備考
21	SK662	5－13	不整形	(260)×(144)	92	南・西側中端より袋状、北・東側中端よりほぼ垂直	ほぼ平坦	SK661に切られる
27	SK654	5－13	不整形	219×131	60	北側若干内傾、北・西側段をもつ		ST5内
21	SK661	5－13・14	不整形	(250)×(110)	44	南側緩やか、西側急傾斜	鍋底状	SK662を切る
	SK688	5－14	略円形	123×113	51	袋状	鍋底状	RP37(第64図11)
	SK737	5－14	円　形	86×81	42	袋状	鍋底状	
22	SK748	5－14	ほぼ円形	129×103	39	南側を除き大きく内傾	鍋底状	南側崩落
27	EP907	5－16	略円形	59×56	57	急傾斜	平　坦	RP60(第58図5)
25	EP1044	2－15	円　形	61×61	64	ほぼ垂直	平　坦	RP35(第61図3)
26	SK1050	3－14・15	不整楕円形	108×87	24	急傾斜	平　坦	ST1壁柱穴に切られる
24	SK1052	4－14	不整楕円形	199×116	59	西側を除き急傾斜	鍋底状	RP36
26	SK1057	3－15	楕円形	94×71	29	急傾斜	平　坦	SK1059に切られる
	SK1059	3－15	(楕円形)	(140)×111	34	急傾斜	平　坦	SK1057を切る、ST2壁柱穴に切られる
	EP1085	3－14	不整楕円形	79×31	68	開口部が広く中壁部よりほぼ垂直	平　坦	
	EP1086	3－14	楕円形	41×34	24	急傾斜	平　坦	
22	SK1091	3－16	略円形	168×165	92	袋状	平　坦	
21	SK1093	3－16	(不整楕円形)	(170)×(144)	81	急傾斜	平　坦	SK400に切られる
23	SK1096	3・4－16	不整楕円形	317×152	71	東・西側緩やか、南側一部袋状		
24	SK1108	3－16	不整楕円形	177×101	65	南・西側垂直、東側急傾斜	平　坦	礫多量含む
	SK1112	5・6－14	略円形	97×92	47	急傾斜	鍋底状	北側土壙に切られる、RP46・47
35	SK1121	6－14	(略楕円形)	(68)×(57)	7	東側開口部より急傾斜、中端より内傾、西側急傾斜	鍋底状	南側未調査
	SK1126	6－14	(不整楕円形)	153×36	54	東側開口部より若干内傾し底部まで急傾斜、西側開口部より内傾	平　坦	南側未調査
	SK1127	6－14	略円形	97×83	78	開口部より底部まで内傾、西側大きく内傾	鍋底状	南側未調査
36	SK1406	7－19	楕円形	90×88	21	緩やか、北側急傾斜	平　坦	
	SK1408	7－19	不整楕円形	152×134	24	緩やか	平　坦	SK1485を切る
34	SK1414	7－20	不整楕円形	174×101	44	東側、中端より底部まで内傾	平　坦	
	SK1415	7－20	円　形	122×111	59	東・南側開口部直下より内傾	鍋底状	
36	SK1418	7－20	楕円形	154×94	36	緩やか	平　坦	東側にピット有
34	SK1419	7－20・21	円　形	119×116	34	南・西側フラスコ状、北東側急傾斜	平　坦	南西側に落ち込み有
	SK1420	8－20	円　形	11×106	40	北東側開口部より、底部までまっすぐ内傾	平　坦	
36	SK1423	6－18	円　形	10×83	17	西側急傾斜、他は緩やか	平　坦	
36	SK1438	7－18	不整形	152×72	48	南側緩やか、北側急傾斜	鍋底状	
34	SK1439	7・8－18	不整楕円形	128×111	46	東側開口部より中端まで急傾斜、中端より内傾、北・西側中端まで緩やか、中端より若干内傾	平　坦	
35	SK1440	7・8－18	略円形	131×113	32	開口部より急傾斜、中端上部より内傾	平　坦	
37	SK1446	7－19	不整円形	143×110	55	底部より段をもち、外側に外に立ち上がる	鍋底状	各層に礫多量混入
	SK1453	6－19	不整楕円形	125×(82)	17	南側極めて緩やか、西・北側急傾斜、東側未確認	平　坦	SK1452を切る
	SK1452	7－18	不整楕円形	135×(11)	24	急傾斜	平　坦	SK1453に切られる、礫を底部に含む
	SK1460	6－18	略円形	80×67	37	東・南・北側開口部より中端まで内傾し、中端から急傾斜 南西側中端で内傾	平　坦	
34	SK1468	7－19・20	楕円形	108×87	37	南側ほぼ開口部より内傾 東・西・北側急傾斜	平　坦	
35	SK1469	8－20	楕円形	167×116	43	開口部より内傾	鍋底状	
36	SK1485	6－19	円　形	86×66	19	東側急傾斜、他は緩やか	平　坦	SK1046に切られる
37	SK1491	7－18	楕円形	9×57	19	急傾斜	平　坦	
38	SK1529	8－18	不整形	228×121	43	南・北側は急傾斜、他は緩やか	平　坦	SK1530と重複
	SK1530	8－18	楕円形	132×107	32	急傾斜	平　坦	SK1529と重複
35	SK1557	8－18・19	略円形	101×98	42	北西・南東側開口部より急傾斜、中端上部より内傾、東側急傾斜	平　坦	
	SK1572	8－17	円　形	(127)×(112)	45	東・南・西側開口部より急傾斜、中端上部より内傾	平　坦	RP51a(第56図1) RP51b(第56図2) RP51c(第57図2) RP52(第63図16)
38	SK1585	7－16	楕円形	186×160	16	緩やか	平　坦	
37	SK1535	8－18	不整楕円形	90×69	15	底面より内湾ぎみに立ち上がる	凹　凸	

3　墓壙（第40～47図、表－4、図版35～42）

検出された墓壙については表-4にその平面形や規模ほかをまとめておいた。以下ではこれら墓壙に関わるいくつかの特徴について概略を述べていく。

墓壙群はD区6～8－16・17Gに位置し、D区の中では南西側の一画から検出された。その広がりは東西15m、南北約13m程の規模と捉えられ、内部に石（組）棺墓6基を含む45基からなる墓域と確認される。これらは、D区内を東西に走る旧河道の内部から左岸寄りに位置しており、確認面は基本層序のIII層およびIV層上面であった。なお、墓域の南東部は地形的に高くなることもあってか、後世の攪乱による影響が顕著にみられ、墓壙の確認面から床面までが極めて浅い状態や、石棺を構成する石組が部分的に引き抜かれる等の状況が認められた。

［平面形］は小判形の長楕円を基調としており、全体の内29基は整正な楕円形態のものである。その他では不正楕円形、略円形、隅丸方形を呈するものなどが認められた。［規模］は平面形で、長径55～236cm、短径37～117cm、深さ5～34cmを各測り、概ね長径150cm内外、短径70cm、検出面からの深さ20cm程を測る例が一般的なあり方と窺えた。

［壁］の状態は上部の攪乱などもあって不明確な部分が多いが、床際の立ち上がりから推してほぼ垂直に近い急傾と推察される。

［底（床）面］の状態は平坦なものが殆どながら、幾つかは鍋底状や凸凹を呈するものも認められた。また、底面の中央や壁際に小ピットを1個ないし2個程度確認できたものがある（SM1672・1676他）。

墓壙の［主軸方位］は、小判形の土壙墓が概ね西と東向きに、石組墓例で東に偏する傾向が顕著であった。すなわち墓域中でも東側に検出された一群は西に偏する傾向が強く、計測範囲はN－3～87°－Wまでとばらつきが大きいながら、概ねN－60°－W前後に集中している。

一方、西側に位置する多くは、前者とは反対に東側に偏しており、主軸方位の計測値N－2～82°－Eまでの中では概ねN－65°－E前後に集束する様子が確認される。この両者の数的関係は東に傾くもの26基、同じく西に傾くもの19基であり、東偏よりのものが幾分多い。なお、石組による石棺墓6基はいずれも墓域の中央から西よりに検出されており、その主軸方位は60°～80°の範囲で北から東に傾いている。このうち、SM24・26・28は同一のN－67°－Eの値を示し、企画面での共通性が特に強いと窺えた。また、その他の石組を有するSM25・27・1668にしても規模や方位などの企画面で特に相違する様子は認められず、石組を有するタイプの墓壙として全体的にまとまりがあると指摘できそうである。

石組の墓壙は検出面の深さ的にやや上部で確認されたことから、施設を持たない所謂小判形墓壙の一部よりは時期的に幾分新しいのではないかと調査段階では捉えていた。しかし、小判形形態のものが黒土中から掘り込まれて、その上部の検出が困難だったと考えれば、ことさらそのことをだけを根拠として先後関係を求めることがどれほど有効であるかは疑問である。むしろ同時期で墓壙形態の主体と言うよりは付加的特殊形態として構築されたと考えるのが正当のようである。とすれば、小判形の土壙墓と石組を持つ墓壙の関係が問題となる。しかし、両者共に副葬品は皆無であり、その差異を知ることができるのが石組施設をもつかもたないかだけの一点とも見受けられた。しいて言えば、規模・企画的に小判形や円形のものに較べてやや大きいこと、平面形が楕円ではなく隅丸の長方形に近いなどが相違点としては大きいと考えられる。

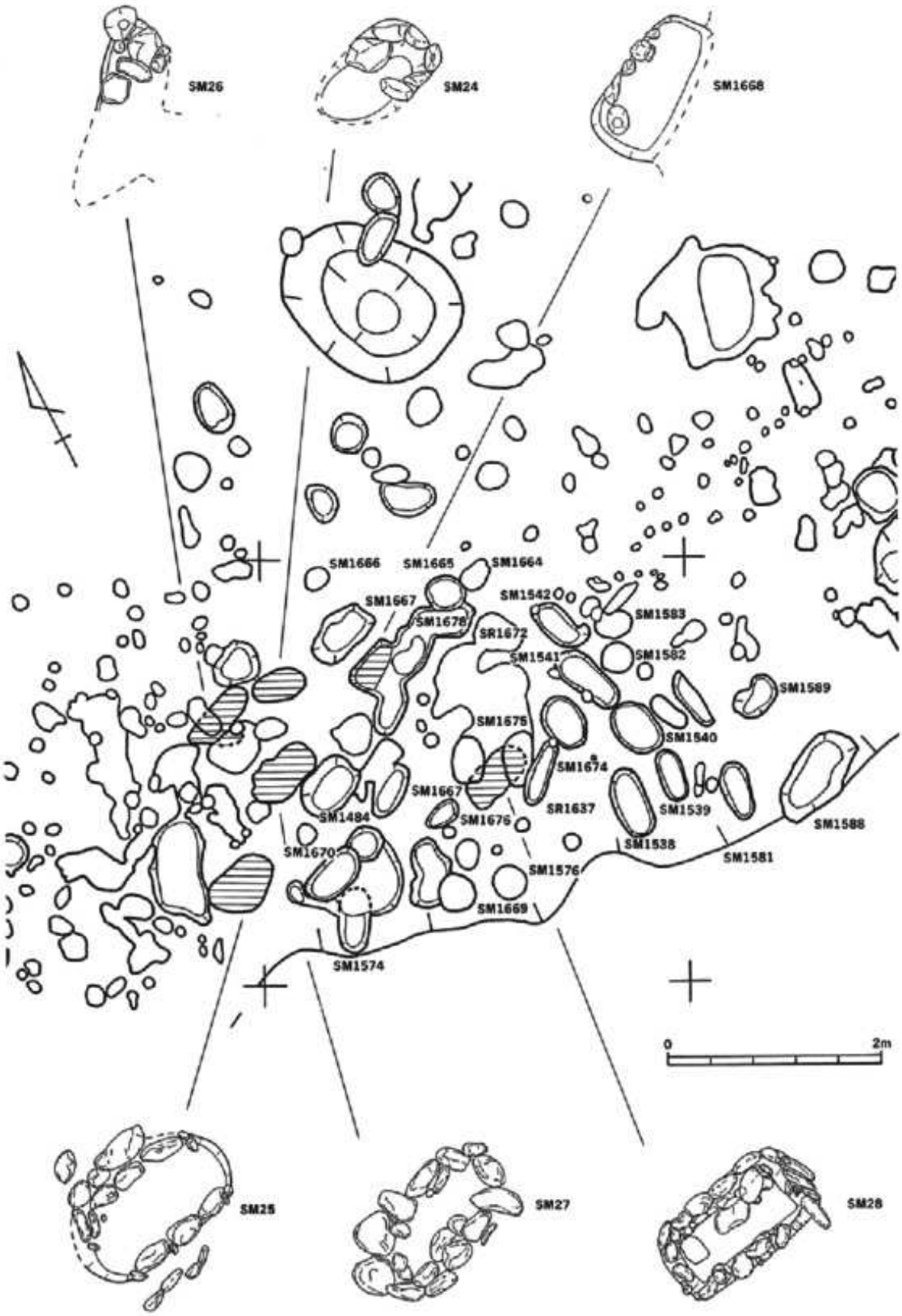
［重複関係］では、小判形墓壙が円形の小土壙に切られるものや、小判形墓壙同士に切り合いの見られるものがあり、何世代かにわたって意識的・重複的に墓域として使用された状況と窺い知れる。しかし、若干例を除いてはその先後関係を明確に把握することはできず、さらに出土遺物も殆どないことから時間幅や土器型式との対比等も正確には行えない困難さを伴っていた。次に石組石棺を持つ墓壙について概略を述べておく。

［平面形態］は小判形ないし隅丸長方形を呈し、規模は長軸150cm、短軸90cm、石組上部からの深さ40cm前後を測るものが大方で、遺存状態での差はあっても墓壙個々の差は基本的にはないか少ないと推測される。

［石組］は土壙の掘り方（壁）に沿って河原石を直列的に配置して囲う（ＳＭ25他）仕様であり、一重一段積と二重一段積風（ＳＭ28）のものがある。石はやや偏平で長楕円形の河原石が選択的に用いられたと窺え、長辺40cm内外、幅40cm前後とやや大きなものを主体に、径10cm程度の石を中込石的に使用している。また、墓壙内部の底面に数個の河原石が散見される例（ＳＭ26・28）があるが、本来的に石敷であったと考えられる状況は見あたらず構築後に墓室内へ落ち込んだものと推測される。

［覆土］は黒褐色細砂質土の単層のものが大半と言ってよく、表土の人為的な埋め戻しによる結果と考えられる。あるいは封土としての土饅頭が時間的経過の中で落ち込んだ結果とも推測されるが、封土としての盛り土があったかどうかは確認の手だてがない。

［出土遺物］は殆ど認められないと言ってよい状況であったが、幾つかの例からは若干の土器片が埋土に混じって出土している（第55図）。何れも混入で２・３点等に限られる資料のため断定的なことは控えるが、円形（ＳＭ1657）や小判形（ＳＭ1574）のもので堀之内式系のやや古手の土器が目だつことが注目される。しかし全体としては十腰内Ⅰ式系や宝ケ峰式系の土器も散見され造墓期間と遺跡の存続期間が概ね重なっているためと推察される。



第40図　墓壙配置図・石棺墓位置

4　集石遺構（図版40・41）

集石遺構はD区の南西部分、7－16･17Gに位置している。検出層位は基本層序Ⅲ層（黒ボク土）の下部であった。平面形を概観すると、7－17G中央やや西側から同南側に集中が認められ、それらが7－16G西側へ幅50cm、長さ約13mの規模で延び出して結果的に円弧ないし弓形状を構成しているように見受けられる。この集石が円環を意図して企画されたと仮定すれば、外縁までの直径が約10m規模と推察される。

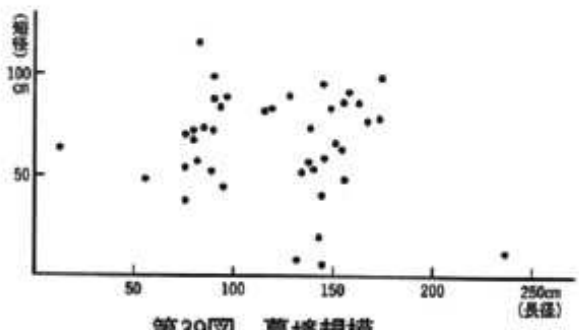
集石群の位置は先に述べた墓域のほぼ上部およびその西側一帯にあたっており、確認できた範囲は東西10×南北13mほどの広がりである。礫群は長径20～60cm大のものが約300個以上でなり、2m四方ほどの範囲に30個前後のまとまりを有する4ブロックが識別された。例えば7－16･17G中央部（30個）、7－16G北東部（25個）、7－16G北西部（30個）、7－16G中央部（32個）などである。

これら集石遺構と墓壙との関連は明かでないが、上下の位置と検出関係から見て集石が後と考えるのは妥当であろう。ただし、墓壙構築に付随した墓標や葺石と考えられる要素が残り、一概に時期を違える別種のものと早急に結論づけることは適当ではなさそうである。調査ではこれら集石の時期と墓壙との関係を明確にできるだけの根拠は得られなかったが、墓壙群の構築とさほど違わない時期に墓域を意識して造られたものと理解しておく。

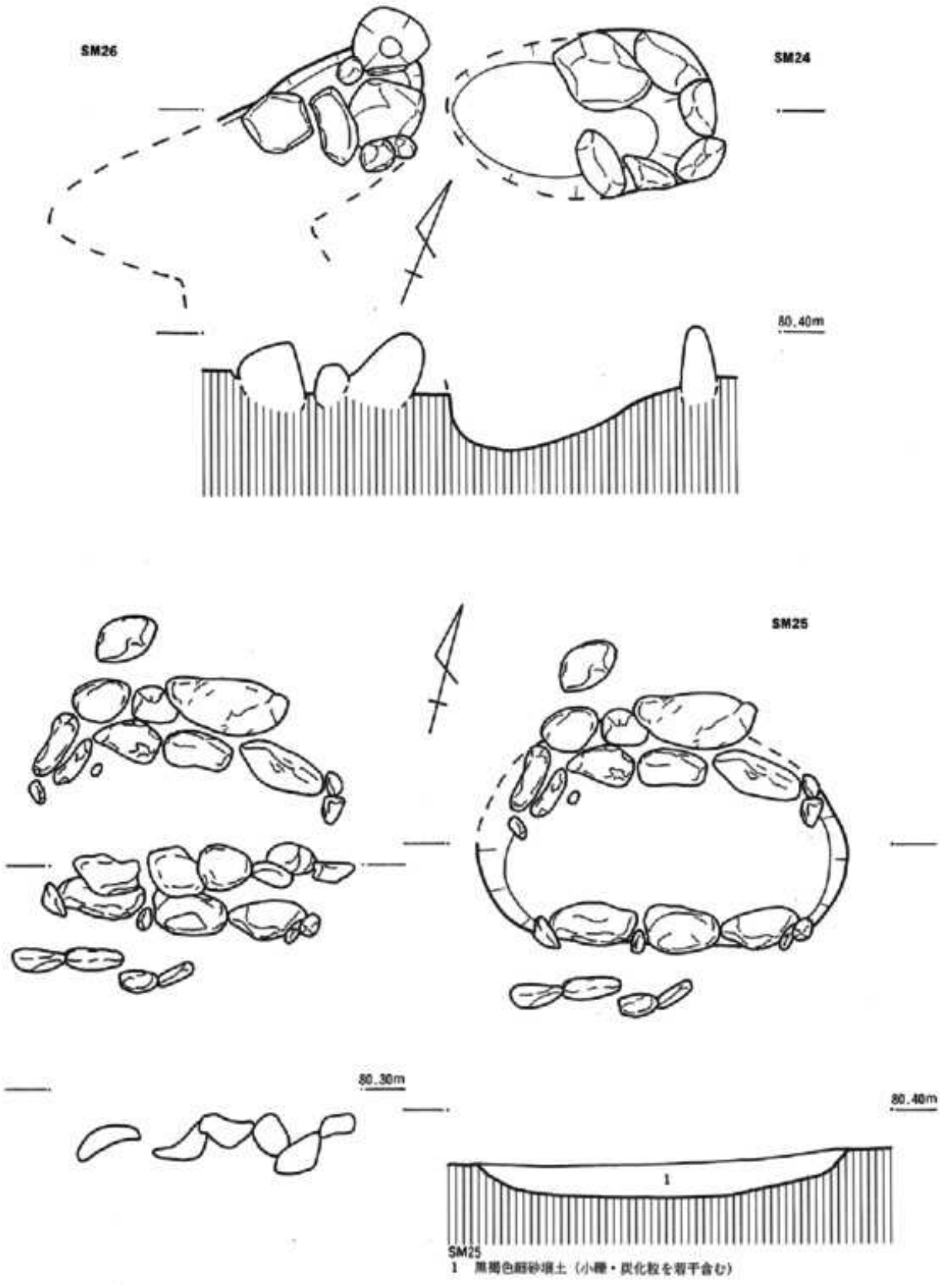
5　立石遺構（第38図、図版35・38）

7－16G東側に掘り方を伴う立石（SM29・RQ48）が検出された。立石（石棒）はほぼ垂直に立った状態で出土しており、極めて稀有な事例と注目される。確認面は集石同様にⅢ層中で上部に石棒が、下部に掘り方の認められる状況があった。掘り方は径45cmの円形で10～50cmほどピット状に掘り込み、その内部に基部の破損した石棒を正位で直立させる様子が観察される。なお、掘り方を土層の断ち割りから子細に見ると、東側では垂直に掘り込んだ後、狭いテラス状の段を設けてその内側をより狭く垂直に掘込んでいた。他方は垂直に近い掘込みのままで、半ばからしだいに狭まる仕様が認められる。

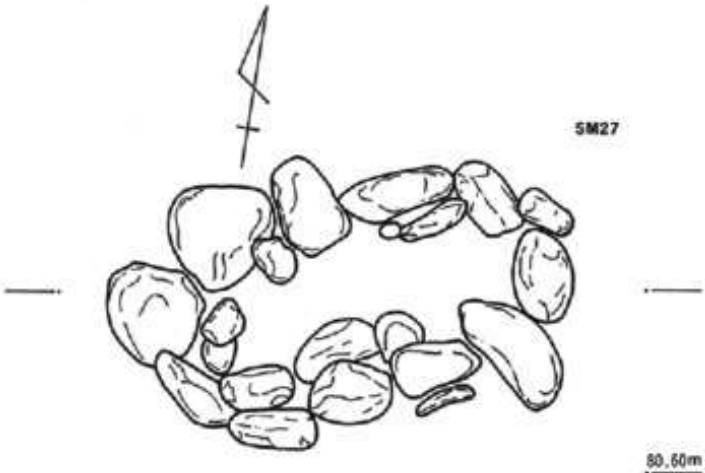
石棒埋置の状態は上記掘り方の内部に若干の土を埋め戻し、破損部分を補う小円礫数個を直下に据えて直立させその後に土を入れ込んで固定したと考えられる。立石は写実的な男根形で長さ29.5cm、直径12cmを計る優品ながら下半を欠失している。本来の姿から見れば約半分ほどの残存と推定される。



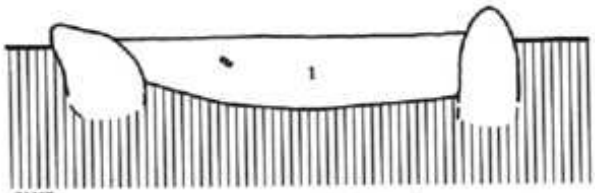
第39図　墓壙規模


SM26
SM24
80.40m
SM25
80.30m
80.40m
1
SM25
1 黒褐色細砂壌土（小礫・炭化粒を若干含む）
0
1m

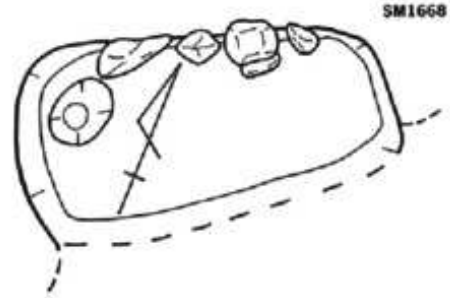
第41図　D区墓壙（1）



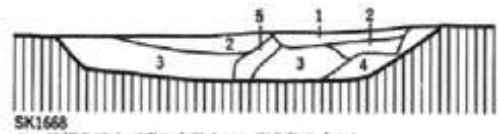
80.60m



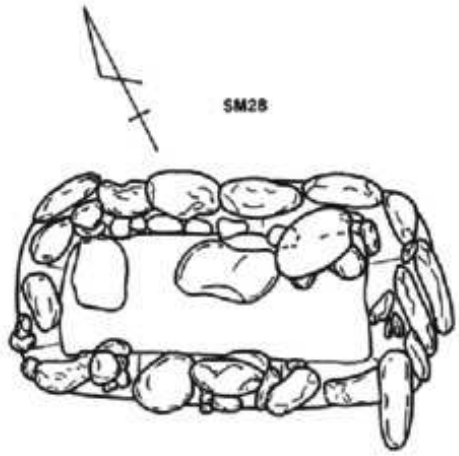
SM27
1　黒褐色細砂壌土（炭化粒を若干含む、土器をはさむ）



80.50m



SK1668
1　黒褐色壌土（礫を多量含む、炭化物を含む）
2　暗褐色砂壌土（にぶい黄褐色壌土をブロック状に多量混入）
3　黒褐色壌土（にぶい黄褐色壌土をブロック状に混入、よくしまる）
4　暗褐色壌土（にぶい黄褐色壌土を混入）
5　にぶい黄褐色砂壌土ブロックが帯状に混入

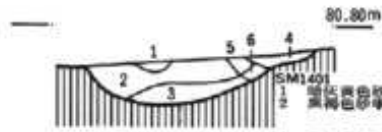


80.80m

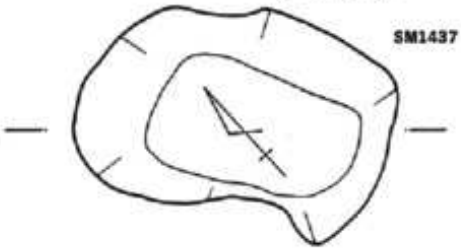
SM28
1　黒褐色細砂壌土（炭化粒を若干含む）

0　1m

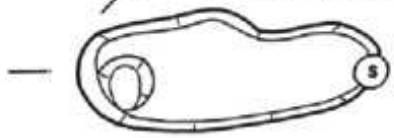
第42図　D区墓壙（2）

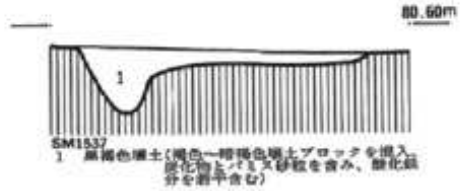


SM1401
1 暗灰黄色砂質土
2 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色細砂をブロックに若干混入、パミス粒多量・炭化物を含み酸化性に富む）
3 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色細砂をブロックに多量混入）
4 黒褐色砂質土（黄褐色細砂を多量混入、酸化粒に富む）
5 黒褐色砂質土（黄褐色細砂をブロックに混入）
6 黄褐色細砂

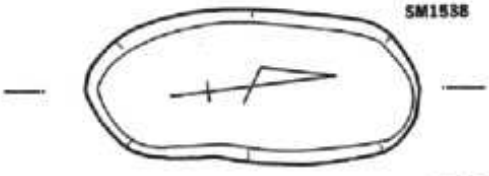


SM1437
1 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土をブロック状にやや多量混入）
2 黒褐色砂質土（未分解有機物を含む、炭化物・パミス粒に富む）
3 暗オリーブ褐色粘土（黄褐色細砂質土をブロック状に含む）
4 黒褐色砂質土（黄褐色細砂をブロック・斑点状に含む）
5 褐色細砂（オリーブ黒色粘土質砂質土をブロック状・斑状に混入）
6 褐色細砂（酸化鉄分混入）
7 暗褐色砂質土（炭化物を若干含む）

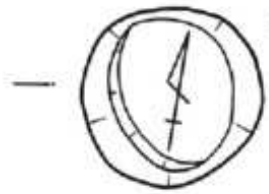




SM1537
1 黒褐色砂質土（褐色～暗褐色粘土ブロックを混入、炭化物とパミス砂粒を含み、酸化鉄分を若干含む）

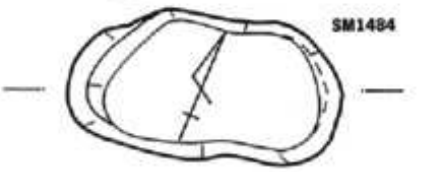


SM1538
1 褐色砂質土（黒褐色砂質土をまだら状に混入、パミス砂粒に富む）
2 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土をブロック状に混入）

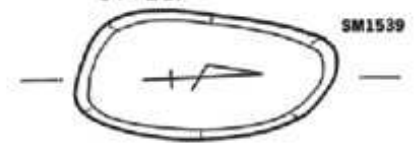


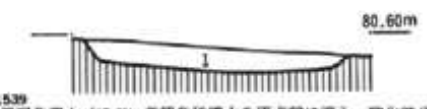
SM1416
1 黒褐色砂質土（下部で酸化粒砂に富む、パミス粒を含む）
2 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土を斑点状・まだらに多量混入、酸化鉄に富む）
3 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土を斑点状でやや混入）
4 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土をブロック状に多量混入）
5 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土をまだら・筋状に混入、やや酸化鉄分に富む）

SM1467
1 黒褐色砂質土（黄褐色細砂をブロック状にまだらに多量混入、やや酸化鉄分を帯びる）
2 黒褐色砂質土（黄褐色細砂をブロックで若干混入、炭化物を若干含む）
3 暗褐色粗砂（黄褐色細砂を多量混入）
4 黒褐色砂質土（黄褐色細砂ブロック状に少量混入、炭化物をやや含み、パミス粒に富む）
5 暗色細砂（黒褐色砂質土を斑状に含む、わずかに酸化鉄を帯びる）
6 黒褐色砂質土（黄褐色細砂をブロック状に多量混入、パミス粒に富む）



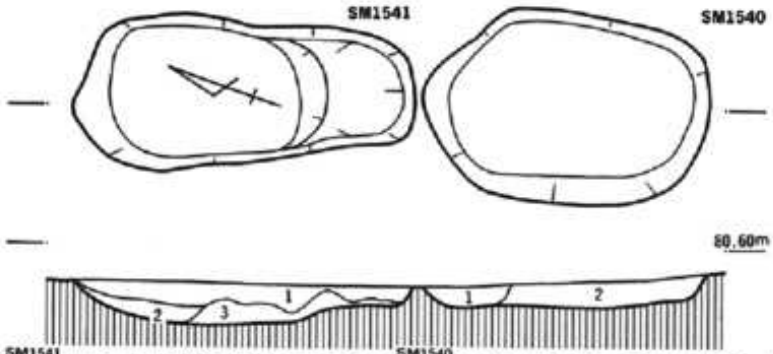
SM1484
1 黒褐色土（黄褐色砂質土をブロック状・斑点状で多量混入、酸化鉄分と炭化物に富む）
2 黒褐色土（酸化鉄分と炭化物に富む、粘土化有機物をはさむ）
3 黄褐色砂質土（黒褐色土をまだらに混入、酸化鉄分に富む）
4 黒褐色土（黄褐色土をまだらに混入、酸化鉄分を含む）
5 黒褐色土（黄褐色土を斑点状に混入、酸化鉄分と炭化物をやや含む）
6 暗褐色砂質土（黄褐色細砂を多量混入、酸化鉄に富む）
7 黒褐色砂質土（黄褐色細砂を多量混入、酸化鉄に富む、有機物をやや含む）





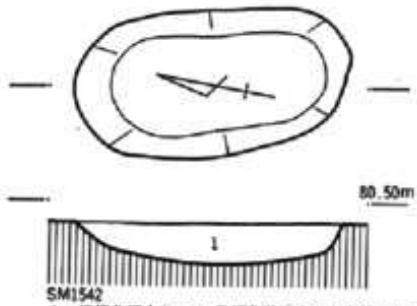
SM1539
1 黒褐色砂質土（にぶい黄褐色砂質土を斑点状に混入、酸化鉄分と炭化物に富む）

第43図　D区墓壙（3）

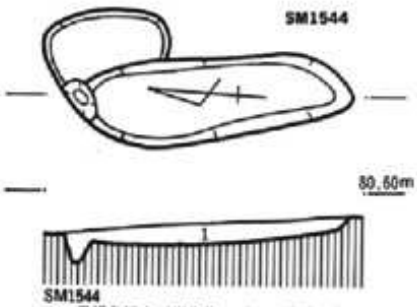


SM1541
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状でやや混入、炭化物・酸化鉄分をやや含む）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状でやや多く混入、酸化鉄分をやや含み、1より明るくやや砂質を帯びる）
3 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック状・まだらに多量混入、2より明るい）

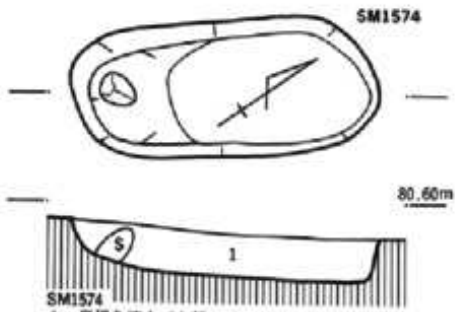
SM1540
1 黒褐色壌土（褐色砂壌土を斑点状に若干混入、炭化物・粘土化有機物をやや含む）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状・まだらに混入、炭化物・粘土化有機物・酸化鉄をやや含む）



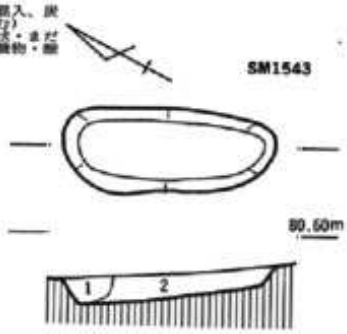
SM1542
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状で若干混入、炭化物・パミス砂粒を含む）



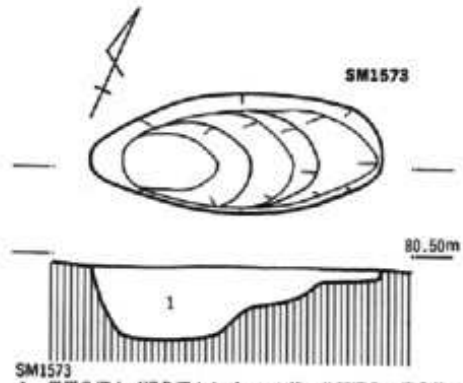
SM1544
1 黒褐色壌土（炭化物・パミス砂粒を含む、ほぼ粘土化有機物を若干含む）



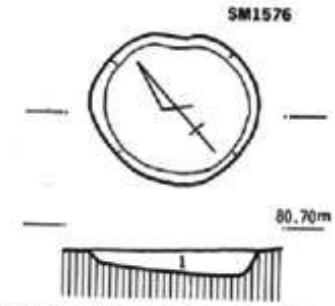
SM1574
1 黒褐色壌土（上部でパミス粒を多量含み、部分的に酸化鉄を含む、有機物を含み、砂利～礫を多量包含）



SM1543
1 黒色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック状で若干混入、炭化物・酸化鉄に富む）
2 黒褐色壌土（にぶい黄褐砂壌土をブロック状に多量混入、炭化物を多量含み、酸化鉄分にやや富む）

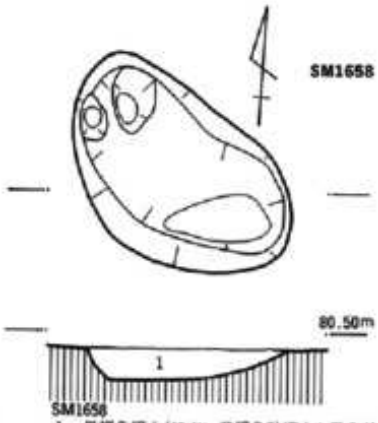


SM1573
1 黒褐色壌土（褐色壌土をブロック状に若干混入、炭化物・パミス粒を含む、よくしまって粘性やや強い）

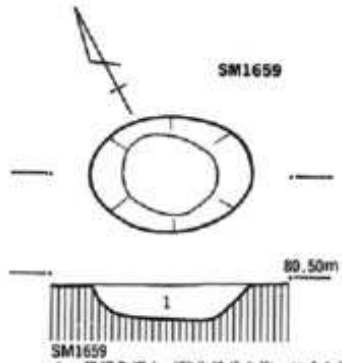


SM1576
1 褐色壌土（黒褐色壌土をまだらに混入、パミス砂粒に富み、ほぼ粘土化した有機物を含む）

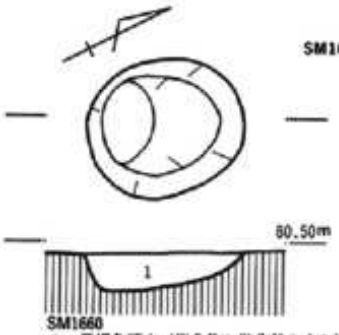
第44図　D区墓壙（4）



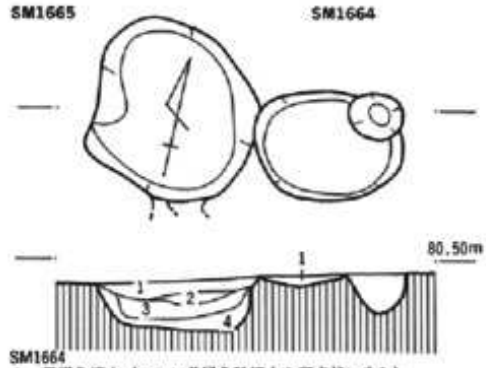
SM1658
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土と酸化鉄分を斑点状に混入）



SM1659
1　黒褐色壌土（酸化鉄分を均一に含む）

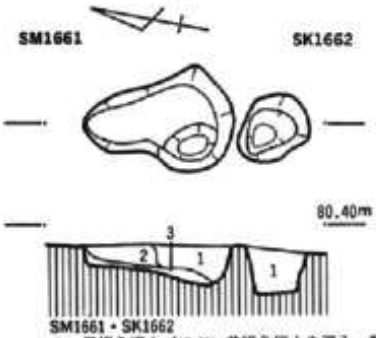


SM1660
1　黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を含む）

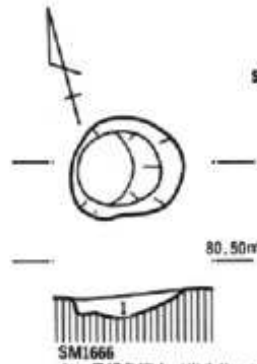


SM1664
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状に含む）

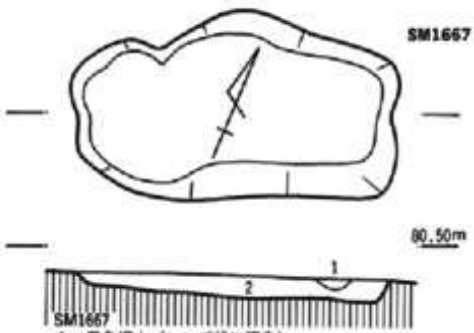
SM1665
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状に含む、浅細砂～粗砂ブロックを含む、炭化物・酸化鉄分を若干含む）
2　暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土ブロックを多量混入）
3　黒褐色壌土（炭化物・酸化鉄分を含む）
4　暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土ブロックをまだら状に含む）



SM1661・SK1662
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色壌土を混入、酸化鉄に富む、暗い）
2　黒褐色壌土（にぶい黄褐色壌土を多量混入、酸化鉄に富む、明るい）
3　暗褐色壌土



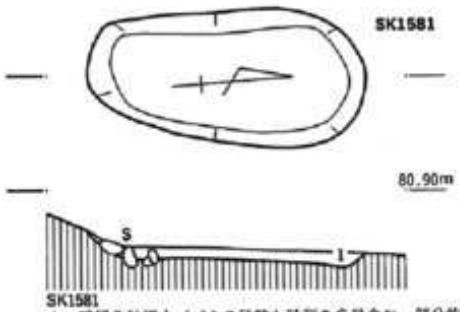
SM1666
1　黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を含む）



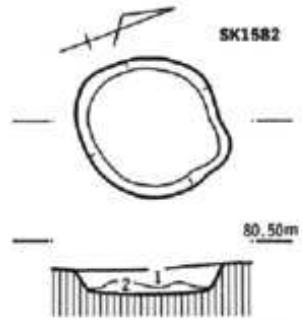
SM1667
1　黒色壌土（レンズ状に混入）
2　黒褐色壌土（下部ににぶい黄褐ブロックを混入）

0　1m

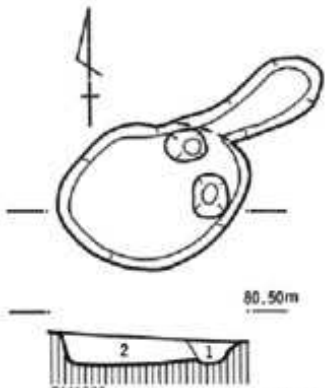
第46図　D区墓壙（6）



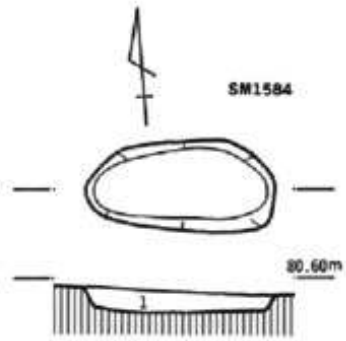
SK1581
1　暗褐色砂壌土（パミス砂粒と砂利を多量含む。部分的に酸化鉄を筋状に含む）



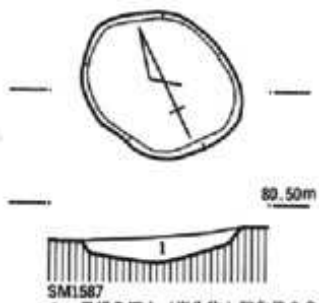
SK1582
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロックでまだらに混入、酸化鉄に富み、炭化物を含む。骨片を粉状で部分的に堆積）
2　にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土を混入、酸化鉄に富む）



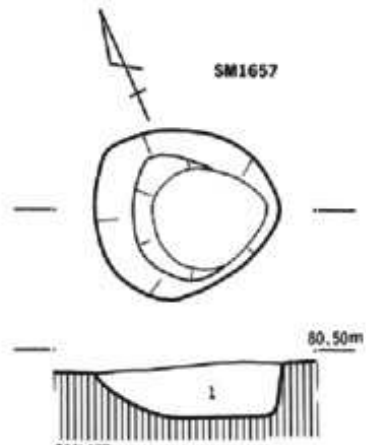
SM1583
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状に混入、酸化鉄に富み、炭化物を含む）
2　暗褐色壌土（黒褐色壌土を帯状に混入、酸化鉄分を含む）



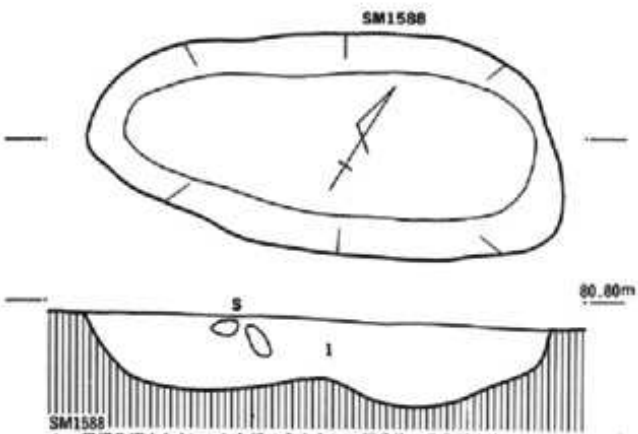
SM1584
1　黒褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土を斑点状に混入、酸化性に富み、炭化物を含む）



SM1587
1　黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を含む）



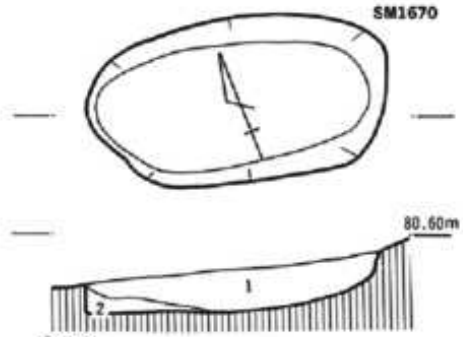
SM1657
1　黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を若干含む）



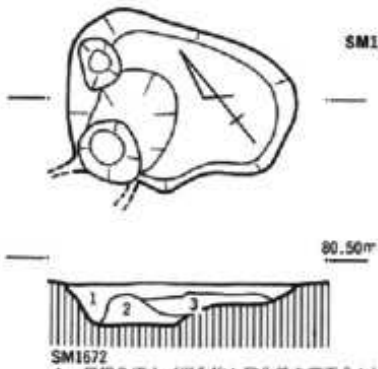
SM1588
1　黒褐色壌土（パミスを上部で多く含む。部分的に酸化鉄を含む。未分解有機物をはさみ、砂利・礫を包含する）

第45図　D区墓壙（5）

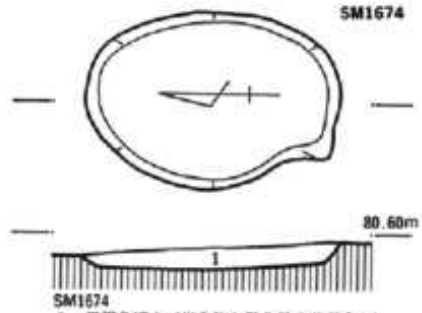
SM1669
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色壌土を粗点状のブロック状に含む）
2 黒褐色壌土（明黄褐色壌土を斑点状のブロック状に含む）



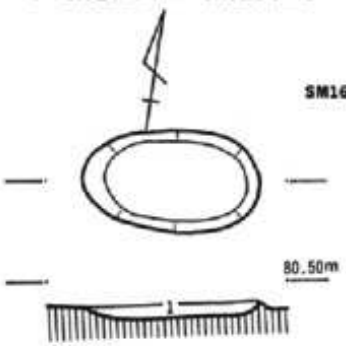
SM1670
1 黒褐色壌土（パミス粒を含む、粘性が強い）
2 褐色砂壌土（黒褐色壌土とにぶい黄褐色砂壌土を混入）



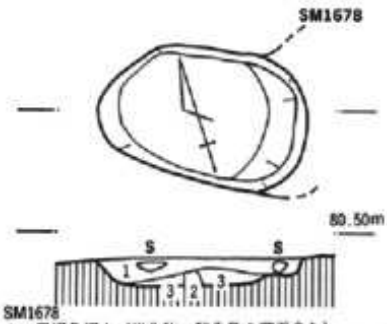
SM1672
1 黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を若干含む）
2 にぶい黄褐色砂壌土（暗褐色壌土を斑状に混入）
3 暗褐色壌土（にぶい黄褐色砂壌土をブロック状に混入）



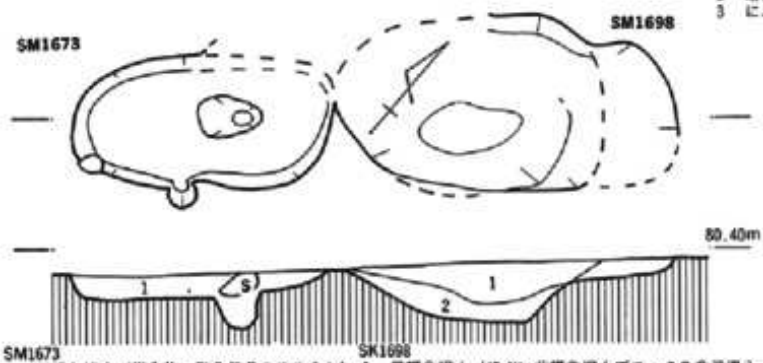
SM1674
1 黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を若干含む）



SM1676
1 黒褐色壌土（炭化物と酸化鉄を若干含む）



SM1678
1 黒褐色壌土（炭化物・酸化鉄を若干含む）
2 暗褐色砂壌土（黒褐色とにぶい黄褐色砂壌土を混入）
3 にぶい黄褐色砂壌土（黒褐色壌土をまだらに混入）



SM1673
1 黒褐色壌土（炭化物・酸化鉄分をやや含む）

SK1698
1 黒褐色壌土（にぶい黄褐色壌土ブロックを多量混入、酸化鉄分に富む）
2 暗褐色壌土（にぶい黄褐色壌土を多量混入）

0 1m

第47図 A区墓壙（7）

表－4　墓壙一覧表

第図番号	遺構番号	検出地区(G)	平面形	規模 (cm) (長径)×(短径)	深さ(cm)	壁の掘込状態	底面の状態	主軸方位	備考
41	SM24	7－16	楕円形	(121)×(70)	26	東側緩やか、西側急傾斜	鍋底状	N-67°-E	石棺、西側未確認
	SM25	6・7－16	楕円形	166×117	18	緩やか	平坦	N-75°-E	石棺
	SM26	6・7－16	不整楕円形	(181)×(6)	26	緩やか	平坦	N-67°-E	石棺、南西側未確認
42	SM27	7－16	楕円形	173× 99	24	緩やか	平坦	N-80°-E	石棺
	SM28	7－16	隅丸方形	162× 86	18	急傾斜	平坦	N-67°-E	石棺
43	SM1401	6－19	不整楕円形	118× 82	22	東側緩やか、他は急傾斜	鍋底状	N-75°-W	
	SM1416	7－20	円形	90× 86	18	東・西側緩やか、他は急傾斜	鍋底状	N-80°-E	
	SM1437	7－19	不整楕円形	155× 87	27	南・西側急傾斜、東・北側緩やか	平坦	N-30°-E	
	SM1467	7－19	楕円形	145× 59	18	西側緩やか、他は急傾斜	凹凸	N-86°-W	
	SM1484	7－16	楕円形	137× 56	34	東側中頃より内傾、他は急傾斜	平坦	N-65°-E	
	SM1537	7－16	不整楕円形	155× 48	31	急傾斜	平坦	N-48°-E	南西側のピットを切る
	SM1538	7－16	楕円形	167× 77	9	急傾斜	平坦	N-7°-E	
	SM1539	7－16	楕円形	133× 52	12	急傾斜	平坦	N-2°-E	
44	SM1540	7－16	楕円形	144× 95	12	急傾斜	平坦	N-18°-E	
	SM1541	7－16	楕円形	172× 79	19	北側緩やか、他は急傾斜	ほぼ平坦	N-18°-W	
	SM1542	7－16	楕円形	138× 73	18	北側緩やか、他は急傾斜	ほぼ平坦	N-8°-W	
	SM1543	7－16	楕円形	106× 43	13	急傾斜	平坦	N-27°-W	
	SM1544	7・8－16	不整楕円形	144× 40	14	急傾斜	平坦	N-3°-W	北側ピットに切られ、土層を切る
	SM1573	7－16	楕円形	144× 6	35	東側階段状、他は急傾斜	平坦	N-66°-E	
	SM1574	7－16	楕円形	153× 63	21	南東側ほぼ垂直、他は急傾斜	平坦	N-34°-E	
	SM1576	8－16	円形	84× 73	12	急傾斜	平坦	N-48°-W	
45	SM1581	8－16	楕円形	139× 54	8	急傾斜	平坦	N-8°-E	
	SM1582	7－16	円形	75× 70	6	急傾斜	平坦	N-21°-E	
	SM1583	7－16	楕円形	89× 72	15	急傾斜	平坦	N-89°-W	東側ピットに切られる 北・東側土層と重複
	SM1584	7－16	楕円形	94× 44	10	急傾斜	平坦	N-87°-W	
	SM1587	7－16	楕円形	79× 72	11	急傾斜	鍋底状	N-65°-W	
	SM1588	8－16	楕円形	236× 11	41	急傾斜	凹凸	N-60°-E	
	SM1657	7－17	不整円形	92× 83	25	南・東側急傾斜、西側緩やか	平坦	N-66°-W	
46	SM1658	7－17	楕円形	131× 8	15	南東・北西側急傾斜、南西・北東側緩やか	平坦	N-83°-E	西側2基のピットに切られる
	SM1659	7－17	楕円形	81× 57	17	急傾斜	平坦	N-61°-W	
	SM1660	7－17	円形	79× 68	18	南側緩やか、他は急傾斜	平坦	N-11°-E	
	SM1661	7－17	不整楕円形	75× 37	19	ほぼ垂直	平坦	N-10°-W	SM1665を切る。南側にピット有
	SM1664	7－17	楕円形	75× 54	5	緩やか	鍋底状	N-82°-W	SK1663に切られ、SK1665を切る
	SM1665	7－16	楕円形	95× 89	26	急傾斜	平坦	N-38°-W	SM1664に切られる
	SM1666	7－16	楕円形	55× 48	10	西側ほぼ垂直、他は緩やか	鍋底状	N-74°-W	
	SM1667	7－16	不整楕円形	157× 91	10	急傾斜	平坦	N-71°-E	
42	SM1668	7－16	隅丸方形	142×(60)	19	急傾斜	平坦	N-63°-E	石棺、西側にピット有
47	SM1669	7－17	不整楕円形	87× 98	21	緩やか	平坦	N-35°-E	東壁にピット有
	SM1670	7－17	楕円形	148× 84	20	西側垂直、他は急傾斜、南東側階をもつ	ほぼ平坦	N-69°-E	
	SM1672	7－17	不整楕円形	114× 81	19	北西急傾斜	平坦	N-50°-W	
	SM1673	7－16	楕円形	13× 63	12	急傾斜	平坦	N-48°-E	北東側1668と重複 ほぼ中央にピット有
	SM1674	7－17	楕円形	127× 89	10	急傾斜	平坦	N-2°-W	
	SM1676	7－16	楕円形	89× 51	6	西側緩やか、他は急傾斜	平坦	N-82°-E	
	SM1678	7－17	楕円形	150× 66	13	急傾斜	平坦	N-59°-W	東側重複
	SM1698	7－16	楕円形	(134)× 88	29	南・西側緩やか、南・北側急傾斜	ほぼ平坦	N-50°-E	南西側SM1673に切られる

IV　出土遺物

出土遺物は縄文土器を中心として、剝片・礫石器、土・石製品、自然遺物、骨片などの種別があり、整理箱にして305箱相当の量がある。概数的内訳は土器が265箱、石器・石製品39箱、その他、自然遺物および炭化物等１箱である。以下では整理がある程度進んだ遺構内出土の土器・石器を中心とした上記種別・器種毎の概要を記すが、包含層出土の資料については一部を除いて割愛した。

１　土　器

例示資料は住居跡・土壙・墓壙に関連する破片資料の拓影図（第48～55図）、器形復元から図化できた土器の実測図（第56～64図）、完形土器の展開拓影図（第65・66図）、およびこれら土器群の集成図（第78図）等である。

なお、破片拓影の第48～55図は床面ないし底面における１次的な遺物の遺存が皆無にちかかった住居跡・土壙等の帰属時期を推測する目的からのものであり、個々の類別作業を通して採録し得たものではない事を断って置く。従って、遺構（柱穴等出土地点）毎での様相として認識し以下に概観する。

ＳＴ１住居跡出土土器（第48図1～10）

１・２・５・８・９・10は住居中央の西側寄りに位置する円形の土壙覆土内から出土した一群で、沈線が波状口縁に沿って巡る（２）、３本の沈線が単位となって文様を描出し、内部にＲＬ単節斜縄文が充填される（１・３）、１本の沈線で描出し、やや幅広の磨消縄文の施される（５）、肥厚する口縁が波状し０段多条のＬＲが縦位回転施文される（９）、円盤状土製品（８）、小形土器の底部（10）等が認められる。３・４は周溝状に巡る壁柱穴が途切れる辺りの東側中央部に位置する柱穴（ＥＰ370）内から出土したもので、波状口縁・３本沈線による文様の描出と半裁竹管による円形刺突文（３）、沈線区画内を磨消す（４）等が観察される。６・７の深鉢体部破片は、主柱の一つＥＰ364の覆土から出土したもので、粗い１本沈線よる「D」字形の区画が磨消の内部に弧を描いて収まる特徴を持つ（７）。これは本遺跡における縄文後期土器群の中では古相を示しており注目される。地文の縄文はＲＬ横位回転である。

ＳＴ２住居跡出土土器（第48図11～16）

住居跡に直接関連する土器は、出入口の柱穴（ＥＰ1057）から出土した（14～16）、同じく柱穴（ＥＰ1069）から出土の（12）、幅広の周溝内部から出土した（13）等がある。11はＳＴ２住居と重複する土壙（ＳＫ356）から出土したもので、遺構の切り合いではＳＴ２住居跡が切られている。これらは地文縄文のみのもの（12・14・15）、口縁に沿って沈線が多

数条で巡る（11）、３本の沈線で文様を描出する（13）等に区分できる。

また、地文縄文の14は頸部を磨消して無文帯とする粗製の深鉢形土器で、地文は直前段反撚のＲＬＬｒである。なお、16の底部資料には明瞭な編物圧痕が残り、タテは「３本超え、３本潜り、２本送り」と観察される。

ＳＴ３住居跡出土土器（第48図17・18）

例示資料は小柱穴（ＥＰ1045）から出土した小形の壺形土器体部と深鉢形土器の体部である。共に３本の沈線が単位となって文様の描かれるもので、区画内に細かなＲＬ縄文が充填される。17には沈線の起点ないし終点等に円形の刺突文が付加されている（17）。

ＳＴ４住居跡出土土器（第49図１）

遺物が10点前後の小さな土器片に限られ、内容的に不明確である。例示資料は覆土内出土のもので、頸部の隆帯に沿って上下に列点状の刺突文や平行沈線文が施文される。地文はこの部分に限れば認められず、無文地である。その他、図化し得なかったがＲＬ縄文地の上から３条単位の沈線を曲線的に巡らす小破片１点が認められる。

ＳＴ５住居跡出土土器（第49図２～13）

この住居は壁・床面が遺存せず、かろうじて壁柱穴の配列からプランの捉えられたものである。そのため、住居に伴う明確な遺物は殆ど無く、例示資料の大半が壁柱穴内およびそのプラン内部に位置する土壙等から出土したものに限られている。文様的には３条の沈線を基本として描出され、内部に縄文（ＲＬ）を充填施文する４～６・12と類似のもの（７・13）、これらとは逆に多数条の平行沈線間を磨消して無文とし、外を縄文地とする３（ＲＬＲ）・11（ＬＲ）等が認められる。また、２は住居と重複するＳＫ614土壙から出土したもので、無文地を深く掘り込む平行沈線によってレリーフ的な文様が描き出されており、これまで見た他のものとは大分異なった雰囲気を持つ。８～10は壁柱穴の途切れる住居中央の東側に位置する土壙（ＳＫ654）から出土した粗製の深鉢で、地文のＲＬをくびれる頸部で磨消して無文帯とする（８）、口縁端部を遺してＲＬを多段横位で施文する（10）、底部付近の縄文を磨消して無文帯を作り出す（９）等の特徴が観察される。

ＳＴ６・７住居跡出土土器（第49図14～23）

ＳＴ６住居跡の提示資料はＳＴ５住居跡同様、周溝状に連続する壁柱穴内から出土したものである。３本の沈線で文様を描く（17～19）、口縁部の沈線区画内に刺突文を充填する（16）、隆帯が蛸状に隆起し、内部に連続するヘラ状工具の刺突文を施す（14）、４条の太い沈線で菱形様の構図を描き、その内部にＬＲ縄文を充填する（15）等が認められる。

14は資料的に僅少で、時期的に他のものよりは先行しよう。21はＬＲＲ１を縦位回転施文するもので、末端を結んだ綾繰文が併走している。22は内面に刺突文・数条の明確な平

行する沈線文が巡る小形の浅鉢で、外面はケズリ・ナデ調整を加えただけの無文地となる。

なお、20は深鉢の底部資料で、撚紐を絡めた籠様の網代圧痕文が観察される。ＳＴ７住居跡では壁柱穴ないし、プラン内の小柱穴や小土壙等覆土から約13点が出土しただけでありこの内、太めの沈線が特徴的で磨消縄文を伴う（23）の小片１点を掲載できたに止まる。

ＳＴ８～11住居跡出土土器（第50図１～21）

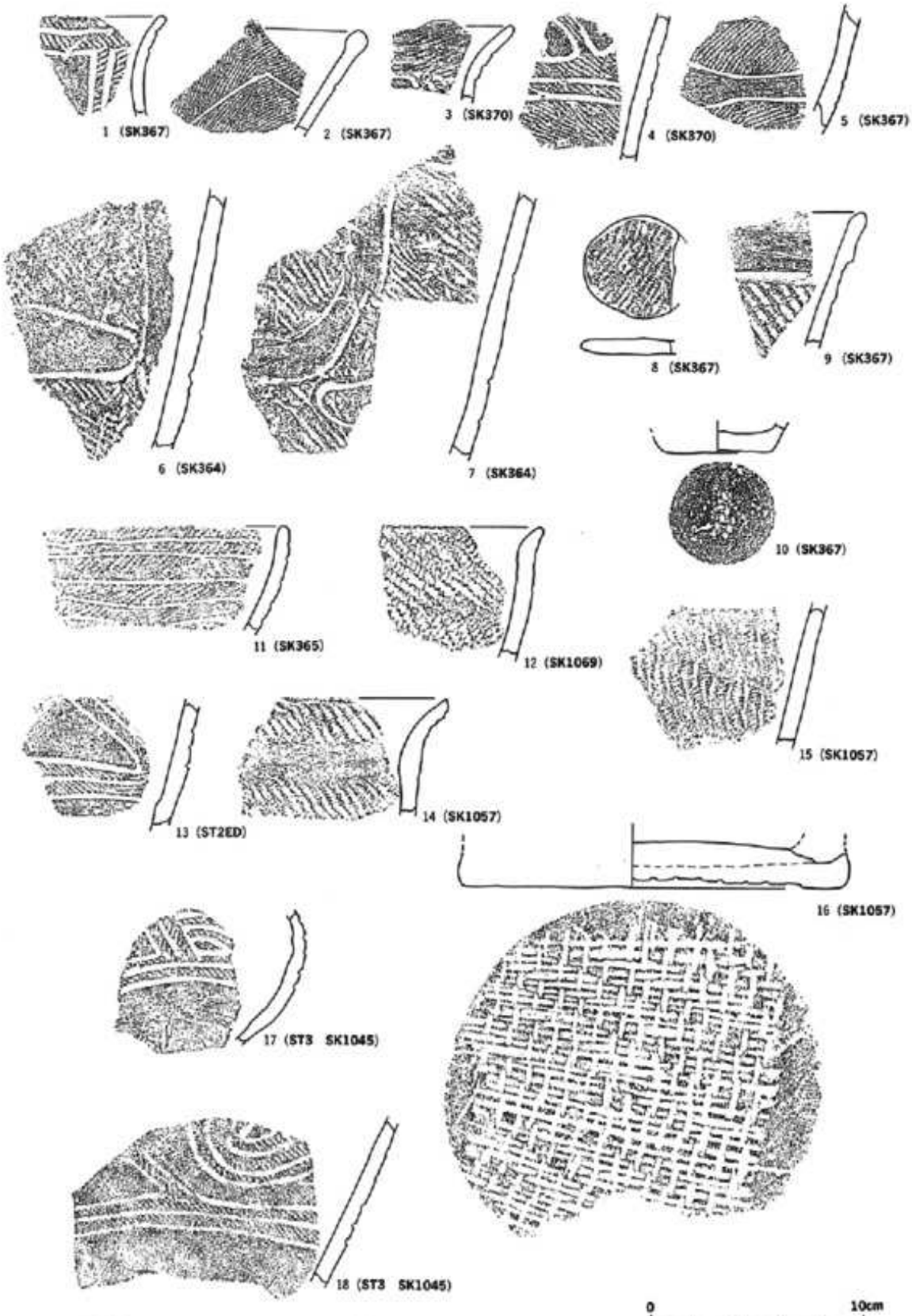
住居跡毎の内訳では１～14がＳＴ８住居跡、15・16がＳＴ９住居跡、17・18がＳＴ10住居跡、19～21がＳＴ11住居跡に各々かかわるものである。１～５、７・10・16等はＳＴ６住居跡でも主体を占めた３本単位の沈線文・沈線間斜縄文を持つ類で、量的なまとまりを見る。その他では少数例ながら「クランク」状に沈線が連結し、その上から０段多条のＬＲ縄文を横位に施す(18)、帯条の磨消し部を持つ小形鉢の口縁部(６)、無文地で口縁部に縦の橋梁状把手が付き小円孔を有する(15)、花弁状に大きく開く突起を持った深鉢の体部片で磨消縄文を持つ（20)、無文地を粗い沈線で区画する（11)、粗製深鉢の口縁部(17･19･21)、同体部(12･13)等がある。なお、13はクシ状工具による平行沈線が地文となる。

土壙出土の土器（第51～54図）

土器を多量に含む土壙は概ね大・中規模のフラスコ状土壙等である。幾つか代表例を上げればＳＫ34・59・68・114・119・134・143・215・237・241・258・309・310・311・347・356・363・400・412・416・445・500・619・654・807・1140等が指摘できる。以下ではこれら土壙群から抽出し得た一般的あるいは特徴的な土器群について類別的に概観して行く。量的に主体を占めるものは、住居跡での様相と同様に３本沈線で横「Ｓ」字様や入組文風の曲線的な文様構図を持つもの、あるいは直線的で幾何学的な構図を描き、その内部に横位施文の単節縄文を充填する一群（第51図４・16・18、第52図１・２・４・５・６・９・11・13・15・17～19、第53図２～６・11・13・15・20・21、第54図１～５・８・11）等である。これらの大半は第56・57図、および第58図の一部実測図に示した類に共通し、器種的には大小の深鉢を中心として若干の長頸壷等で構成される。

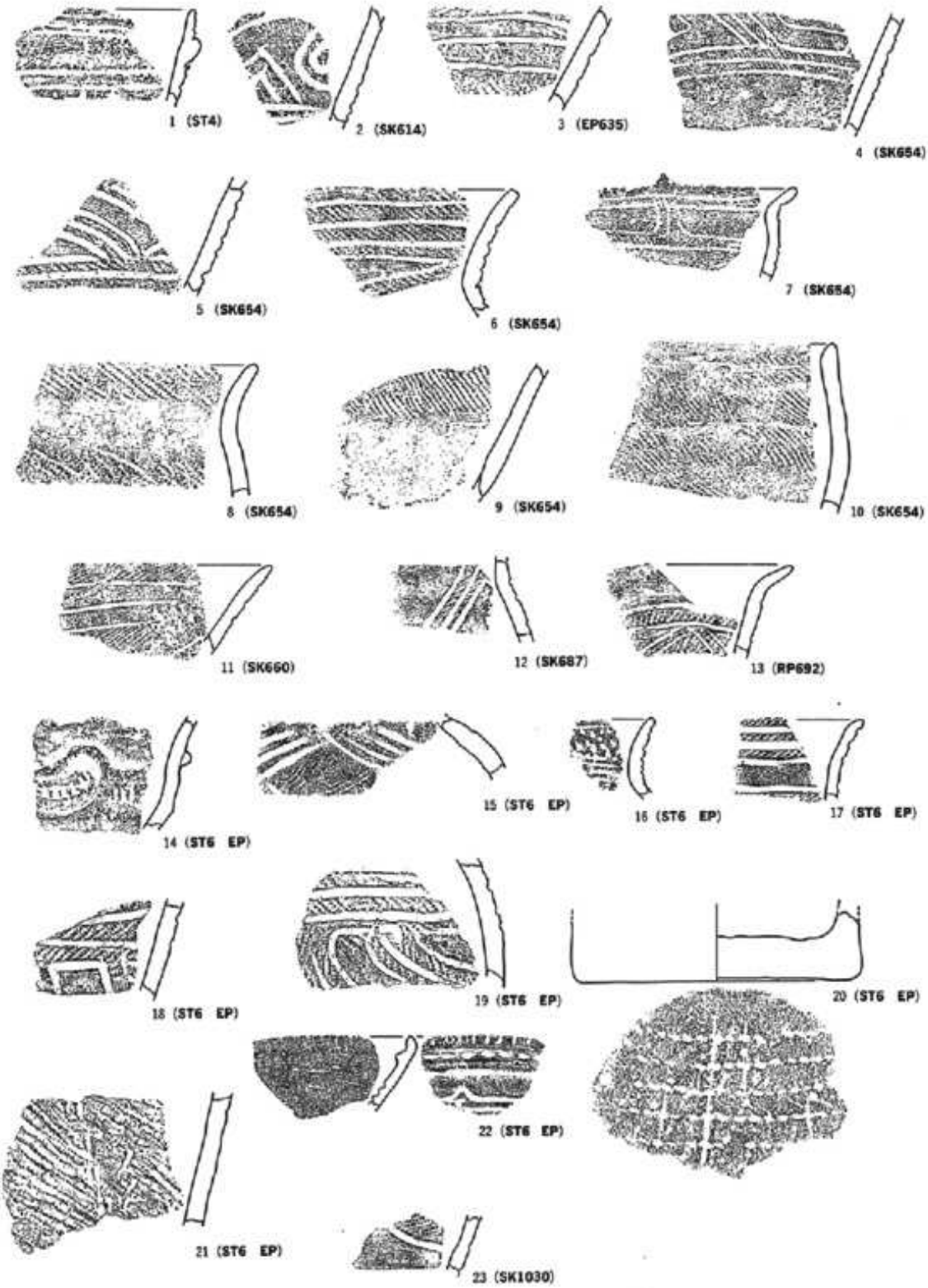
次に、第60図６・７・９で代表される土器群は十腰内Ⅱ式（Ⅱ群ｂ類）に相当すると考えられる一群（第51図５・８・９、第52図10・第53図８、第54図６・12）で、量的には前記の類に較べてかなり少ないようである。これらの特徴は大形で花弁状に開く口縁部形態やこれに取り付く装飾把手、台付形態や小さくすぼむ体部・底部等から成る不均衡な器形、および曲線的な磨消縄文とその区画線の内側に沿う点列の刺突文等文様描出技法に求められる。また、これと関連して貝鳥貝塚の報文で第Ⅲ群第４類中に含めて考えられた横方向からの連続刺突文を有する類（第53図14、第54図７他）他も若干ながら認められた。

その他では沈線区画内に原体の施文方向を変えて充填される羽状縄文が特徴的な類（第



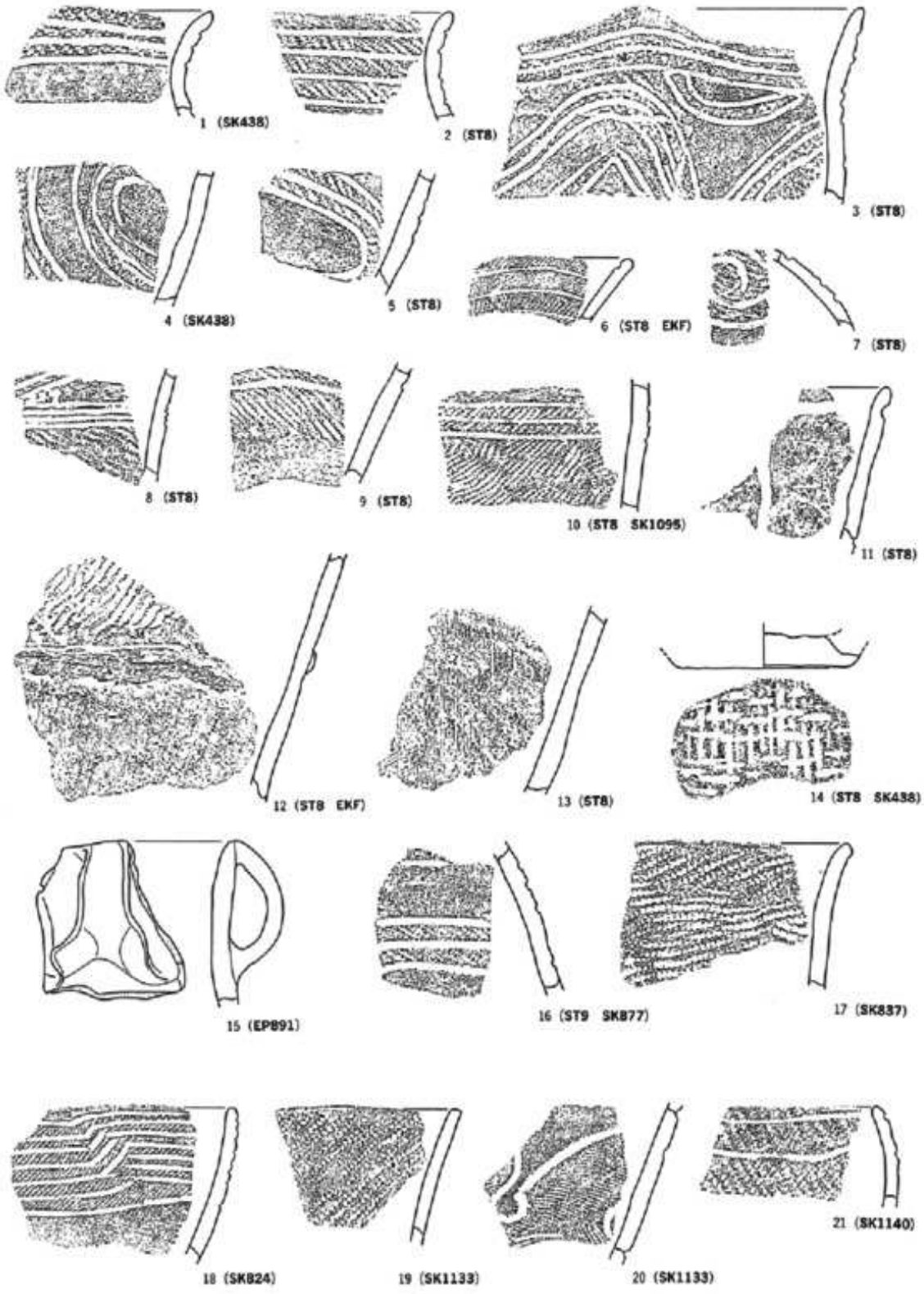
1～10：ST1，11～16：ST2，17・18：ST3，

第48図　土器拓影図（1）



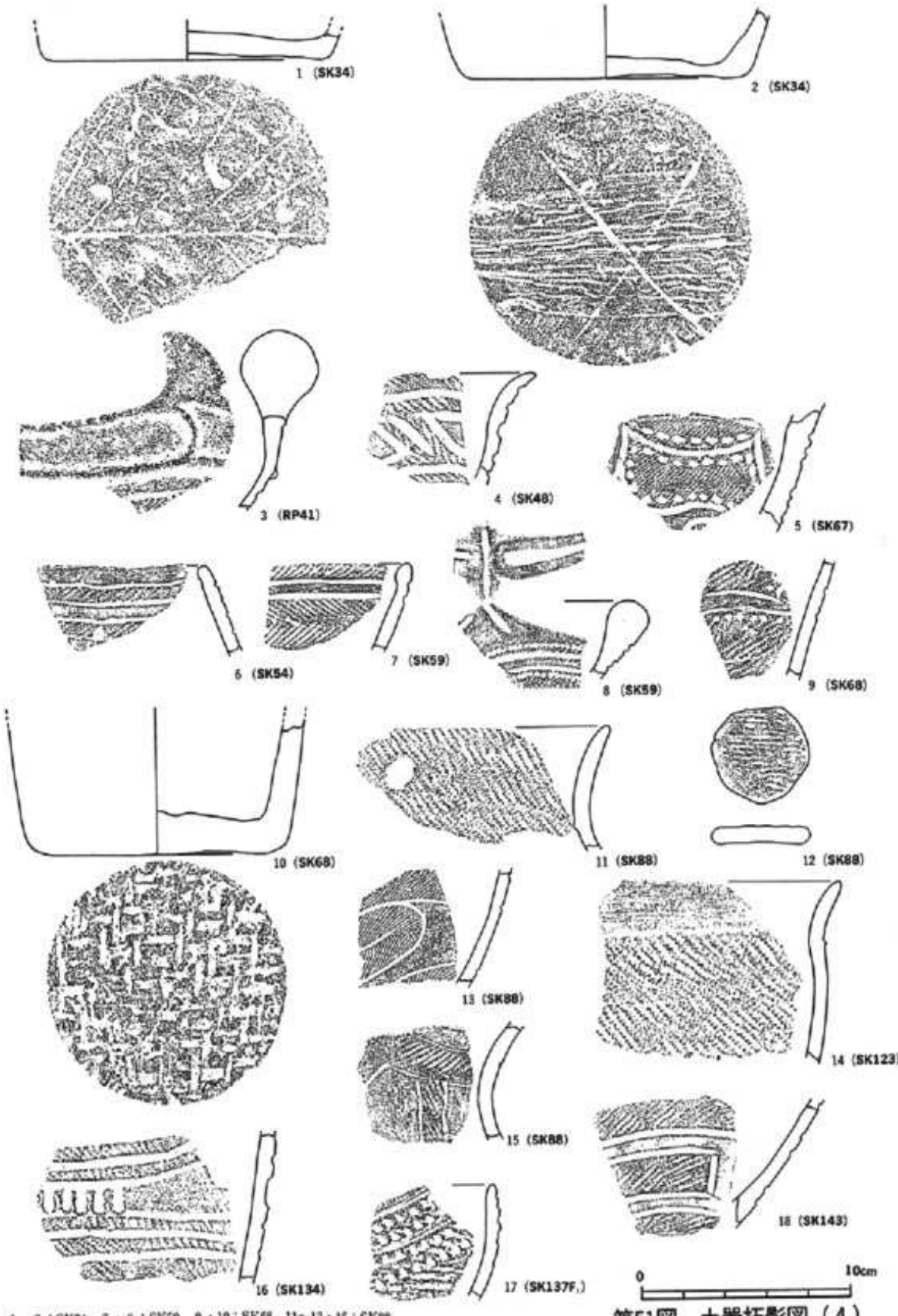
1：ST4，2～13：ST5，14～22：ST6，

第49図　土器拓影図（2）



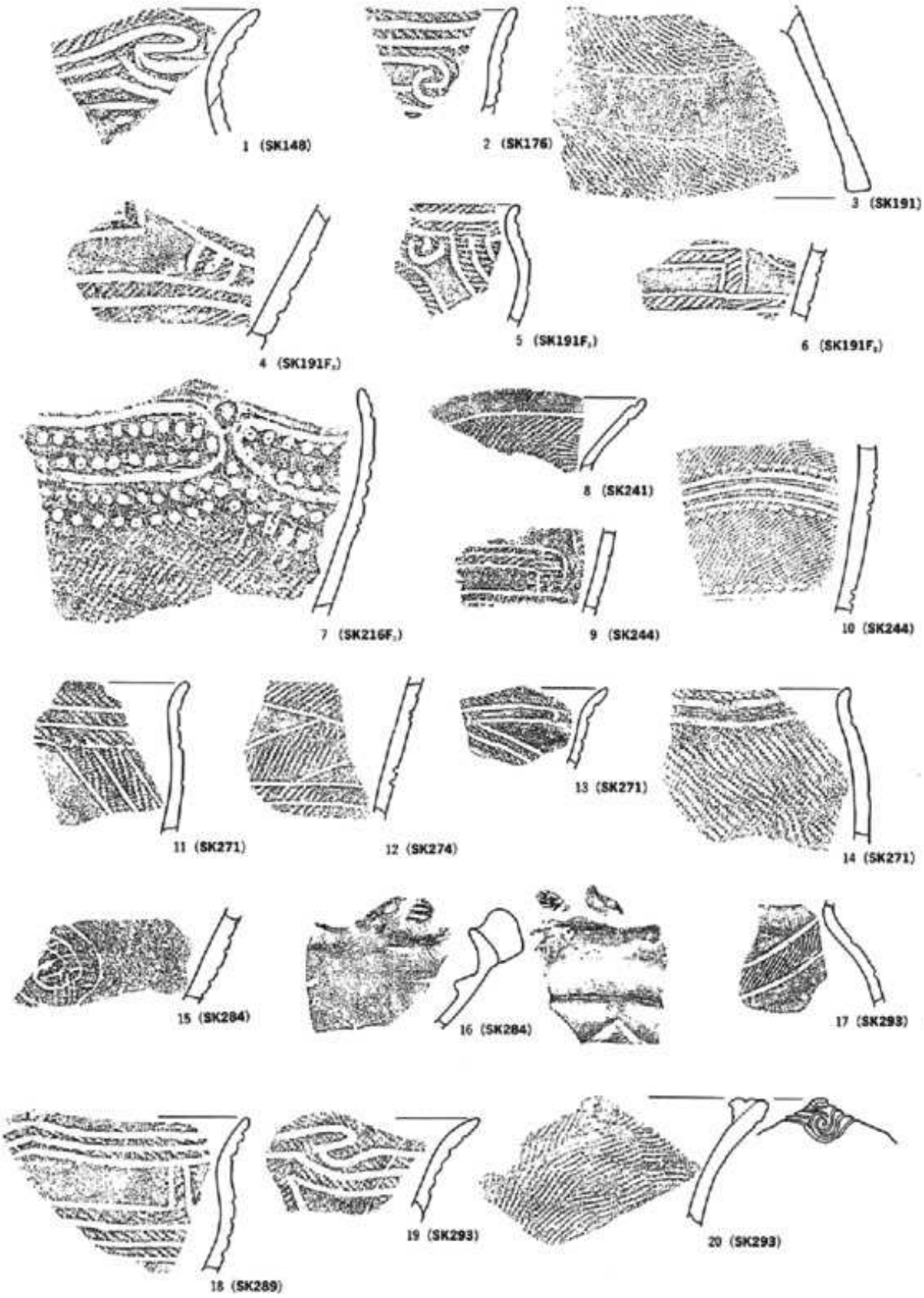
1～14：ST8，15・16：ST9，17・18：ST10，19～21：ST11.

第50図　土器拓影図（3）



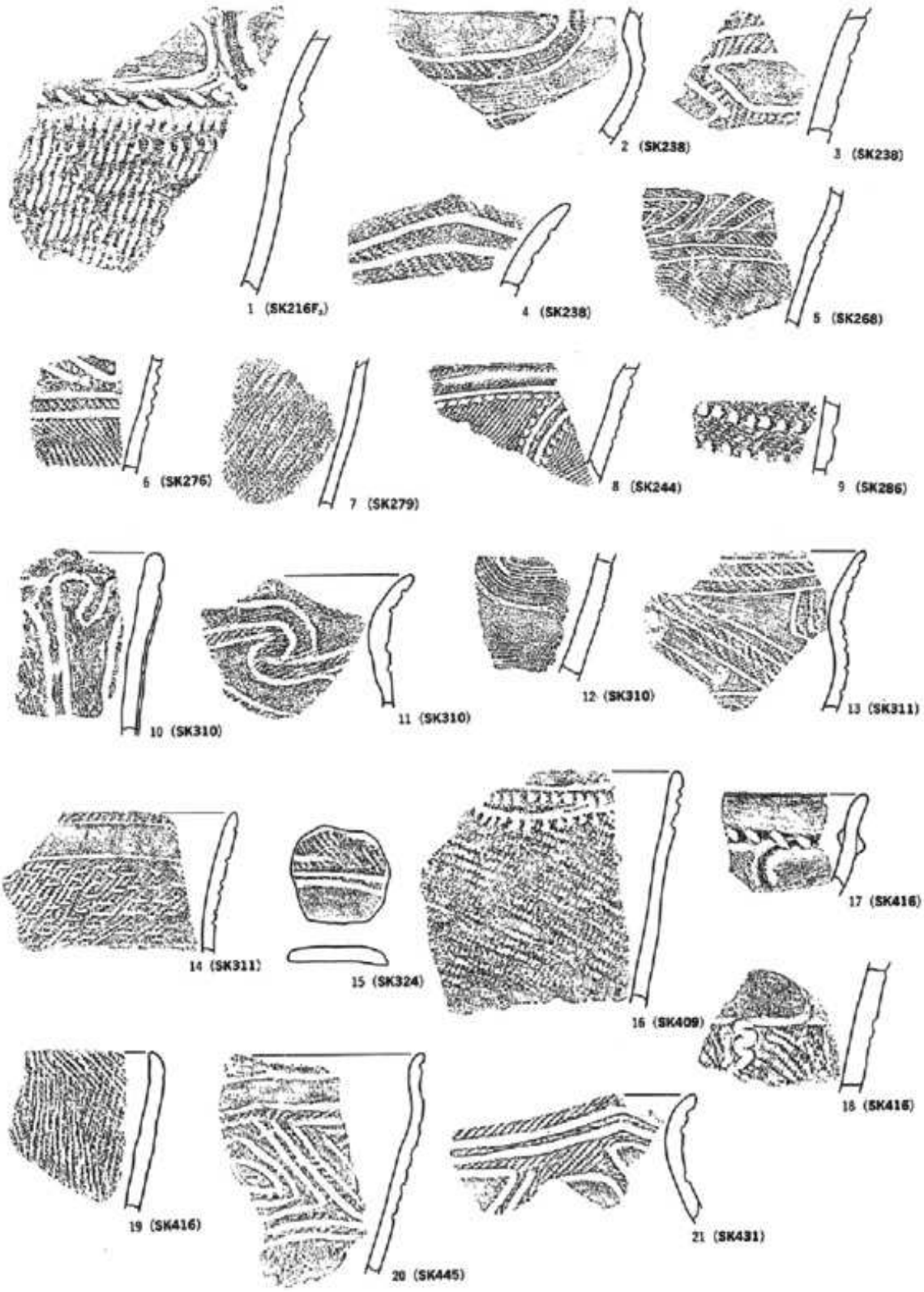
1・2：SK34，7・8：SK59，9・10：SK68，11～13・15：SK88，

第51図　土器拓影図（4）



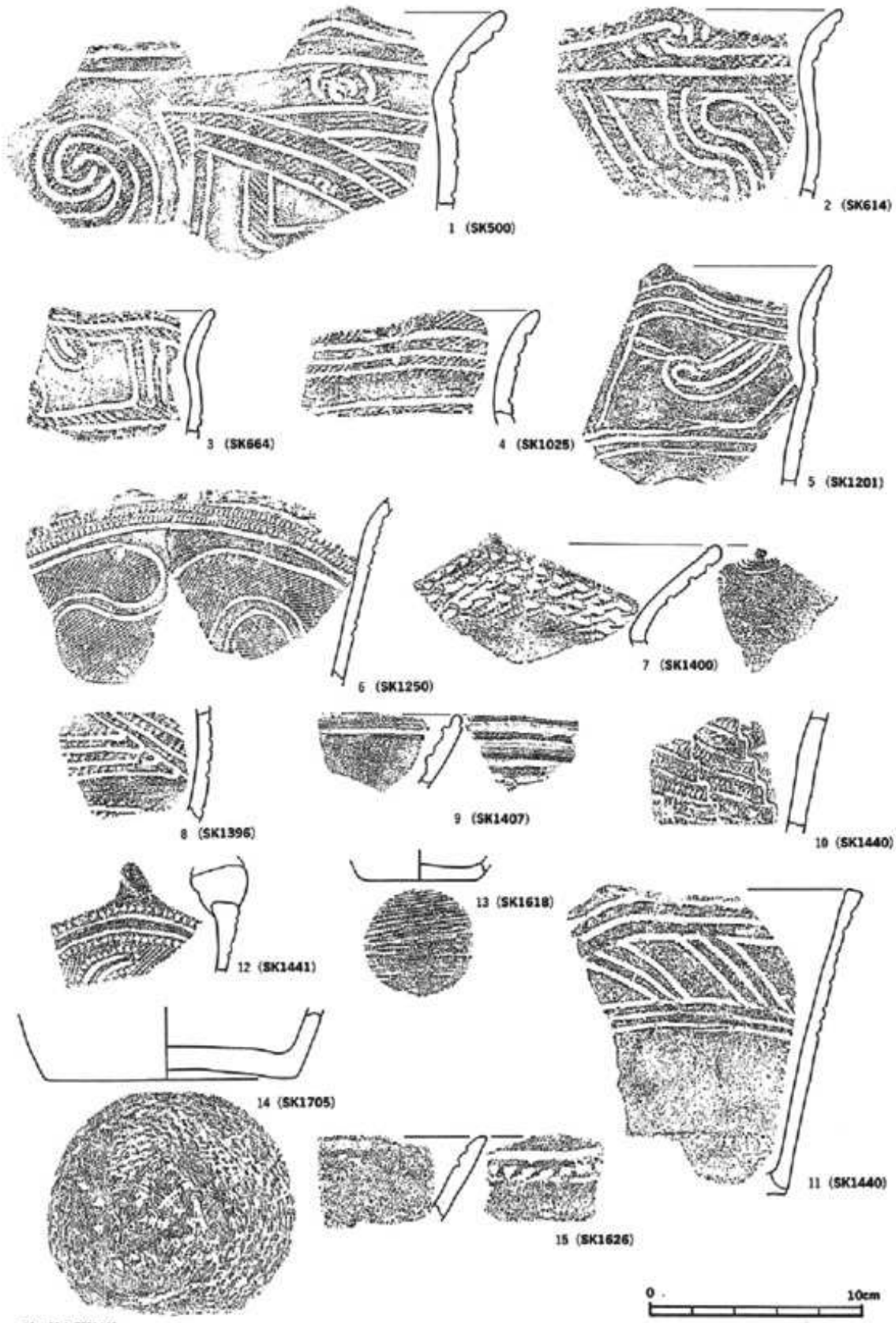
4～6：SK191, 9・10：SK244, 11・13・14：SK271, 15・16：SK284, 17・19・20：SK292.

第52図　土器拓影図（5）



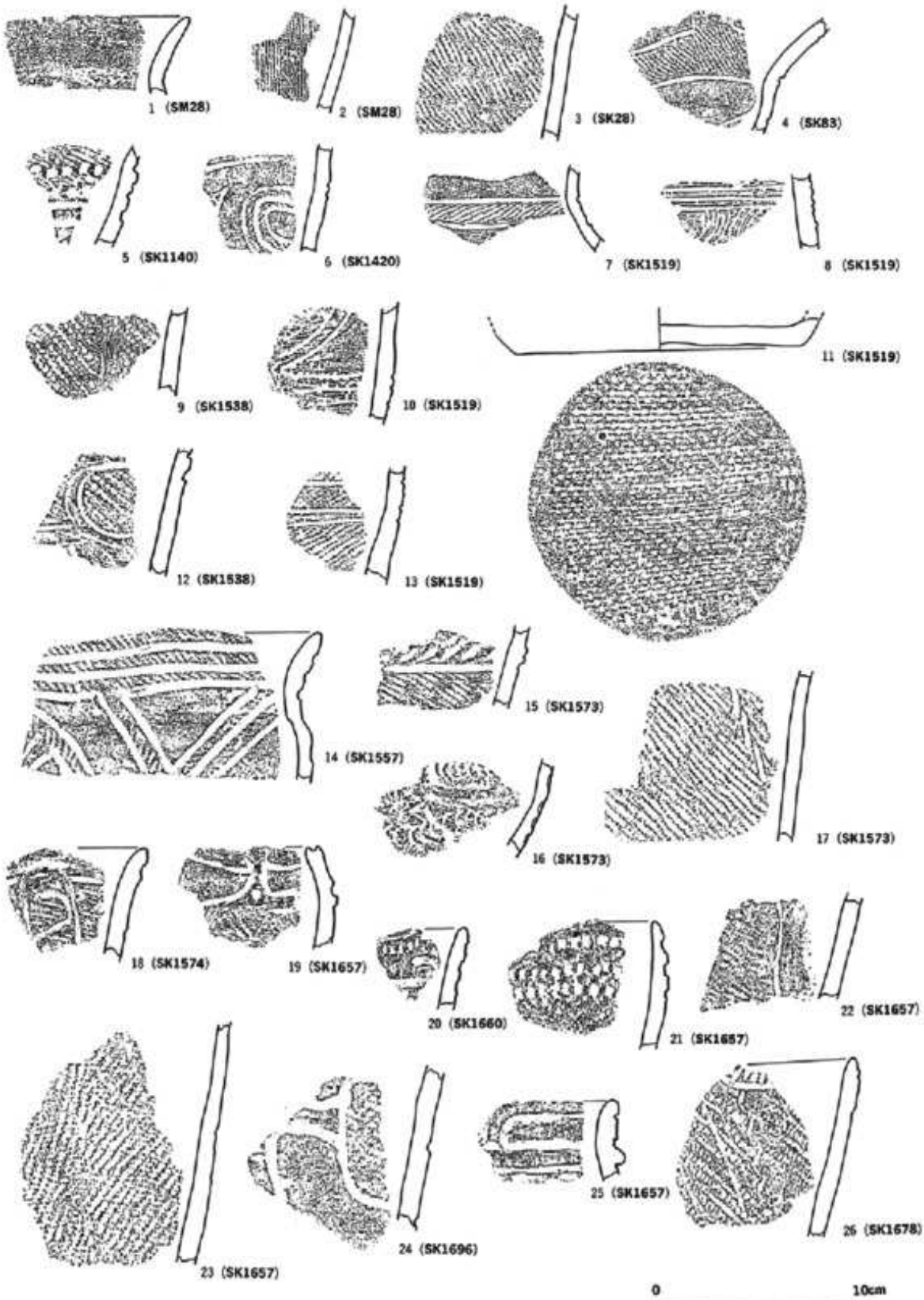
2～4：SK238，10～12：SK310，13・14：SK311，17～19：SK416，

第53図　土器拓影図（6）



10・11：SK1440.

第54図　土器拓影図（7）



1・2：SM28，7・8・10・11・13：SK1519，9・12：SK1538
15～17：SK1573，21～23・15：SK1657，

第55図　土器拓影図（8）

51図7）や、浅鉢内面の上部に沈線や隆線施文を見る類（第52図16、第54図9・15）の在り方から堀之内2式～加曾利B1式に相当する土器群が指摘できる。一方、これらとは逆に隆線や円形突起文（第51図3）、隆線に刻目を伴う類（第53図1・17）、頸部から「S」字を描いて垂下する第53図18他からは後期前葉に遡る土器群の存在も指摘できるようである。しかし、いずれも部分的・断片的な資料のため内容の詳細は明らかでない。

墓壙出土の土器（第55図）

D区南西部分で集中的に検出された墓壙群から出土した土器について概観する。但し、副葬品と考えられる遺物は皆無であり、覆土も殆ど人為的な単純層からなっていたなどから、ここに取り上げた大半は、埋め戻された時点で紛れ込んだものと理解される。

これら土器群の様相はこれまでに見た住居や土壙でのそれに大差なく、3本沈線で描かれる横「S」字基調の横位連結文と磨消縄文等に代表される十腰内I式系や大湯II式（秋元1986）などに並行する後期中葉の土器群が大半を占めると判断できた。しかし、一部の墓壙（SM1573・1657等）からはやや古手の一群が出土しており、墓壙構築の時期幅を示すかとも推測させる。例えば第55図15以下のものなどであり、ST1住居例で指摘（第48図6・7）した沈線区画内を磨消し、その内部で沈線が「X」字状に収束する（24）や、隆線区画内に半裁竹管による爪形文を連続的に充填する(16)、同じく波状口縁に沿って連続する爪形文を3段に亙って巡らす(21)、波状口縁の頂きを起点として弧状に垂下させた沈線区画内に蕨手状の沈線が配される（18）等は後期初頭から前葉の様相と看取される。すなわち、南境式の前半期に位置付けられる仙台市六反田遺跡のII群に相当する一群（16・19・24）や、三十稲場式（21）、あるいは宮戸Ib式（18）等との関連が辿れる資料と言える。

完形土器

これまでは各遺構にかかわる主として破片資料について概観したが、以下に器形の復元できた謂所精製や粗製の完形品等について器種毎に類別して説明する。なお、これらの出土地点は前章の遺構図中にも示したように主に土壙からの単発、まとまったとしてもせいぜい2～3個体程度で検出されたもの、および、A区・D区の中央部南よりに位置する旧河道中に形成された遺物包含層中からのものであったことを付記しておく。

深鉢形土器（第56・57図、第62図4・6）

深鉢は体部上半から口縁部にかけて文様帯の施される精製土器の一群と、主として縄文地文のみのもの、あるいは縄文地文と原体の側面圧痕を有すもの、および無文地の謂所粗製のものとに大別できる。精製のものでは、破片資料においても主体を占めた沈線と磨消縄文で描かれる曲線的な構図を有する以下に述べる1類が大半で、これ以外の類型は時期的にやや遡ると考えられた若干例に限られるようである。

Ⅰ類は法量から大（第57図3）・中（第56図2）・小（第57図2）のおよそ三種に区分できるが、形態的には基本形と理解できる第57図5に代表されるほぼ一種とみなされる。但し、器高の長短や体部上半の膨らみ加減、あるいは体部下半の外傾・外反・内湾等から生じる幾つかの亜種が認められ、強いて細別すれば体部内反のまま立ち上がる第56図2や足長で頸部下の狭い範囲が膨らむ第57図1等は区別すべきと考えられる。従って、以下では第57図5に代表できる体部下半外傾か外反で体部上半部キャリパー、奇数単位（5・7）の小波状口縁が短く外傾する一群をⅠa類、体部上下半が一体で内湾気味に立ち上がる第56図2等をⅠb類、上記第57図1等をⅠc類と分類して記述して行く。

Ⅰa類（第56図1・3・4、第57図2～4）

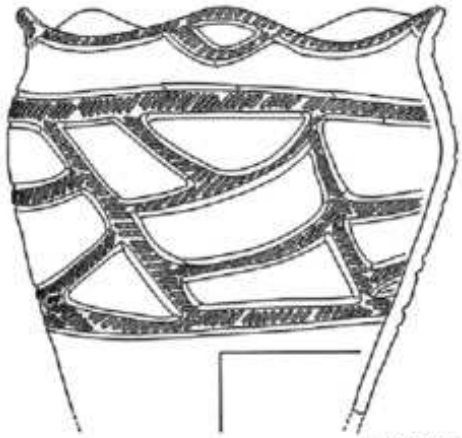
文様帯の構成から、A：口縁部文様帯と体部文様帯の二帯から成る一群（第56図1、第57図3・4）、B：口縁部文様帯が縮小・簡略化されて体部文様帯に組み込まれてしまう一群（第56図3・4、第57図2・5）とに大別できる。Aでは頸部の無文帯が上下の文様帯を区分する第56図1や、口縁部の幅の狭い文様帯中にも渦巻きや斜行するクランク様の意匠が配置される第57図3等のほか、第57図4のようなさらに簡略の方向にあると考えられる類型とが認められる。一方、Bでは口縁部に沿って巡る1ないし2条の沈線による細長の帯縄文ほかは口縁部文様帯と言えるものは無く、全体に体部上半の文様帯が迫り上がった様相と受け止められる。内部の文様意匠は斜行文、クランク状文、入組状文、波状文、弧文、右上がりの横S字状文等の連続文様（第65図）で成っており、口縁部の波状単位同様奇数単位が大半である。また、これら文様を構成する沈線・充填縄文からなる帯縄文とその内外の無文（磨消部分）以外の要素では文様意匠の起点や終点に施される竹管や棒状工具による刺突文（第56図3、第57図2）を知るのみであった。

Ⅰb類（第56図2）

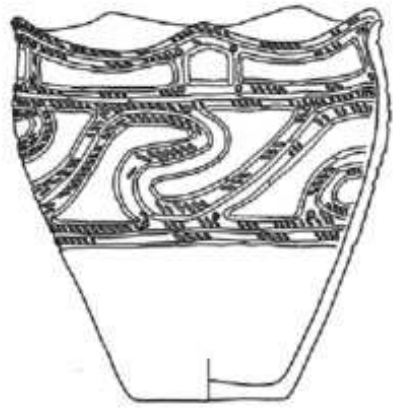
文様帯の構成はⅠa類のAに共通し、口縁部文様帯・体部文様帯の二帯より成る。口縁部文様帯は波頂下の竹管文を四隅に配した小方形区画とその左右の長方形区画から構成され各5単位で周巡する。また体部文様帯は上下の区画線に接続しながら5単位で連続する波状文が描き出されており、沈線間に充填される縄文は節の細かなRLである。全体に少ない類型と見え量的まとまりを認めないが、構図的にはB類のモチーフに共通である。

Ⅰc類（第57図1）

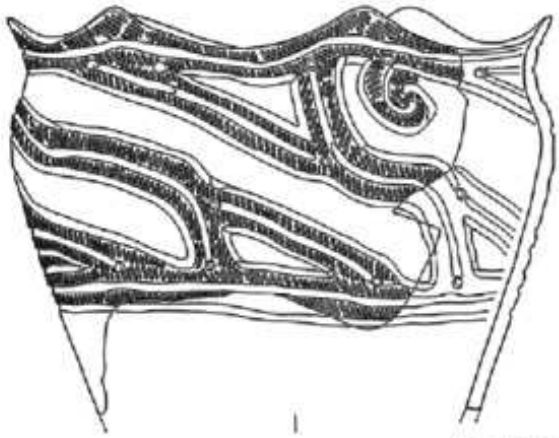
器形的に大型の類型で先に述べた形態的特徴の他、体部下半にも縄文（LRr）が施される特徴を持つ。この縄文は他の多くが磨消・研磨により無文地とされるのに較べて異質であり、注意すべき表現方と思われた。体部上半の文様は単位不明ながら弧文が上下に相対する構図で、中間に相互を連結する入組文風の渦巻沈線が配されている。



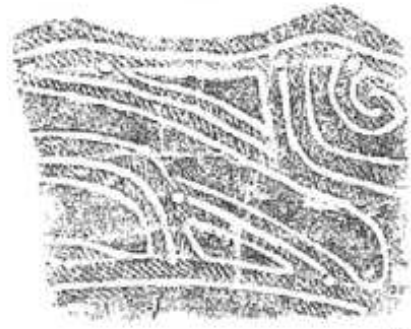
1 (SK1572 RP51a)



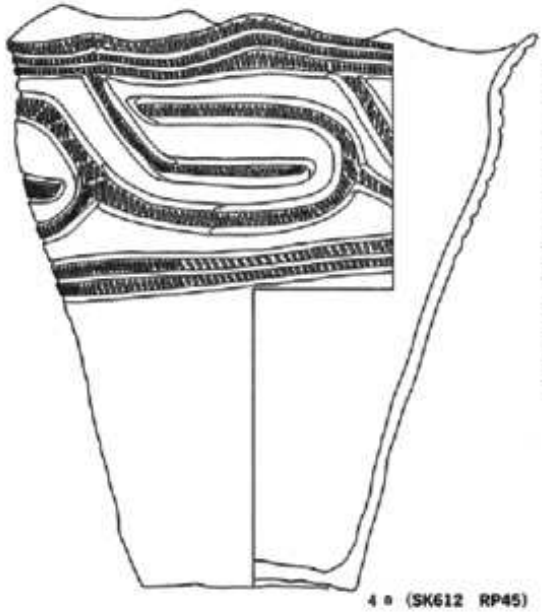
2 (SK1572 RP51b)



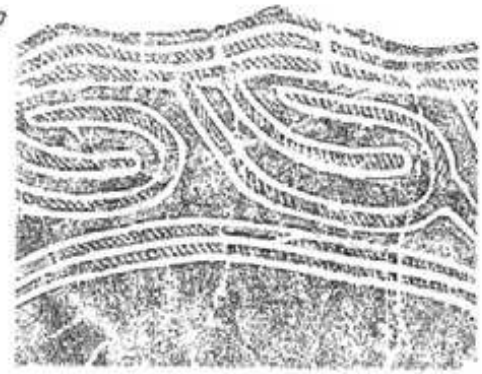
3 a (3－14Ⅲ)



3 b

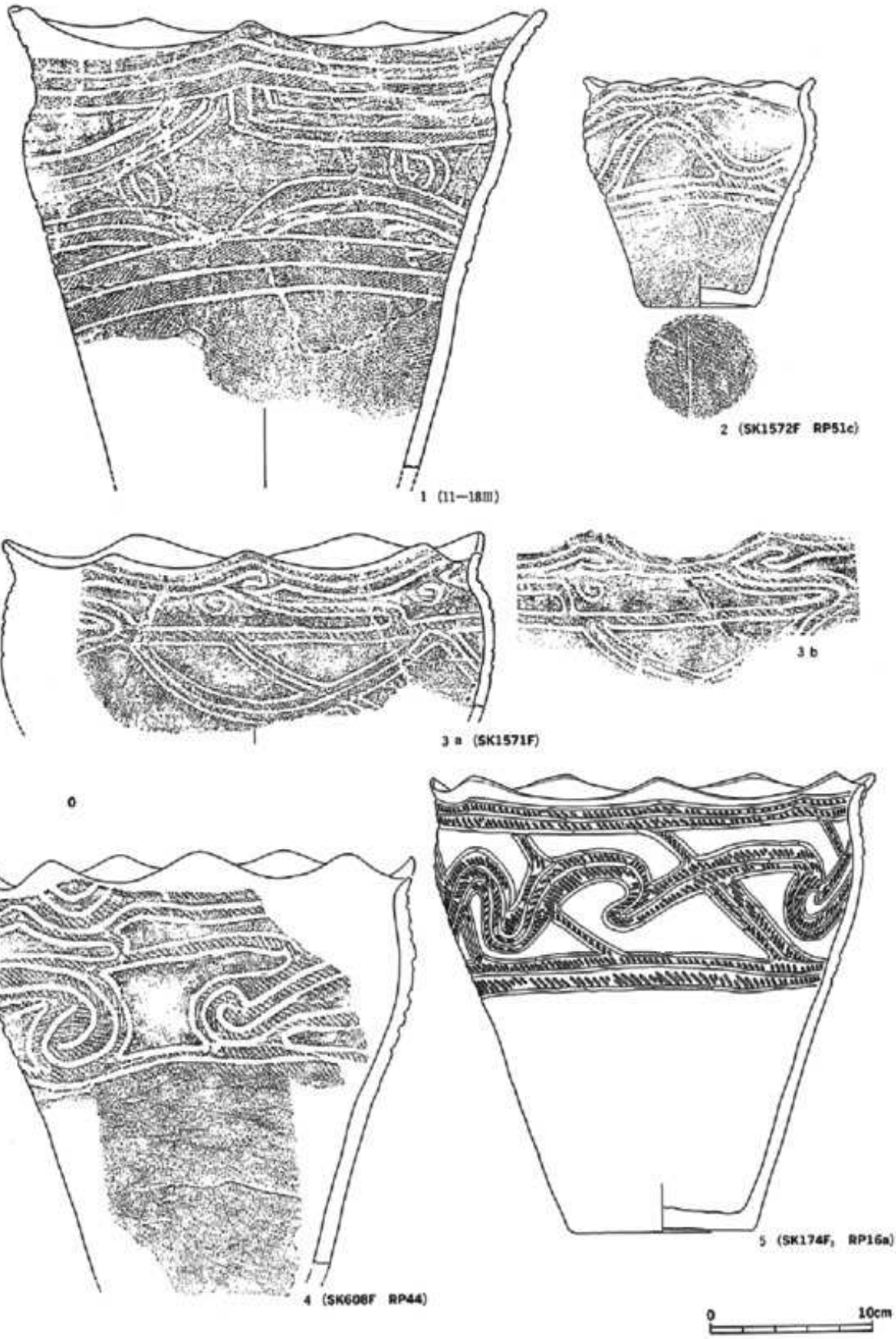


4 a (SK612 RP45)



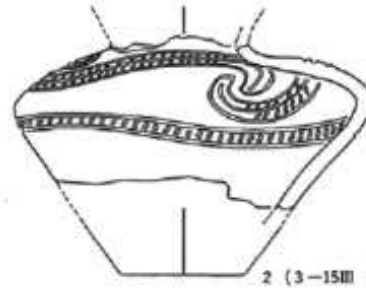
0 10cm

第56図　土器実測図（1）


1 (11—18III)
2 (SK1572F RP51c)
3 a (SK1571F)
3 b
0
4 (SK608F RP44)
5 (SK174F, RP16a)
0
10cm

第57図　土器実測図（2）

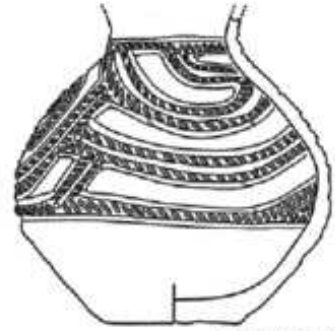
1 (3－17Ⅲ)



2 (3－15Ⅲ RP30)

3 (SK34F RP18)

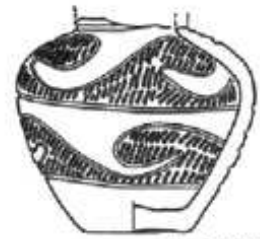
4 (SK115F RP21)



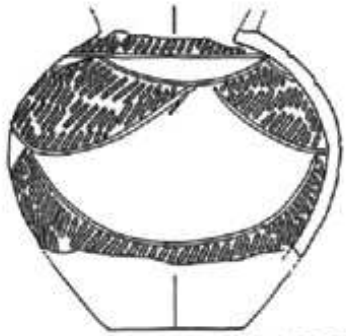
5 (SK907F RP60)

6 (10－18Ⅲ RP54)

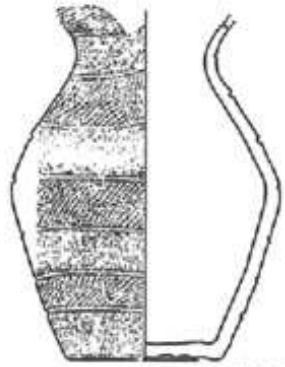
7 (SK1051F RP38)



8 (SK305F RP14)



9 (9－18Ⅲ RP49)

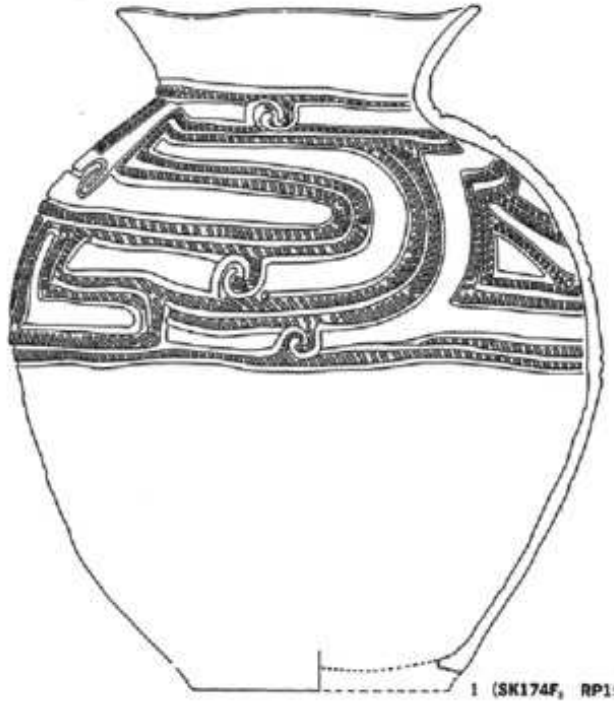


10 (29トレⅢ)

11 (2－16Ⅲ RP56)

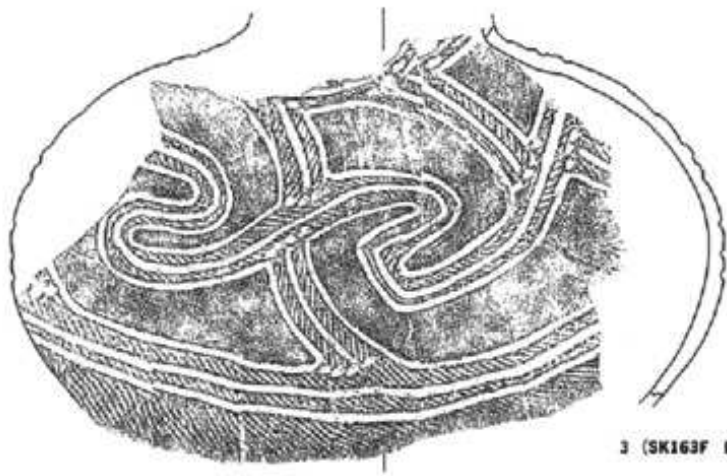
0 10cm

第58図　土器実測図（3）



1 (SK174F, RP15)

2 (8—11III RP11)



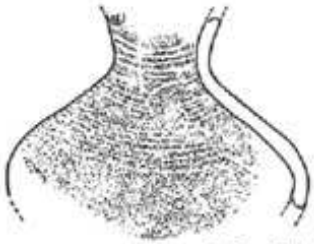
3 (SK163F RP13)

0 10cm

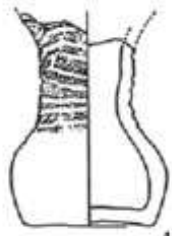
第59図　土器実測図（4）

1 (2－17Ⅲ RP26)

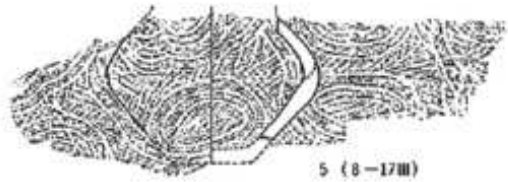
2 (8～9－17Ⅲ)



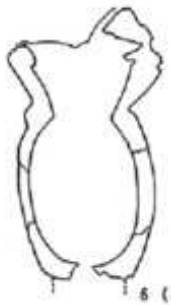
3 (3－15Ⅲ)



4 (9－18Ⅲ)

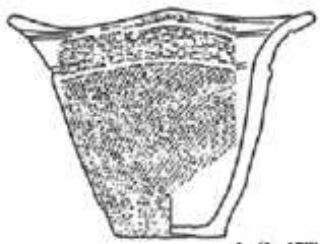


5 (8－17Ⅲ)

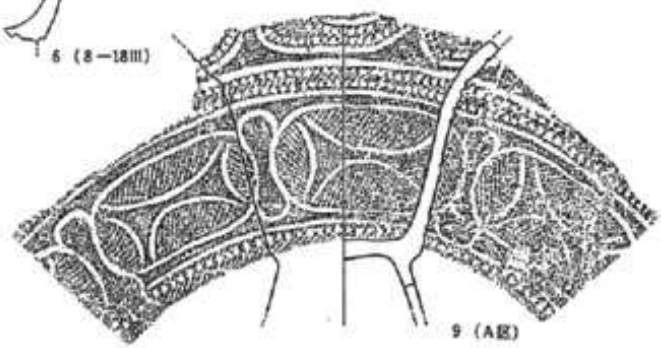


6 (8－18Ⅲ)

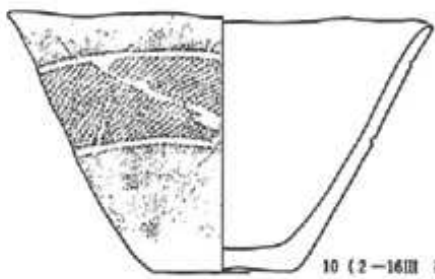
7 (2－16Ⅲ)



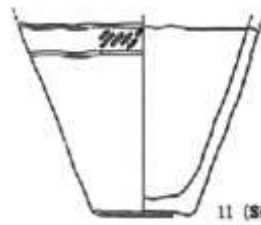
8 (2－17Ⅲ RP24)



9 (A区)



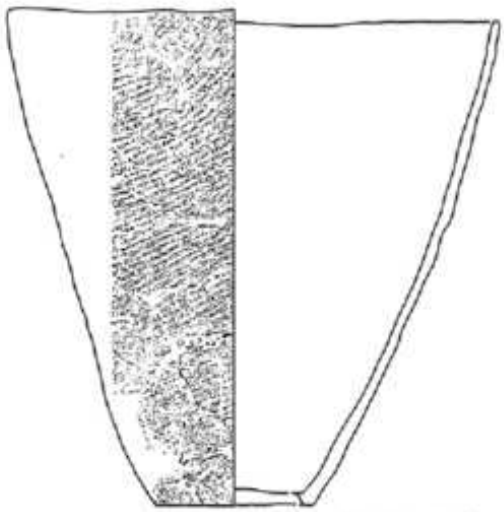
10 (2－16Ⅲ RP24)



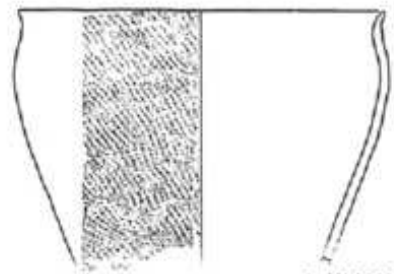
11 (SK416F RP41)

0 10cm

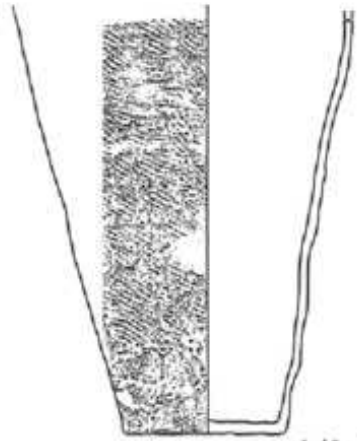
第60図　土器実測図（5）



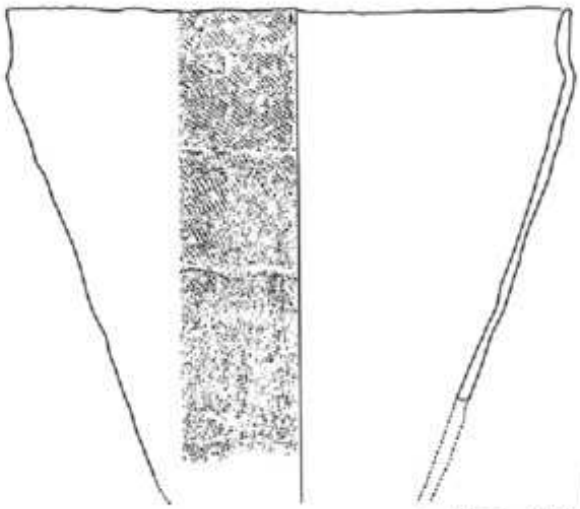
1 (SK174F, RP16)



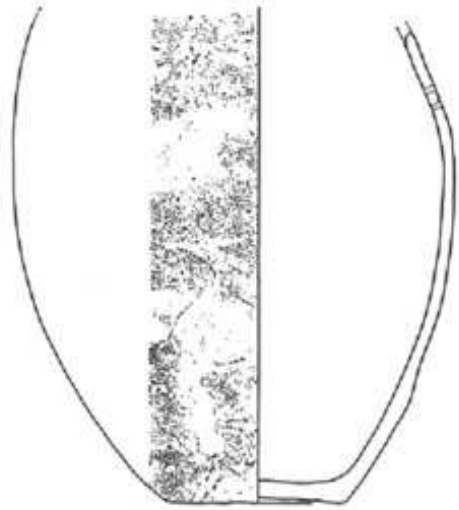
2 (SK1080F)



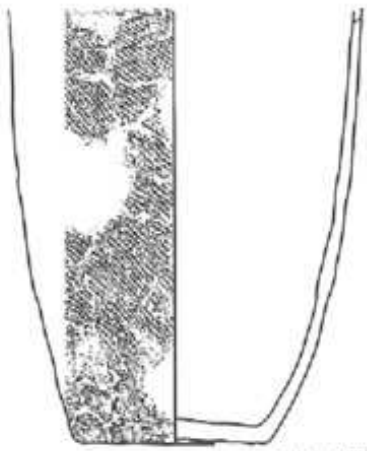
4 (3—16III)



3 (EP1044 RP35)



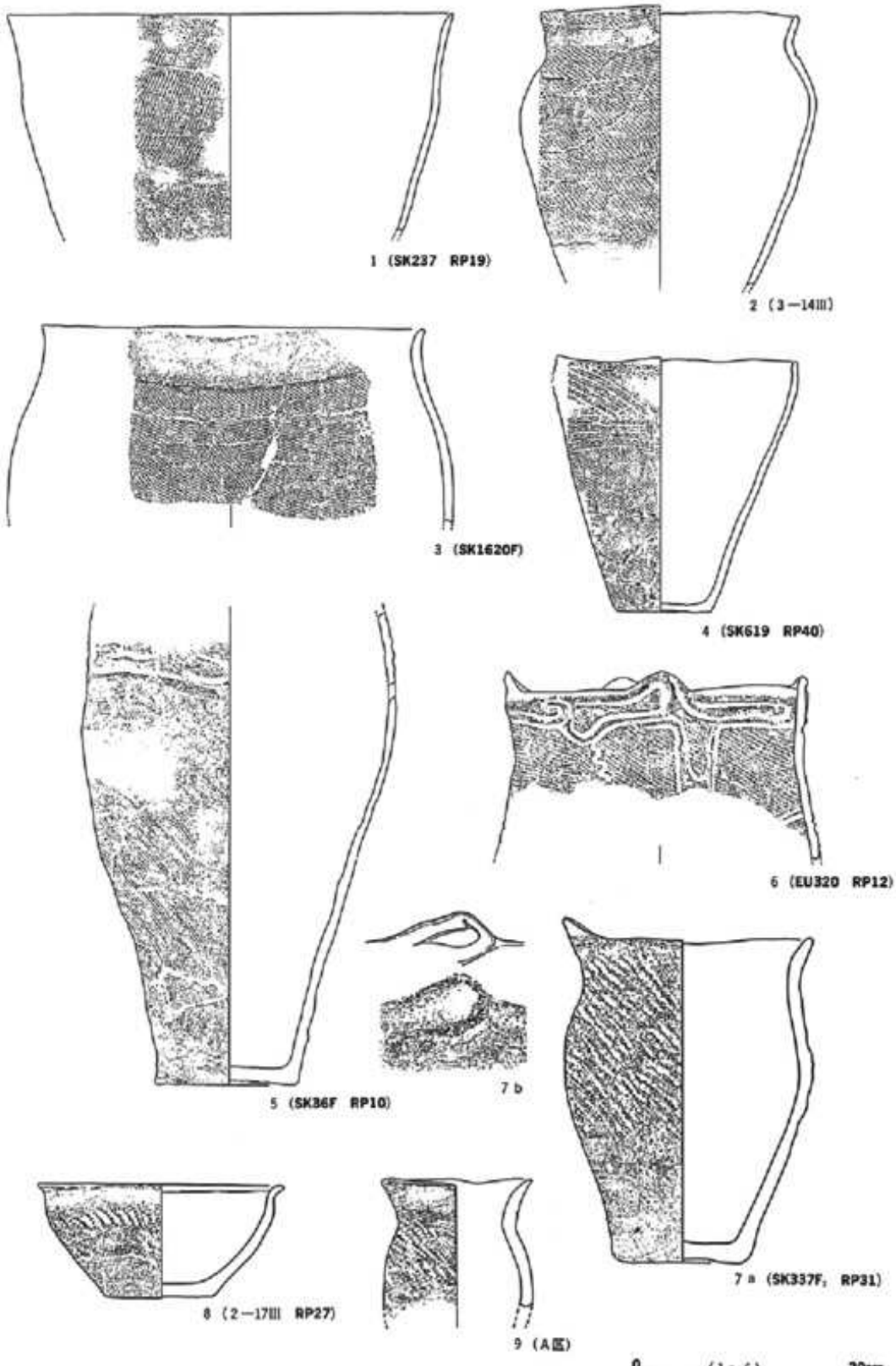
6 (SK445F, RP32)



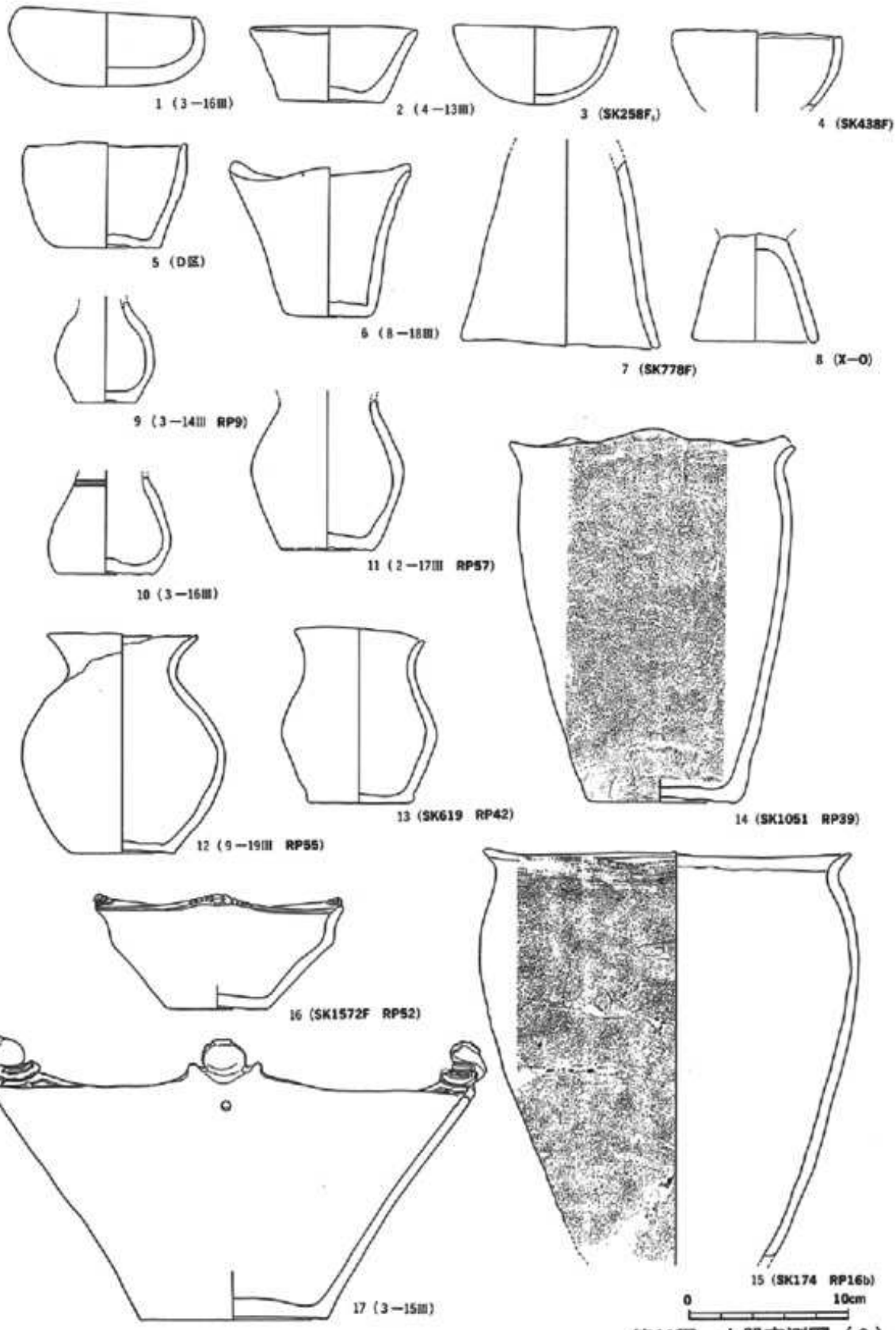
5 (8—17II EU321 RP28)

0 20cm

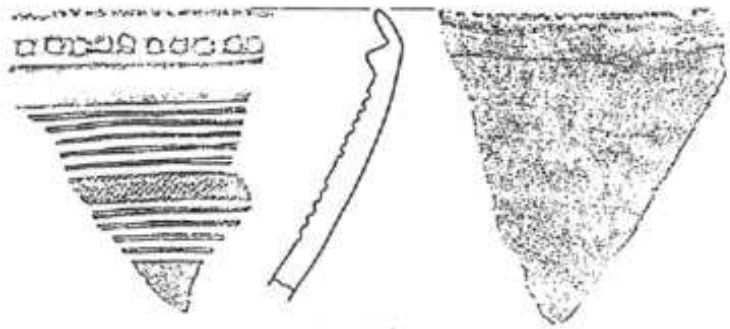
第61図　土器実測図（6）


1 (SK237 RP19)
2 (3－14Ⅲ)
3 (SK1620F)
4 (SK619 RP40)
5 (SK36F RP10)
6 (EU320 RP12)
7b
7a (SK337F, RP31)
8 (2－17Ⅲ RP27)
9 (A区)
0
(1～6)
20cm

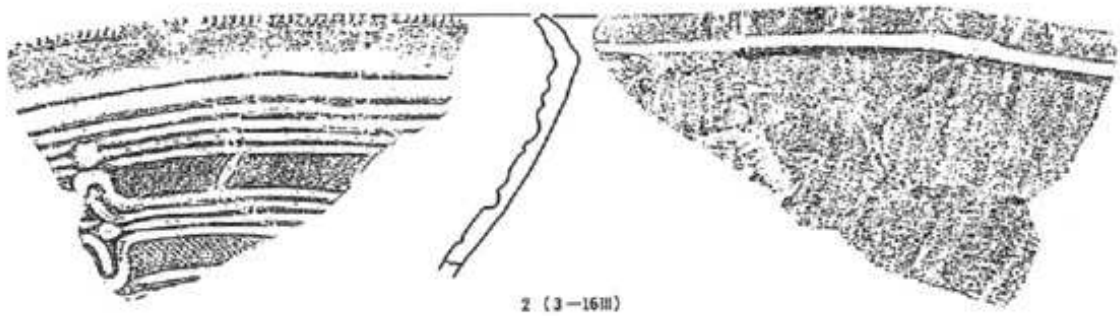
第62図　土器実測図（7）


1 (3－16Ⅲ)
2 (4－13Ⅲ)
3 (SK258F$_1$)
4 (SK438F)
5 (D区)
6 (8－18Ⅲ)
7 (SK778F)
8 (X－O)
9 (3－14Ⅲ RP9)
10 (3－16Ⅲ)
11 (2－17Ⅲ RP57)
12 (9－19Ⅲ RP55)
13 (SK619 RP42)
14 (SK1051 RP39)
15 (SK174 RP16b)
16 (SK1572F RP52)
17 (3－15Ⅲ)
0
10cm

第63図　土器実測図（8）



1（4－16Ⅲ）



2（3－16Ⅲ）

3（9－19Ⅲ）

4（ST8 EP）

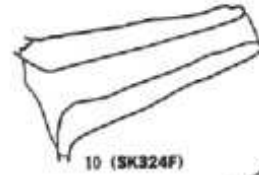
7（3－14Ⅲ）

5（EP1223F）

6（4－14Ⅲ）

8（SP825F）

9（4－16Ⅲ）



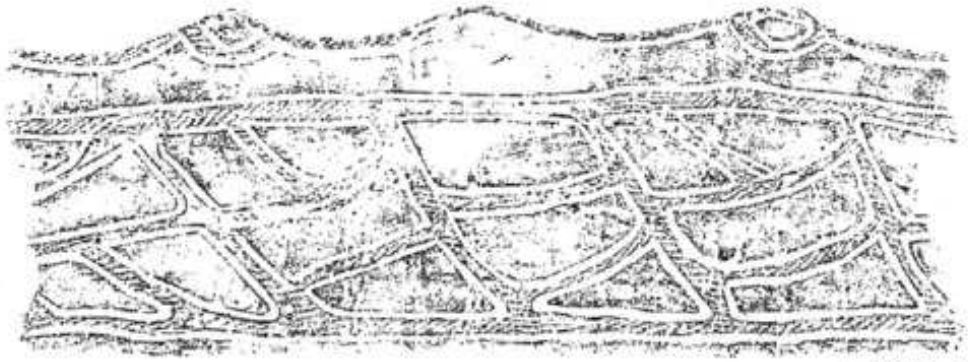
10（SK324F）

11（SK688F RP37）

13（8－19Ⅲ）

12（4－14Ⅲ）

第64図　土器実測図（9）・拓影図他



1 (SK1572 RP51a)

2 (SK1572 RP51b)

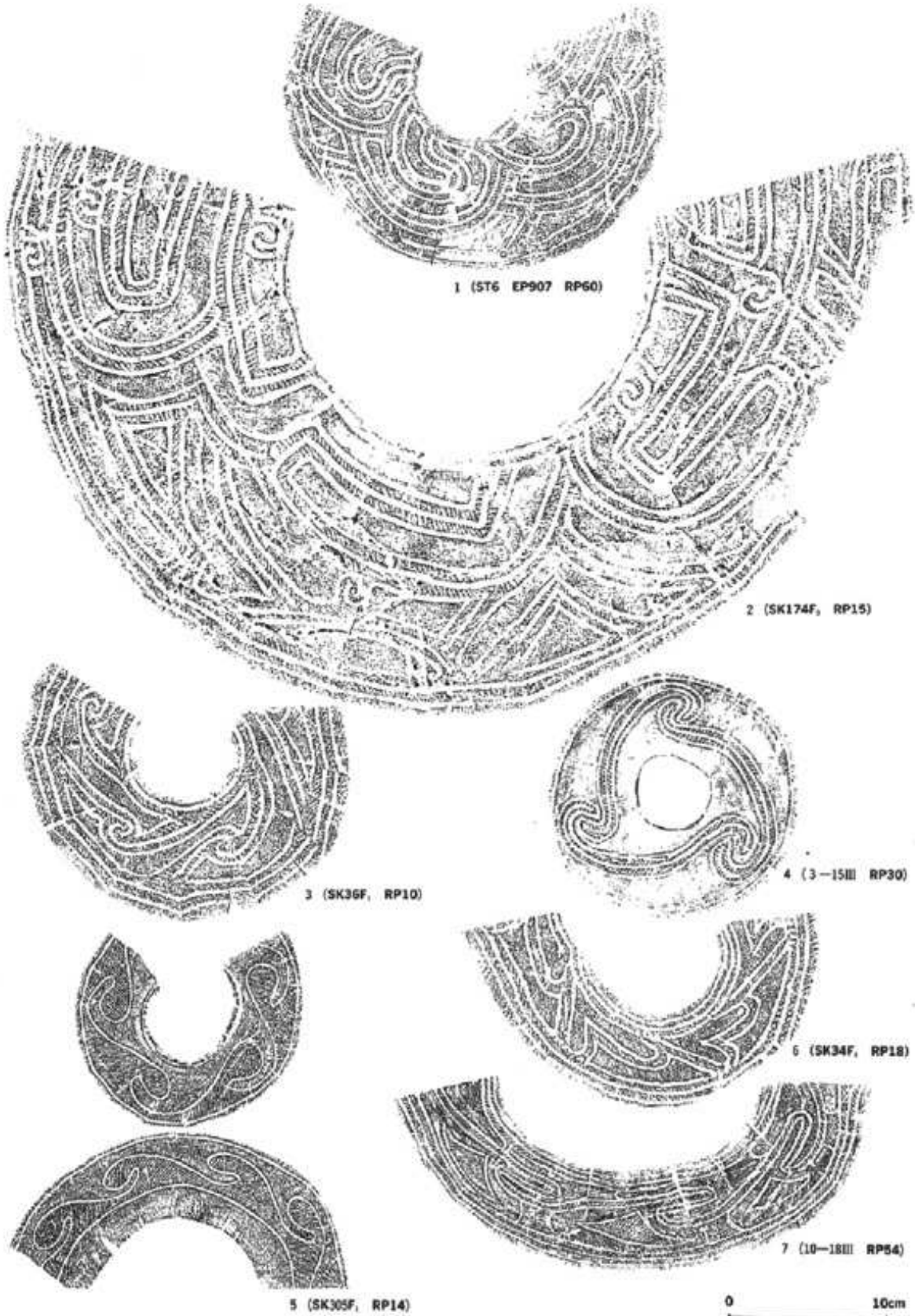
3 (SK174F, RP16)

4 (SK163F RP13)

5 (3—14III)

0 10cm

第65図　土器展開拓影図（1）



第66図　土器展開拓影図（2）

壷形土器（第58図・59図１～５）

本遺跡では中・小型の壷が特徴的に認められた。資料化できたもの19個体程がある。これらは器形から中・小型で細頸の１類（第58図１・３～５・７・８、第60図１～３・５）とやや太頸で短頸の２類（第58図６・９）、体部・口縁部が直線的なフラスコ形態を呈す３類（第58図10・11）、体部上半が強く張る４類（第58図２）、瓢箪形様の５類（第60図４）、大型で丸く張る体部、絞られる頸部から短く開く口縁部などの形態的特徴を持つ６類（第59図）などが識別でき、このうちの量的主体は１・２類と窺えた。これらは細部の形態的特徴や以下に述べる文様帯および施文文様などの要素から細分される。

文様帯の構成は口縁端部・体部上半部の二帯のもの（1類の大半・４類・６類）、同じく二帯ながら体部下半にも及ぶもの（１類の一部・３類）、口縁無文で体部上半の文様帯一帯からなるもの（２類の一部・６類）、同様に一帯ながら施文域が下半にも及ぶもの（２類の一部）などの類型で括ることができ、各々時期や系統との関わりを現していると推察される。

文様の構図は「L」字や「C」字状の幾何学的磨消帯を多段で配置するA類（第66図１・２他）、幅の狭い縄文帯を横「S」字あるいは入組文風に三単位で周巡させるB類（第66図３・４・６・７他）、及び一本沈線で「S」字や波状文・弧文を描き、内部に縄文を充填するC類（第66図５他）、沈線を多段で重ねるD類（第60図３）、縄文地の上から沈線で楕円文や弧線文を描くE類（第60図５）などに類別できる。

この内A・B類は三本沈線で縄文帯を縁取る仕様が共通し、C類の一本沈線区画・幅広の縄文帯と較べれば大きな相違があると看取される。時期的に前葉から中葉に懸かる土器様相の変遷過程を示す一端と窺えよう。

鉢形土器（第60図６～11、）

鉢類の出土数は目だっていない。形態的に高台付で大振りな波状口縁を有し先端に中空取っ手を持つ所謂宝ケ峰式系の鉢（第60図９）、小型で四波状口縁を持ち頸部に竹管刺突文を周巡・充填させる例（第60図８）、体部上半に縄文帯を一巡させるだけの（第60図10）等に限られている。

浅鉢形土器（第63図16・17、第64図１・２）

浅鉢は無文地で三波状口縁を持つA類（第63図16・17）、および口縁が強く内弯する大型形態で外面無文・内面上部に重層沈線や縄文帯の巡る所謂加曽利B1式タイプのB類が認められる。A類は無文地を研磨して丁寧な造作を見せ、波状口縁の先端には壷１類の一部に施されると同様な線刻や小突起が配されている。深鉢１類、壷１・４・６類などに包括される要素と理解でき、加曽利B1式よりは前段の一群として位置づけられよう。

粗製土器（第61・62図、図版64～66）

地文縄文が主体的に認められる深鉢・鉢・浅鉢の類を一括する。これらは土壙内や包含層として認識した捨て場から出土したものが大半で、幾つかが埋設土器などであった。

深鉢形土器は器形から体部内弯・外傾で屈曲のないA類（第61図1、第62図1）、口縁が内屈後外反するB類（第61図2・3）、形態的にB類に近いが口縁部無文となるC類（第62図3）、肩部が張り口縁外傾で頸部に無文帯の巡るD類（第62図2）、中・小型で波状口縁ないし小突起を持つE類（第62図7・9）など主要な5類型に分類される。

地文縄文はLRとRLの二種があり、RLで横位施文の一群(第61図2他)、LRで縦位施文の一群（第61図1・3～5他）が特徴的に識別された。なお、地文がRL横位施文のC・D類では、同一原体を頸部や口縁部の縄文帯に沿って押圧させる所謂側面圧痕文の周巡が観察される。また、これらの中には体部下半にミガキ調整を加えるものが目につき(第61図5・第62図2・7)、製作手法上の時期的特徴と捉えられた。

浅鉢形土器は一例（第62図8）あり、RL横位施文と下半のミガキ調整が上記の深鉢形土器同様に認められる。

その他の深鉢形土器（第62図4～6、図版65）

第62図4は前記の精製深鉢I類に近似の仲間と捉えられるが、器形・文様構成などの諸点でやや異なりを見せている。器形は体部外傾、口縁部弱いキャリパーの形態でごく緩い波状口縁を成しており、I類に較べて直線的観が強い。文様はLR縦位の斜行縄文地に四条の沈線を平行・斜行で配して幾何学的文様が構成される。また、文様の交差部には竹管による爪形文を沈線の起点・終点に対応させて4個一単位で付加する特徴が認められた。

第62図5は長胴の大形深鉢で体部上半に隆起線で区画される文様帯を持つ。文様の構成その他は欠損のため詳細は不明となるが、粗い沈線や沈線内の磨消文が部分的に認められる。体部地文はLr縦位施文の無節斜行縄文で、原体末端を結んだ綾繰文を伴っている。

第62図6は同図5に類する器形の深鉢と考えられる。圧縮された隆起線による口縁部文様帯および沈線施文による体部文様帯を持ち、四つの小波状突起がつく。

無文土器・小形土器・注口土器（第63・64図、図版68・72・84）

包含層および土壙内から一定量の小形無文土器が出土している。これらは器種的に鉢・椀様の類（第63図1～5）、台付鉢の台（第63図7・8）、壷（第63図9～13)、緩い波状縁を見せる深鉢（第63図14～15）などがあり、鉢・壷類に量的主体があると窺えた。小形土器は所謂ミニチアタイプの土器であり、沈線施文のある浅鉢形（第64図3）・縄文の施される深鉢形（第63図5）・無文の片口形（第63図5）他の別が認められる。なお、注口土器は5点程の注口部資料に限られ、全形その他は不詳であった。

2　土偶・土製品

土偶（第67～68図、図版70～72）

土偶は23点の出土数があり、若干の土壙内出土品を除けば大半が包含層(基本層序Ⅲ層)から検出されたものである。以下に部位毎の概略を述べていく。

頭部・顔面部は2点あり、正面観は顎を下にして見ると三角形を基調としている。眉・鼻は粘土紐による隆起線で縁どられ、頭部には頭髪ないし装飾品を表すと考えられるターバン様の粘土紐が配置される（第67図3）。第67図4は目・鼻などを具象的に表現しない類型で、額に付される粘土紐が横「S」字状の螺旋となる点に特徴が求められる。顔面は長めの頸を前傾させて突出させる形態（第67図4・6）となるようで、後期前葉期土偶の一般的傾向に合致している。67図3は短頸ながら顎を突き出す仕様や刺突文の施文他で共通すると考えてよい。施文では頸部無文のもの（第67図3）と、頸部上端にまで刺突文の及ぶもの（第67図4）とが識別され、後者は施文方法から見て第67図6などに関連しよう。

胸部・腹部は7点の資料があり、刺突文系の4点（第67図2・5・6・11）と沈線文等主体の3点（67図3・7・9）とに区別される。刺突文は体部上半の乳房を除く胸・肩・頸・肘の正面と背面（第67図2・5・6）および腰（第67図11）の表裏面を中心に施され、施文具は竹管様のもの（第67図2・5・6・11）と尖頭の棒状工具的なもの（第67図3）の二種が推測される。なお、第67図6の例は半（多）裁竹管等による類型で「コ」の字状の刺突文が横位並列で施されたものである。また、同例は上部の刺突文帯と下半のそれとを結ぶ腹面正中線上の刺突文列が認められ、このあり方も時期的特徴の一つと指摘できる。乳房は刺突文系の土偶では明確でないが、剝落痕から貼り瘤様の仕様が想定される。一方、体部にミガキ等調整を丁寧に施す第67図9はリアルに突き出る妊婦の腹部にまず目を奪われるが豊かで写実的な乳房や螺旋状に渦巻く出臍までもが表現された優品である。これは頭部・脚部を欠くため全形不明ながら、ボリュームのある豊満な作り他から、第67図10のような脚部が付く土偶と推定され、刺突文系土偶のそれとは相違する様相と捉えられる。

腹部は前記例の妊娠タイプと小さな膨らみとして表現されるもの（第67図6）があり、時には貼り瘤様の貼付だったりもしている（第67図11）。

沈線文様の見られる土偶（第67図7・8）では、体側の沈線と背面の渦巻、腰部上端の山形ないし鋸歯文等の文様構成が知られ、刺突文の施文も第67図5・6などよりは整然とした仕様と観察される。その他では蹲距姿勢の脚部や腰をおろした腰・臀部の所謂ポーズ形と言われる土偶破片（第68図13･17）、板状ではめ込み式と思われる土偶体部（第68図21）などがある。また、肩から手や足だけと言った部分資料があり、肘から手までが垂直に折れる様子やO脚で踏張る脚と偏平な足等の特徴が窺えた。

土製品（第68図、図版73・74）

耳栓や土錘あるいはスタンプ形土製品や土製円盤などと呼ばれる一連の遺物がある。量的には土製円盤を除けば僅少で、耳栓4点、土錘・スタンプ形土製品などは各1点に限られている。また、これらの出土地点は土偶同様に包含層中からのものが大半で、若干が土壙等の覆土から検出されたものである。

耳栓は4点（第68図12・14～16）あり、全形の窺えるものは第68図12の1点である。形態は漏斗状でラッパ形に開く口縁端部に一条の沈線が巡らされる。装飾はこの沈線ある1例だけで、他は器面に丁寧なミガキ調整を加えただけの無文地である。また、同図15は先細の端部でも凹面をなしており鼓状の形態をなしている。絶対数が少ないながら、幾つかの類型と法量的大小があったものと推測される。

土錘（第68図19）は、楕円体の中央と側面に沿って紐掛用と推測できる凹線が「十」字形に巡らされる。素材は土器と同様の粘土を用いたと考えられ砂粒等が観察された。

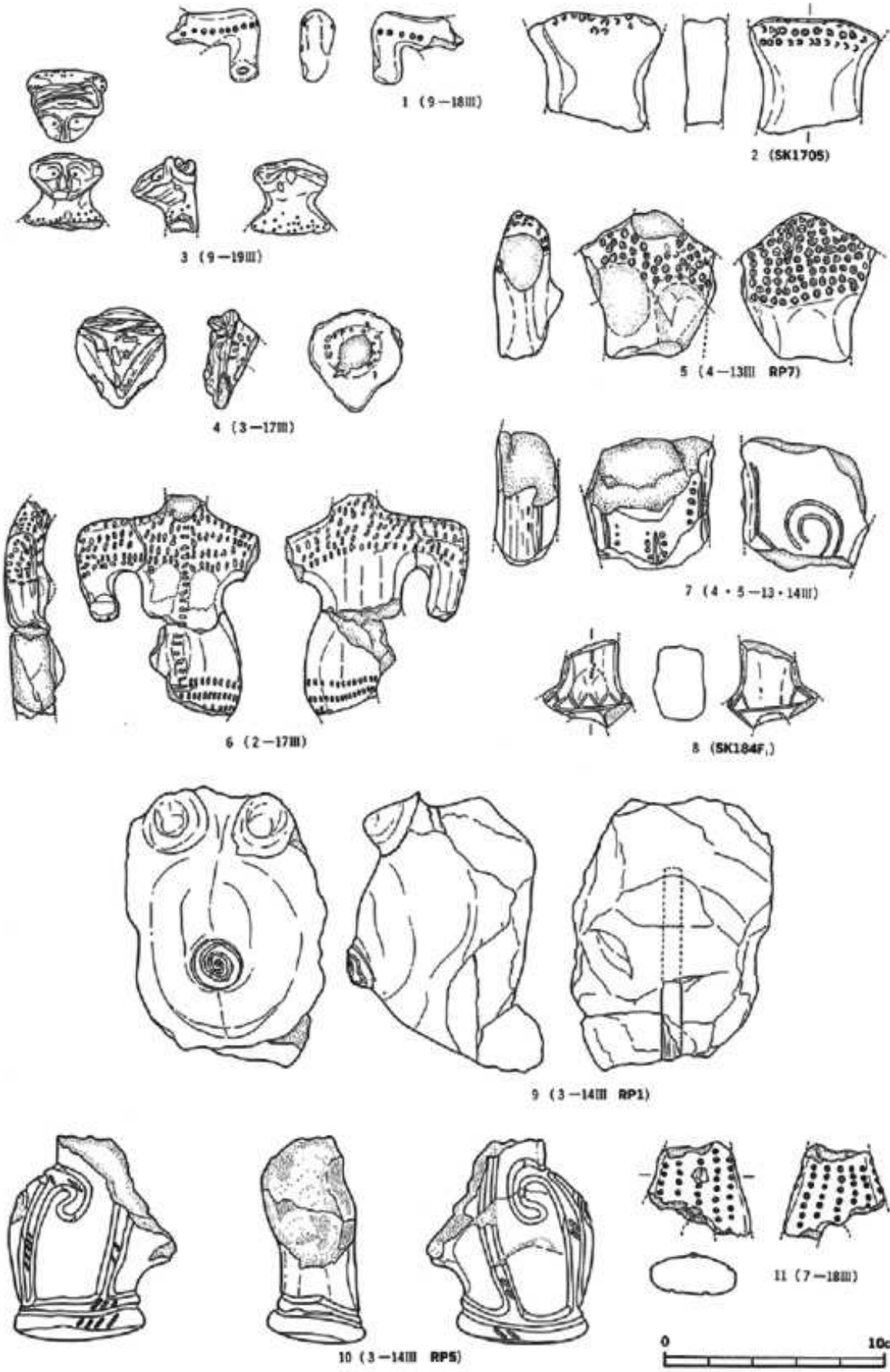
スタンプ形土製品（第68図20）は茸形の形態で、バレン様の緩やかな球面に「ハ」の字状の刻目がほぼ中央を境に線対称形で付されている。文様の施される曲面は楕円体の長軸方向に沈線を三条配して四分割されており、その内部に「ハ」の字状の刻目が片側4～8単位で充填される。なお、文様の反転する対称軸部分では横一線や波線様の仕切線が認められ、対称形を意識したあり方と窺えて興味深い。

円盤状土製品（第69・70図）は50点強の資料がある。いずれも土器片を二次的に再利用したと判断できるもので、器面には本来の土器に施された沈線ないし隆起線や縄文ほかの地文が観察される。これらの文様からは本遺跡の主体となる土器群の年代とほぼ同時期の所産であることが推測されるが、時期幅や共伴関係などの詳細は明確でない。

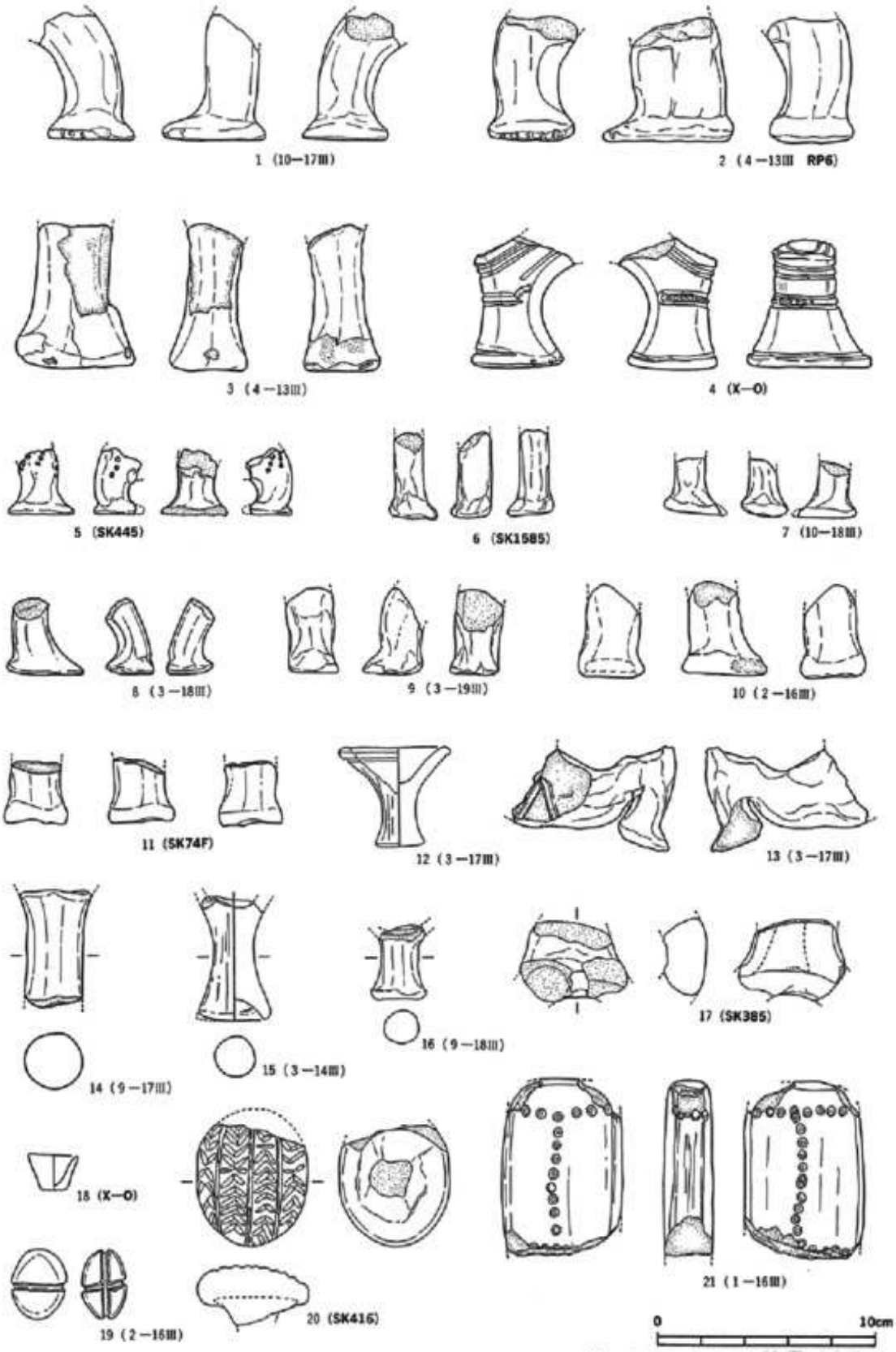
出土状況は他の土製品同様に多くが包含層内からの出土である。遺構から出土した例は第69図3・7・12・17、第70図26・49の6例に限られていた。これらは土壙内の覆土やピット内からの検出となっており、良好な共伴遺物がほとんどない。

形態は円盤形を基調とするが長軸・短軸長にややばらつきのあるものが多い。法量は最小で径2cm、最大で7cm弱までのものがあり、量的まとまりは3.5cm前後（15点）・4cm前後（19点）・5cm前後（11点）の三つに求められる。すなわち、各まとまりにそれほどの偏りがない状況と認めてよさそうで、各々法量的大・中・小の機能と用途に対応するあり方と捉えられる。

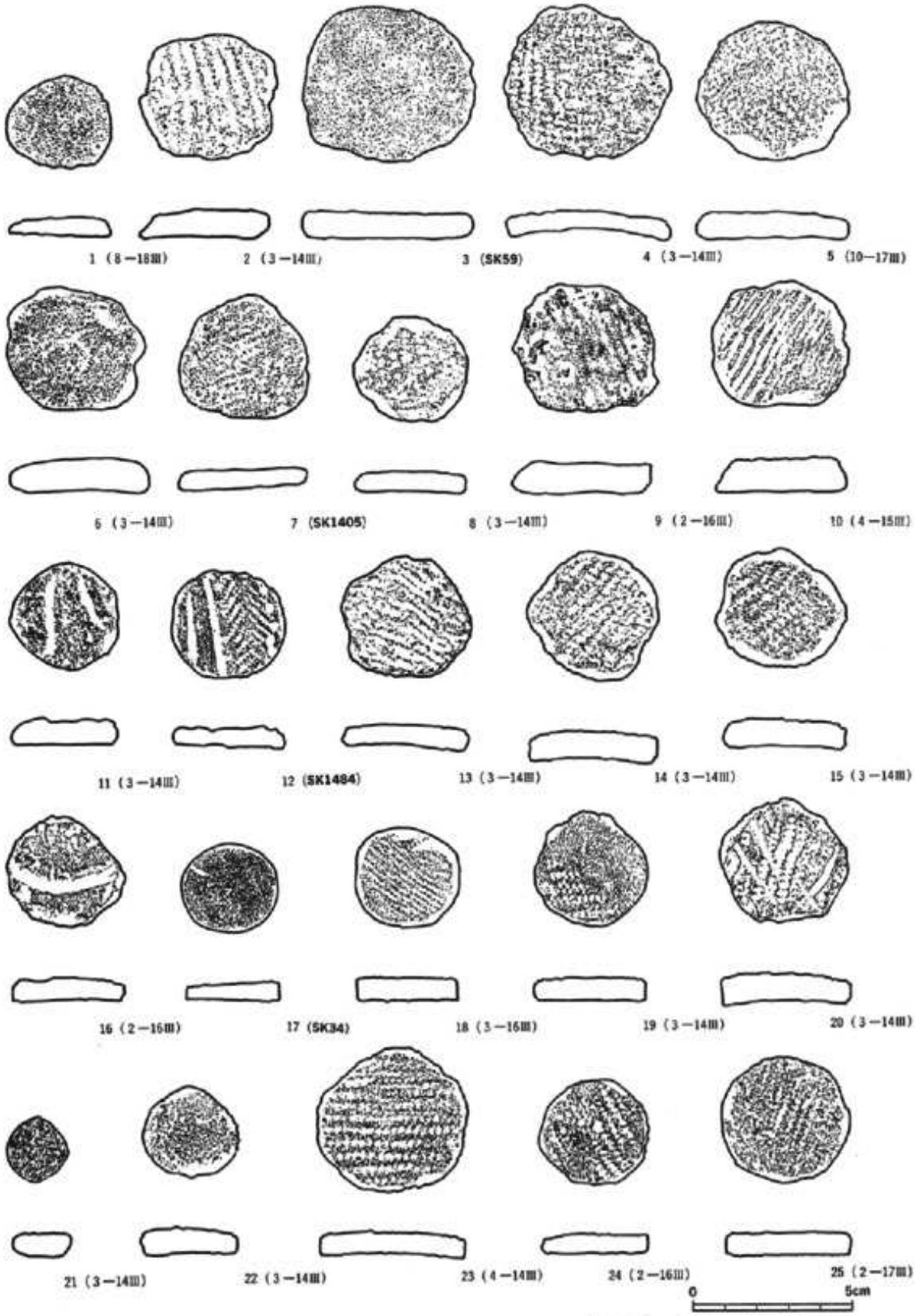
なお、技法的には総じて土器片を連続的に打ち欠きながら正円形を意識した作りと窺えるものである。資料的に少ないながら最終段階で側縁を平滑に磨き上げて仕上げる丁寧な作りのものも認められた（第69図17・18他）。



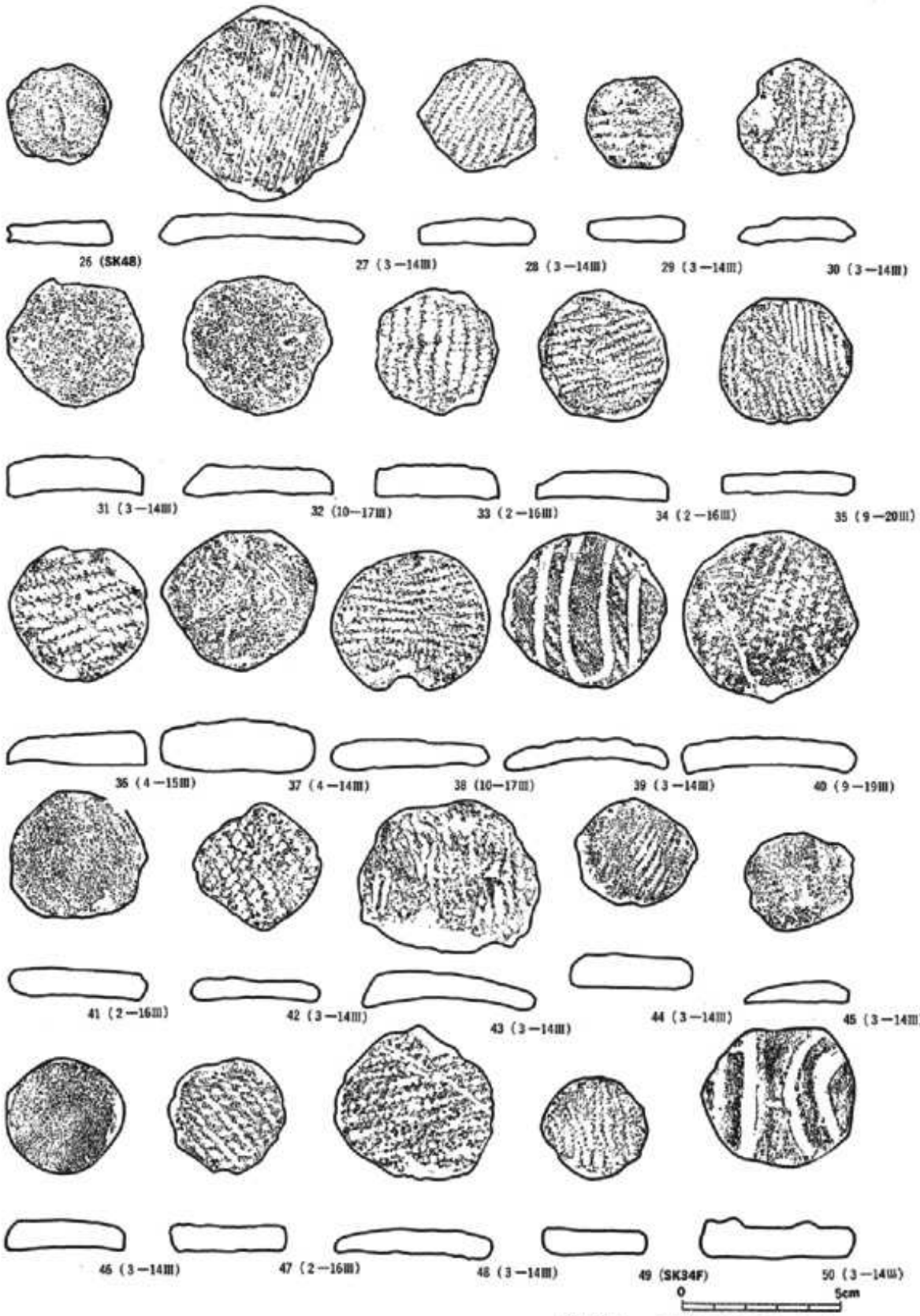
第67図　土偶等実測図（1）



第68図　土偶等実測図（2）



第69図　土製品実測図（1）



第70図　土製品実測図（2）

3　石器（第71～76図、図版75～82）

石器は打製と磨製及び礫石器の別がある。打製石器では石鏃・石錐・掻器・削器・石匙・石篦・尖頭器などの定形的器種が一定量認められ、各々その大小や形態から細別される。

一方、礫石器・磨製石器では石皿・磨石・凹石・石錘・磨製石斧などを認めている。以下に打製石器、磨製石器、礫石器の順に概略を記していく。

打製石器は石匙ほかの器種が認められたが、量的には石匙（63点）・削器（59点）・石鏃（43点）・石錐（30点）などが多く、楔形石器（５点）・篦状石器（４点）・尖頭器（４点）などで少ない様相と把握される。

これらの組成割合は、多い順に記すと石匙28％、削器26％、石鏃19％、石錐13％、掻器８％、楔形石器２％、石篦２％、尖頭器２％となり、石匙・削器・石錐などの加工用具と狩猟用の石鏃が量的・組成的に目だった組成値を示すと窺えた。

出土地点別では、包含層から検出されたものが大半で、ＳＫ34土壙に見る石鏃５点、石錐１点、石匙１点などのような遺構内でまとまる例はごく希と認識される。その他の住居跡や土壙・柱穴等では二次的・散発的な混入と見受けられ、その出土状況等に特別な意味を見いだせたものはない。なお、打製石器の石材はほとんどが頁岩であることを付記しておく。

石鏃（第71図１～９）

無茎と有茎の二種があり、量的には長脚二等辺三角形を呈する第71図１～３の類型が主体となる。次いで菱形形態の第71図７の類型が多い。他の有茎形態や無茎形態の類型は２点ないし４点程度と限られていた。

石錐（第71図10～17）

棒状形態と摘み付き形態の大別二種があり、前者は尖頭部のあり方や体部の膨らみから三種に細分できる。すなわち長い棒状で断面菱形のＡ類(第71図10)、両端尖頭で小形の棒状形態のＢ類（第71図11～13)、基部円形で片尖頭のＣ類（第71図14）などである。

また、後者は「Ｔ」字形ほかの摘みを持つ類で、中には摘み部分も「Ｕ」字形に作り出すものが認められた（第71図15)。前者が多く、後者は僅少である。

楔形石器（第71図20・21）

大形の鏃形態に似る両面加工ないし半両面加工の製品で、両面加工のもの２点、半両面加工のもの３点がある。刃部断面形は鋭い「Ｖ」字形で、全体に薄手の作りとなる。

掻器（第71図18・19、22～24）

形態から円形と縦長の二種が区別され、小形で円形の類型（12点）が縦長で端部がやや屈折する類型（７点）よりやや多いと見受けられる。前者は両面加工で断面レンズ状、後者は片面加工で断面三角形を呈し、先端の刃角が大きくなる特徴が認められる。

削器（第71図25・26）

不定形剝片の一側辺以上に二次調整を加えて刃部とするもの（第71図25）と、側辺にノッチ状の加工を施して凹面を作り出す類の二種がある。量的には後者が多く、整正な前者が少ないと判断される。

石匙（第72図１～19）

63点の出土資料があり、形態から縦形（41%）、円形（11%）、横形（48%）に区別され、縦・横半ばする状況が認められる。

縦形（第72図１～９）は基本的に打面周辺を加工して摘みを作り出すもので、刃部を縦長の一側辺ないし二側辺に持つものが多い。刃部先端は円弧、平縁、尖頭ほかの幾つかの類型があり、刃角も各様となる。

横形（第72図12～19）は摘み部を上にして見た場合、横長の刃部が対面にくるもので、素材的には縦長のそれほどには一様でない。すなわち、打面位置も摘み部、刃部の左右と一定しない状況が認められ、素材形状より必要刃部の確保と横型と言う形式の優先的あり方が重要視されたと理解される。

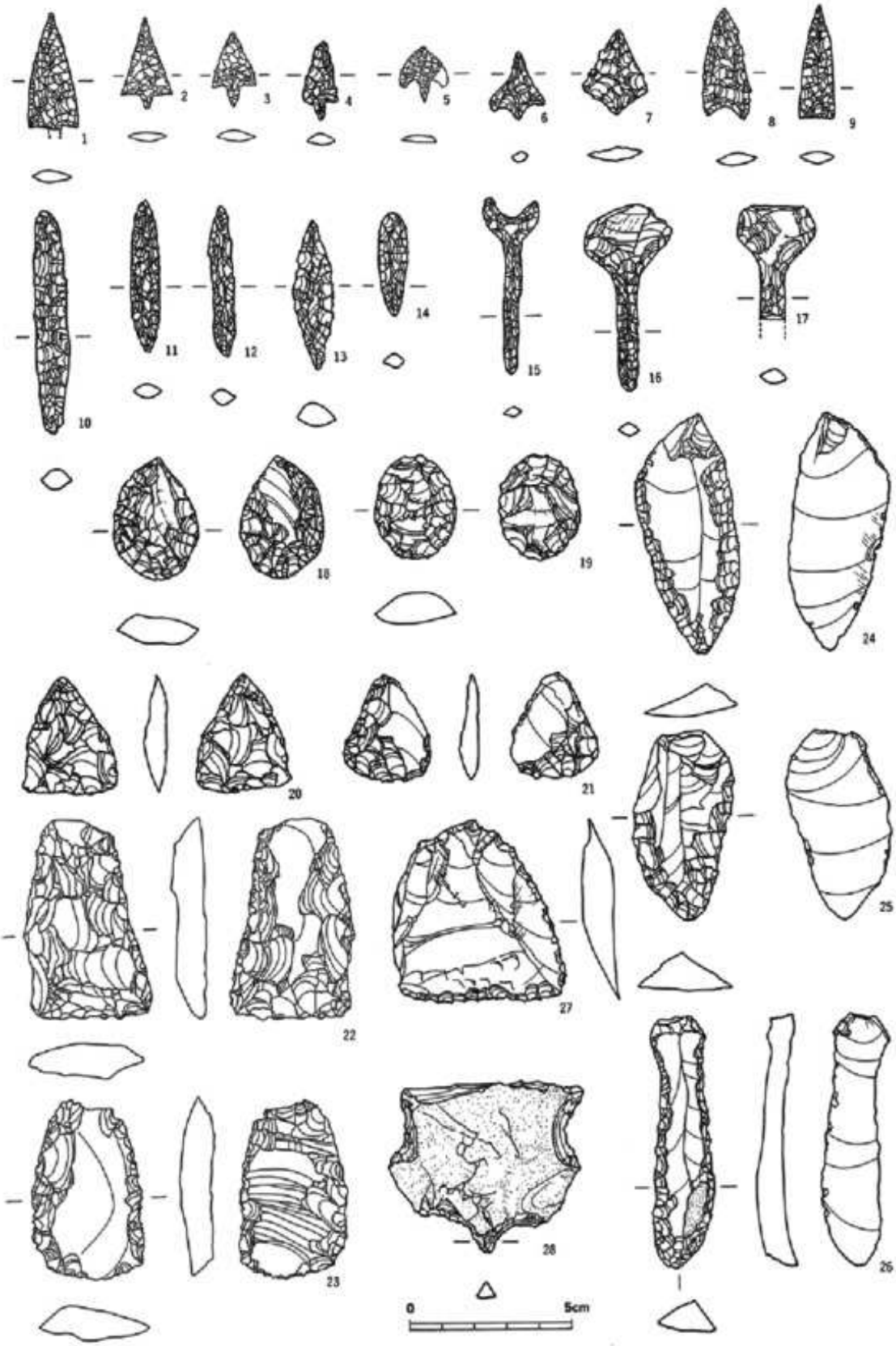
円形（第72図10・11）は刃部を丸く作り出す半両面加工のもので、摘み部を除けば、形態・刃角など所謂円形掻器そのものである。そうした意味では、先に横型に含めた第72図19なども掻器的な刃角を有すと認められ、機能的に同類と括ることができそうである。

なお、第72図２・15には摘み部にアスファルトの付着痕（図中網点部分）が認められた。

磨製石斧（第73図１～21）

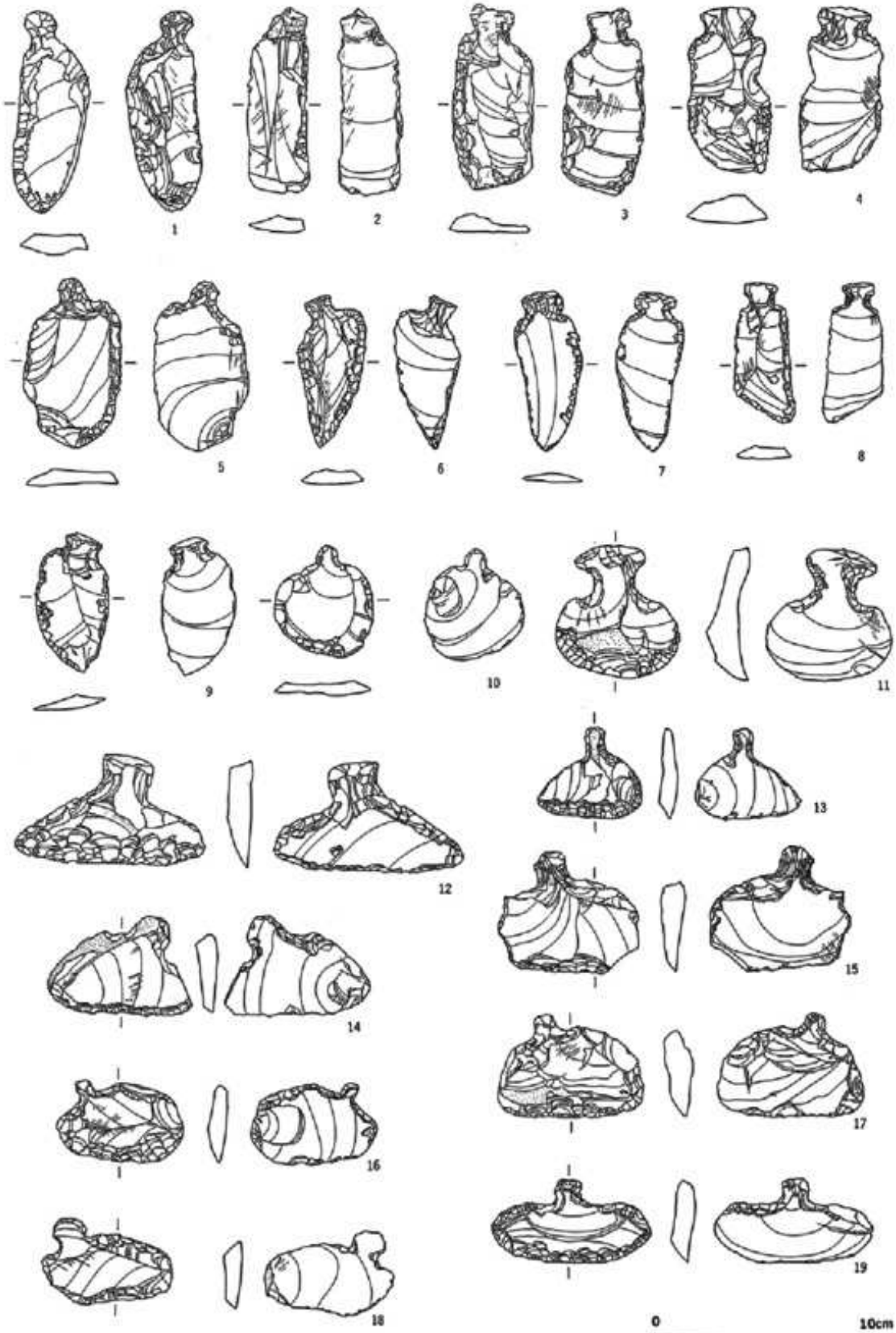
完形品がほとんどなく、正確な計測の不能なものが多いが法量的大小から主体的な４類型の存在が推定される。すなわち全長が13cm前後の大形のＡ類（第73図１～３・５・10・12）、一周り小さな全長11cm内外のＢ類（第73図４・６～９・11・19）、中形と言える全長８cm前後のＣ類（第73図13～15・18）、小形で６cm以下４cm前後のＤ類（第73図16・17・20・21）の計４つである。これらの平面形態は基部が絞まり、刃部で開くいずれもやや中膨らみか直線的な長脚二等辺形を基調とし、刃縁や基部あるいは断面形状での差異から幾つかの類型が指摘される。例えば大形のＡ・Ｂ類は縦断面レンズ状、刃部が両刃となる形態が主体をなし、中形のＣ類は偏平で平刃タイプが多いなどである。また、小形のＤ類も中形Ｃ類の縮小版と見受けられ、その限りではＡ・Ｂ類の大半とＣ・Ｄ類の機能的違いを反映する結果と捉えられる。

なお、欠損部分を見てみると、刃部を大きく欠くもの９例、基部を欠くもの８例となり、出土品の80%強のものが破損例で占められていた。また、石材は不詳ながら緑泥変岩の類が主体と判断される。



1：4－13Ⅲ，2：SK1132，3：8－18Ⅲ，4：C区東Ⅲ，5：C区Ⅲ，6：SK34，7：SK1448，8：SK1428，
9：8－20Ⅲ，10：4－14Ⅲ，11：A区Ⅲ，12：9－19Ⅲ，13：C区中央東，14：2－17Ⅲ，15：SK83
16：9トレンチ，17：C区Ⅲ，18：SK807，19：8－18Ⅲ，20：4－14Ⅲ，21：3－15Ⅲ，22：SK1040
23：7トレンチ，24：2－16Ⅲ，25：3－17Ⅲ，26：SK1657，27：EP506，28：4－13Ⅲ，

第71図　石器実測図（1）



1：8－18Ⅲ，2：3－14Ⅲ，3：8－16Ⅲ，4：10－19Ⅲ，5：SK1466，6：4・5－13・14，7：D区Ⅲ・
8：4－14Ⅲ，9：C区北Ⅲ，10：3－15Ⅲ，11：9－18Ⅲ，12：10－18Ⅲ，13：SK87 RQ 2，14：8－19Ⅲ
15：8－12Ⅲ，16：6－19Ⅲ，17：3－14Ⅲ，18：4・5－13Ⅲ，19：7－18Ⅲ。

第72図　石器実測図（2）

1：C区Ⅲ，2：A区，3：X—O，4：10—18Ⅲ，5：C区Ⅲ，6：X—O，7：9—17Ⅲ，8：4—13Ⅲ，9：X—O
10：2—17Ⅲ，11：3—16Ⅲ，12：4—13Ⅲ，13：9—17Ⅲ，14：X—O，15：17トレンチ，16：SK968
17：8—18Ⅲ，18：4—16Ⅲ，19：8—18Ⅲ，20：SK416F，21：SK1441F，

第73図　石器実測図（3）

礫石器（第74・75図、図版79～81）

礫石器は磨石（129点）、石皿（39点）、凹石（35点）、石錘（２点）の器種があり、所謂調理加工具としての石皿・磨石・凹石の類が大半を占める様子が看取される。なお、石錘は同形態の土器片を再利用する土製品があり、それらとの関連が考えられる資料である。以下に磨石、凹石、石錘、石皿の概略を述べる。

磨石はその横断面形態のあり方から、円形のA類、楕円形のB類、台形のC類に大別される。量的関係でA・B類主体、C類客体の様相となる。A・B類共に平面形は円・楕円を基本とし、C類で不整な長楕円形などと推察された。擦り面は全周的なA類、表・裏面主体のB類、台形の短辺部主体のC類と概括できるが、各個体によるばらつきがあるため必ずしもこの限りに該当しないものも少なくない。

凹石は35点の資料があり、磨石などに較べてやや少ないと見受けられる。これらは平面形態や凹部のあり方、および法量などから主体的な三種と、散発的な三種の計６つの類型が指摘できる。以下に各類型を列記する。

A類：平面形楕円、縦断面形長楕円で、表裏面の中央部に長く連続する凹部列を持つもの。表裏の平坦部は磨石としても使用される例が多いため、平滑な形状を呈するものが 多く認められる（第74図７～９）。法量は全長13～14cm、幅10cm内外を測る。

B類：平面形楕円、縦断面形長楕円でA類に近いが、全長11～12cmとA類より小さくなり、全体に円形に近い形状をとる。また、凹部も中心部に集中する傾向があり、A類に見る長い凹部列は形成しない。石材の形態や法量差による所産と考えられる（第74図10～12）。

C類：平面形円で、縦断面形長楕円ないし「８」字形を呈するものである。B類よりさらに法量の小さな一群で、全長８cm前後にピークが見られる。凹部は表裏面の中央部にあり、同心円的な集中となる（第74図13～16）。

その他、隅丸長方形で大きな凹部を持つD類、幅の狭い長楕円形で複数個の凹部を持つE類、石椀状に凹部の規模が大きいF類等が識別される（第74図17～19）。

石錘（第75図20）

平面形卵形で全長11cm、幅７cmを測る。中央部に叩打による幅広の紐掛け用の凹線が巡らさる。他は自然面そのままとなる。なお、重量は602gである。

石皿（75図１～13）

破損品が多く全形の窺えるものは第75図７～11の５点である。石材は不詳ながら、砂岩質の堆積岩が多いと考えられる。法量は全長25cm弱の同図７が最小の一群で、43.5cmを測る同図９が最大クラスの一例と理解される。これらは製作手法から幾つかの特徴的類型が認められた。以下にA～Cに類別して列記しておく。

A類：石材を丁寧な叩打と磨きにより明瞭な外縁を持つ容器状に整形するタイプで、第75図1～5、7・9・13等が該当する。

B類：偏平な楕円形の河原石を素材とし、その一面を叩打と磨きにより水平に仕上げるもので、横断面形が逆蒲鉾状となる。用途や使用頻度等により遺存度合いが異なると考えられるが、この一群は同図8→11→13へのような変遷を遂げると推測される。

C類：磨面が平坦でなく、幾つかの凹面が集合する状況が認められる一群である。同図9などの用途・機能とは異なる様相と理解され、何らかの砥石的機能が考えられよう。

4　石製品（第76・77図、図版82・83）

石棒・石刀などの所謂「呪物」および出土量の希有な幾つかの石製品について述べていく。これらの出土数量は石棒9点、石刀6点、線刻礫1点、軽石製品1点、石鋸1点、小形の模倣磨製石斧1点などである。また、出土状況については、遺構との関連が捉えられたものについては既に記した通りであり、特に土壙SK1112の床面で石皿と伴出したRQ47や、立石と捉えられたRQ48の石棒は造作の丁寧さや精巧さの面でも注目される。

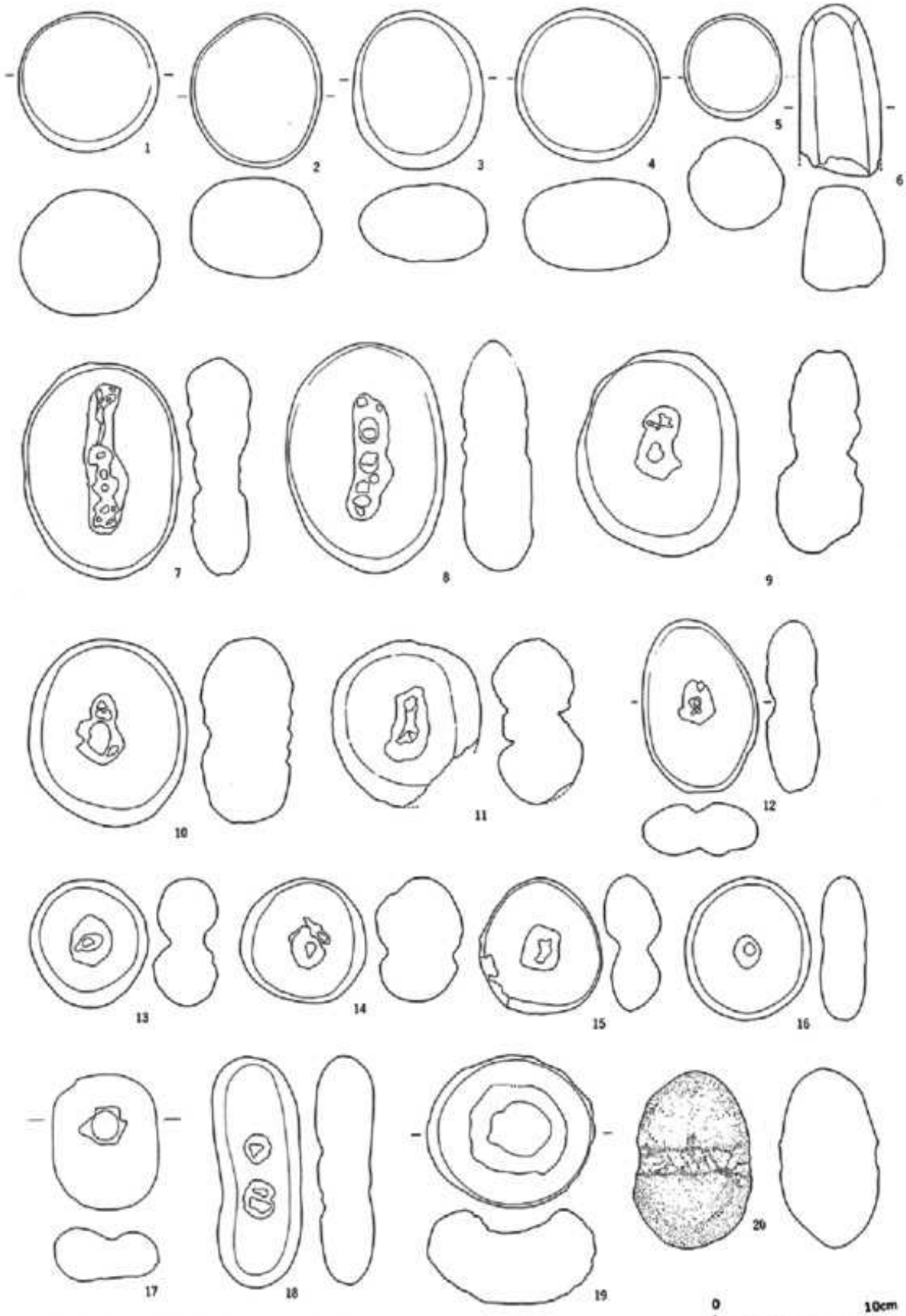
石棒（第76図1～6）

6点の当該例が知られ、土壙内埋置のRQ47や立石遺構のRQ48の2例を除けば何れも原位置を留めない包含層（III）からの出土であった。これらは大小軽重などの法量や形態・製作技法に係わって類別できるが、以下では写実的形態を作り出すA類（第76図1・2）と自然石に殆ど手を加えないで用いたB類（第76図3～6）に大別しておく。A類は男根形の頭部を明瞭に作り出すもので、叩打成形、研磨による整形・仕上などが観察される。RQ48を見てみると形態は先端の頭部が半球形で、体部との接合部には明瞭な括れが見られる。全形は欠損から不明だが括れ部分ですぼまり下膨れ気味の紡垂形と推察される。B類は細長の河原石を利用したもので側縁の一部を叩打して整形する程度に留まっている。第76図3を除けば何れも欠損品となる。

石刀（第77図1～6）

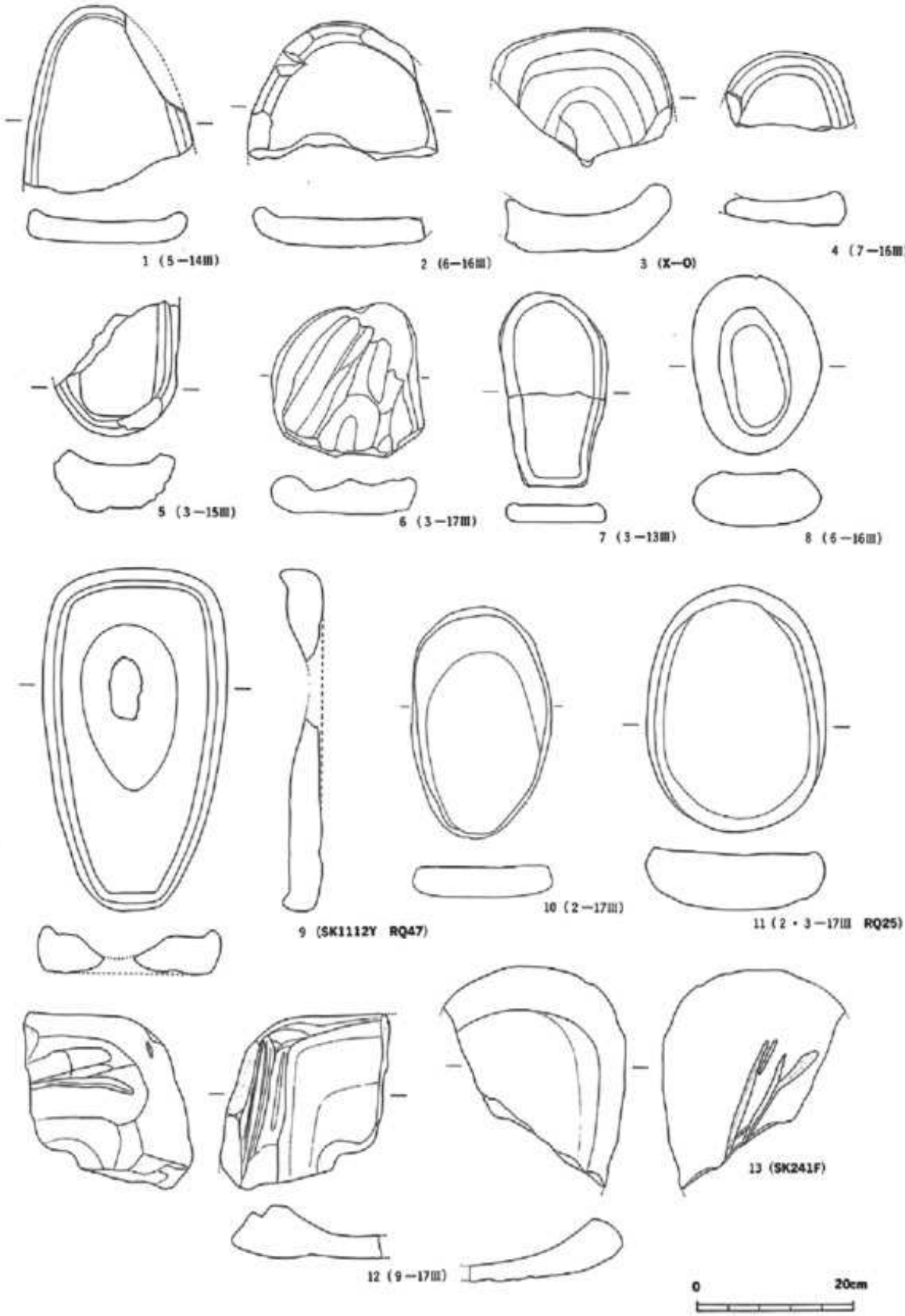
土壙内の覆土や包含層から6点の石刀が出土している。材質は灰黒色を呈する粘板岩で削りや擦痕あるいは磨き調整などが明瞭に認められる。いずれも部分のため全形不明ながら、握り部分と判断できる4点（第77図3～6）と刃部先端（第77図1）、同基部に近い部分（第77図2）などと識別される。形態の特徴は握り部分の凹み、峯に沿う沈線などに窺うことができ、伴出の土器などから十腰内I式や大湯I・II式段階での所産と推測される。

その他の遺物では石刀などの製作に関係したと考えられる砂岩製の石鋸（第77図8）、渦巻や「×」字様の線刻が施される篦状石製品（同図9）、貫通孔を持つ軽石製品（同図10）、小形の磨製石斧様石製品（同図7）などがある。

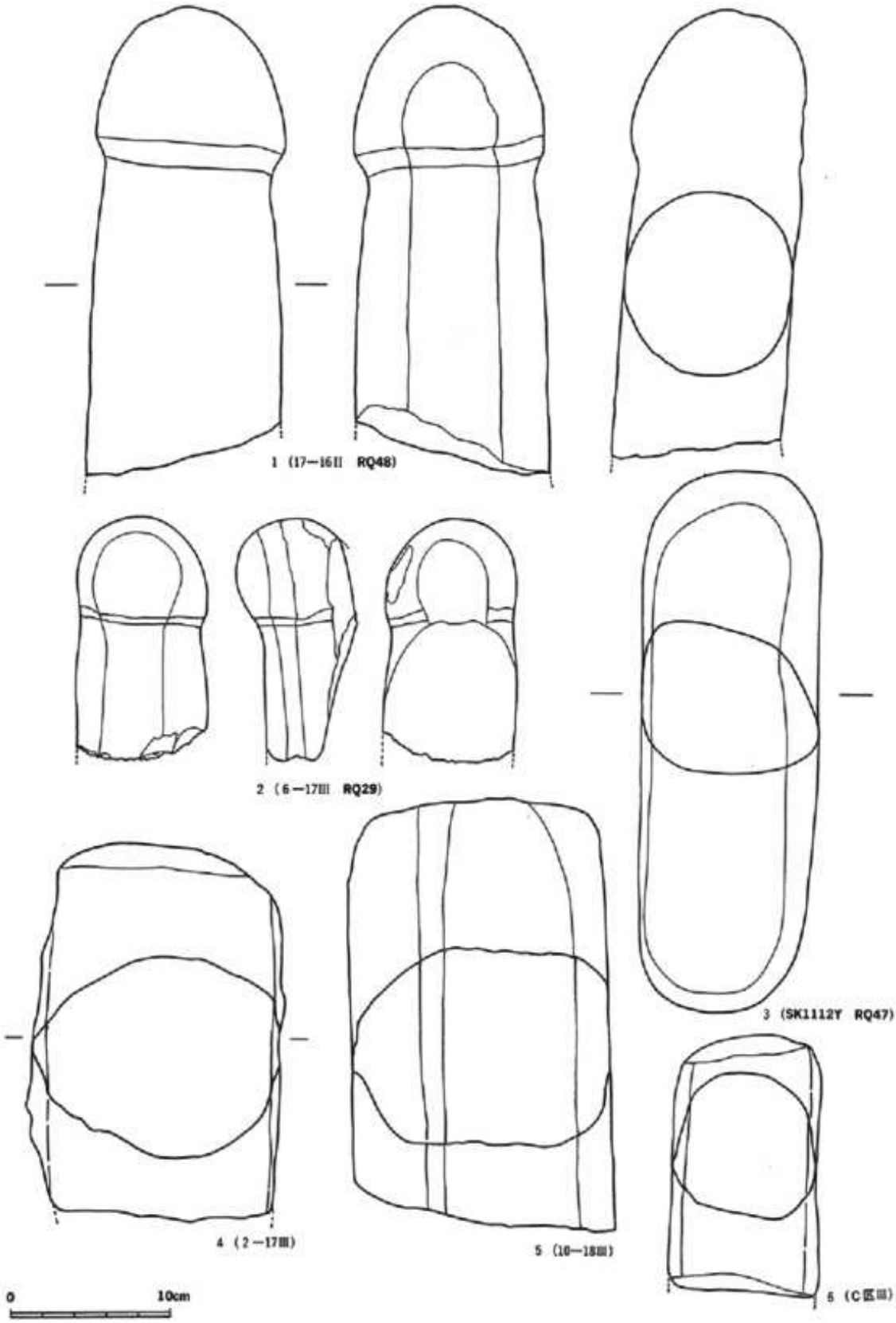


1：10－19Ⅲ，2：4－13Ⅲ，3：3－14Ⅲ，4：8－18Ⅲ，5：4－13Ⅲ，
6：6－18Ⅲ，7・8：7－17Ⅲ，9：2－17Ⅲ，10・11：3－14Ⅲ，12：7－17Ⅲ，
13：X－O，14：SK34，15：SK1258，16：10－18Ⅲ，17：SK495，
18：3－15Ⅲ，19：10－18Ⅲ，20：X－O．

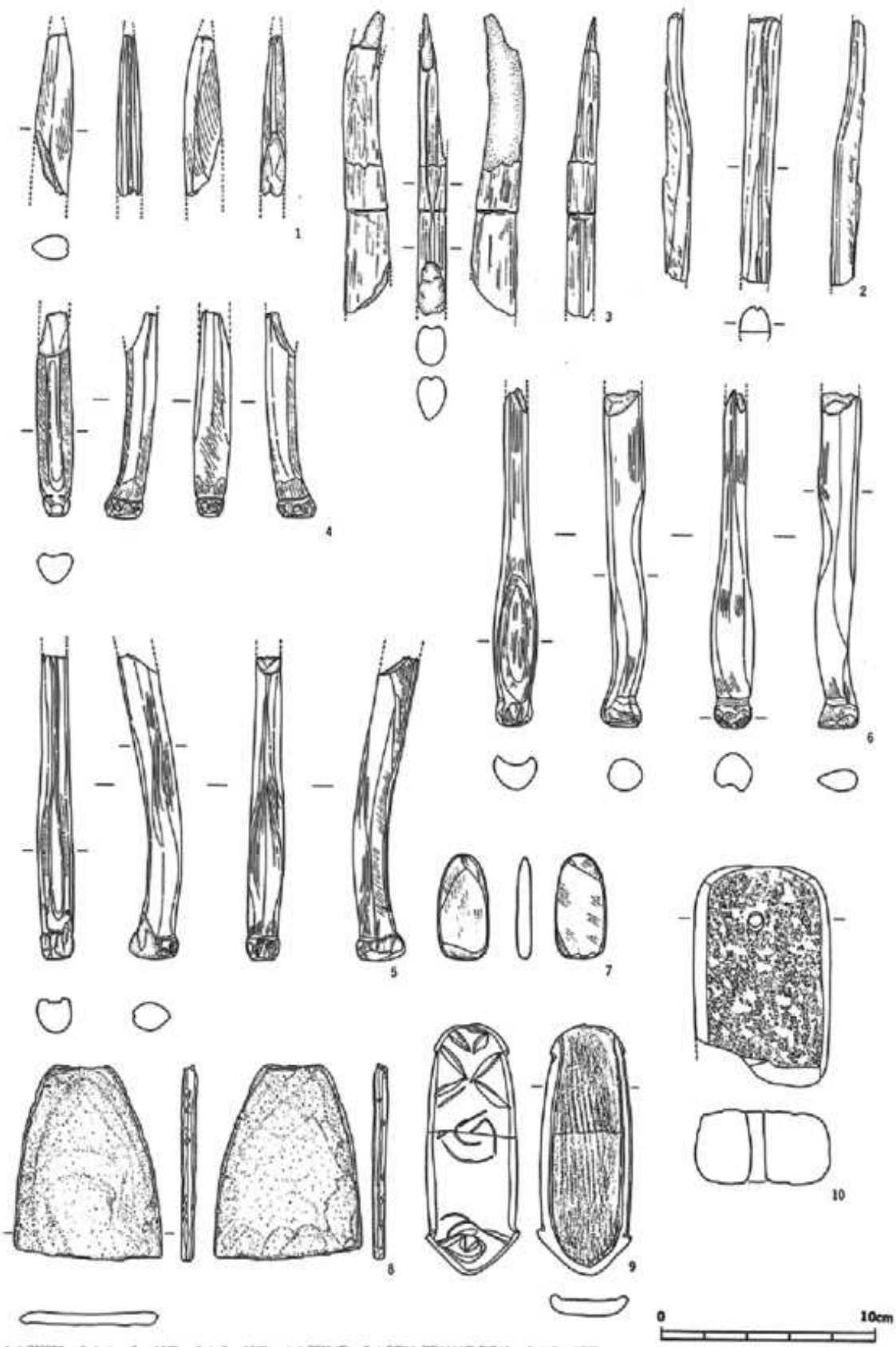
第74図　石器実測図（4）


1 (5－14Ⅲ)
2 (6－16Ⅲ)
3 (X－O)
4 (7－16Ⅲ)
5 (3－15Ⅲ)
6 (3－17Ⅲ)
7 (3－13Ⅲ)
8 (6－16Ⅲ)
9 (SK1112Y RQ47)
10 (2－17Ⅲ)
11 (2・3－17Ⅲ RQ25)
12 (9－17Ⅲ)
13 (SK241F)
0
20cm

第75図　石器実測図（5）


1 (17—16II RQ48)
2 (6—17III RQ29)
3 (SK1112Y RQ47)
4 (2—17III)
5 (10—18III)
6 (C区III)
0
10cm

第76図　石器実測図（6）



1：SK550, 2：4・5－13Ⅲ, 3：9－18Ⅲ, 4：SK34F, 5：ST11 EP1111F RQ43, 6：3－15Ⅲ
7：SK355F, 8：4－13Ⅲ, 9：C区Ⅲ西・SK311, 10：SK687F.

第77図　石器実測図（7）

V　まとめ

1　遺跡・遺構について

検出された遺構は竪住居跡13棟、直径15m規模の半円に纏まる墓壙45基（石棺6基を含む）、フラスコ形土壙ほか大小のピット約1500基、墓壙域と重なる集石遺構、および石棒を埋置した掘り方を伴う立石などである。これらはその配置からA区の東西に住居域、A区南半～C区北半にかけて規模の大きなフラスコ形や袋状の土壙（貯蔵）域、D区南半に墓域が配置された状況と外観され、各々の空間が機能的に一体となって集落を構成していたと窺える。すなわち遺跡に住まいした縄文後期人は何世代かの居住期間に、結果として立石や墓域を中心とする直径60mほどの環状集落を形成したと捉えられる。

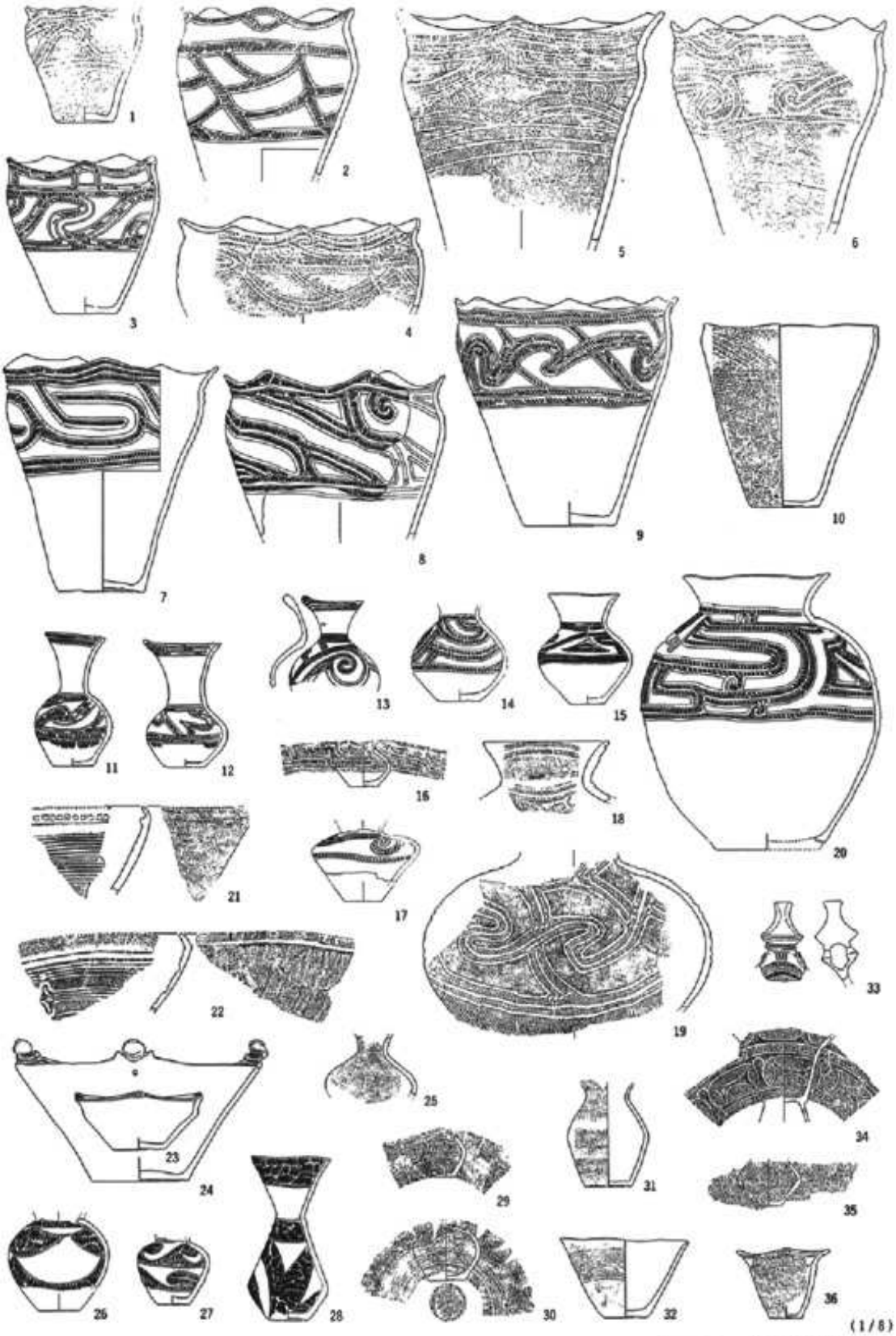
分析不足から以下に述べる立論の根拠を明確にし得ないが、住居群の構成とその重複や墓壙群の在り方などからは「一時的に存在した住居は最大で3～4棟、少なくとも三世代程度の変遷」と窺えた。視点を変えて住居群を二棟一単位と見れば「東西二群（4棟程度）による三段階の変遷」とも理解される。そしてその時期は縄文後期前葉～中葉にかけての時期であり、その主体は前葉の後半にあると出土遺物からは言えそうである。

一方、墓壙は45基ほどが検出され、その内の6基が側壁に河原石を配置する石組の棺であった。この数も東西二群の各単位群に関わる創始者などリーダーのための特別な施設で各々三世代に亙って埋葬された結果だったと推測できなくもない。土壙墓も同様に考えれば東西二群の住居群に帰属したムラ人たちのものであり、当否は別としてもリーダーを加えた一時期当たりの集落構成員は14・15人、一単位住居では7・8人と機械的には推計される。

2　遺物について（第78図）

出土遺物は土器を初めとする多種多様なものからなっている。土器はこれまで本県域においてはあまり類例の知られていなかった十腰内Ⅰ式系のまとまりが注目される（第78図上・中段）。石器では石皿、磨石、凹石などの礫石器が目につき、打製石器で石匙、削器、石錐などの加工具類および狩猟具での石鏃などにまとまりが認められた。依然として植物質食料に依存した割合の高かった結果と映る。立地的環境からすれば漁猟に関わる遺物がそれほど目立っていないのが意外でもある。

また、石製品では粘板岩製の石刀がその石材や形態および製作手法を含めて晩期前葉に多出するそれらの祖形に関わるのではないかと推測された。なお、紙数の都合から触れることができなかったが、これまで説明した以外の遺物としてあまり類例のない掌大の「パン状炭化物」（第64図12）と「アスファルト塊」（同図13）が包含層中から出土していることを付記しておく。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
(1/6)

第78図　土器集成図

<参考引用文献>

1　今井富士夫・磯崎正彦　1968「十腰内遺跡」『岩木山』

2　花泉町教育委員会　1971『貝鳥塚』

3　大槌町教育委員会　1974『崎山弁天遺跡』

4　葛西　励　1979「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号

5　大迫町教育委員会　1979『立石遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書第3集

6　本間　宏　1985　「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」
『よねしろ考古』1号

7　大迫町教育委員会　1986『観音堂遺跡』大迫町埋蔵文化財報告書第11集

8　仙台市教育委員会　1987『六反田遺跡』』仙台市文化財調査報告書第102集

9　安孫子昭二　1985・1986「加曽利B様式土器の変遷と年代（上）・(下)」
『東京考古』第7・8号

10　本間　宏　1987　「縄文時代後期初頭土器群の研究（1)」『よねしろ考古』3号

11　本間　宏　1988　「縄文時代後期初頭土器群の研究（2)」『よねしろ考古』4号

12　高橋忠彦　1989　「秋田県の縄文時代後期の土器」
『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』

13　鹿角市教育委員会　1985～1989『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書（1）～(2)』

図　　版

遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（北西から）

図版2

遺跡遠景（南から）

遺跡近景（北西から）

遺跡全景（北西上空から）

遺跡全景（南上空から）

図版 4

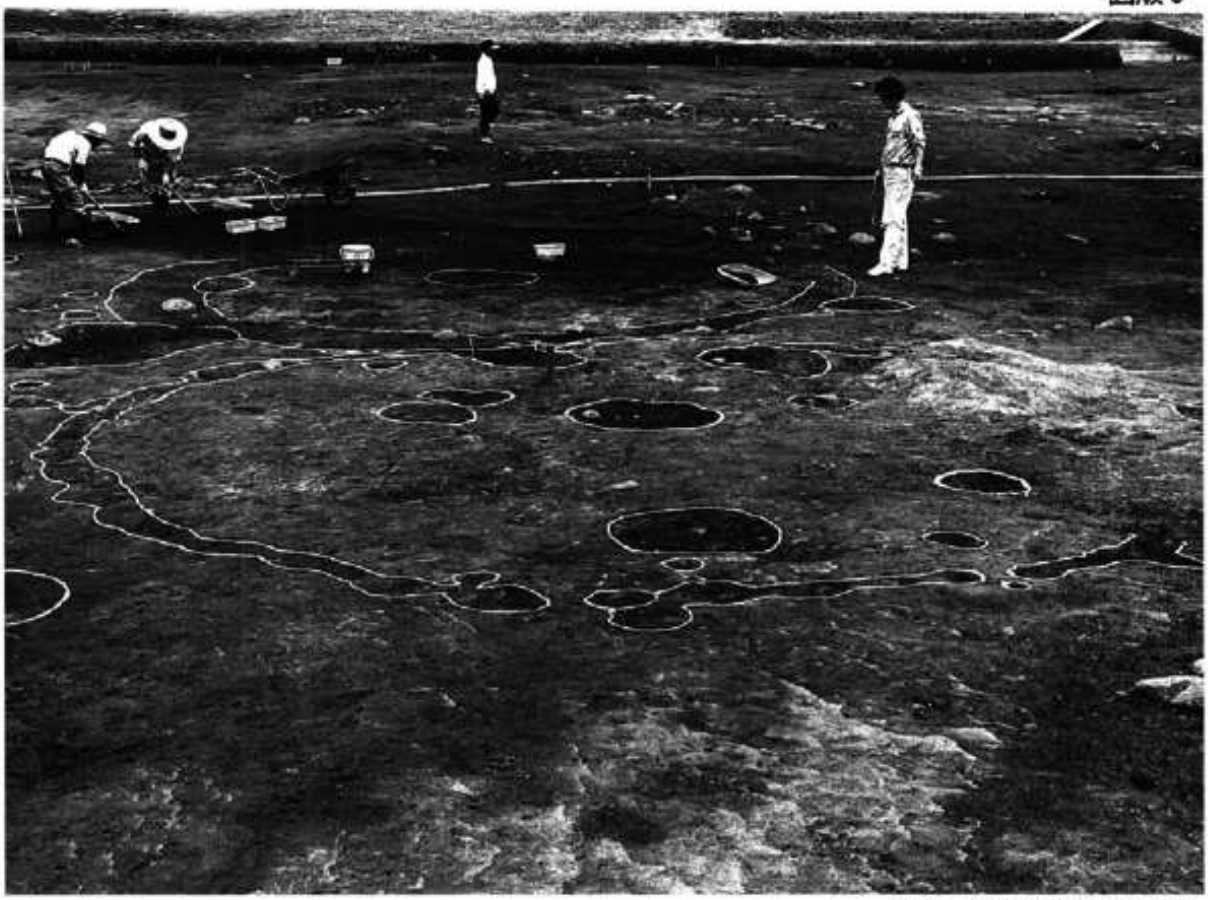
遺跡全景（南西上空から）

A区西壁土層断面（南東から）

B区西壁土層断面（北東から）

C区北壁土層断面（西南から）

D区中央土層断面（北西から）



ST 1 ・ 2検出状況（西から）

ST 1 （西から）

図版 6

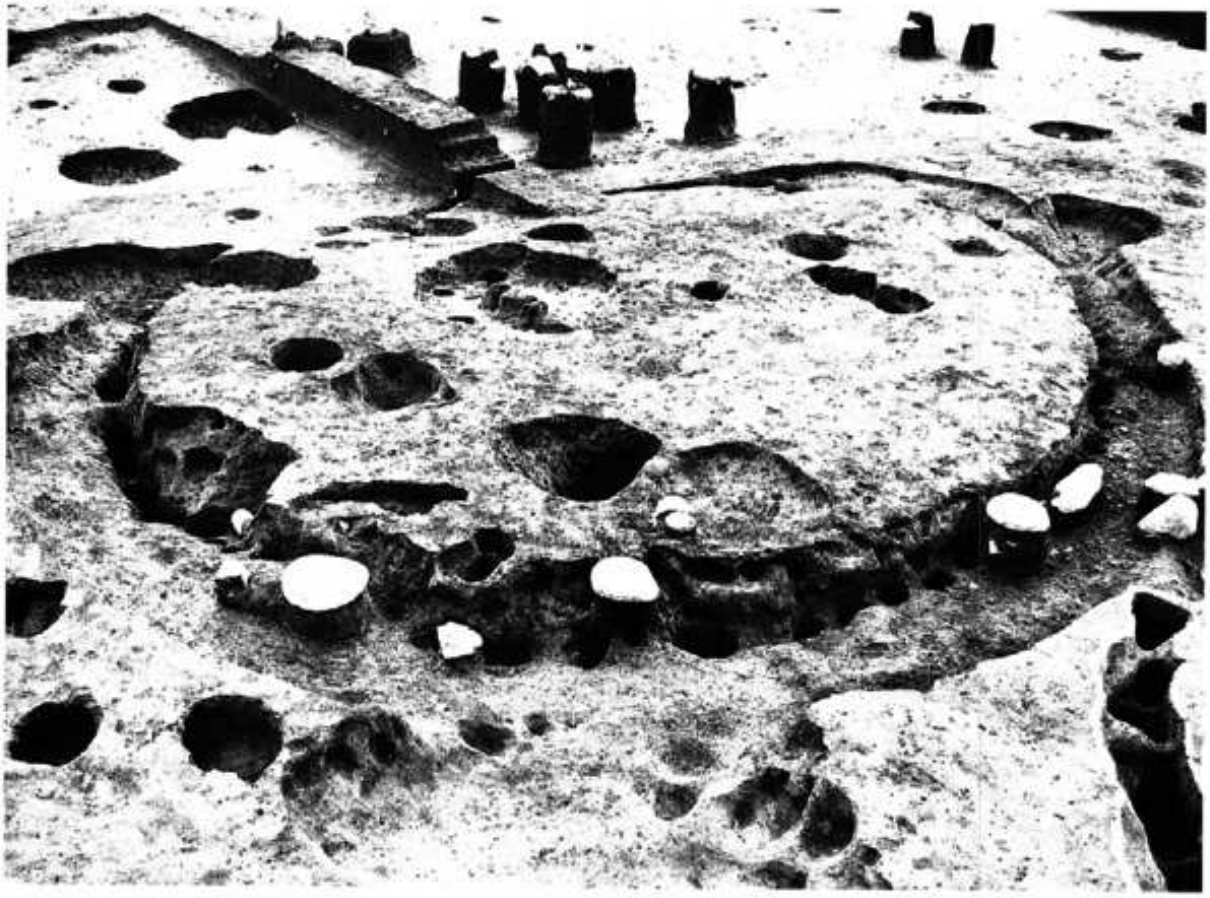
ST 1 （南から）

ST 1 （北から）

ST 2 ・ 1 （東から）

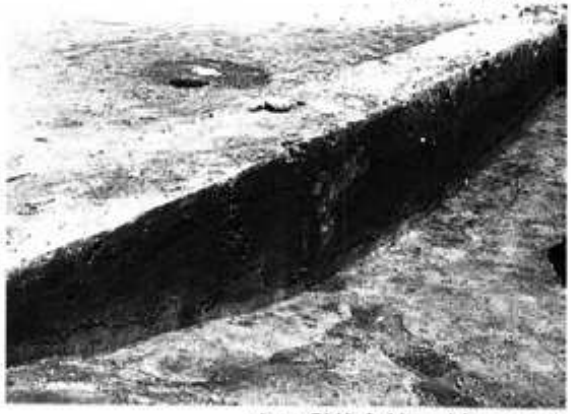
ST 2 （南から）

図版 8



ST 2 （西から）

ST 2 （南から）



ST 2 壁柱穴断面（南西から）

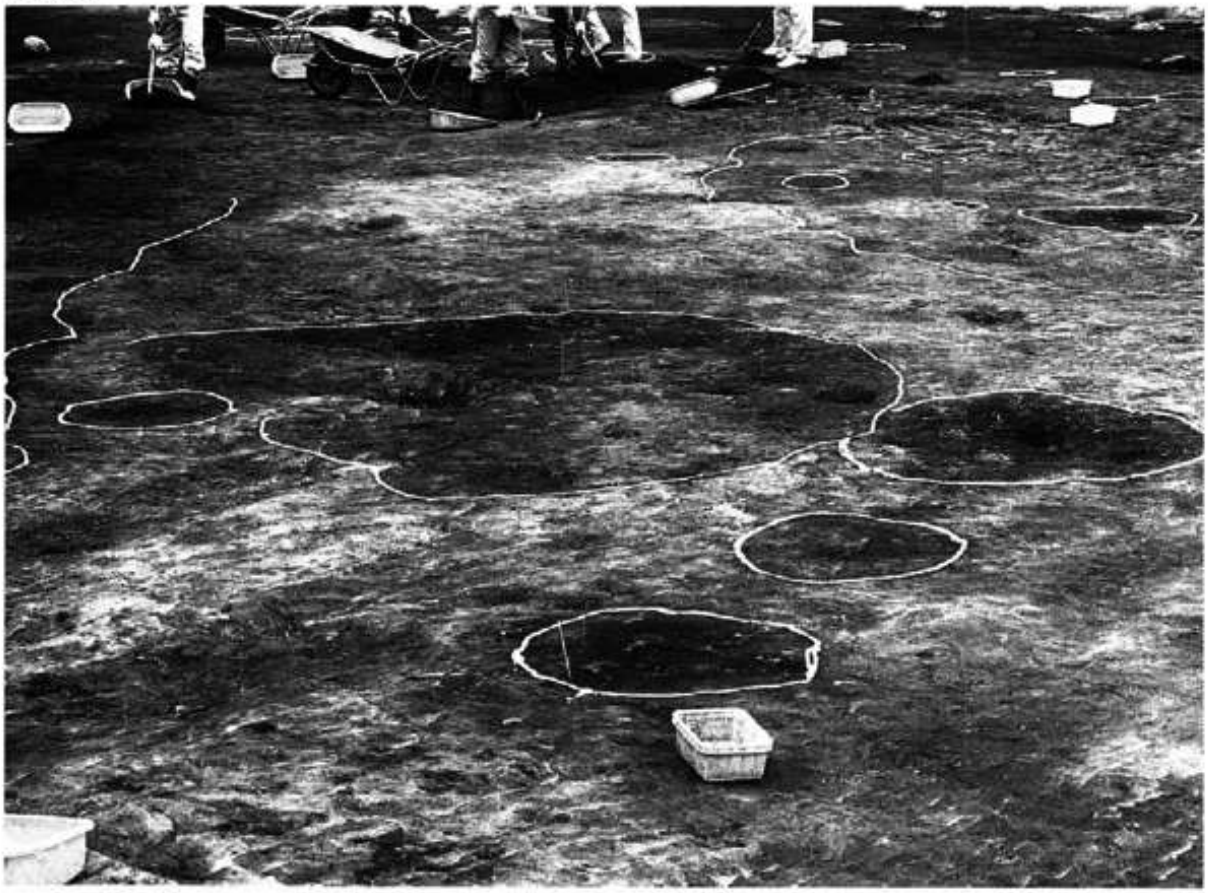
ST 2 壁柱穴（南から）

ST 2 壁柱穴断面（東から）

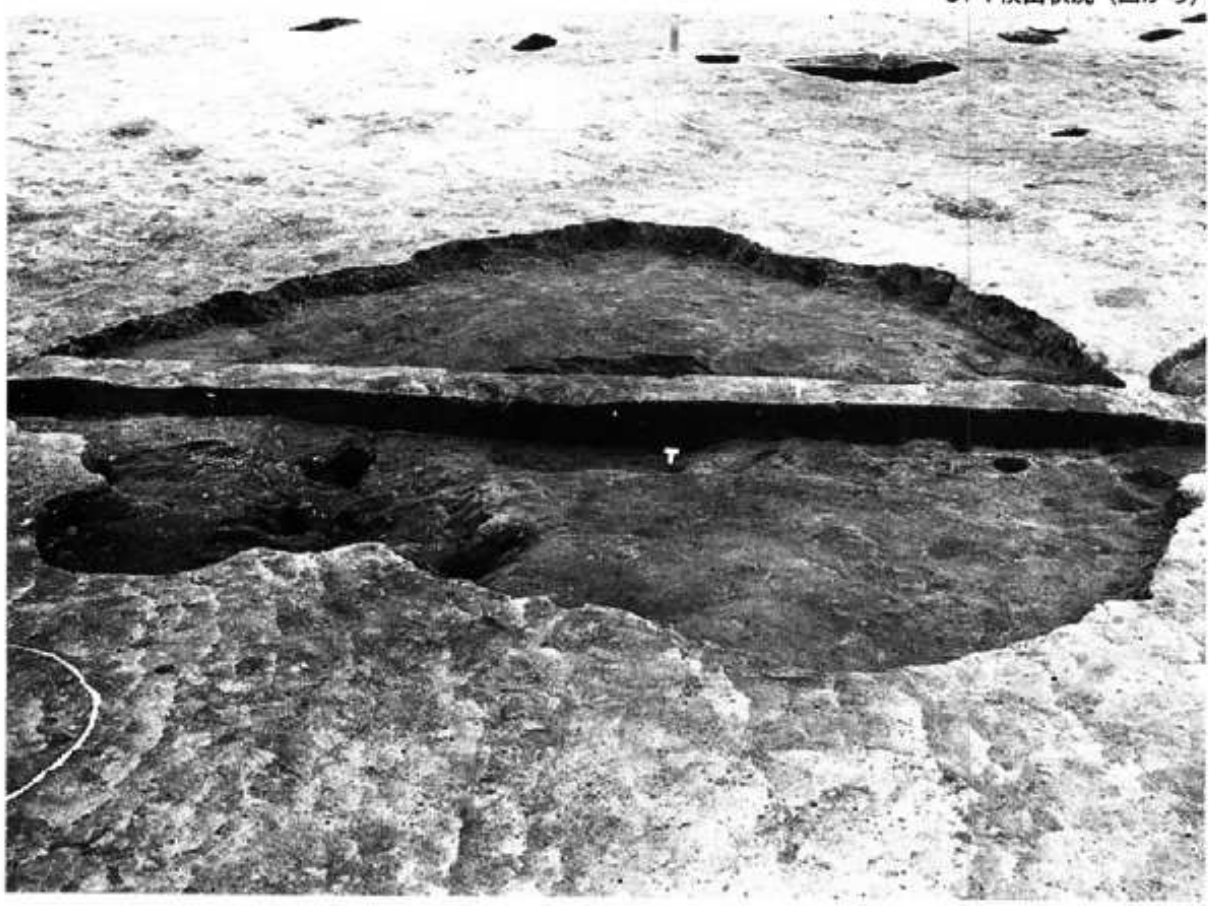
ST 3 （北西から）

ST 3 （北から）

図版10



ST 4 検出状況（西から）



ST 4 （西から）

ST 4 （西から）

EL21 （南から）

EL21土層断面 （西から）

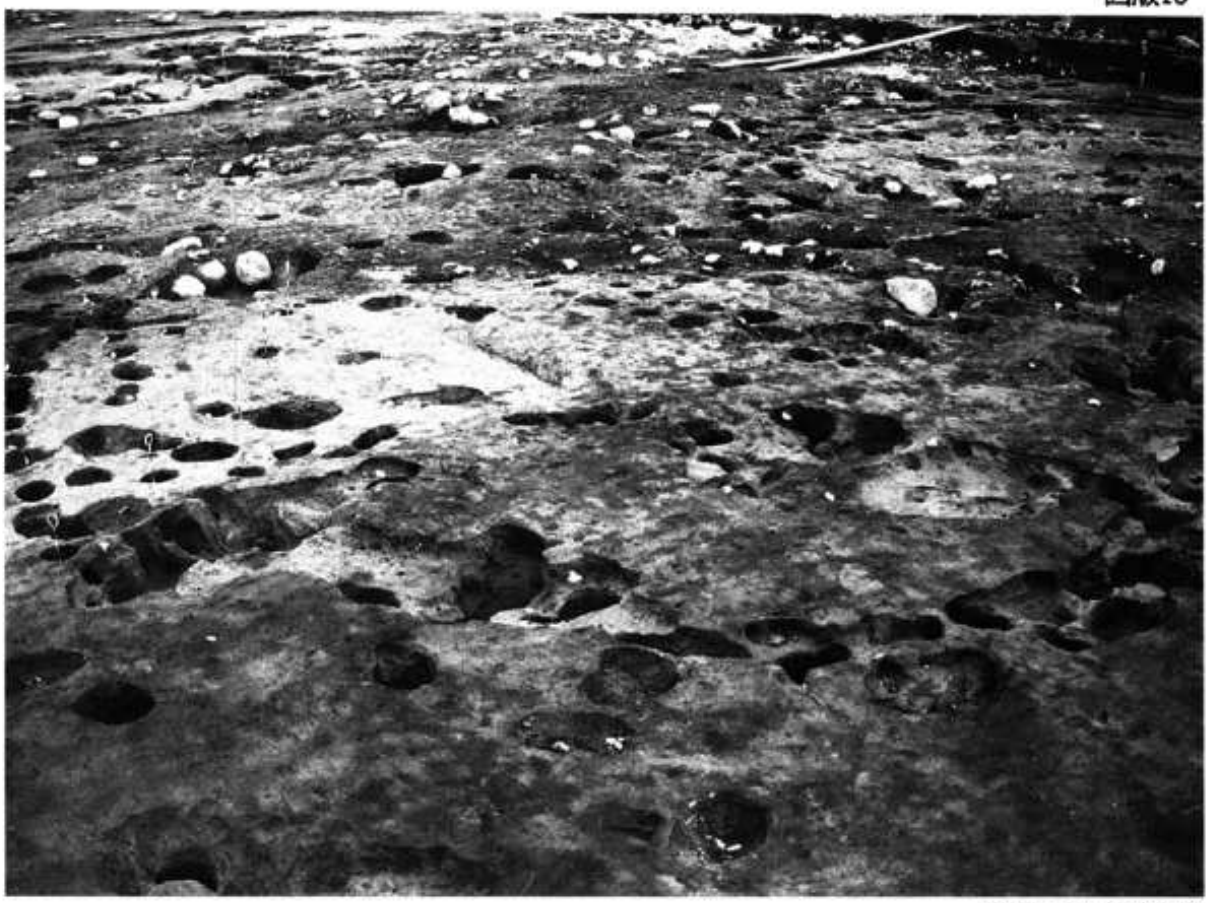
ST 4 （南から）

ST 3 （東から）

図版12

ST 5 （南から）

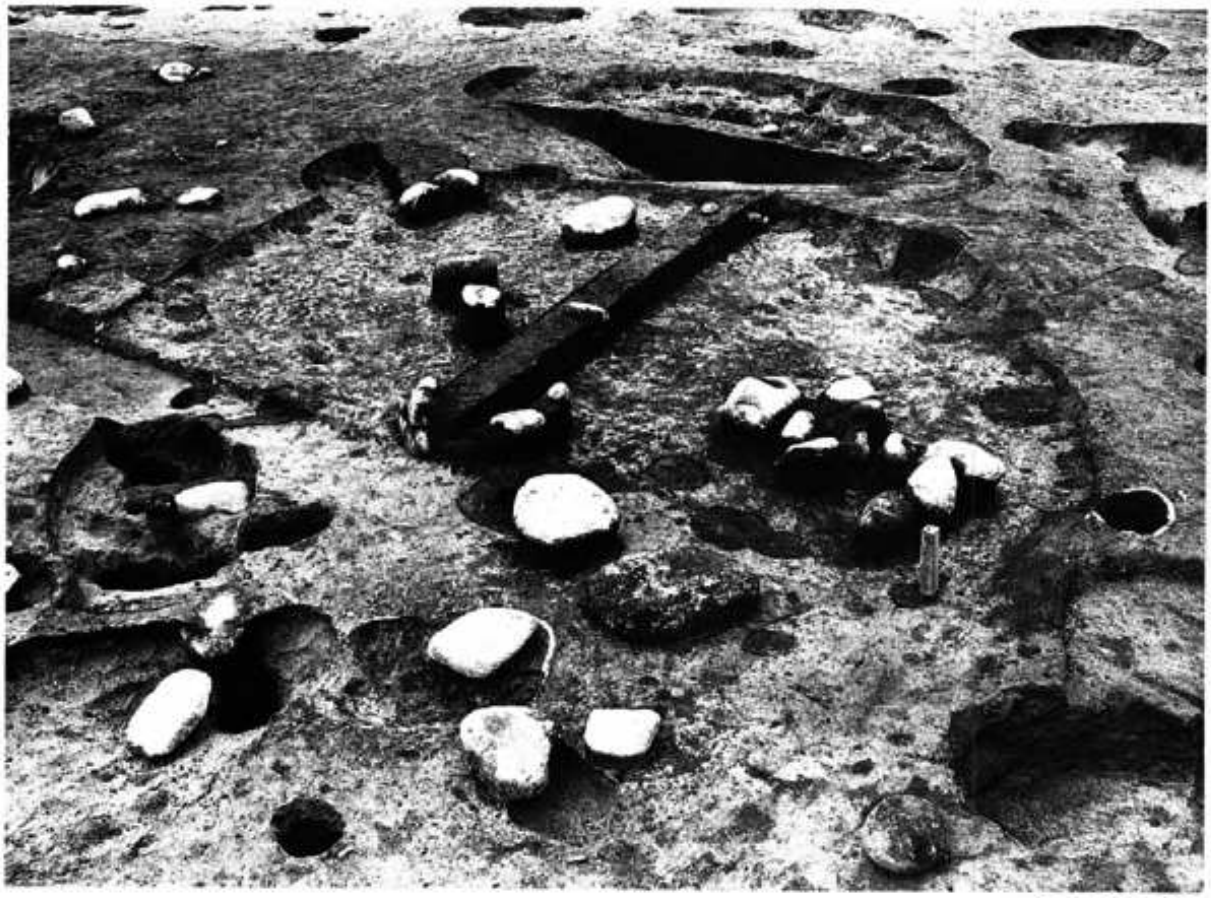
ST 6 ・ 9 ・ 10 （北から）



ST 6 ・ 7 （南から）

ST 7 ・ 6 （北から）

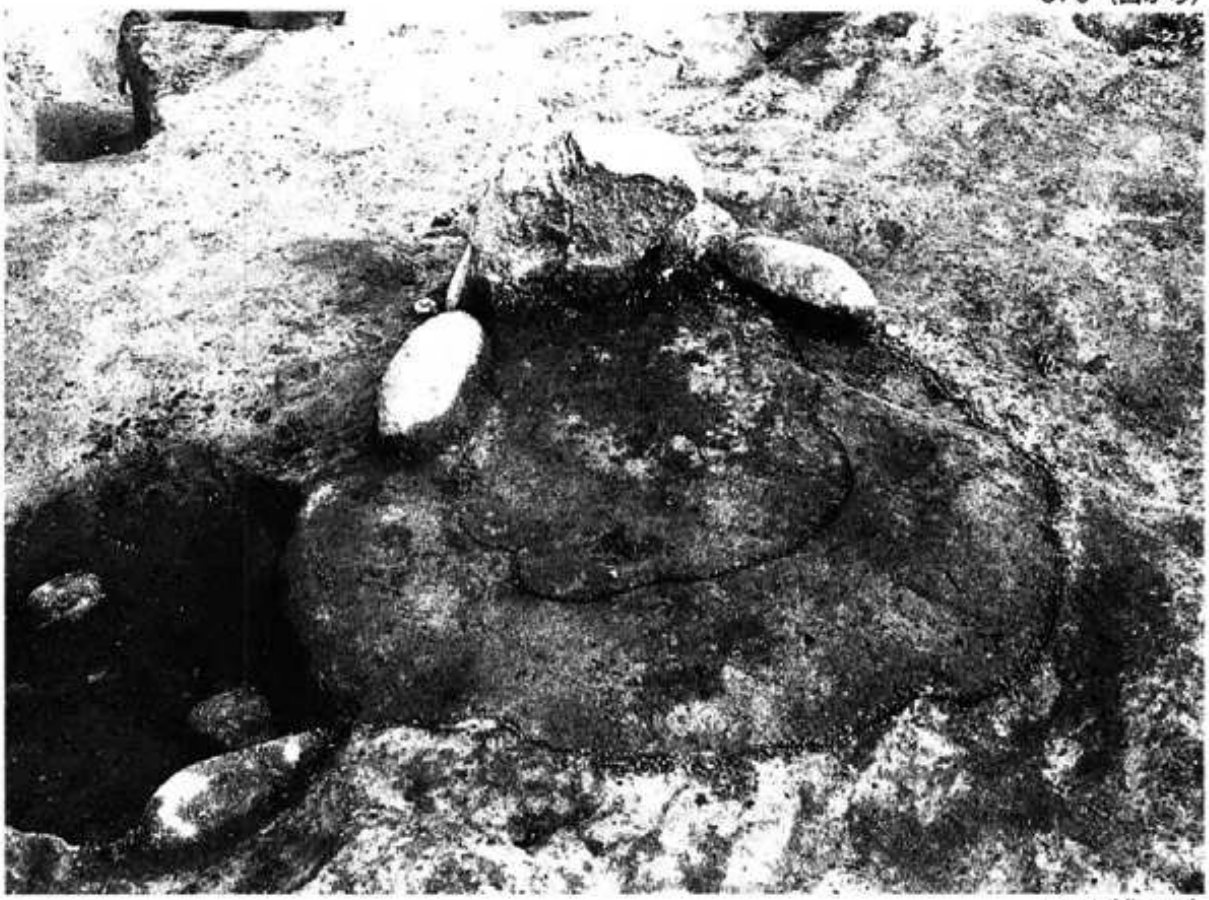
図版14



ST 8 （東から）

ST 8 （西から）

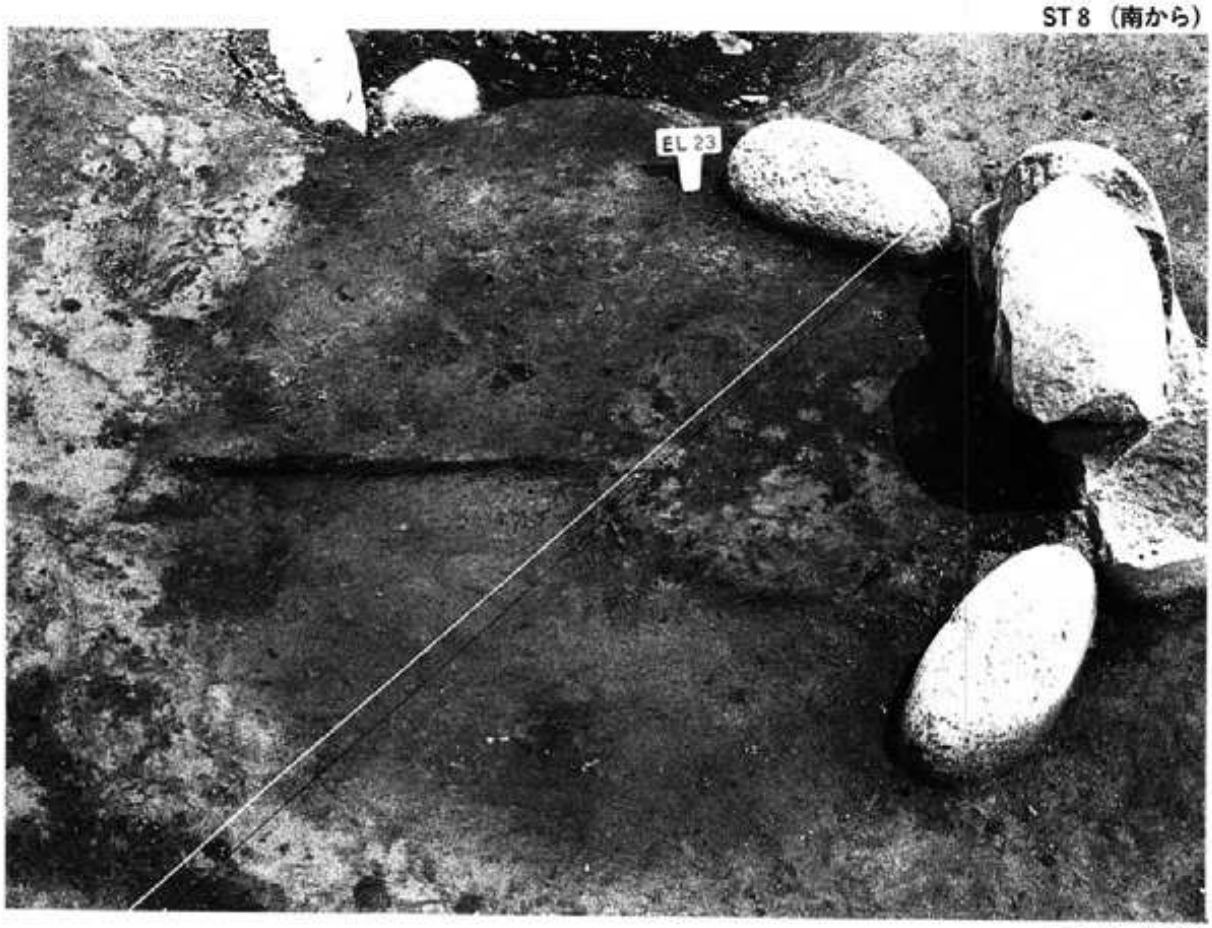
ST 8 （西から）



EL23 （北から）

図版16

ST 8 （南から）



EL23 （西から）

ST 9 （北から）

ST 9 （東から）

図版18

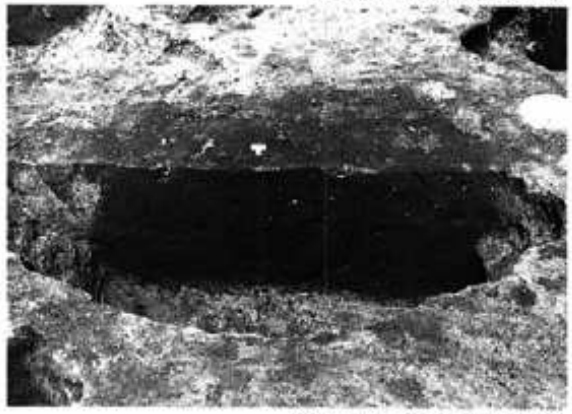
SK337土層断面（南から）

SK337遺物出土状況（北から）

SK355土層断面（南から）

SK400・1093（北から）

SK412土層断面（西から）



SK418土層断面（南から）

SK445　RP32（北から）

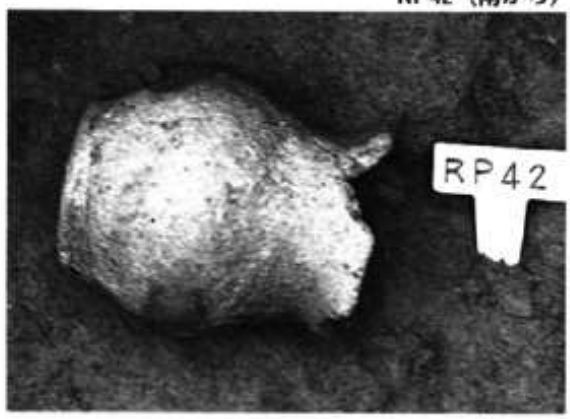
SK645土層断面（南から）

SK619（南から）

RP40（南から）

RP42（南から）

SK1044　RP35（西から）



RP42（南から）

図版20

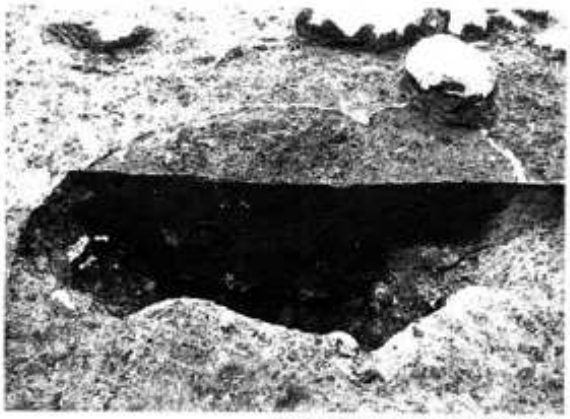
SK688土層断面（南から）

SK688遺物出土状況（南から）

RP37（南から）

SK1051（西から）

SK1095土層断面（南から）



SK1052土層断面（南から）

SK1052土層断面（南から）

SK661土層断面（南から）

SK1091土層断面（西から）

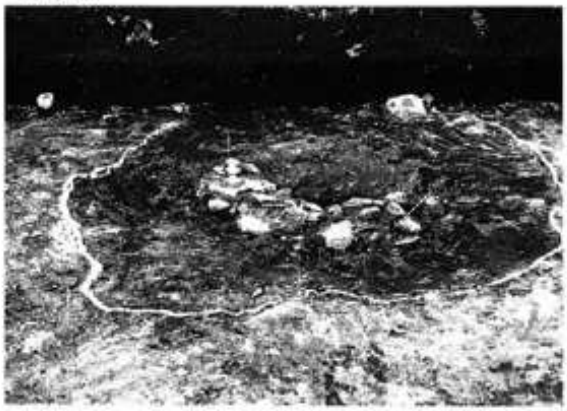
SK1096土層断面（東から）

SK356土層断面（東から）

SK1112（南から）

RQ46・47（南から）

図版22

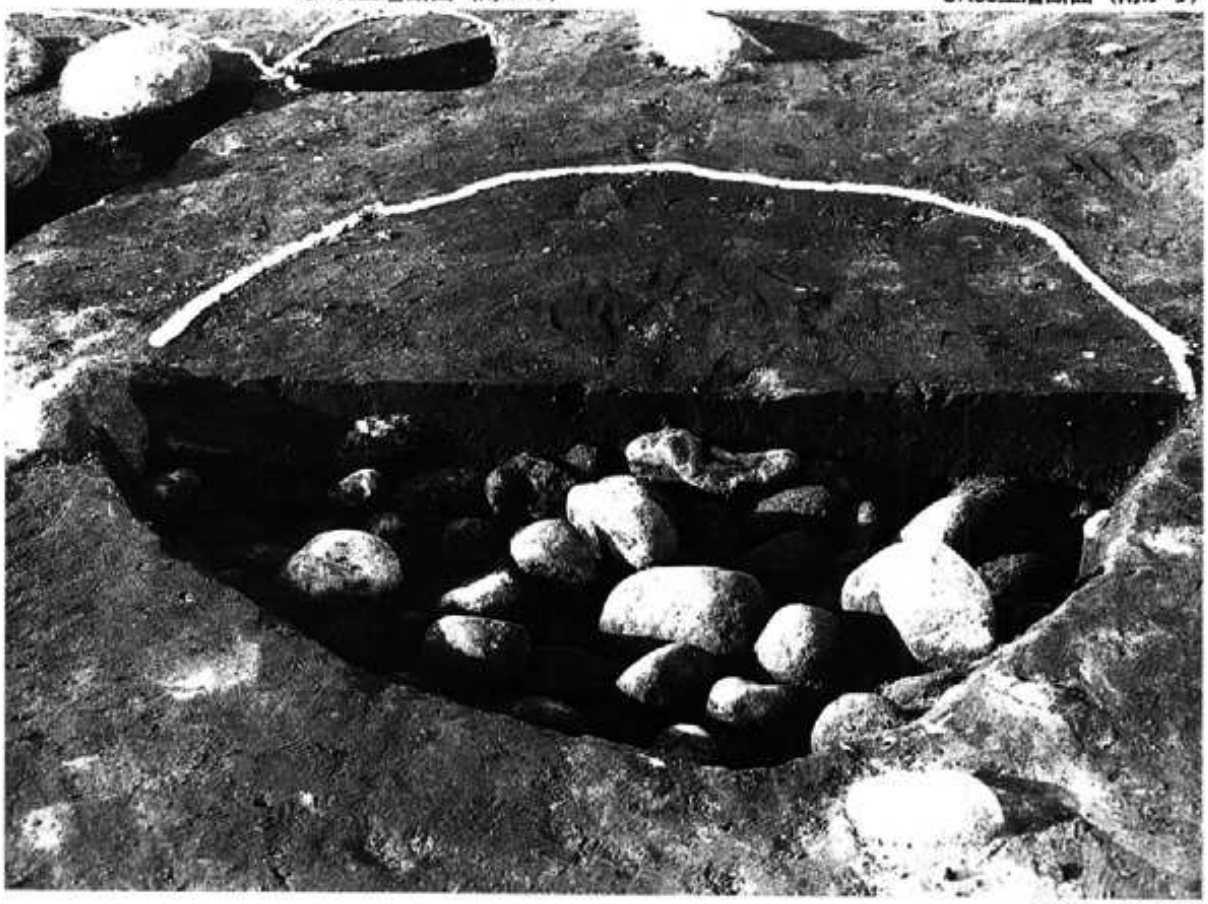


SK32遺物出土状況（南から）

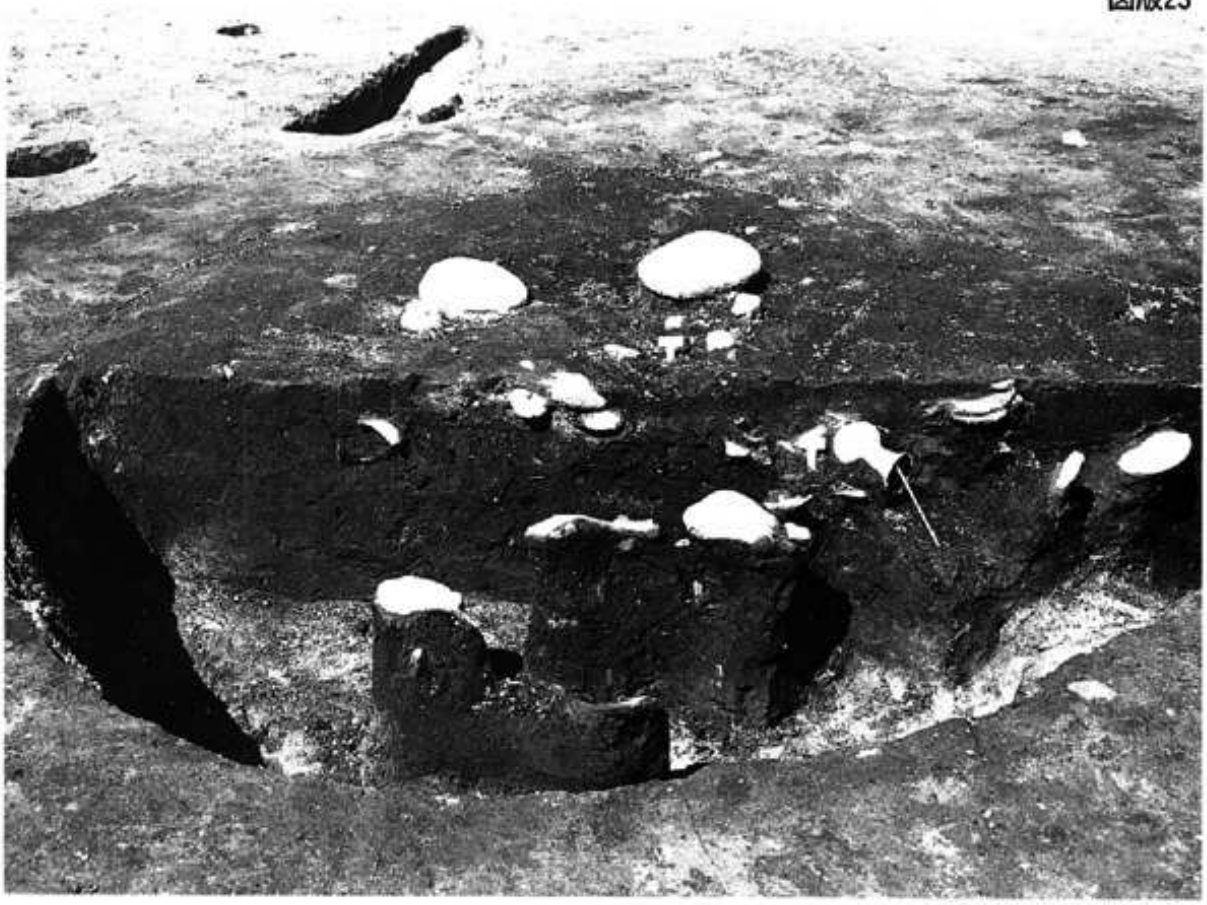
SK32土層断面（北から）

SK31土層断面（南から）

SK33土層断面（南から）



SK30（南から）

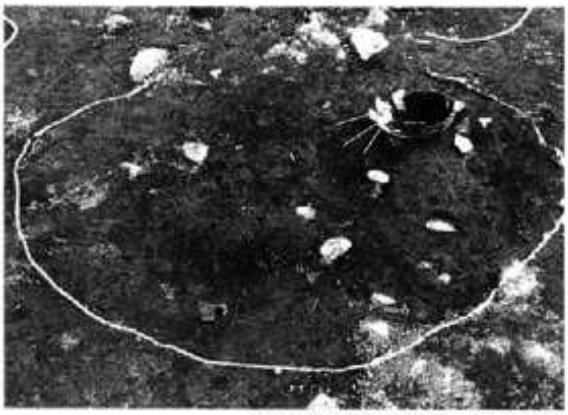


SK34土層断面（南から）

RP18（東から）

図版24

SK36土層断面（西から）

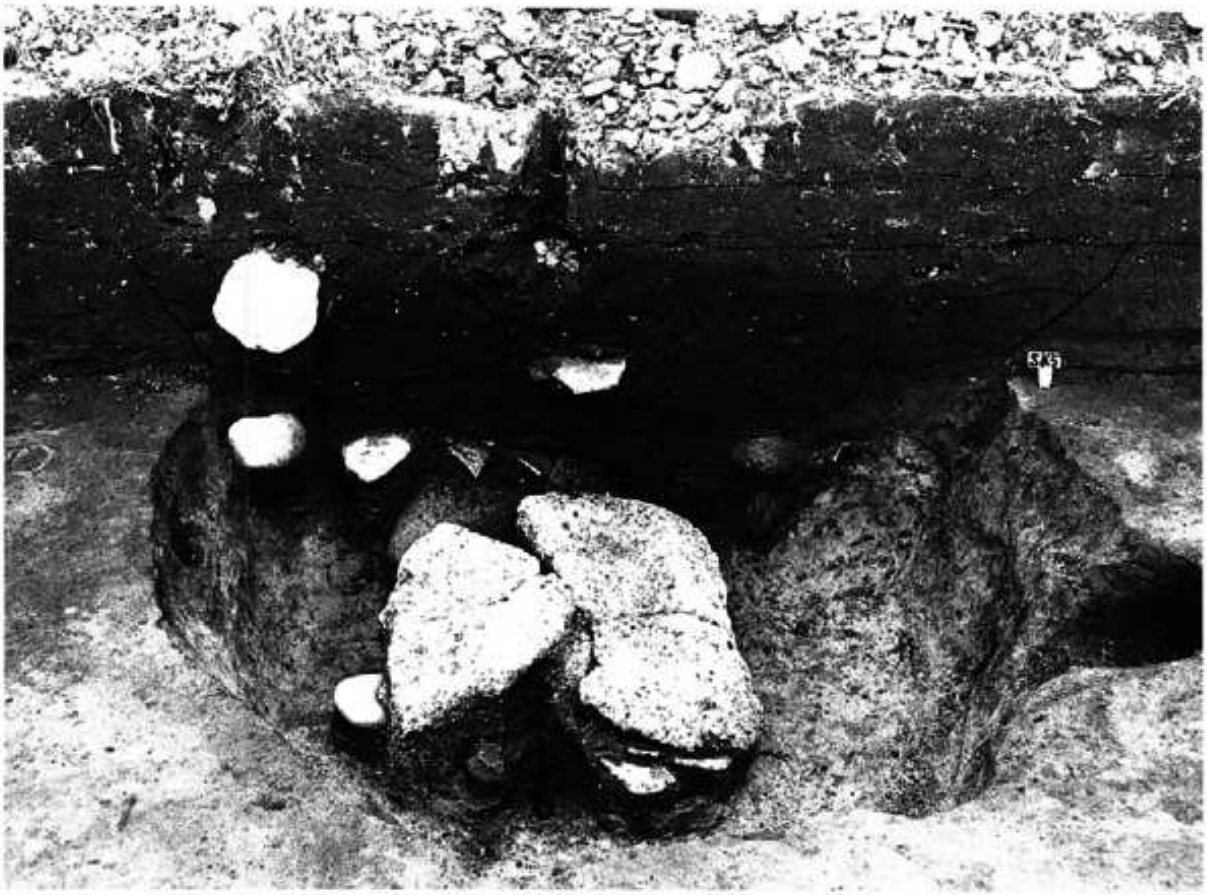


SK36遺構検出状況（西から）

SK36完掘状況（西から）

RP10　SK36（南から）

RP10　SK36（北から）



SK59土層断面（東から）

SK60土層断面（東から）

図版26

SK83土層断面（南から）

RQ３（南から）

SK115土層断面（西から）

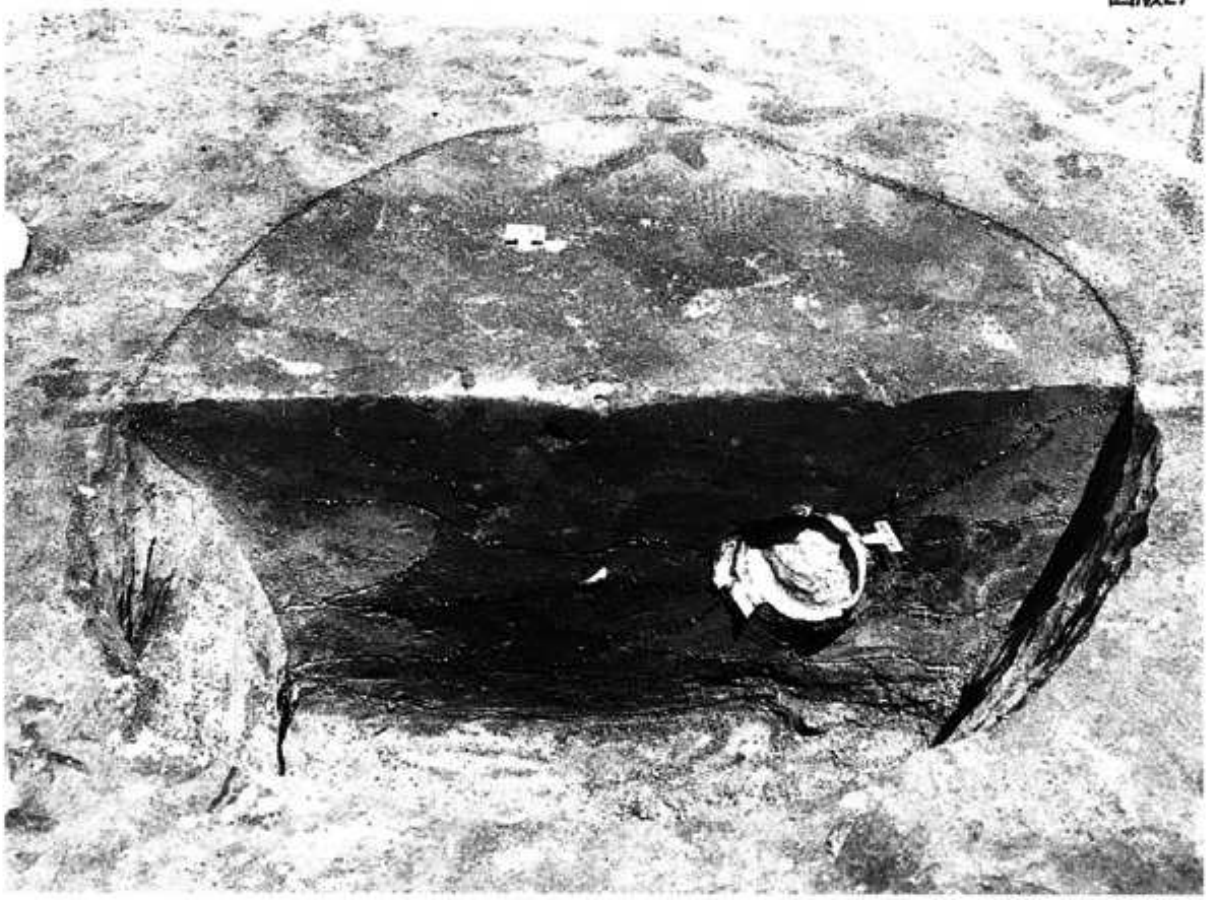
RP21（西から）

SK151（西から）

RP23（南から）

SK137土層断面（南から）

SK137完掘状況（南から）



SK174土層断面（南から）

SK174土層断面（南から）

RP16（南から）

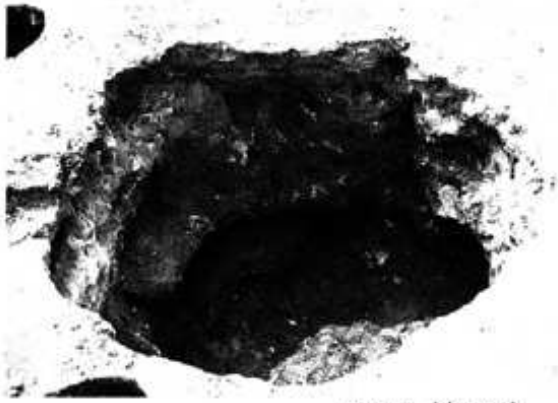
RP15　SK174（東から）

RP15（西から）

図版28

SK134土層断面（南から）

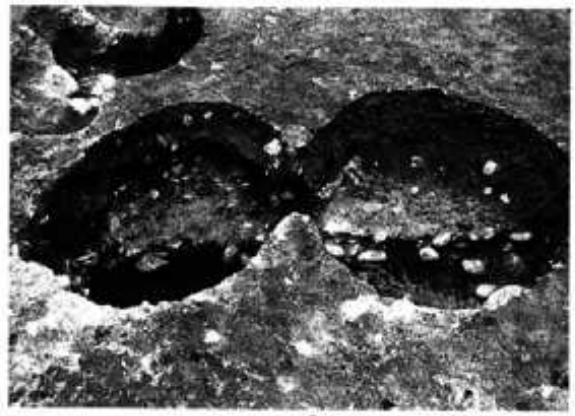
SK181（南から）



SK184（南から）

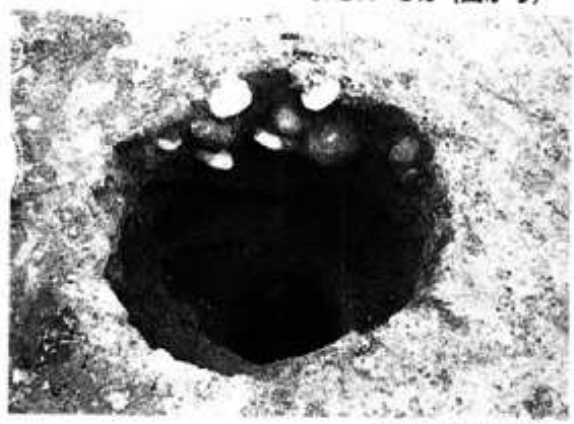
SK208（南から）

SK237　RP19（南から）

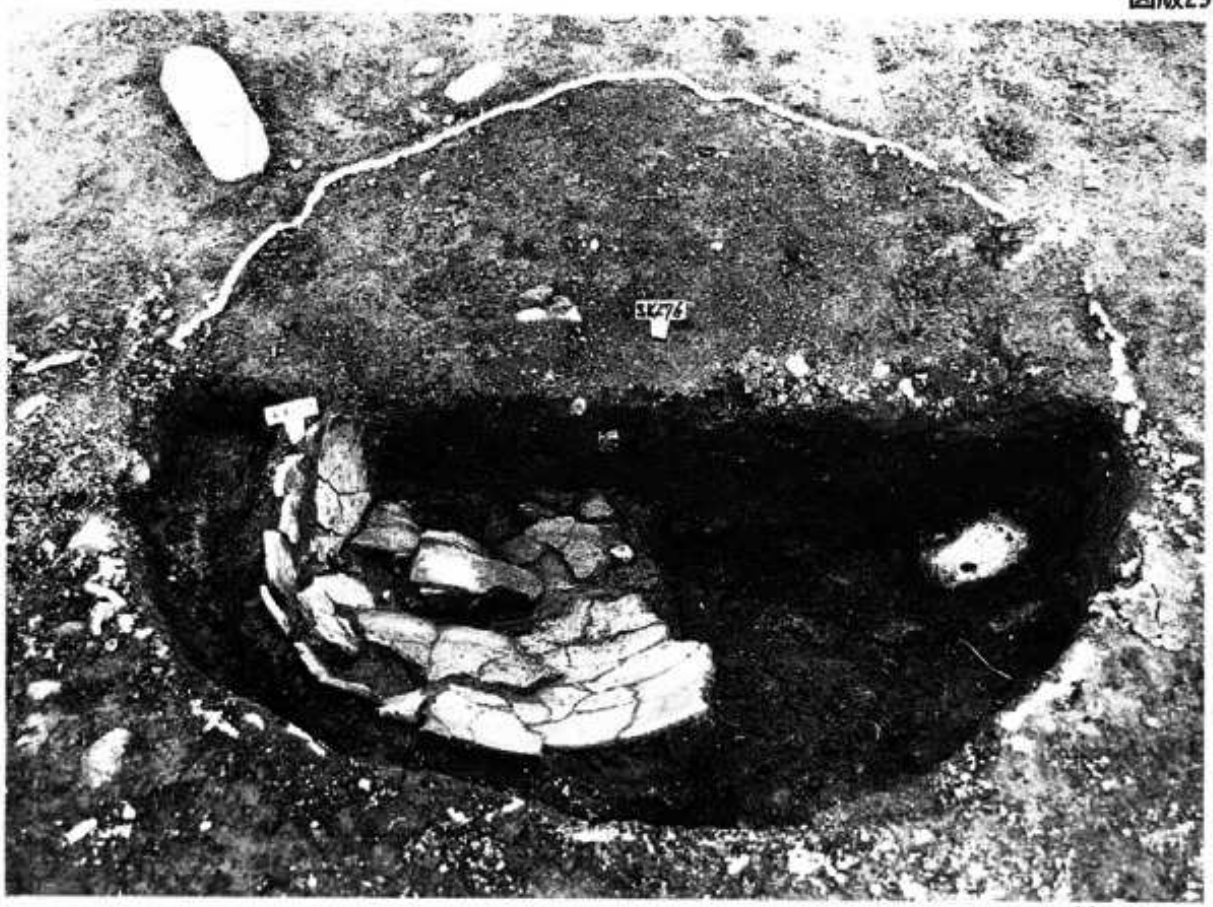


SK244・245（西から）

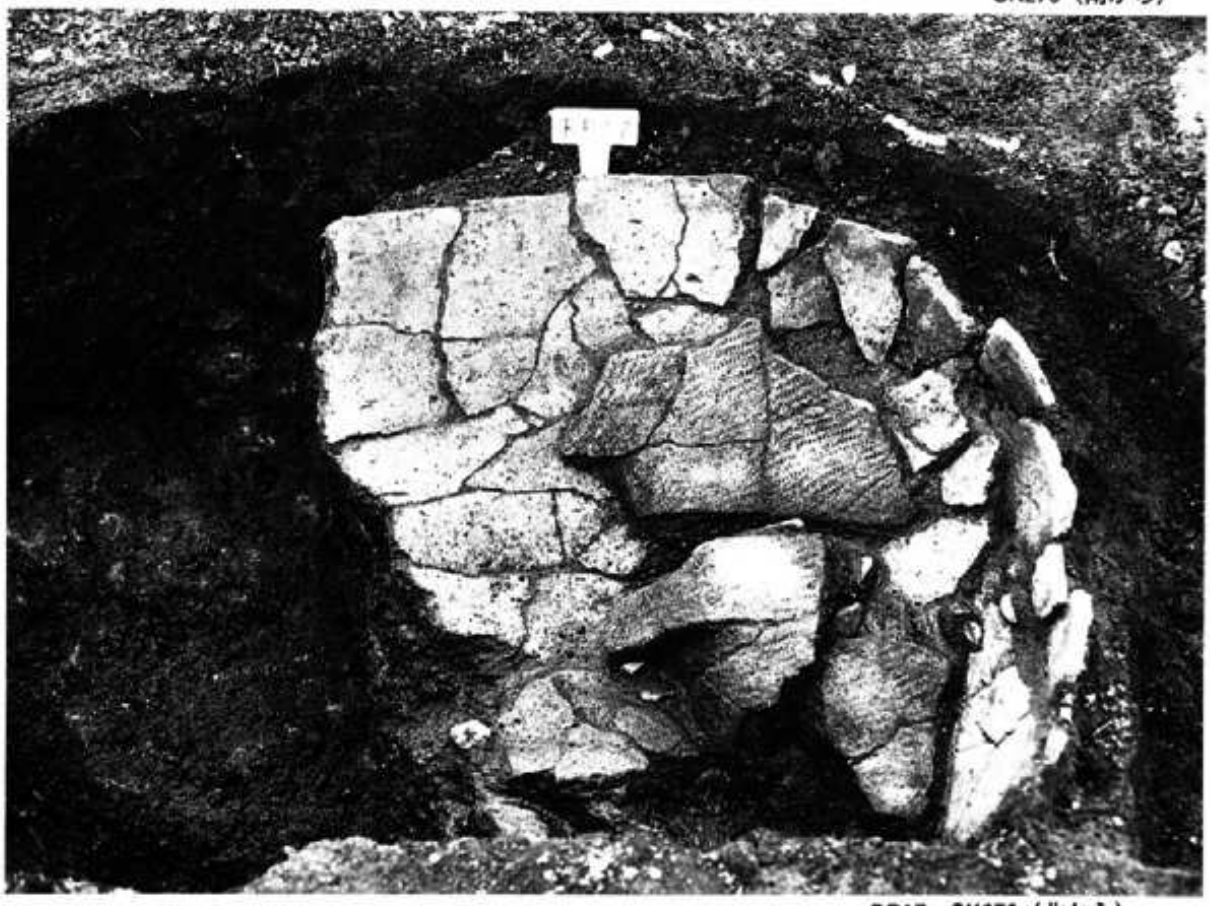
SK252（南から）



SK253（西から）

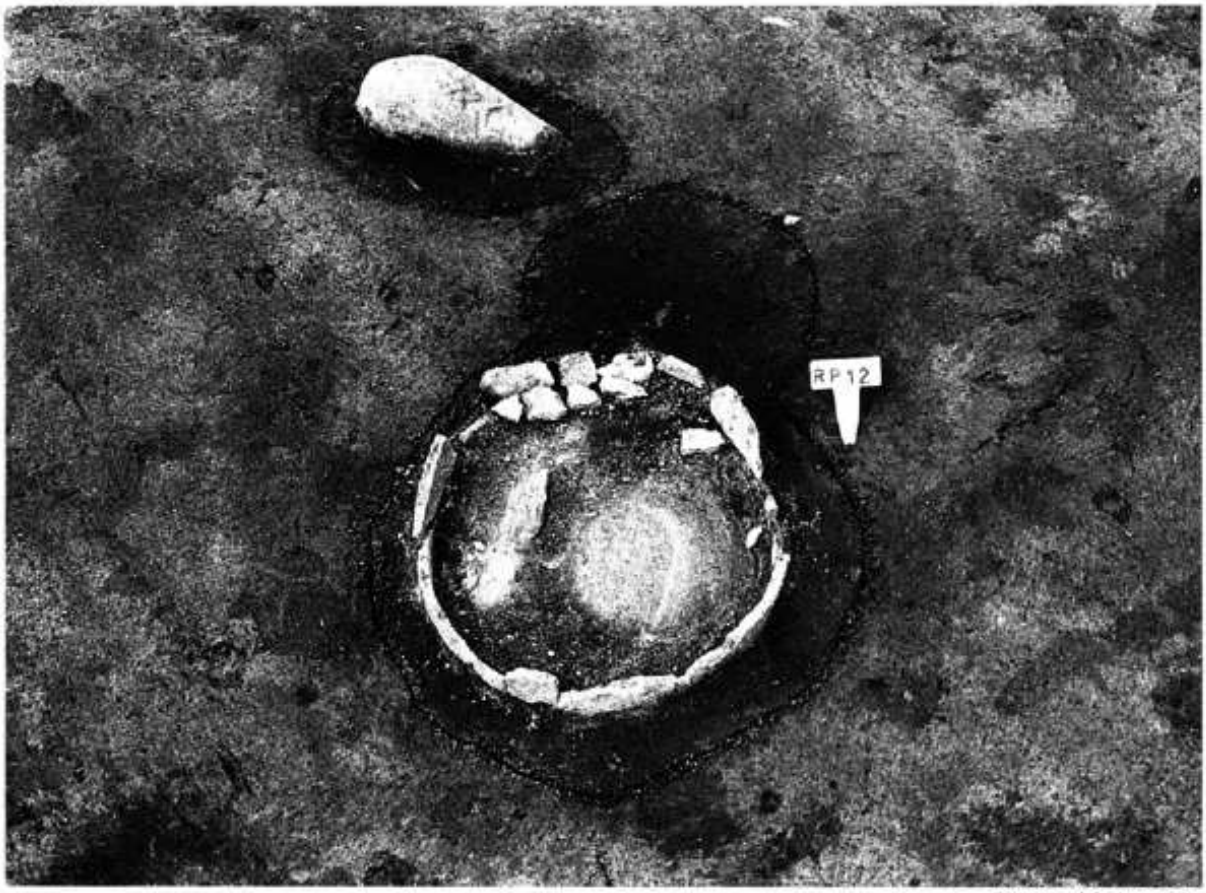


SK276（南から）



RP17　SK276（北から）

図版30



EU320（南上から）

EU320　RP12（南から）

SK1534（南から）

SK1554（南から）

SK1213土層断面（南西から）

SK1468土層断面（西から）

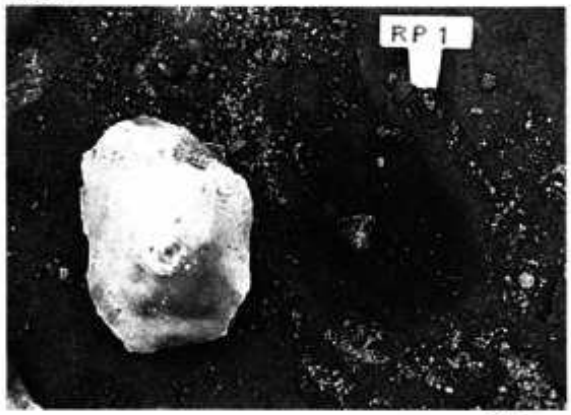
SK1572（南から）

RP51　SK1572（南から）

SK1572（南から）

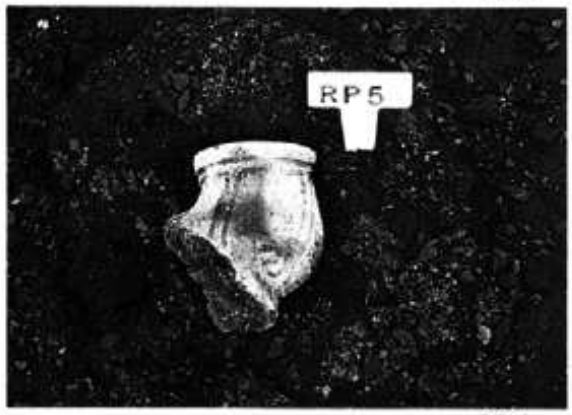
RP52　SK1572（南から）

図版32



RP 1

RP 7



RP 5

RP 6

RP 8

RP14

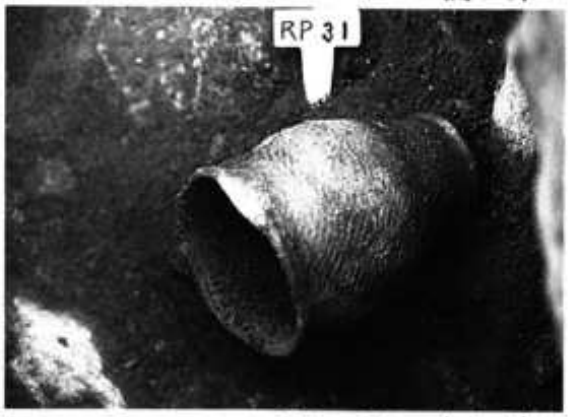
RP24

RP26

RP27

RP28　EU321（南から）

RP30



SP31　SK337（西から）

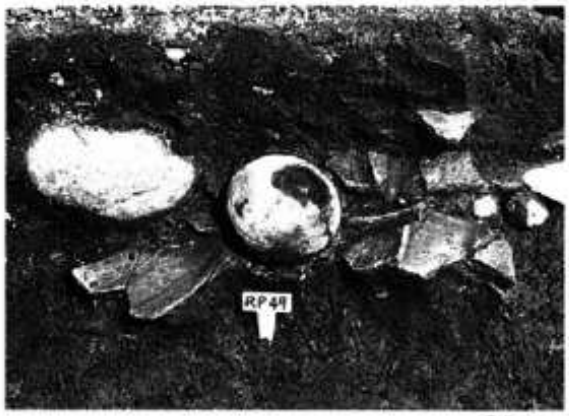
RP33　ST 2 周溝

SP35　SK1044（西から）

RP36　SK1052（西から）

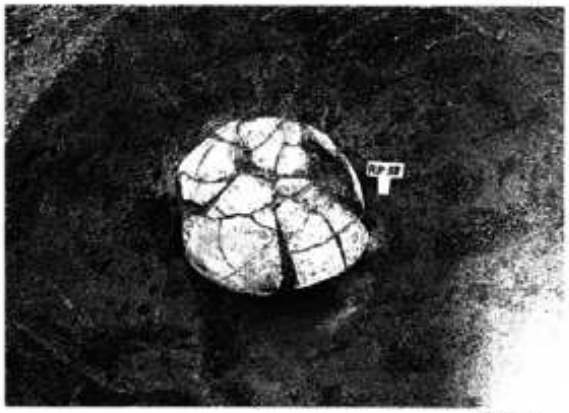
RP45　SK612（西から）

図版34



RP49

RP56

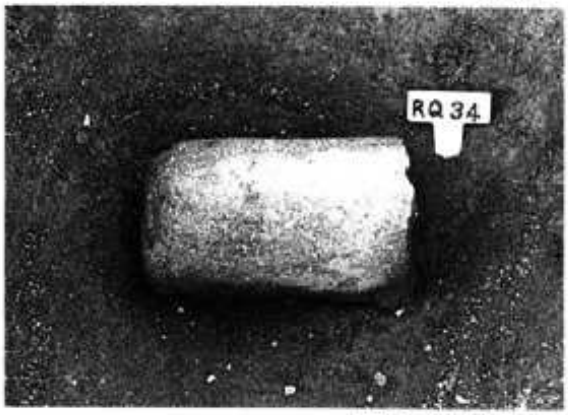


RP58

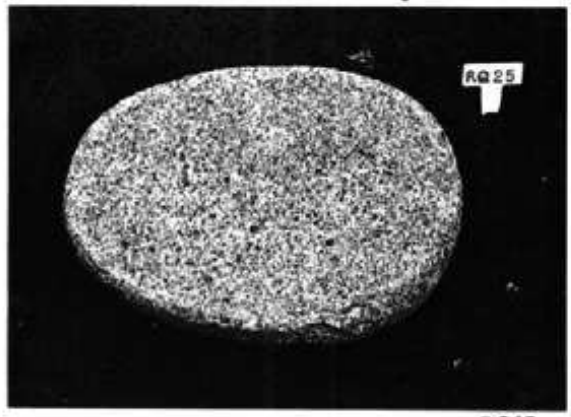
RP59

RQ29

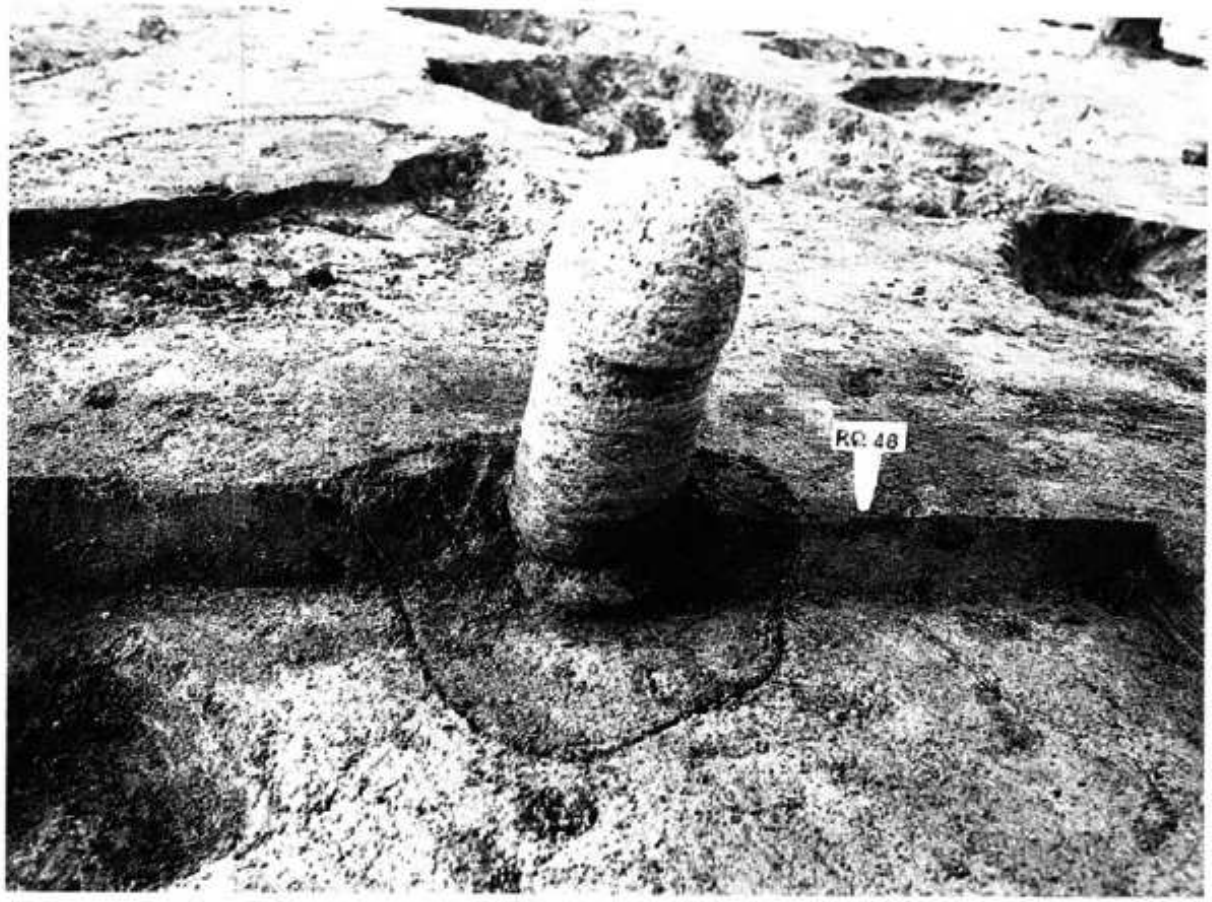
RQ43　SK1111



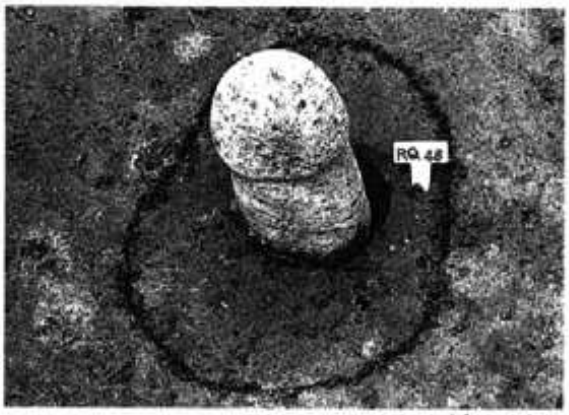
RQ34　ST 2 周溝



RQ25



RQ48（南から）



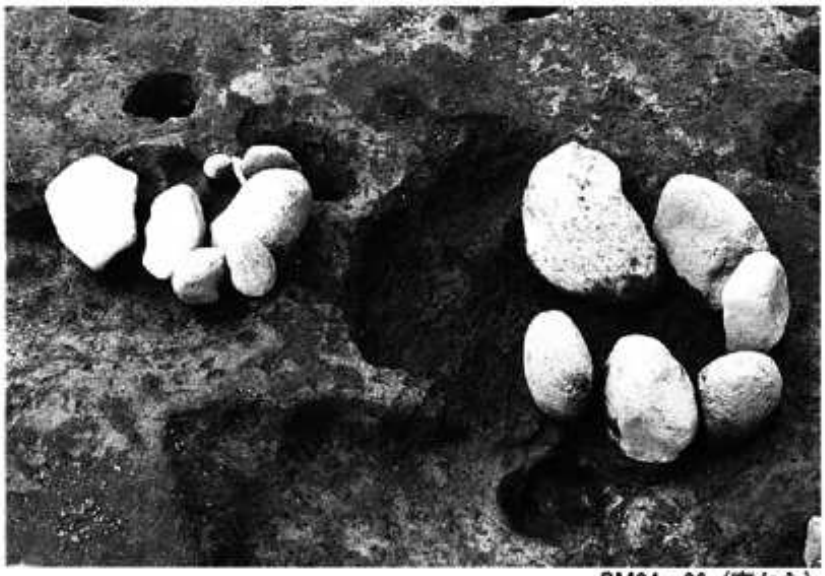
RQ48（南から）

RQ48（東から）

RQ48（北から）

集石・墓壙（北から）

図版36

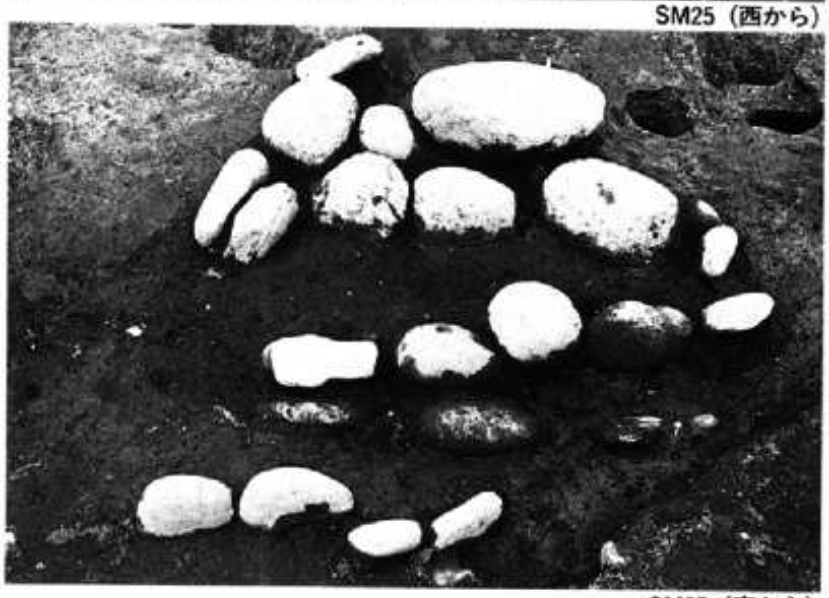


SM24・26（南から）

SM24（西から）

SM26（西から）

SM25（西から）



SM25（南から）

SM25（南から）

図版38

SM27（西から）

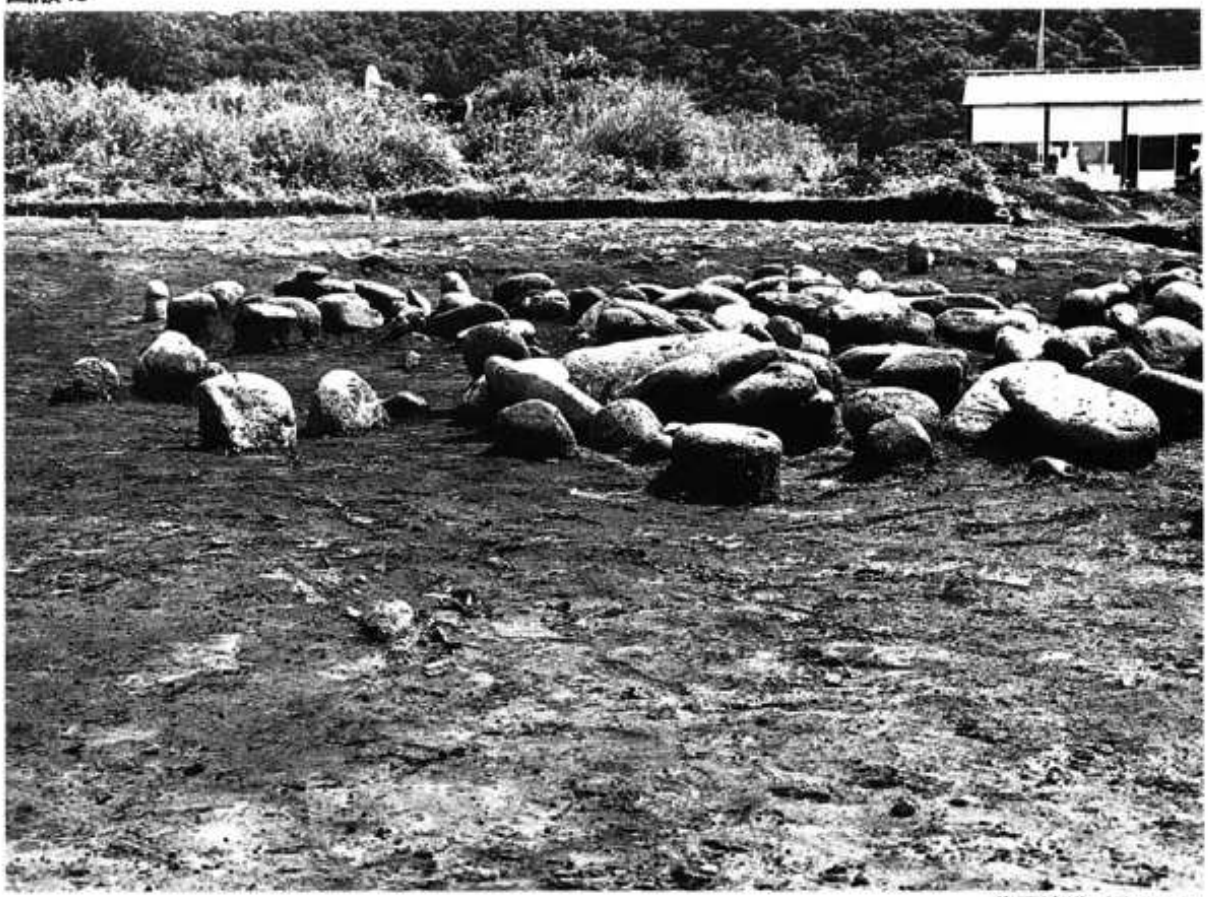
SM27（南から）

SM28（南から）

SM28（南から）

SM28（南から）

図版40



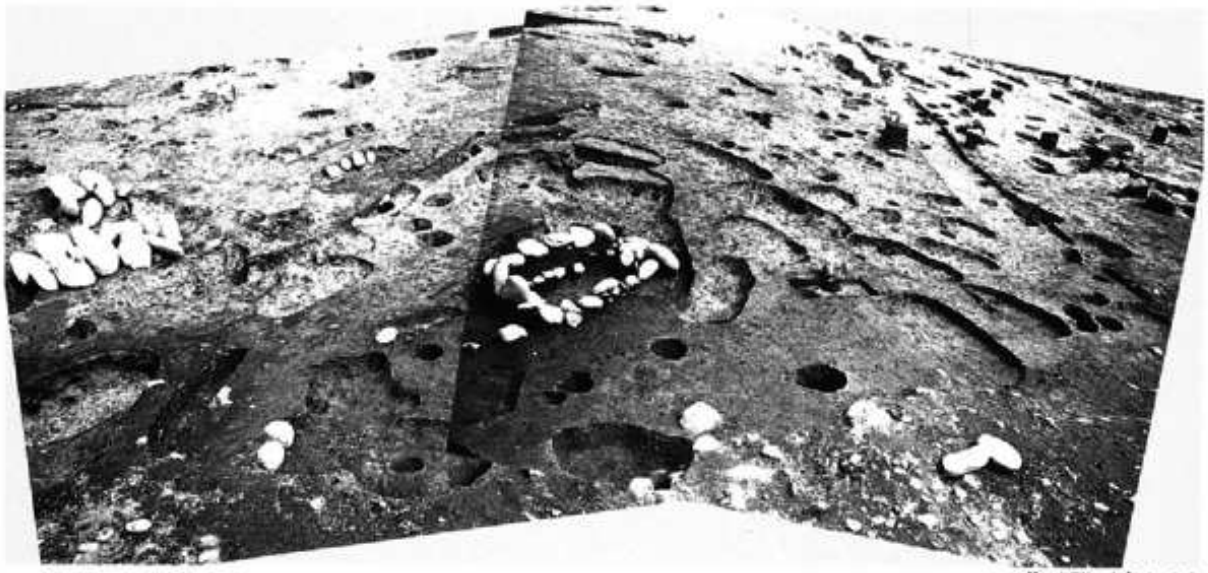
集石遺構（北から）

集石遺構（北から）

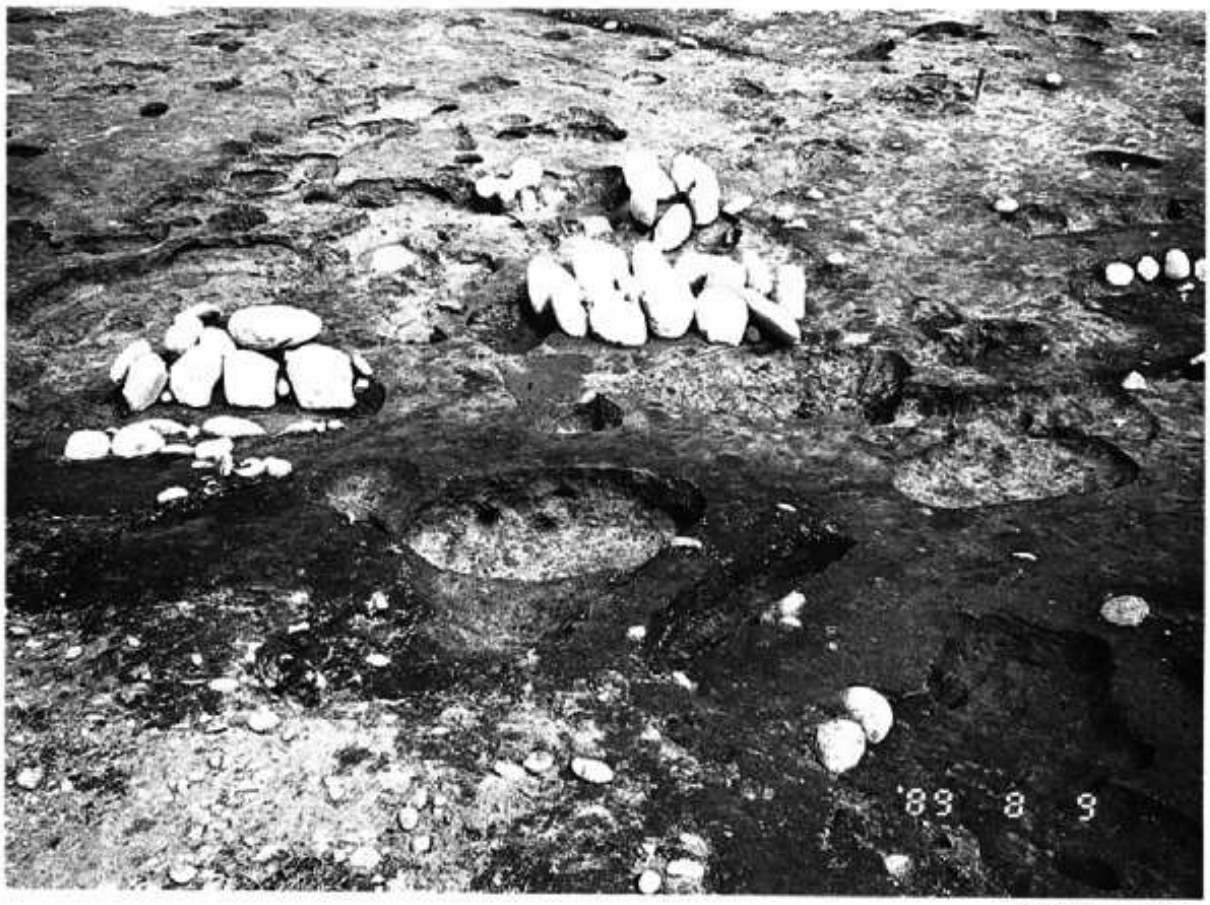
墓壙検出状況（東から）

墓壙検出状況（南から）

図版42



墓壙群（南から）



墓壙群（南から）

A区全景（北から）

A・D区全景（北から）

B区全景（北から）

B区北西側（北東から）

図版46

C区全景（北から）

C区西側（東から）

図版47

D区全景（北西から）

図版48

調査風景（東から）

調査風景（北から）

調査風景（北から）

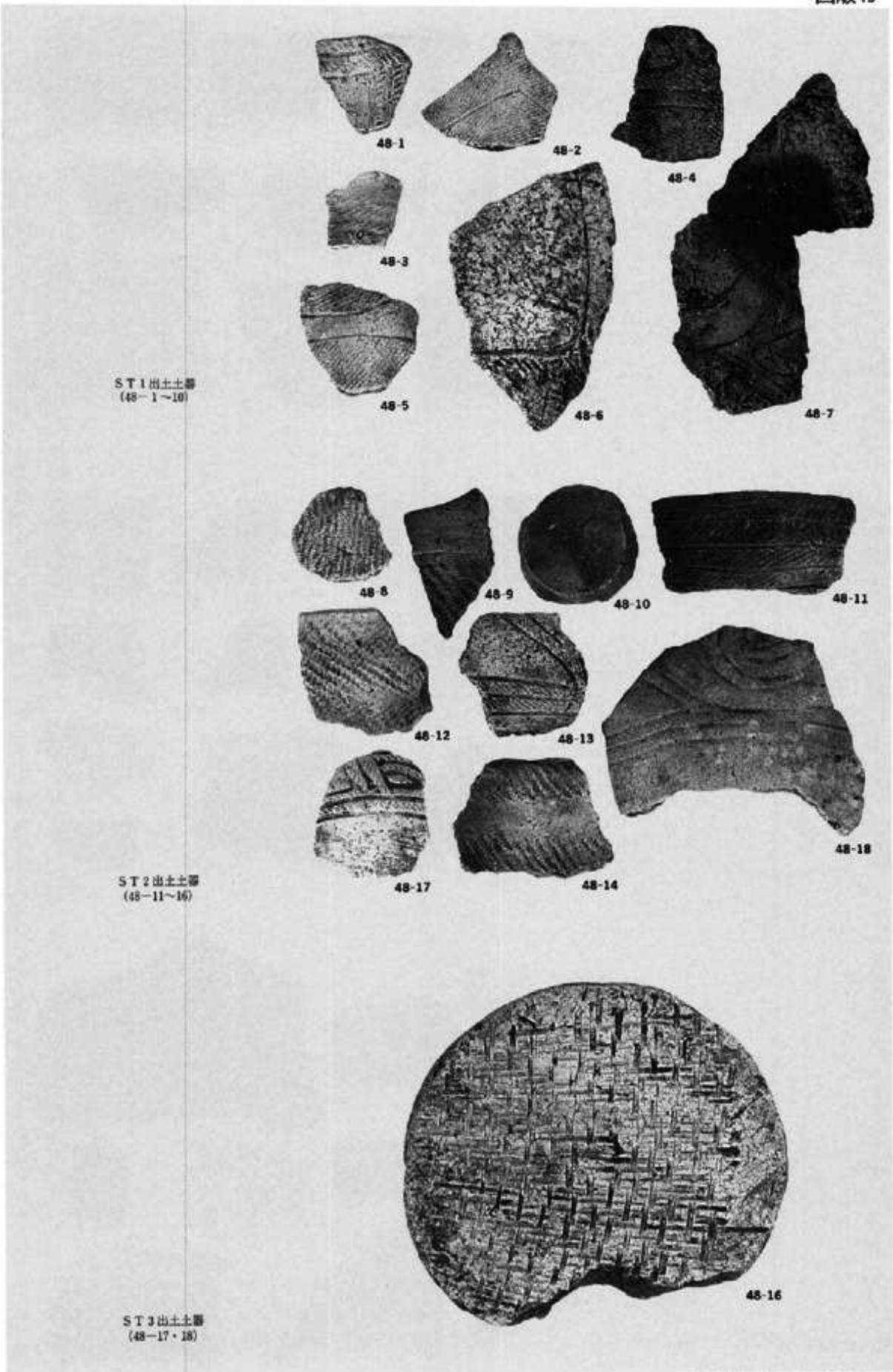
調査風景（西から）

調査説明会（南から）

調査説明会（北から）

調査説明会（東から）

調査説明会（北東から）


48-1
48-2
48-4
48-3
48-5
48-6
48-7
ST1出土土器
(48－1～10)
48-8
48-9
48-10
48-11
48-12
48-13
48-18
48-17
48-14
ST2出土土器
(48－11～16)
48-16
ST3出土土器
(48－17・18)

遺構内出土土器（1）

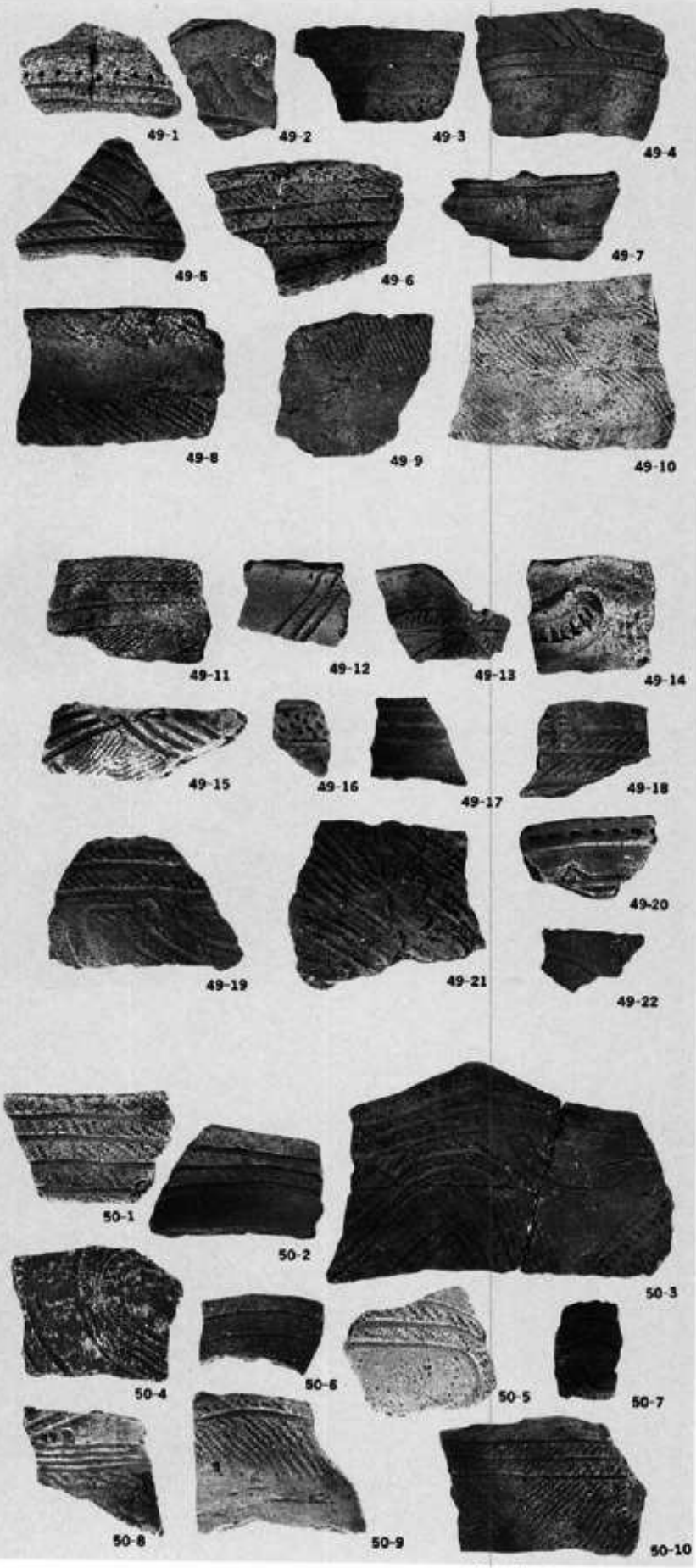
ST 4 出土土器（49－1）

ST 5 出土土器（49－2～13）

ST 6 出土土器（49－14～22）

ST 7 出土土器（49－23）

ST 8 出土土器（50－1～10）

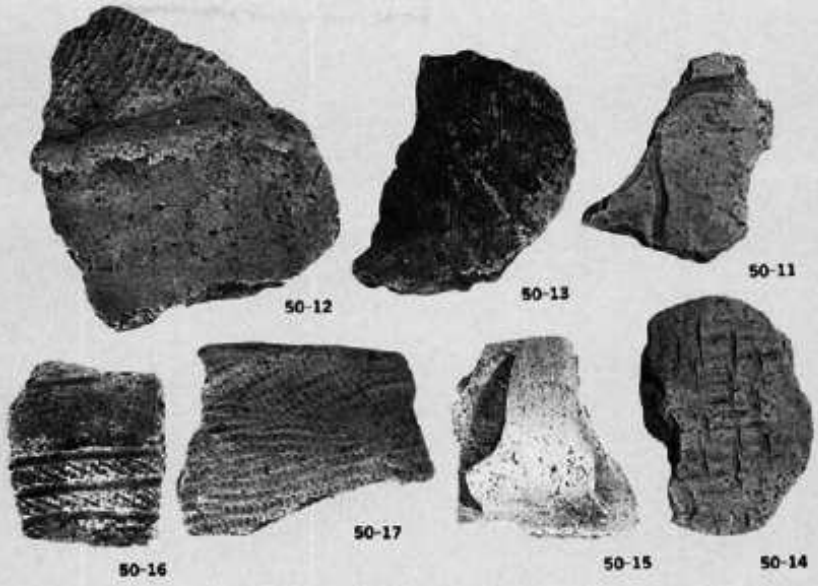


遺構内出土土器（2）

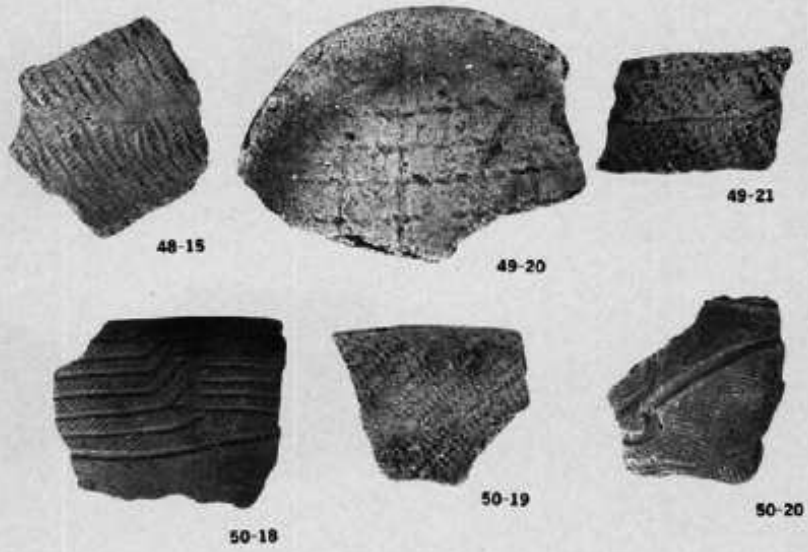
ＳＴ８出土土器（50－11～14）

ＳＴ９出土土器（50－15・16）

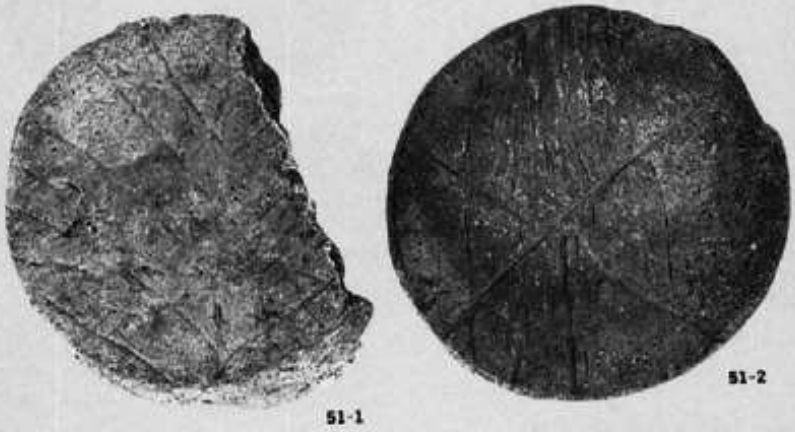
ＳＴ10出土土器（50－17・18）



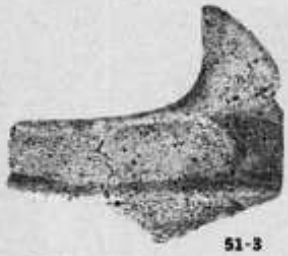
ＳＴ11出土土器（50－19～21）



ＳＫ34出土土器（51－1・2）



遺構内出土土器（３）


51-3

51-4

51-5

51-6

51-7

51-8

SK59出土土器（51－7・8）

SK68出土土器（51－9・10）

SK88出土土器（51－11～13・15）

51-9

51-11

51-12

51-13

51-15

51-14

51-16

51-17

51-18

52-1

52-2

52-3

SK148出土土器（52－1）

SK176出土土器（52－2）

SK191出土土器（52－3～6）

SK244出土土器（52－8・9）

SK24出土土器（52－9・10）

SK271出土土器（52－11・13・14）

SK284出土土器（52－15・16）

52-4

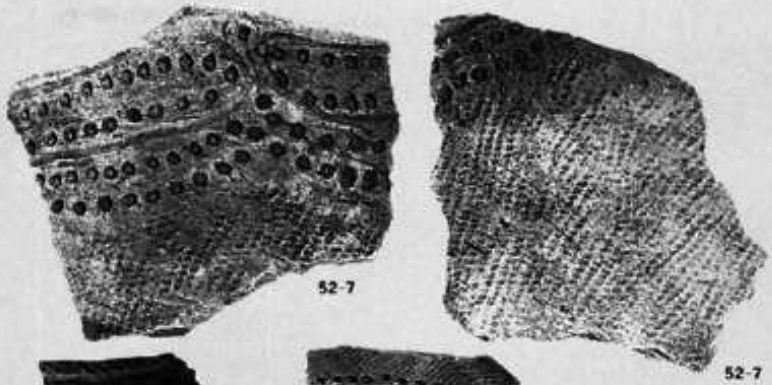
52-5

52-8

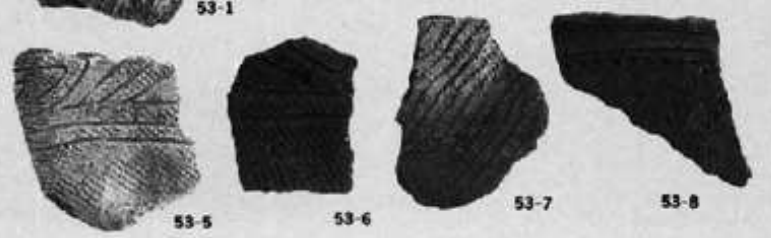
52-6

52-6

52-15

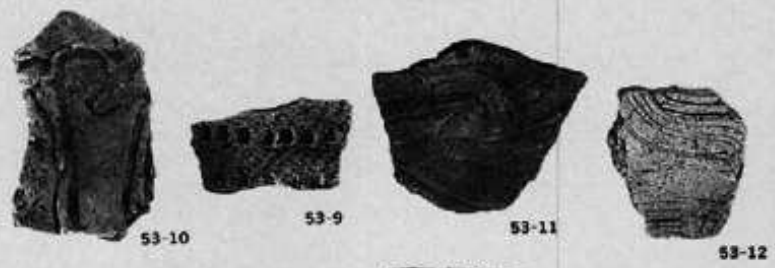


SK293出土土器（52－17・19・20）



SK238出土土器（53－2～4）

遺構内出土土器（5）



SK286出土土器（53－9）

SK310出土土器（53－10～12）

SK311出土土器（53－13・14）

SK324出土土器（53－15）

SK409出土土器（53－16）

SK416出土土器（53－17～19）

SK455出土土器（53－20）

SK431出土土器（53－21）

SK500出土土器（54－1）

SK614出土土器（54－2）

SK664出土土器（54－3）

SK1025出土土器（54－4）

遺構内出土土器（6）

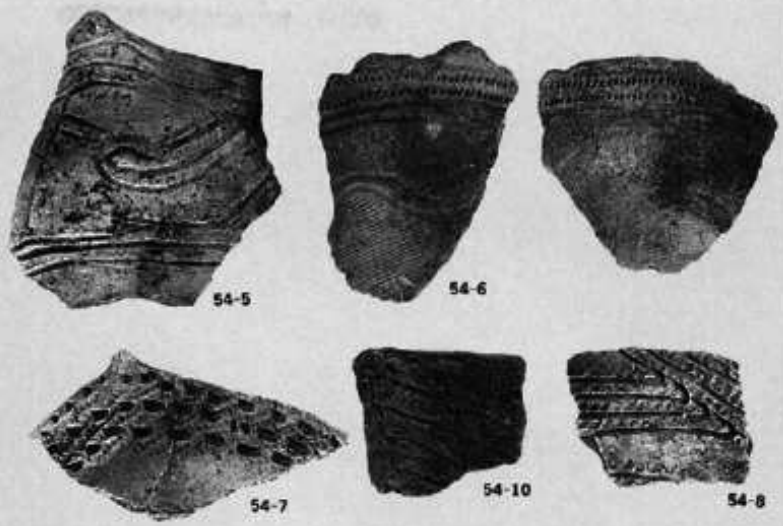
SK1201出土土器（54－5）

SK1250出土土器（54－6）

SK1400出土土器（54－7）

SK1896出土土器（54－8）

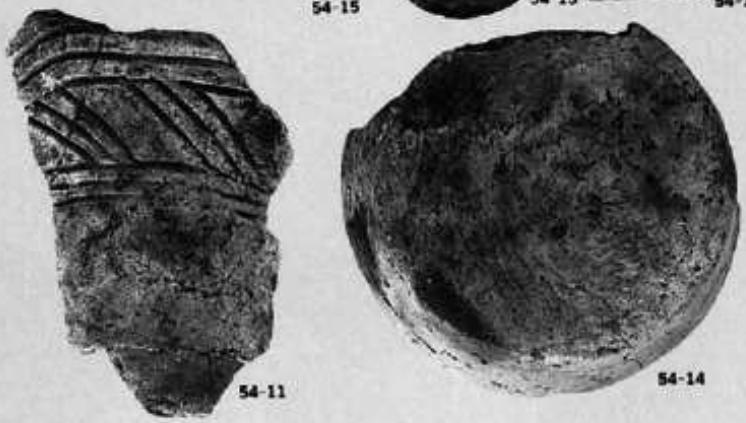
SK1449出土土器（54－10・11）



SK1407出土土器（54－9）

SK1626出土土器（54－15）

SK1705出土土器（54－14）



SM28出土土器（55－1～3）

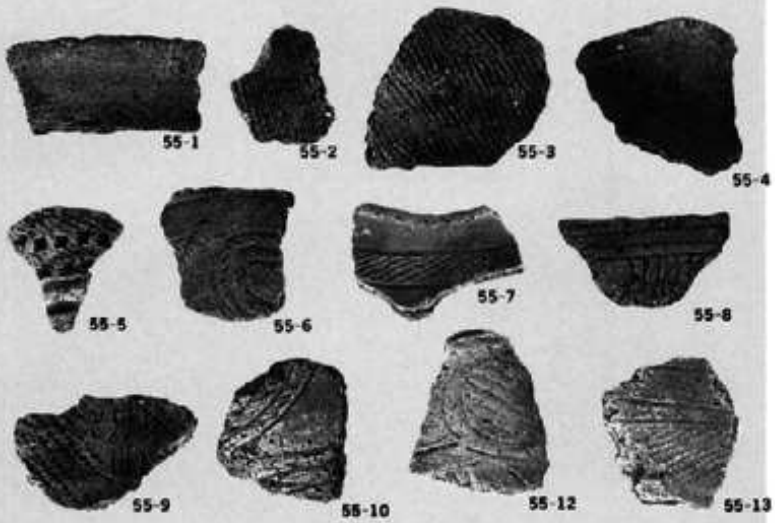
SM83出土土器（55－4）

SK1140出土土器（55－5）

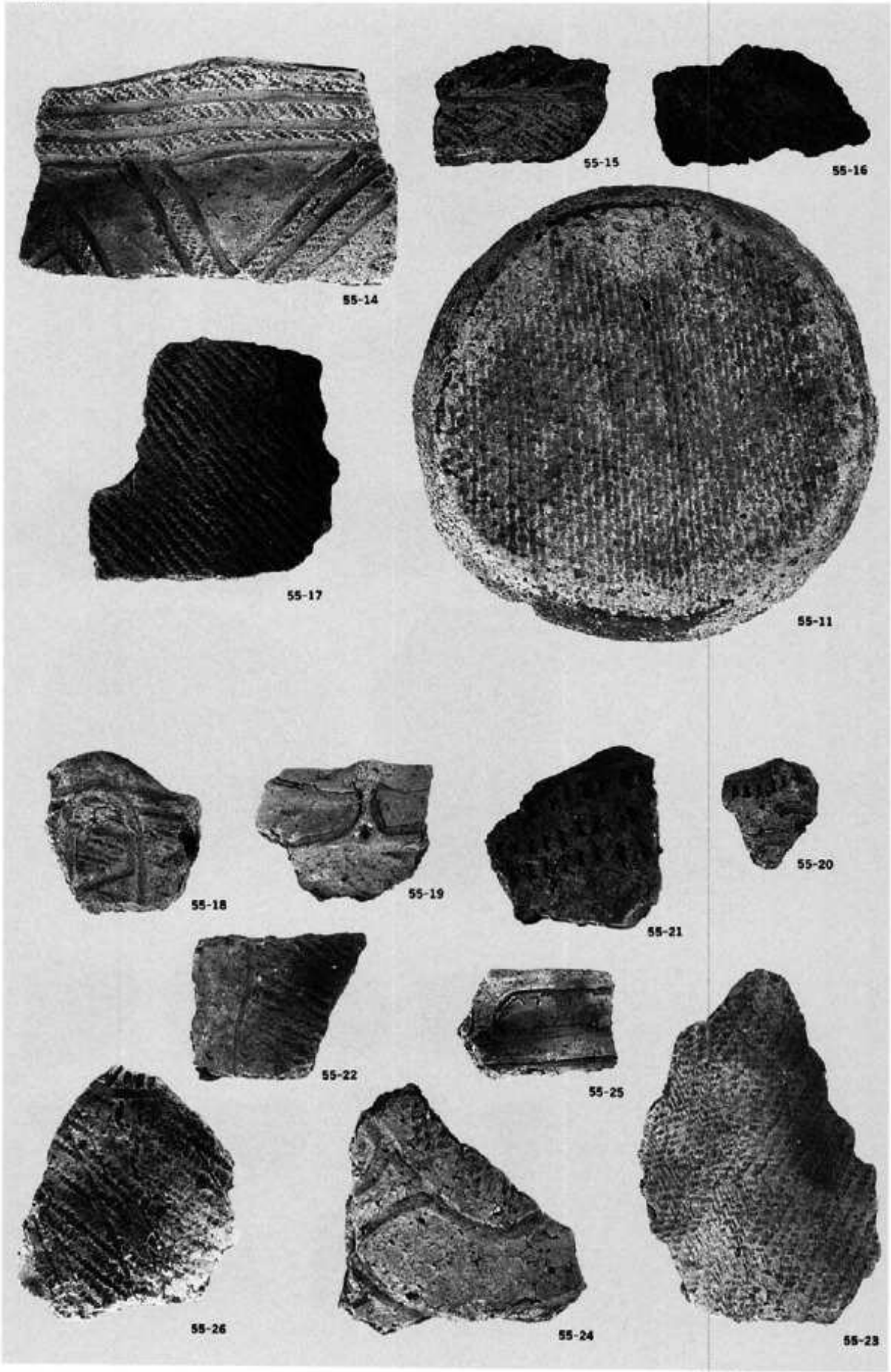
SK1420出土土器（55－6）

SK1519出土土器（55－7・8・10・13）

SK1538出土土器（55－9・12）



遺構内出土土器（7）


55-15
55-16
55-14
55-17
55-11
55-18
55-19
55-21
55-20
55-22
55-25
55-26
55-24
55-23

遺構内出土土器（8）

56-3

57-1

56-2

57-2

56-1

56-4

出土土器（1）

57-5

57-5

出土土器（2）

58-7

58-3

58-4

出土土器（3）

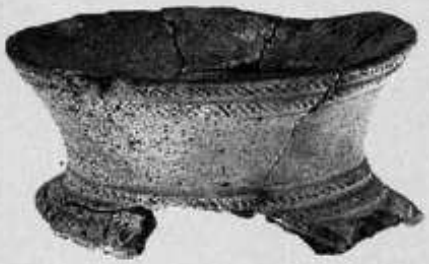
58-5

58-10

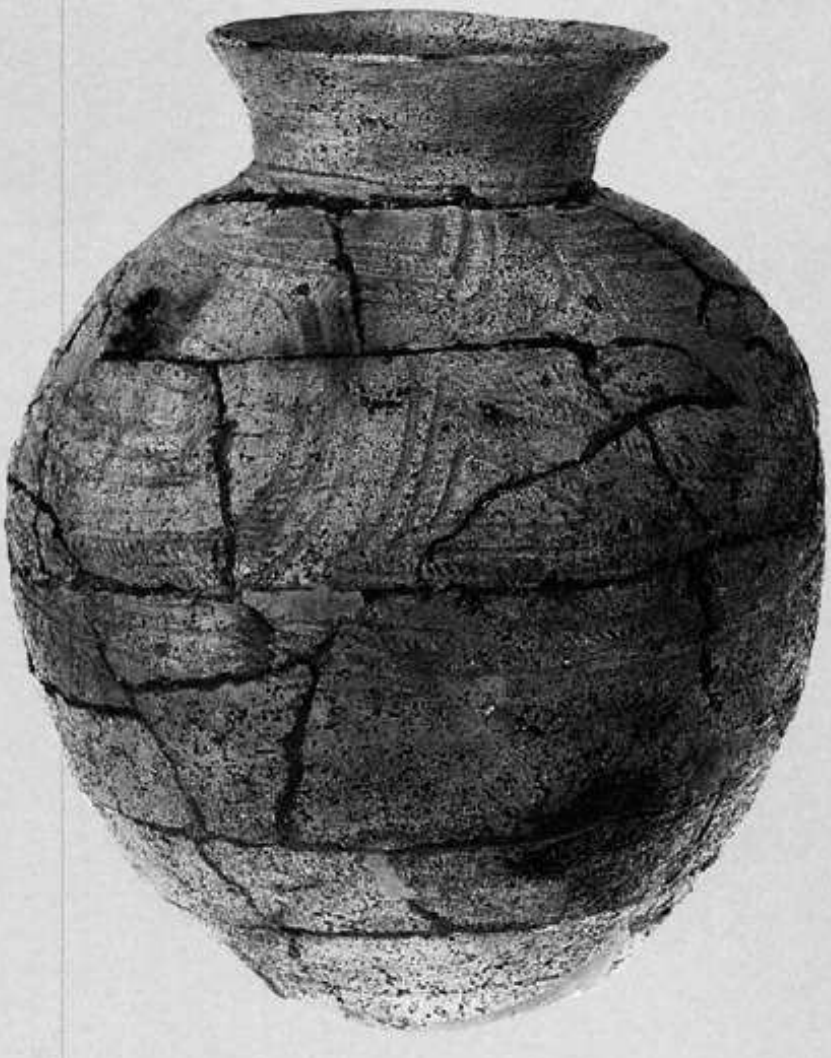
58-11

58-2

58-9



59-2



59-1

出土土器（5）

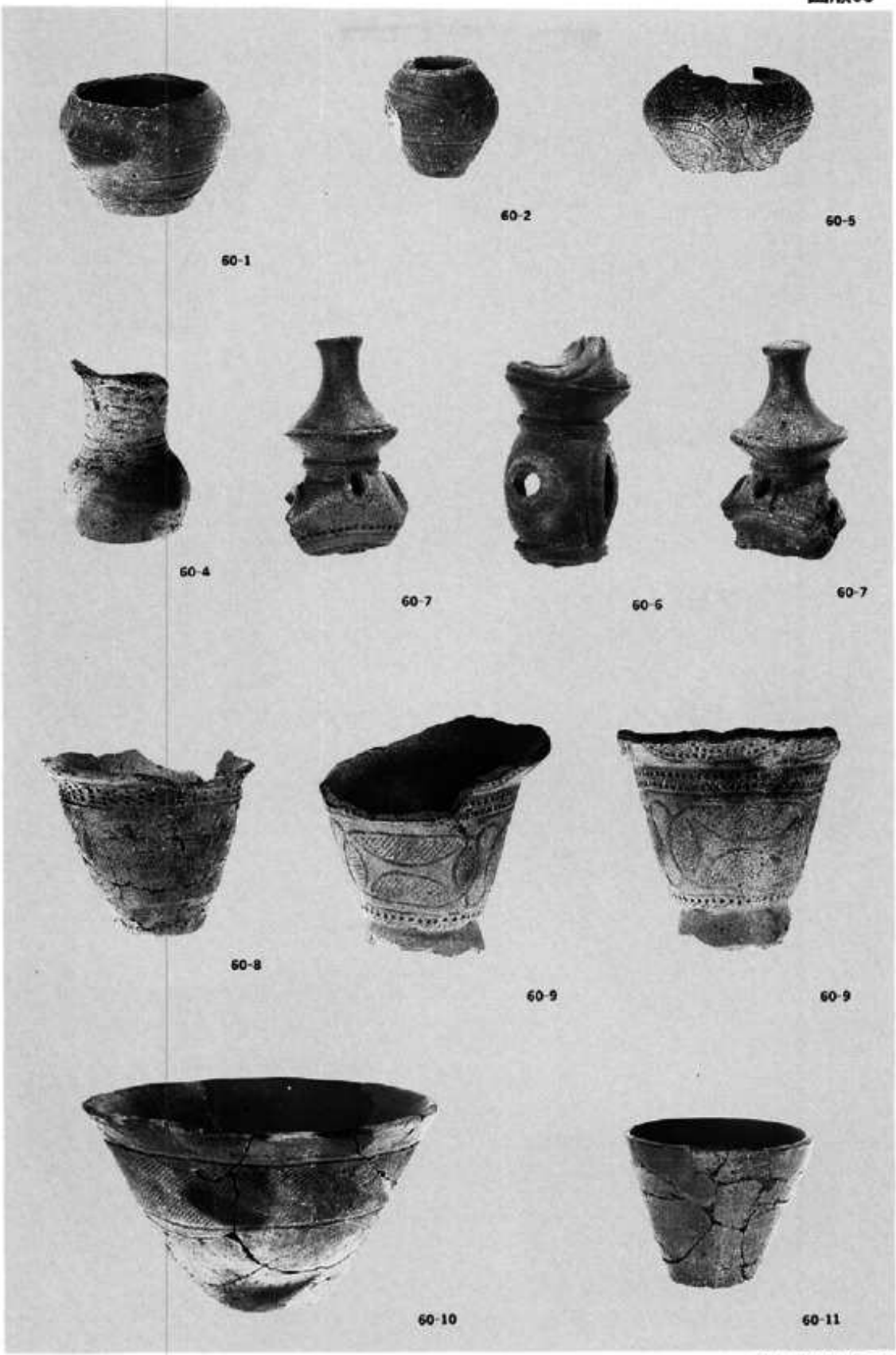
58-6

58-1

58-8

59-3

出土土器（6）



出土土器（7）

61-3

61-4

61-5

61-6

61-1

61-2

62-4

SK688F$_{15}$ RP37

62-6

62-5

62-3

64-1

64-2

出土土器（9）

57-3

62-9

62-8

62-2

62-7

77-8

77-8

出土土器（10）・石器

63-1

63-2

63-3

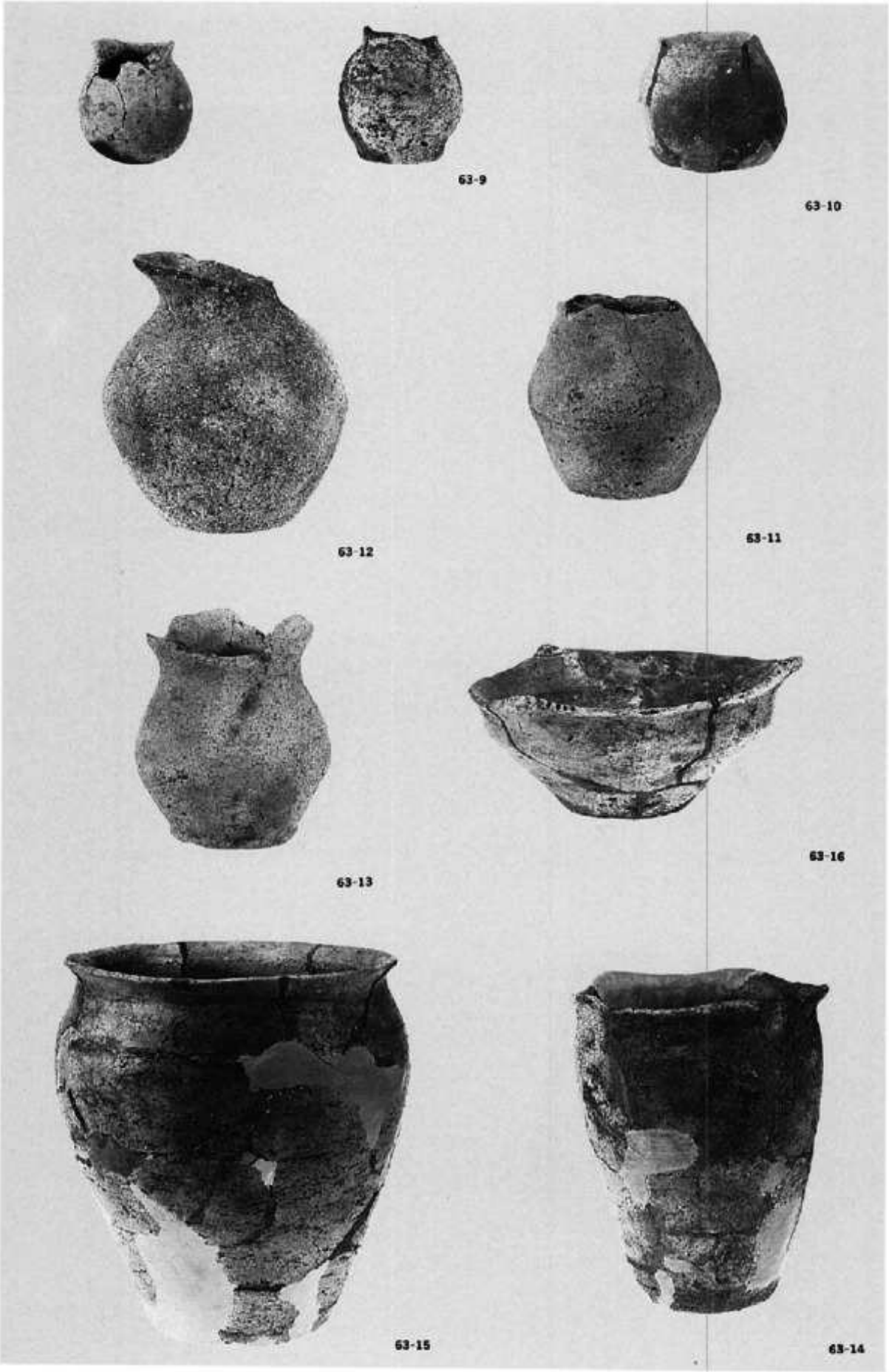
63-4

63-5

63-6

63-7

63-8



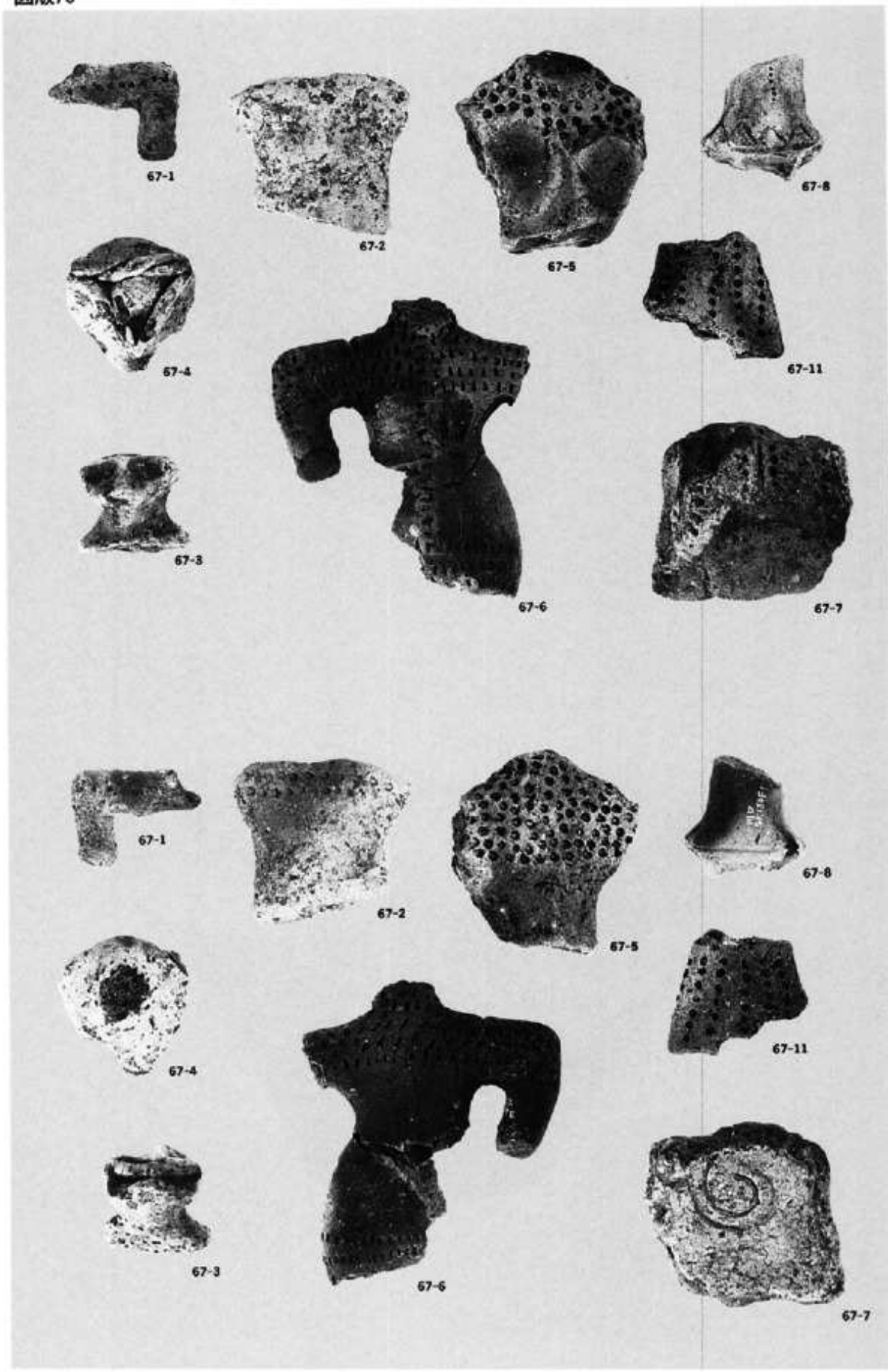
出土土器 (12)

63-17

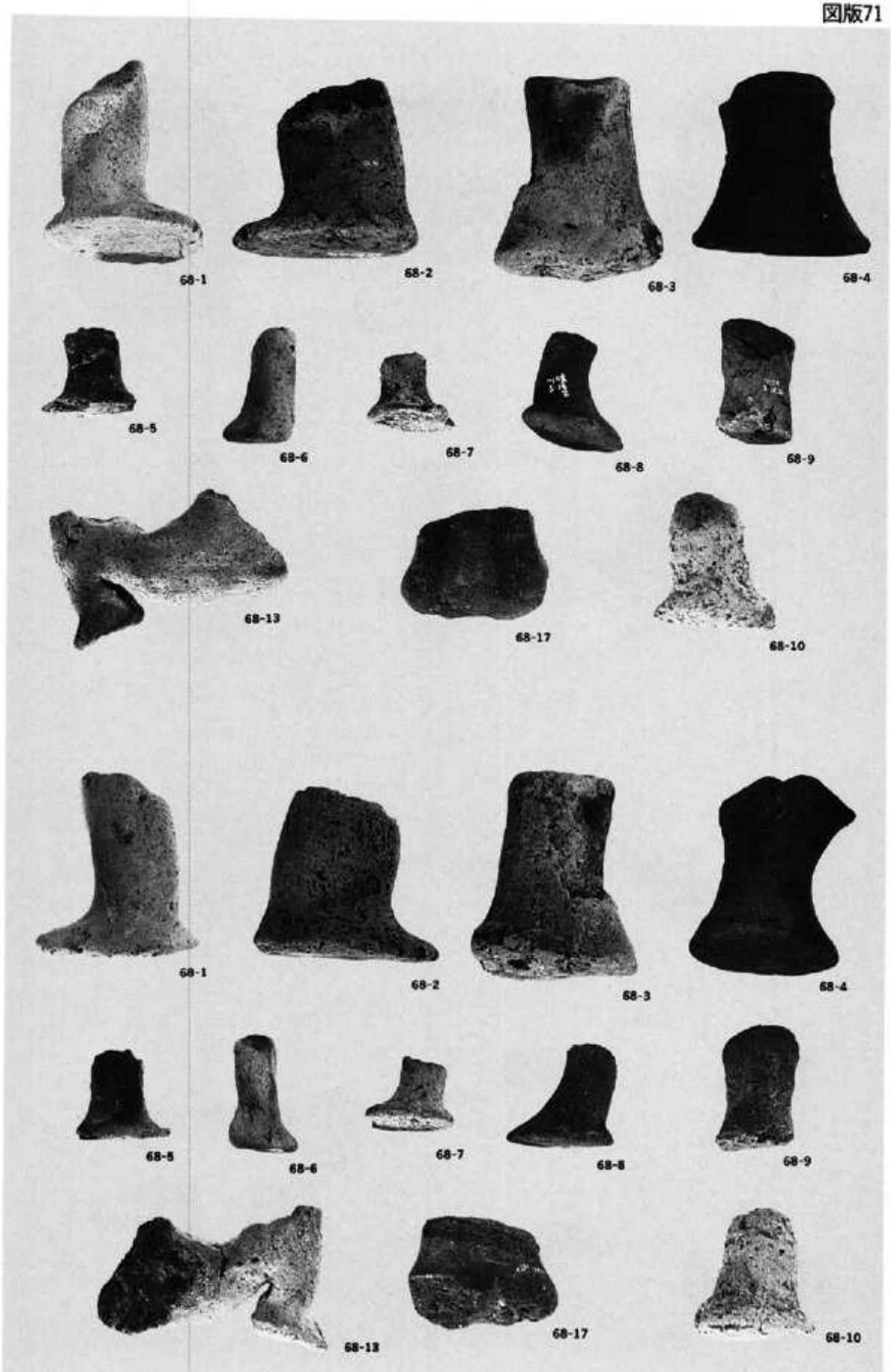
63-17

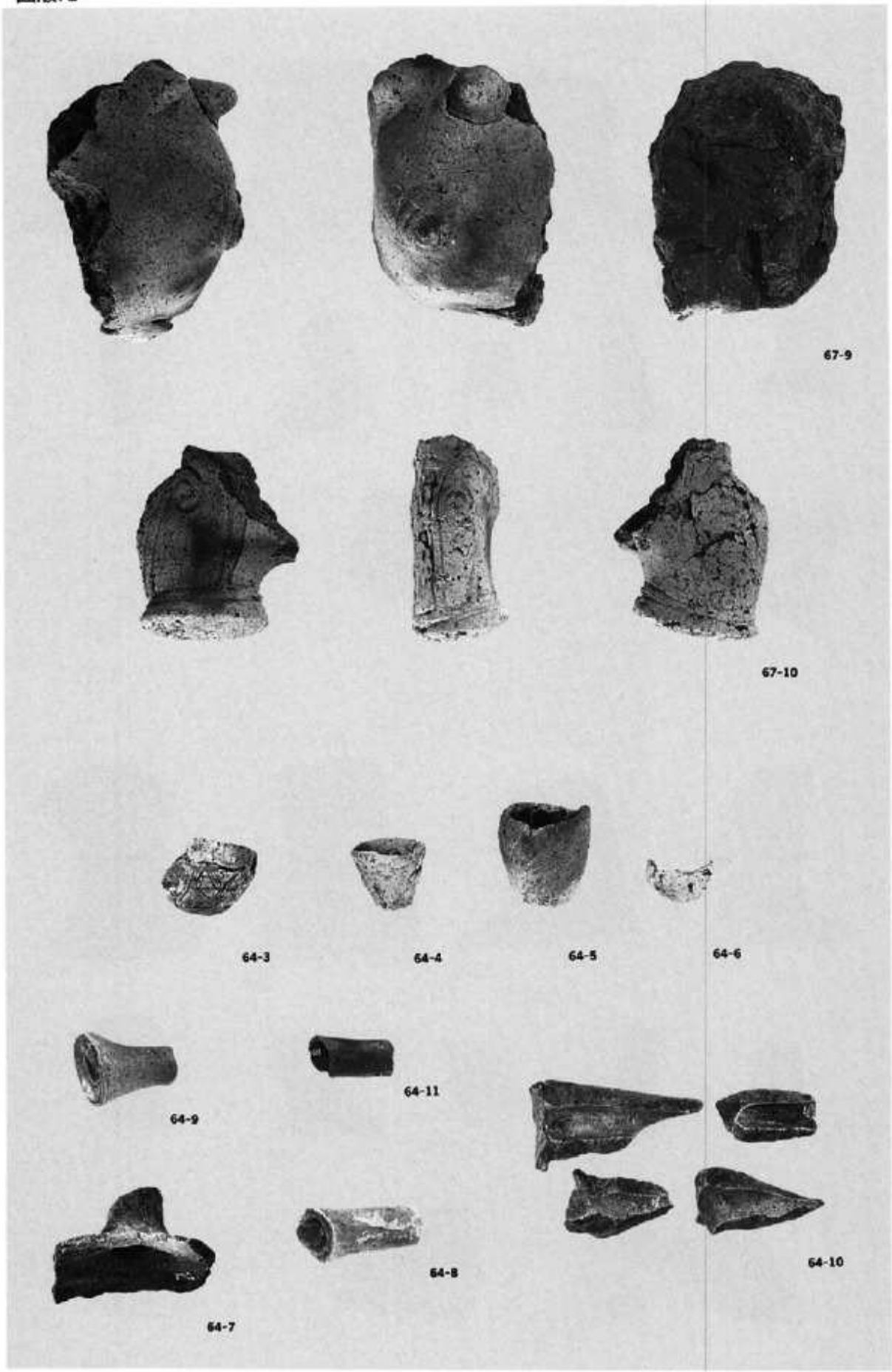
出土土器（13）

図版70

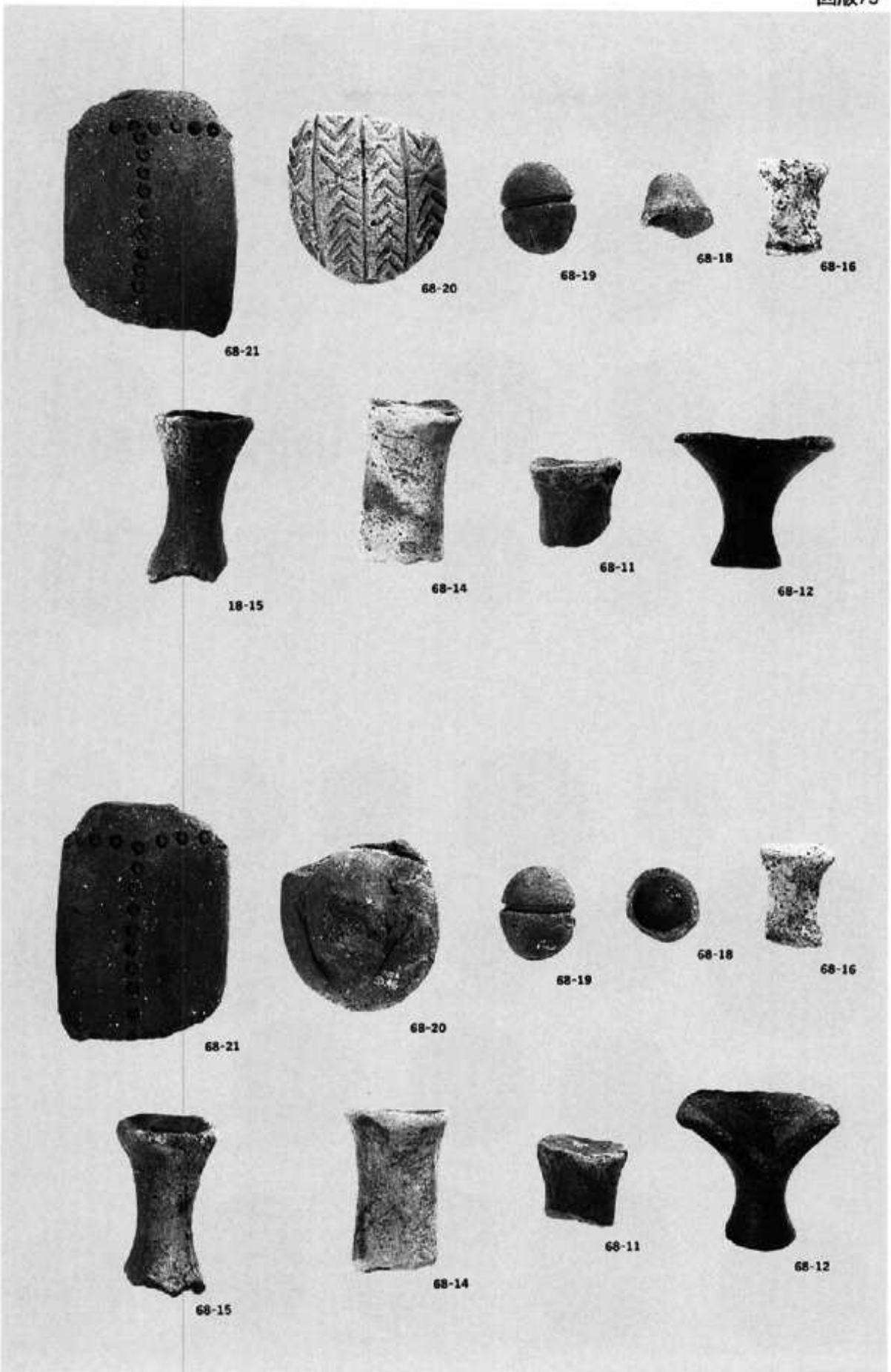

67-1
67-2
67-5
67-8
67-4
67-11
67-3
67-6
67-7
67-1
67-2
67-5
67-8
67-4
67-11
67-3
67-6
67-7

土偶（1）


68-1
68-2
68-3
68-4
68-5
68-6
68-7
68-8
68-9
68-13
68-17
68-10
68-1
68-2
68-3
68-4
68-5
68-6
68-7
68-8
68-9
68-13
68-17
68-10

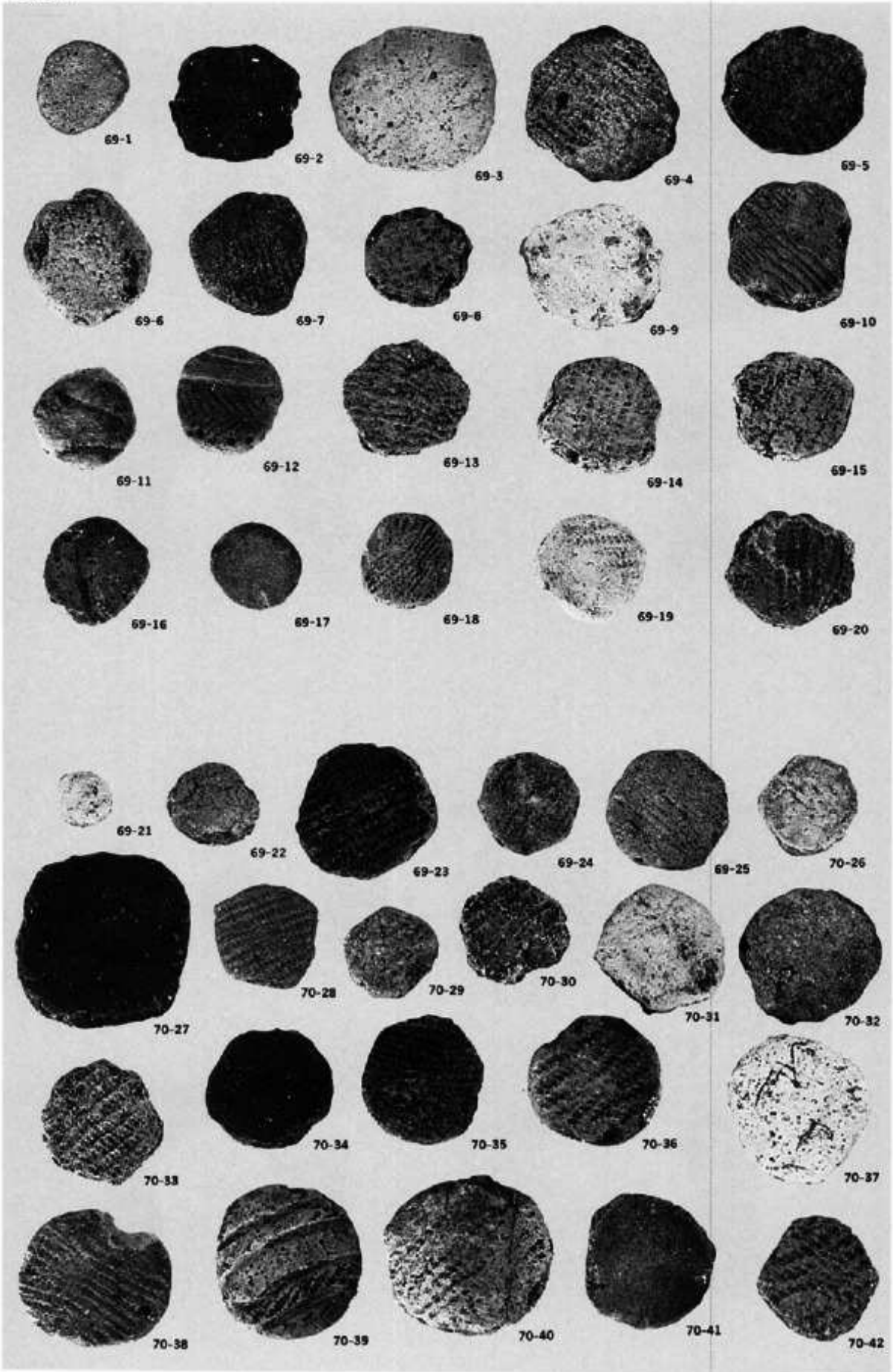


土偶（3）・小形土器・注口土器

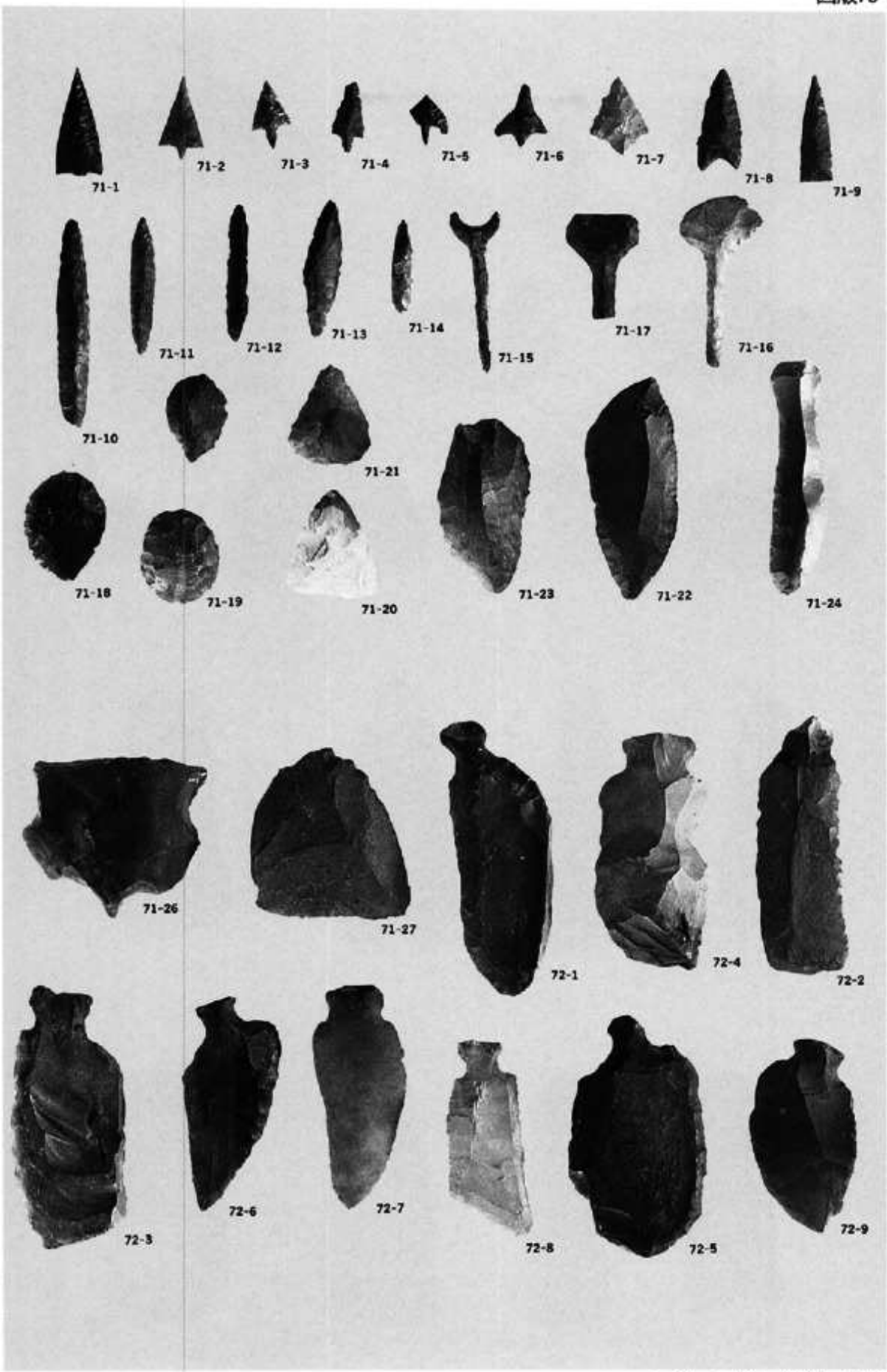


土版・スタンプ状土製品・耳栓他

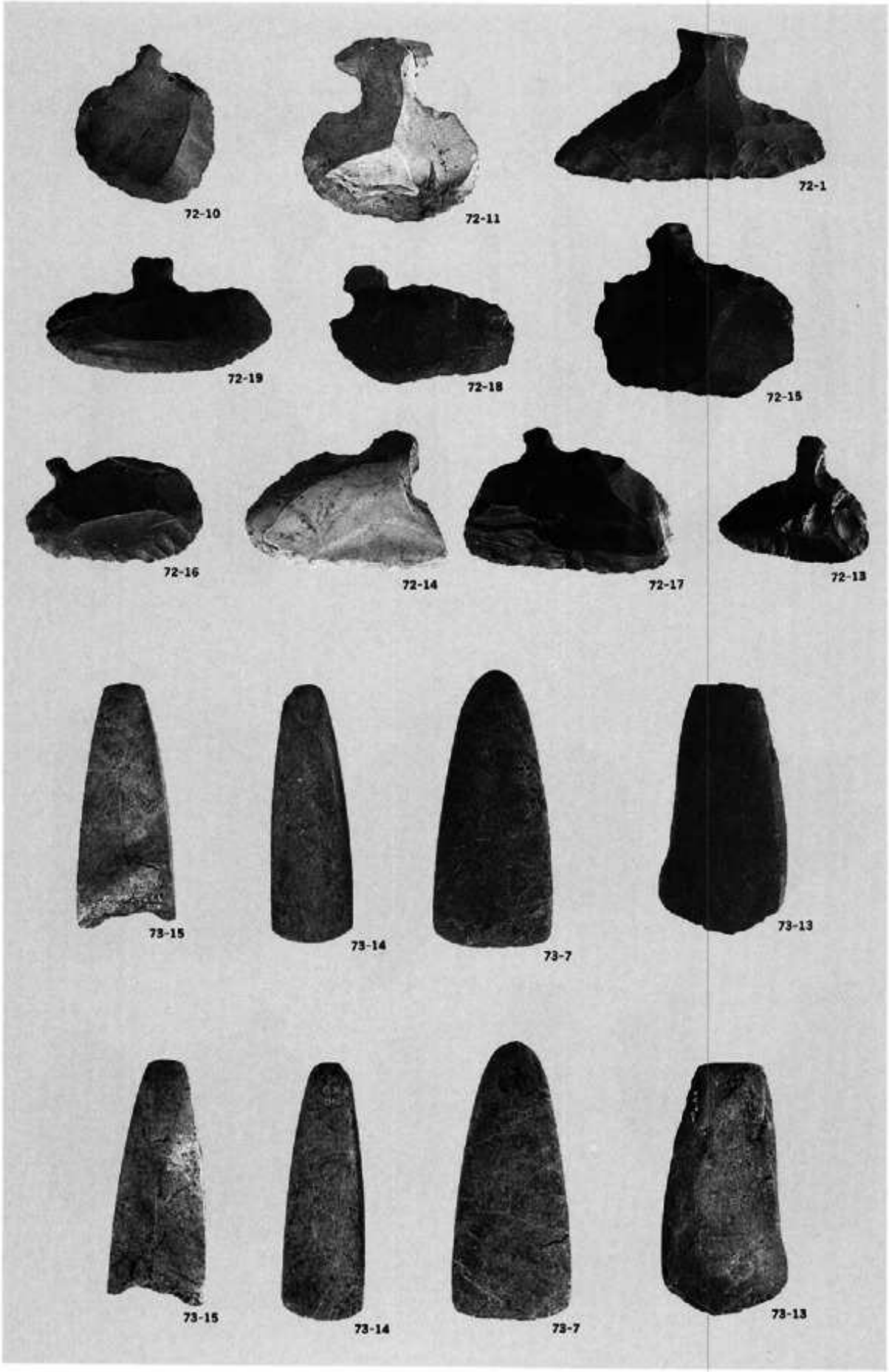
図版74


69-1
69-2
69-3
69-4
69-5
69-6
69-7
69-8
69-9
69-10
69-11
69-12
69-13
69-14
69-15
69-16
69-17
69-18
69-19
69-20
69-21
69-22
69-23
69-24
69-25
70-26
70-27
70-28
70-29
70-30
70-31
70-32
70-33
70-34
70-35
70-36
70-37
70-38
70-39
70-40
70-41
70-42

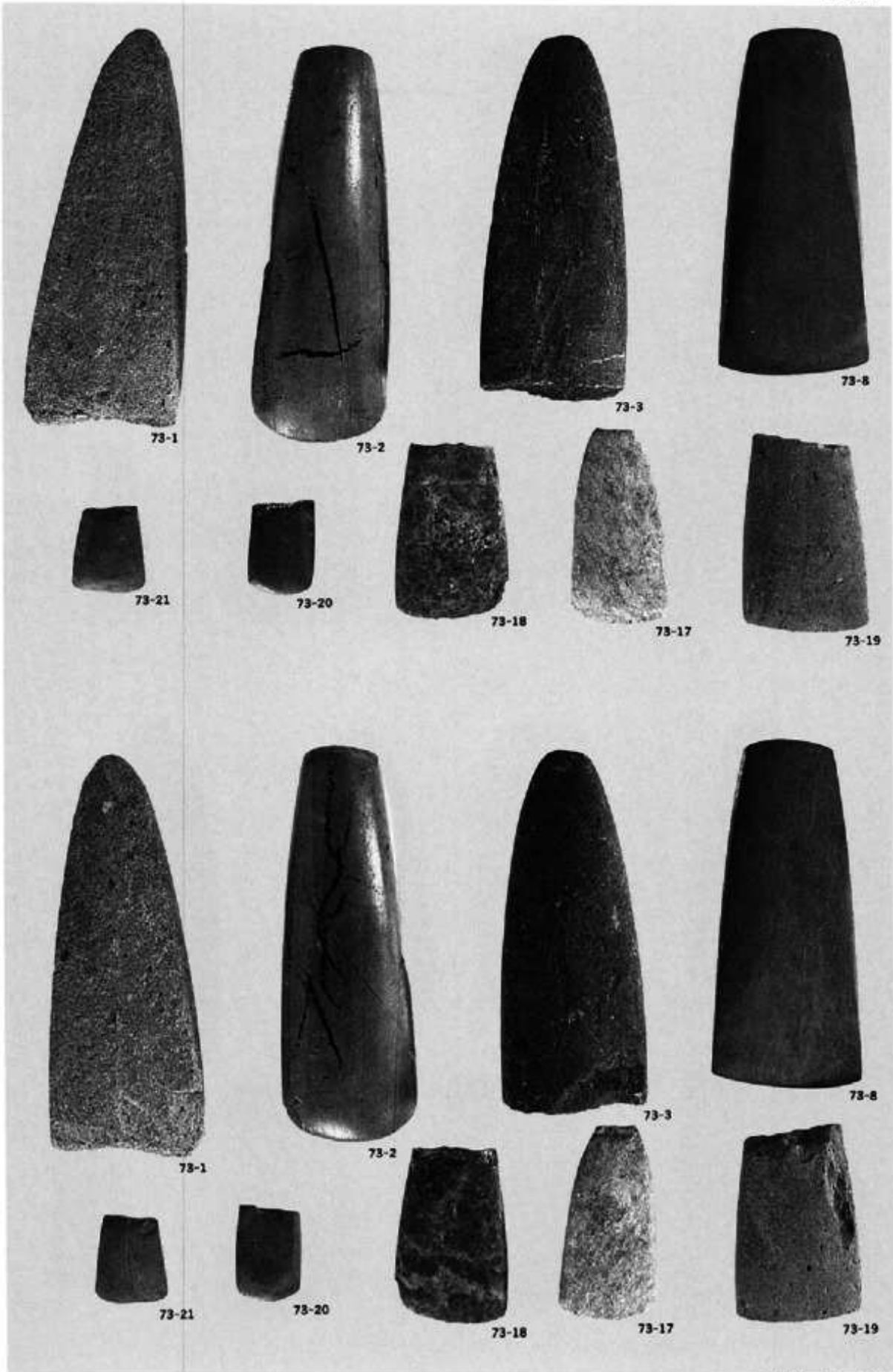
土製円盤


71-1
71-2
71-3
71-4
71-5
71-6
71-7
71-8
71-9
71-10
71-11
71-12
71-13
71-14
71-15
71-17
71-16
71-18
71-19
71-20
71-21
71-23
71-22
71-24
71-26
71-27
72-1
72-4
72-2
72-3
72-6
72-7
72-8
72-5
72-9

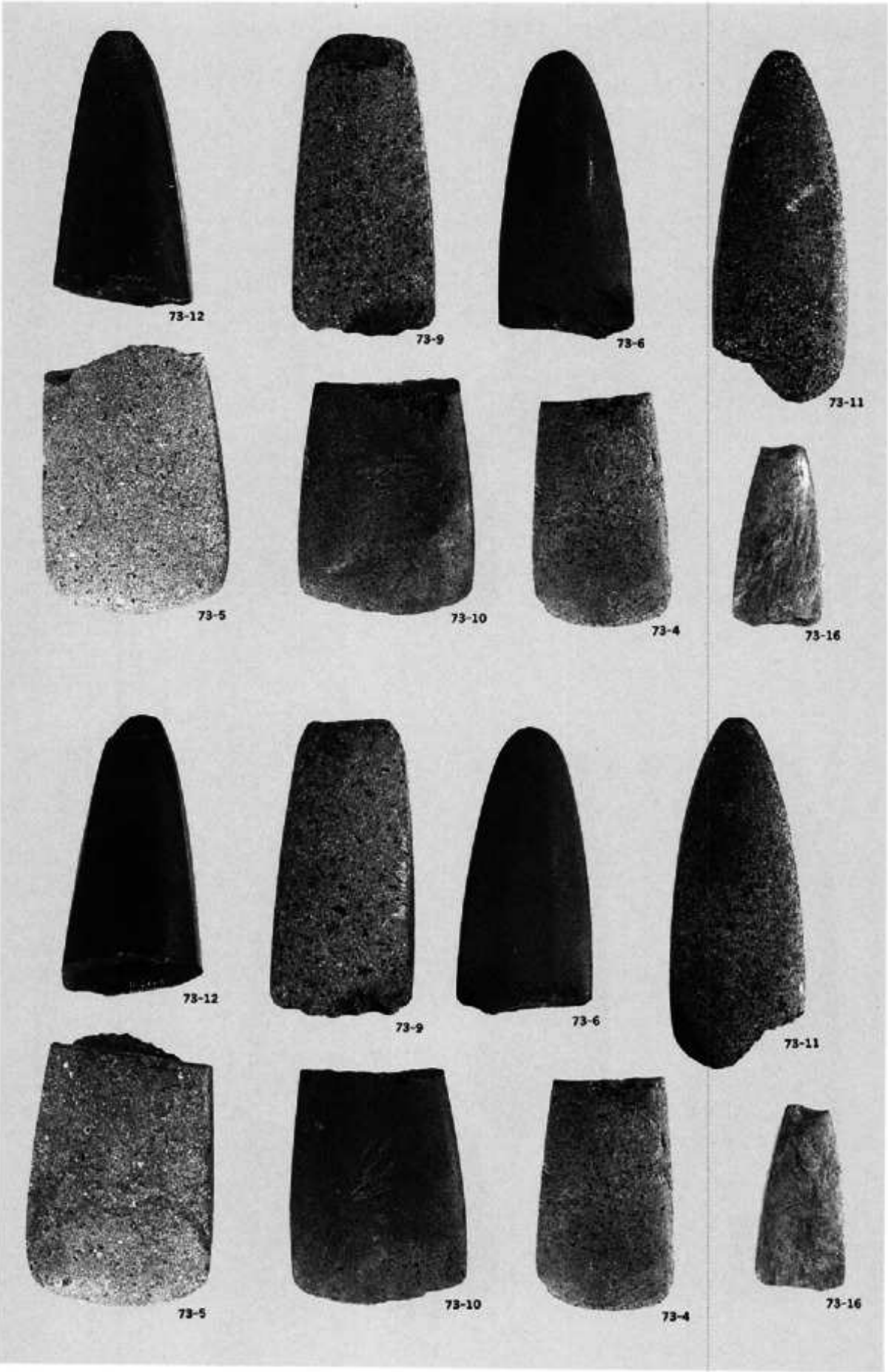
石鏃・石錐・掻器・石匙


72-10
72-11
72-1
72-19
72-18
72-15
72-16
72-14
72-17
72-13
73-15
73-14
73-7
73-13
73-15
73-14
73-7
73-13

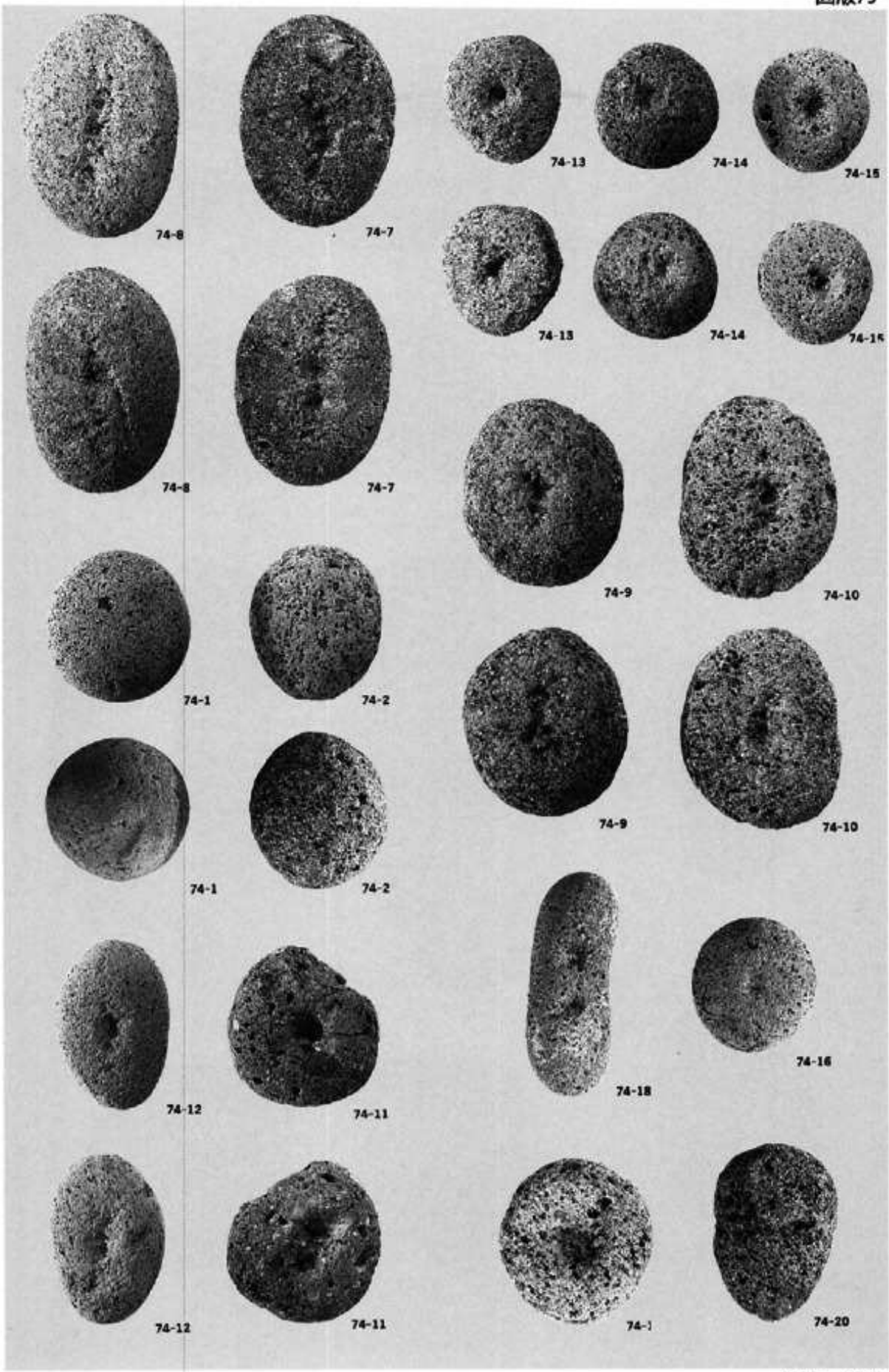
石匙・磨製石斧（1）

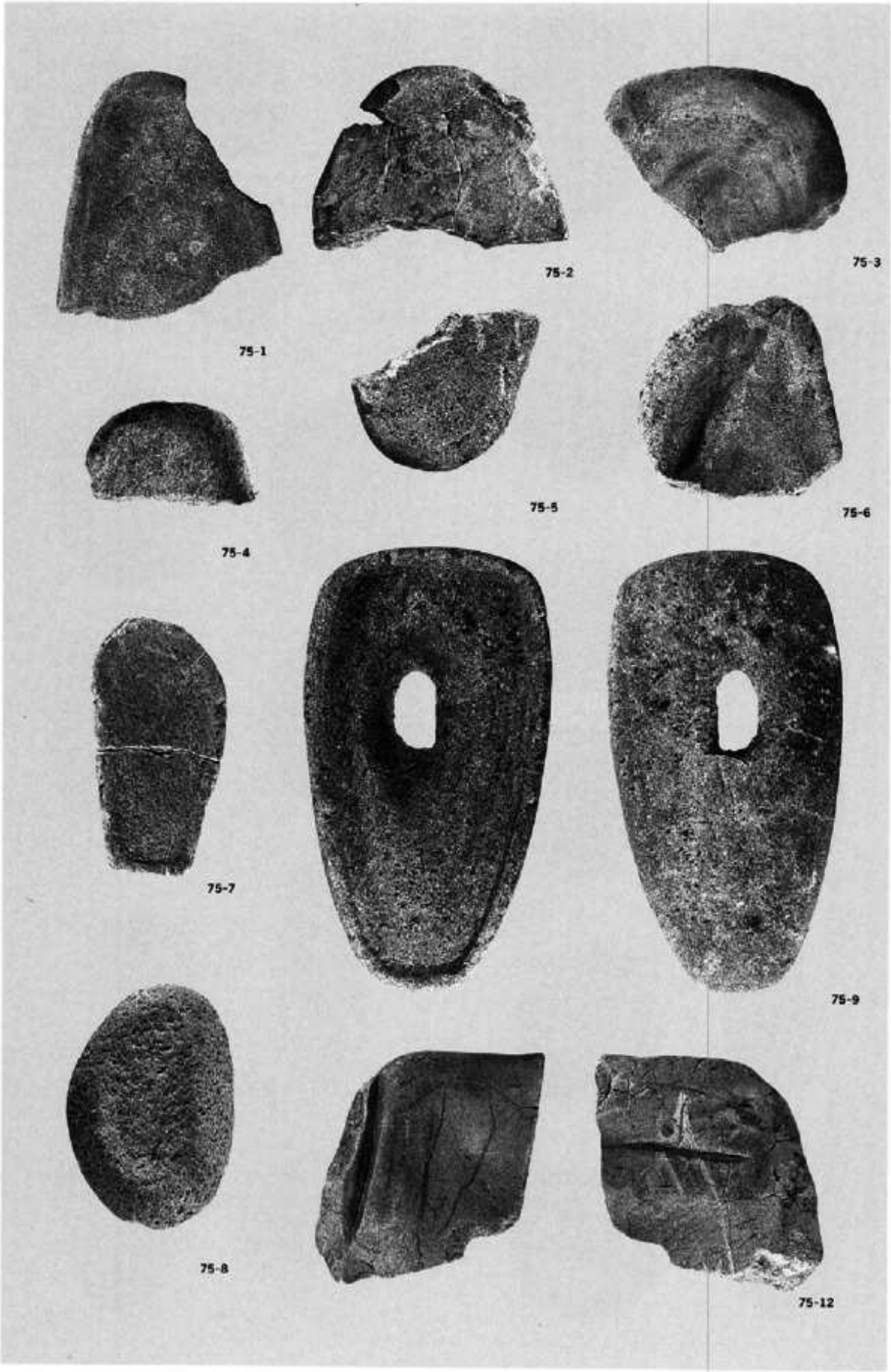

73-1
73-2
73-3
73-8
73-21
73-20
73-18
73-17
73-19
73-1
73-2
73-3
73-8
73-21
73-20
73-18
73-17
73-19

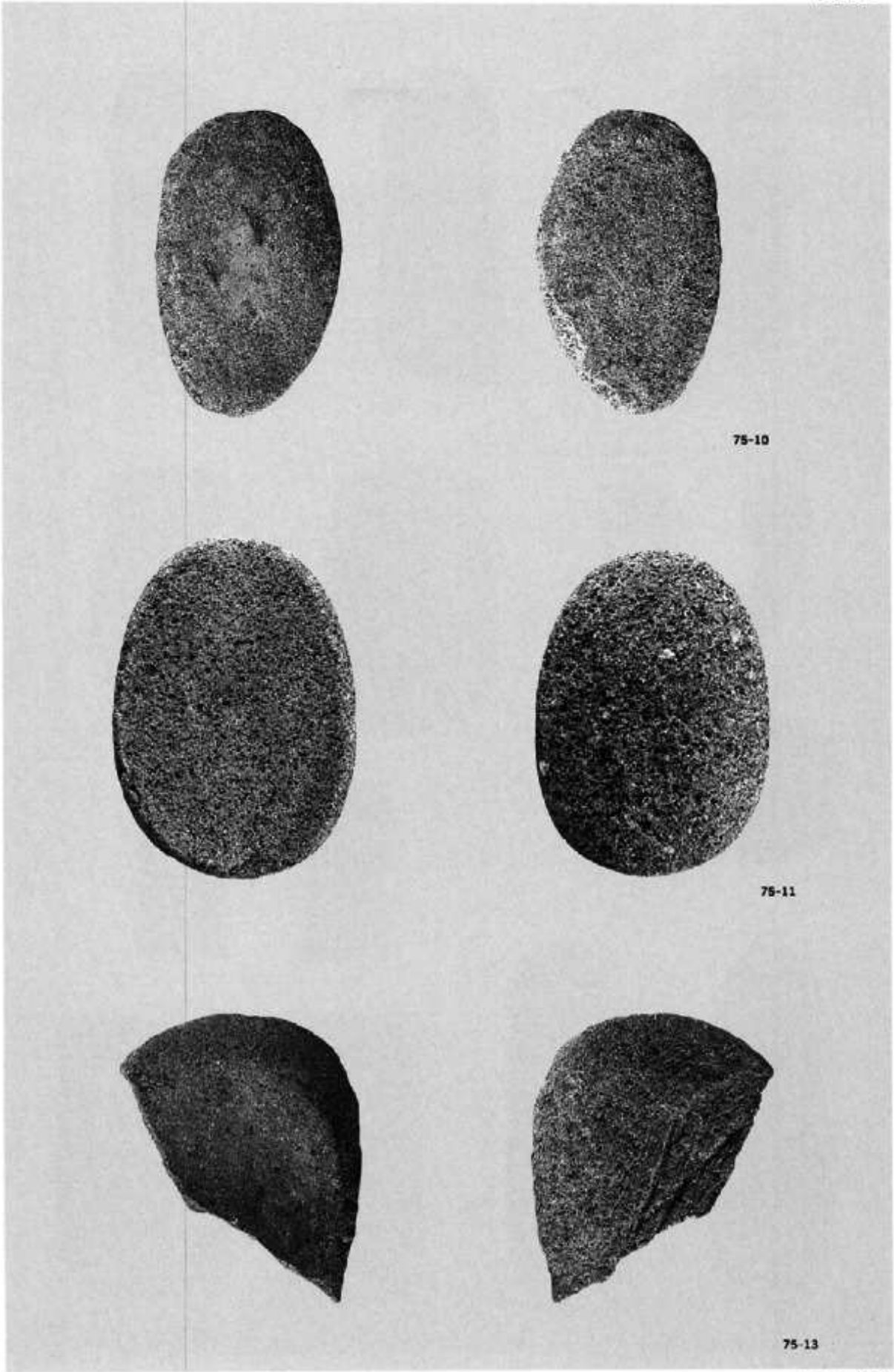
磨製石斧（2）


73-12
73-9
73-6
73-11
73-5
73-10
73-4
73-16
73-12
73-9
73-6
73-11
73-5
73-10
73-4
73-16

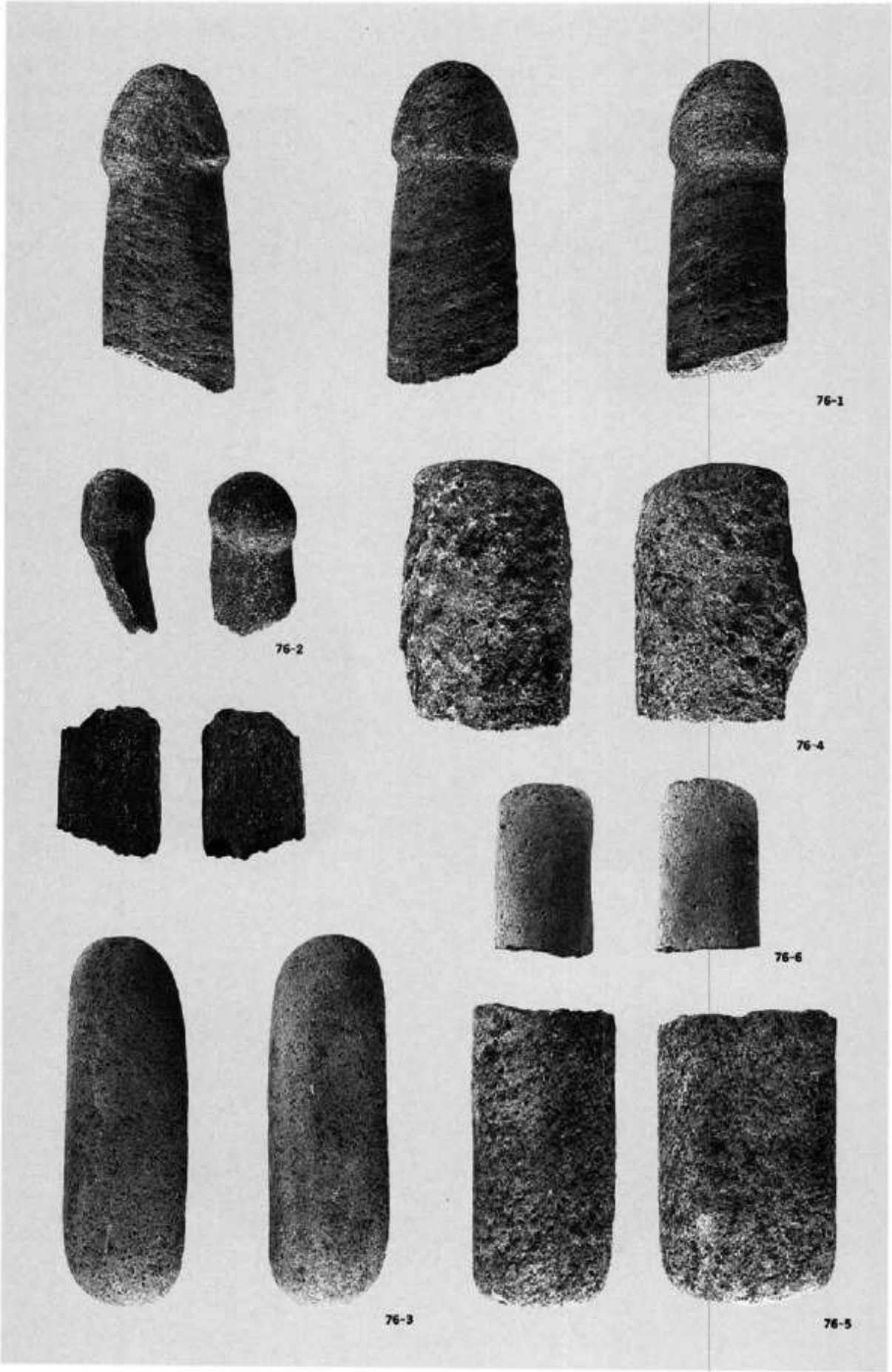
磨製石斧（3）

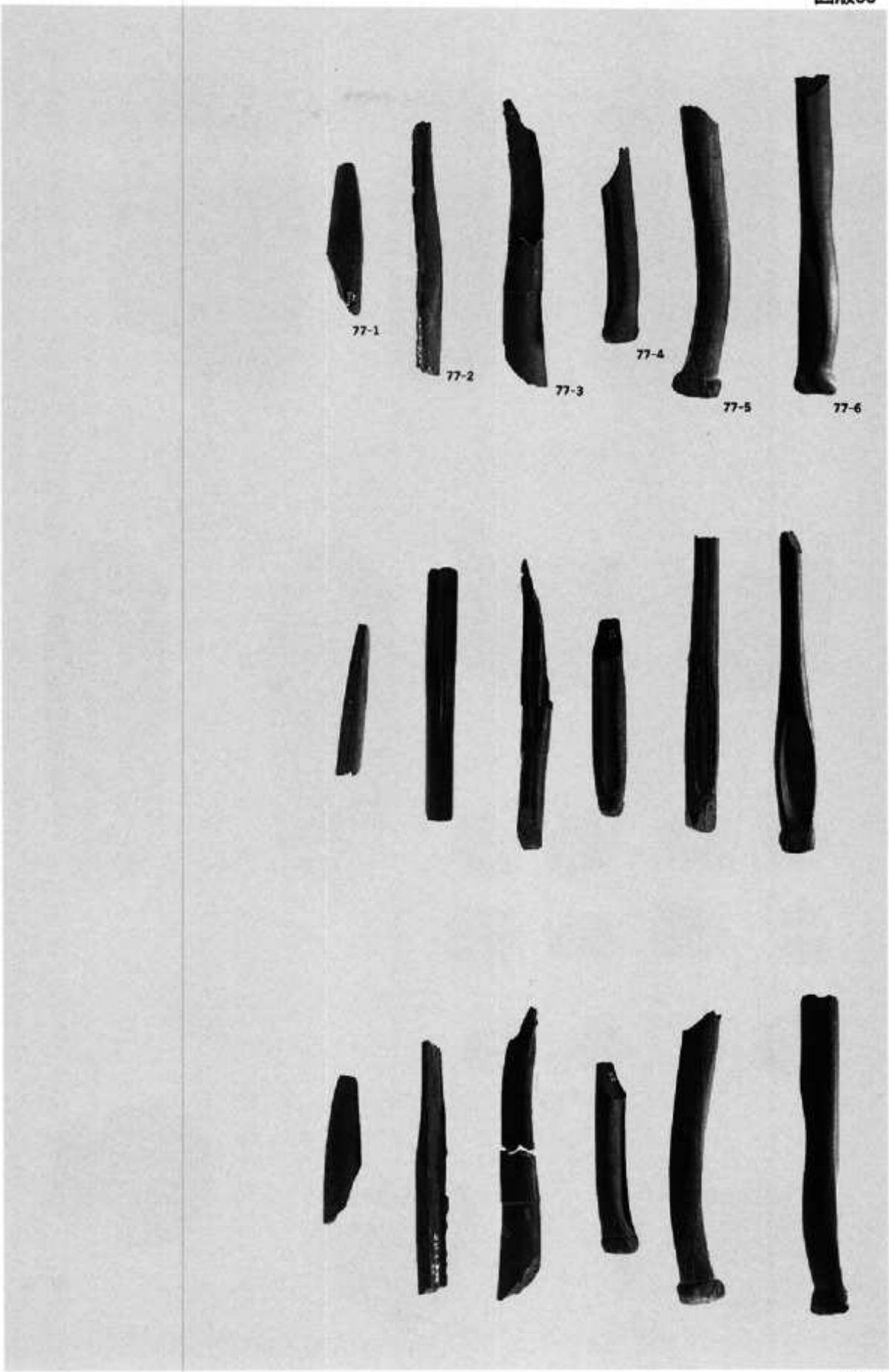

74-8
74-7
74-13
74-14
74-15
74-8
74-7
74-13
74-14
74-9
74-10
74-1
74-2
74-9
74-10
74-1
74-2
74-12
74-11
74-18
74-16
74-12
74-11
74-20


75-1
75-2
75-3
75-4
75-5
75-6
75-7
75-8
75-9
75-12

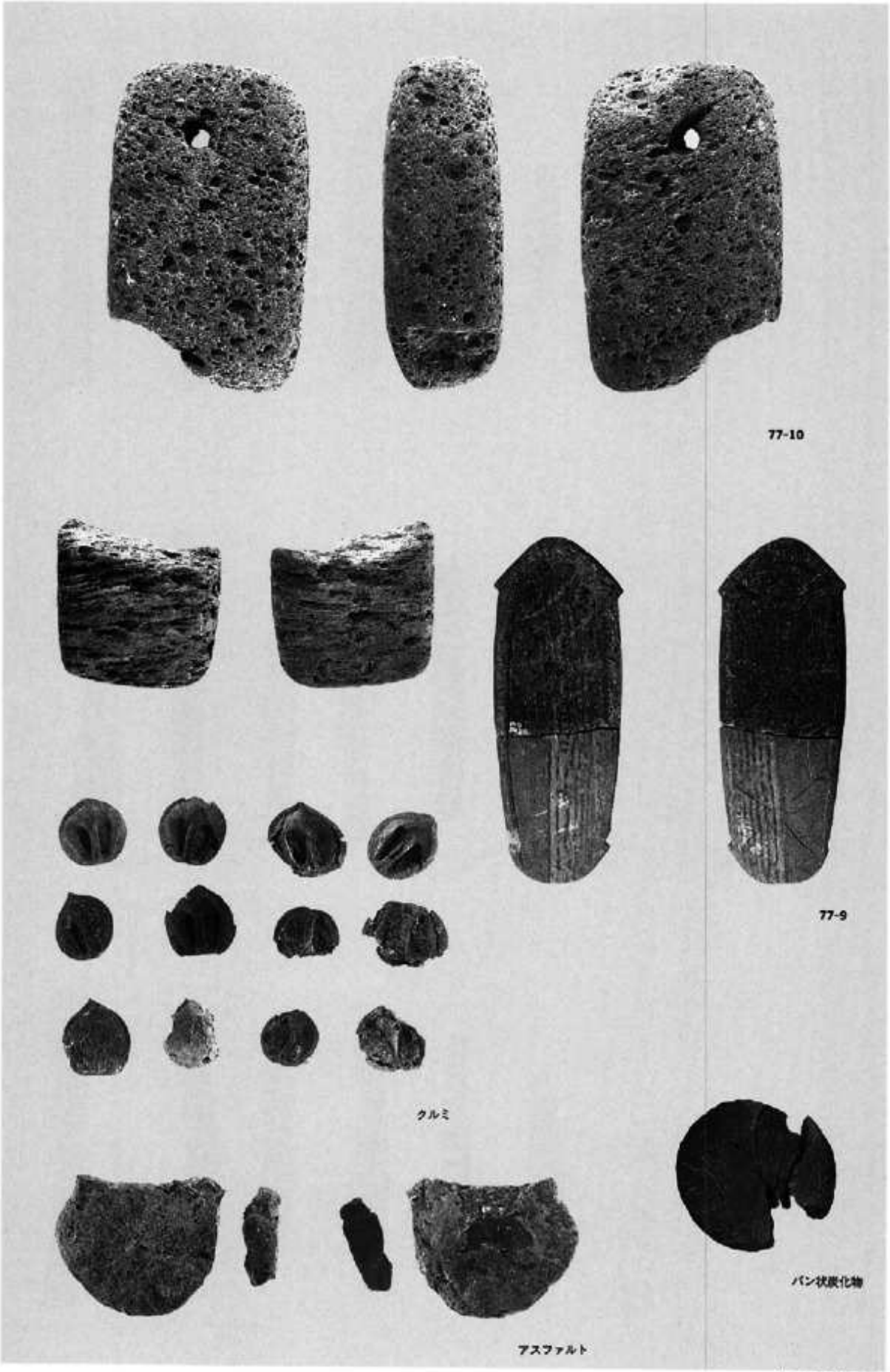


石皿（2）


76-1
76-2
76-4
76-6
76-3
76-5



石刀


77-10
77-9
クルミ
パン状炭化物
アスファルト

山形県埋蔵文化財調査報告書第151集

川口遺跡
発掘調査報告書

平成2年3月25日　印刷
平成2年3月31日　発行
発行　山形県教育委員会
印刷　藤庄印刷株式会社